女子文壇
臨時增刊
第五年三號
新美文

女子文壇 第二增刊

新作家

投稿締切　三月卅一日

發表期日　五月十五日

▼文學初心者の爲に新らしき方向を開拓す▲

▼作物選拔と編輯の方法に一新機軸を企つ▲

懸賞

一等	金貳拾圓		一人
二等	金拾五圓	宛	二人
三等	金七圓	宛	三人
四等	金五圓	宛	四人
五等	金參圓	宛	五人
六等	金貳圓	宛	十五人
七等	金壹圓	宛	二十五人

一等當選者には賞金の外に月桂冠（絹製造花）を附る○一等二等は正金にて贈り三等以下七等までは吳服物、家庭用品等凡て物品にて贈る○圖書は此表以外一等より十等までの賞を與ふ○賞與は凡て作物發表の一ヶ月後に贈呈す

●編輯の方法●

本年の第二增刊として發行すべき『新作家』は編輯の方法を一新すべし。即ち作物に據りて分類せず、投稿作家其人の技倆に據りて優勝を判定し、個人の能所を充分に世に發揮せしめんとす。選拔の方針も全然個人を本位とし、人にして各種の作を寄せられたる場合には、其の內最も得意と認むる作品を採錄すべく、又最優等者の如きも必ず何種と限ることなく、全投稿を通じて最も勝れたる作家に月桂冠を授け、順次等級を定めて小說散文詩歌等各種文學を其作家の技倆に應じて次第すべし、蓋し投稿を主としたる雜誌の編輯法に一新工夫を加へたるものにして、文藝を尊重するは取りも直さず個人の人格を尊重すると云ふ時代の趨勢に應じたるのみ、此機に乘じて大いに諸君の發奮を懇望す。

☞投稿の方法は次の四頁を見よ☜

女子文壇増刊第一 新美文（第五年第三號）目次

美文（一—一〇〇）

【短篇小說】（一〇一—一三八）

【新體詩】（一三九—一四八）

（[illegible]の二）

新作家投稿方法

編輯法の一新に就いて、投稿の方法も多少違つて來ますから注意いたします。

▲小説は小説、美文は美文と一つ一つ分けて選抜するのではなく、其寄稿家の作を一人〱見て行くのですから、成るべく御自分の得意なものを寄稿された方がよろしい。

▲けれども御自分で詩が好いか、文が好いか分らぬと云ふやうな時は詩も文も寄稿して差支ないのです。

▲勿論一人で詩歌散文の各種を寄稿しても差支はありません、が、餘り同種のものを澤山寄稿しないやうにして下さい、成るべくなら各種一篇づゝにして頂きたいものです。

▲此度の「新作家」は個人の本領を發揮させたい爲の企ですから成るべく投稿の方法も自由にして、規則がましいことは設けませんけれど多少の制限は守つて下さい。

▲其制限は小説百行乃至二百行、脚本は一幕物、美文は五六十行から百行まで、論文、書簡文、日記文は五十行まで。

▲短文は一篇を五行乃至十行と定め、一人で十篇まで寄稿して宜し。

▲新躰詩は行數に制限を定めません、短きもよし、長きもよし、口語詩、散文詩の類もよし。

▲和歌、俳句は一首づゝでは其人の眞の詩才を認めかねますから會心の作一人十首以上二十首までを可とします。

▲右に舉げた外、散文にせよ、詩歌にせよ、自ら得意とするものなら何でも宜しい、必ずしも右の種類に宛てはまらなければならぬと云ふことはないのです、例へば世に謂ふ寫生文、紀行文の類で、詩歌中では新歌謠の如きものでも、要するに一切の文學的作物を含んで居ます。

▲小説脚本新躰詩の三種には振假名をつけること、文章は凡て二十四字詰に書くこと。

▲封筒の表に新作家原稿の字を書き添へること。

▲圖畫は例の通り二寸五分に三寸の大きさにて薄葉雁皮の類を用ひよ。

▲寄稿する者は必ず日課表一枚を添へて下さい。

▲日課表には姓名（本名、雅號、年齡）住所（國郡市町村名等、或は海邊とか山中とか或は其日の天候等特色を書き添ゆるもの、但し紙上に住所本名を發表すること不可なる其旨附記せられたし）家庭（職業、父母、同胞家族等の現在）日課（朝、晝、晩の行事、通學、用事、勉强等の模樣）月日（此の表を書く時の月日）以上總て簡單明瞭に認めること、左に日課表認め方の一例を示します。

日課表

姓名	木津屋ゆき　雅號奴の小萬　十六歳
住居	大阪南區島之内
家庭	父は五郎兵衛　家は藥舗　但し私は藥は嫌ひ
日課	午前六時起床　柔軟體操を行ふ　午前は劒術自習、午後柳澤里恭先生の許に郵便を出す、和歌の添削を願む爲なり、夜、行燈の下にて六韜三畧虎の卷と古今集を繙く、外には淡雪降る
月日	延享元年二月十五日

第九卷第四號

日本青年最好伴侶

秀才文壇

二月十五日發行 ● 價一冊金拾三錢 郵税一錢

懸賞
青年文壇壹百餘頁には新進青年作家の大筆戰あり

撰者 有名大家十四名

發行所 東京神田旅籠町一丁目（振替口座一九五五）文光堂
賣捌 東京堂 東海堂 ◎北隆館 ◎良明堂 ◎上田屋 ◎至誠堂

（前付の一）






毛髪の滋養として大効あり故に紳士
貴婦人諸君間にて好評嘖々たり
煉香油
パール
東京横山町三 發賣元 平尾店
(其の四)

朝の祭



（大江原色版部）

樂聲



三隅穎三郎筆

女學部新設

實用女學講義錄發行

▲本會は中學講義錄の發行に從ふと既に五ヶ年通信敎授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して「實用女學講義錄」を發行せり。

▲講習期一ヶ年半、此間に於て高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす。

▲講義錄は每月二回發行とし講師は敎育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲每月機關雜誌「新國民」を發行して會員に限り每號無料進呈す「新國民」は現代知名の專門敎育家及び斯道大家の訓語學說創作及び會員の投稿を掲ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切なり。且つ會費極めて低廉、都會一ヶ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◎新學期開始＝至急入會者に限り入會金全免すべし◎

見本つき規則　無料進呈

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺
電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

（奥付の三）

入選作家（一）



木村志満子君



杉浦翠子君



長曾我部菊子君

（左は従妹）

入選作家（二）


伏見八千代子君


鶴見美那子君


石川貴與子君

入選作家（三）



加藤莉子君



山内梅枝子君



秋山欣子君



松山政子君



阿部秀子君



加藤筆子君

入選作家（四）

女子文壇
増刊第一

新美文





美文

一等

何故私は斯う物に驚くのでせう

信濃　太田きし子

乍恐縮以て書面を御願上候　偖私事段々御世話樣に相成候所今回無盡を手に入れ御勘定致す可心組の處、遂手に入らざる爲め不止得身の立置所なく一度家立貫き候故千圓にも家一つ何分にも宜敷御願申上奉候先は後便に讓づる

松本市にて　山田米吉

ア、矢張りかうなつたか、どゝのつまりがこんなとになつたのか、氣の狹いこの冬空をどうするつもりだ、一里出たつて旅ぢやねーか、千圓にも家一ッとは氣がきいてるけれど、あのサンカラ家臺一ッが何ぼになると思ふた、ウフ……。ポンと抛り出した其端書、間違ひだらけの其の端書、

一度讀で二度見て、見ればみるほど思は新らしく湧いてくるばかり。

とう〳〵逃げて仕舞ひましたわねー、それでも困るぢやないか、ぢやアあの一件も無論駄目でござんすわね、困つちまうなア、それで早くから私がやい〳〵云つてとだつたけれど何ァに〳〵とあんまり信用しすぎて飼犬に手を嚙まれるッて眞にこのと、それでもよく〳〵な米吉ぢやないか、ッて父樣は炬燵の上がけを手あたり次第に撫でまはしていらッしやる。

父樣は默つたまゝまた端書を拾ひ上げて、それを讀むでもなし、母さんの仰有ることにも御返事なさるでも

なし、たゞ呆然としてゐらしッやる。

霜のぴか〳〵光る寒い寒い朝でございます。遠くの方からはカチン〳〵と「のみ」をつかう音がし近い垣根側には鶲がしのびやかに啼いて、考へがちのこの胸大きな〳〵あるものを發見して萬事皆に嘲られて居る心持なのに、その聲がまたなく寂しうきかれます。なつかしいやうでいそぎ椽に出ました。

妾はさッきまでゐ、たゞのさッきまで、あれこれと思を走らして全く自分一人の天地のやうによろこんで居りましたのに、弱い心に生れては只平らかな安い日を日をとそれのみ願つて居りましたのに、此の端書一枚はやがて吾が凡ての破壞者となつて仕舞ひました。いくつになつても、ねんねー樣でネー、と云はれちやア寂しい心になつて世間見ずをかこちましたが、其時の思ひは決して悲しいとではなかつたのでございます『決して悲しいことではなかつた』これを覺つた、たゞ今の私はもう恐ろしくも寂しうも冷たく深いはてなき處にだん〳〵と吸ひ込れて落ちゆくのでせう。

手も足も頑丈で、私共の血とは能度ちがつて居つたでございませう、何事をするにも鬼のやうに强かつた彼米吉は遂にこの里をぬけ出て仕まひました。口かず少なかつた女房のおかよも、たゞ一人限りの太十も、しよんぼりと後に尾いて行つたでせう。

あゝいくら骨ぐみが頑固でも、心だてが正直でも「金」この金がなくなつて仕まへば、萬人からうとまれて仕まつてこの米吉のやうな仕末となるのでせうか。

金が無ければ人にうとまれる、自由にあるべき立派な體軀も金のためには内外から嚴しい〳〵縛りにあつて吾が住みなれた里にも居られなくなつちまうでせうか、何事も皆新らしく珍らしく感じつゝある私の、この目、胸、なぜ鋭どく生れたのでせう、何物にも觸れないで居れば心安いでせうに時々刻々と迫りくる物事には生きてゐる以上はどうしても觸れなければなりませんはねー、觸れゝばぢきに覺めて驚ろいて、また覺めて驚ろいて仕まつて、果ては何の感じも思ひもなくなるでせうが。其の時はどんなものでせう。思ひますまひよ決して、決して、けれども性分でせう、どうしても思はずには居得ません。

私はすべての物に嘲られて居はしますまいか、便りない思がしきりと致します。

これを我がまゝだと叱られても仕樣がありません。何の經驗もない私に明日の安さが知れませうか。薄氷の上を行くやうな、あやふい生命の蜜のやうな詩歌を慰としてわづかほゝ笑で居ますが、これも今に今

に何ものかの手に奪はれて仕まうでせうが、その時は、何によつてゆきませう、頭が半分づゝしびれます、さつきまでの私、と現の私と、は遠ざかつて仕まひました、いつまで經つたとて逢ふ事ができません。「滅ぶ聲」とでも申しませうか鴿はまだ啼いてゐます、目にうつるもの枯木立、ゆく人はとぼ〳〵とゆきます、どこからどちらへ何を的にゆくのでございませう。どうしても多くを語り得ません、我がまゝだとおとがめ下さいますな。これは私の性分でございます故。

物に驚き易く感じ易き若き人の胸は遺憾なく此一事件に由りて表はされてゐます、一枚のハガキが來た爲に天地も覆るばかり、若き胸に覺ゆる不安、恐怖、恰もあるらしく想ひます、小說ではない、事實です、事實から湧く自己の感想ほど確かなものはありますまい、千圓のかたに家一つ置いて逃げたと云ふ世間には有りふるした事實です、けれども若き胸はそれ程の事にも大いなる波が響くのです（評）

二等

晩春の伊香保

上野　木内きくえ

潰れかゝつたやうな家の並んだお師町も歩るき榛名の神さびた御社も見、湖水のほとりをもしばらく徜徉ふた私達はやがて萠黄の色にうちはへた若草の上になかくひく自分の影法師を踏みながらとぼ〳〵と伊香保の方へ歩いてゆくので。ふりかえると空は薄曇りして、黃色く濁つた日は餘程傾いて居ました。榛名湖につゞく牧場の道の右と左、伊香保富士や、相馬が嶽や、遠い越後境の山々、皆太古のやうな落日の靜けさを味はつて居る其の姿。懐かしさにたえられず路に佇むと涙がさしぐまれる、あゝ「刹那の思ひ」です。人が日常の無意味な生活を送るのも此の刹那の思ひを求めるからで、私は友達の胸に刹那の閃を見、戀人の言葉に刹那の尊さをきゝます、此の刹那の思ひにのみ生くることのできない慊ない人の世に……而もこうした曠野に立つてゐるのです、その果てに遠く落日の靜寂のうちに立つてゐる山影を望むのですもの、懐かしくなくてどうしやう――私は連れの人々におくれて伊香保――晩春の夕ぐれ――かう考へてしみ〴〵と「不如歸」のことなど思つて春の宿りをさして歩いて

行くのでした、湯澤川の深い谷に沿ふて伊香保へ下りた頃は湯川の水音が聞えて來た、西洋畫ににでもありさうな白塗の橋の欄杆によつて見やると何處となく灰色を帶んで明日の雨を思はせるやうな空はひくく

可懐しい、温泉の宿の硝子窓や、灰色がゝつた家の屋根が若葉の間に見えかくれして眼に映つた

私は恍とそれを眺めました、眺め入りました。

夕ぐれを欄杆から眺めるとぢき麓の湯中子の村は若葉がくれにちらほらと灯がもれて、さらぬだに物しづかな晩春の夕暮は悲しいやうな哀れなやうにも感じます、冷えた山上の空氣が湯あがりの肌に觸れる心地、何だかかう今まで思ひつめて居た伊香保のことが一度にこみあげたやうで頭が重い、私は恍と四邊を眺めて居ました、紫に暮れゆく赤城の裾野日光足尾から越後境の山々、近い小野子子持の山まで黄昏れ渡つた。欄杆の前は若葉に埋れた谷で晝なら鶯も聞こえましやう。谷からともなく宿の湯殿からともなく硫黄の匂ひが夕闇と共にたゞよふて來る、春の夜のあたゝかさの身も心も溶けるやうな親しい匂ひ、激しい病に疲れた人々は地の底から湧いて出る温泉の暖みに感じて弱い身體の苦痛を逃がれる――あゝ何という懐かしい匂ひであらう。

私は靜かに夕闇のうちに立ちつくした、



春　（一等）　紀伊　榊田みつ子

今日は雨。糸のやうな白い雨がたえず降りそゝいで、つめたい風が頬にひやりとする、もう意氣地もなく閉めきつた障子をあけると向ひ合つて居る旅館の三階の客も欠伸して詖居る、たえまなくうちふる雨にぼんやりとして遠い山の頂や高い家の屋根や何やかや見るものは皆霞んで居る、

しばらくして私はたゞひとり町を歩いて居ました、春の雨にうつりのよい繪葉書をならべた家や、美しい玩具を鬻ぐ店や、蛇の目傘をさして行く者、裾を端折つて白い素足で走る女、高下駄をはいてゐせいよく行く下男風の男、何處からともなく立ちまよふ湯煙の匂ひもしつとりとして、なまめかしいうちにもおだやかな春雨です、空は曇つて居るけれどどことなく緑色にうるんで居る、私は儚ない夢に憧れるやうな氣がして妙に哀愁をおぼえました、

晴れてはさすがに心地のよいものです、洗ひ出された山々は、はつきりと輪郭が鮮かに極くうすくかすかにぼうとした薄霞がかゝつて居て、すつきりと柔かに晴れた空を靜かに微風がふいて居る。

さやかにそよく若葉は南廊下を美しく見せる、欄近く垂れた若葉の吐息は頬に匂ひかゝります、いく度か目を細くして嗅いて見た、あゝ淋しいと思つてきく五月雨のふるにつれ、春の逝くにつれ、この若葉も硬い青葉となつてじりじりと照り渡る夏の日の前に苦しさうに喘ぐやうになるでせう、かうして私共の若き日もゆくのかと思ふと堪へられませぬ悲哀をおぼえます。

樂しい若い女の笑ひ聲、放肆な湯場の空氣かすかに戰ぐ若葉の匂ひは人を醉ふばかりにさせた。血液の循環が鈍くなつたやうな、愉快と言つても心の底からではなく一寸靜かな所へさへ行けば始終悲しいやうな寂しさが胸に蟠かまつて居まする、私の好んで行く物聞山道。其の路すぢの丘、物しづかな眞晝の光は高い樹葉をもれて所々花やかな光を地におとして軟かな培土の吐息も身にせまるかとばかり。

あゝ孤獨のわずらひを忘れるのもこゝです、幽思に耽るのもこゝです、たへがたい折々は若葉の影に身を投げて戀の苦痛も哭きました、おゝ私の隱れ家……友と夕暮れをこゝへ來ると黄昏れの微光は雜木林をもれて來ました、暮れてゆく空にとめた春の名殘の白雲がひと片悠々と赤城の頂に見えました時あゝどんなに漂泊の生活を慕ふ心がわきましたらう。

華麗と歡樂とにみちた歌劇の燈のかげに映る巴里の都野罌粟の花の紅く燃えるやうなアルプスの谷を越えて入る伊太利は、ローレルの樹高くレモンの花の咲くという所、都々の宮殿寺院の屋外は桂と椰子と柏との緑葉につゝまれて藝術の花の匂ふ國、河は日の前に輝く

アルノオ河チベルの河は黄に濁つてローマの都ぞ流るるとか。草はカンパニャの野に匂ふアラセイト草、森は深緑の香を送る橄欖の森。あゝ、アルプスの山を越えてルゼンの湖畔に立つた時ライン の上流について檢檜の林の道を静かに歩いた時、和蘭の海岸に立つて北海の暗い波濤を望んだ時はどう――。こうした果てしない空想を追ふ時、胸の動悸が高う高う、いふに言はれぬなつかしさをおぼえる、あゝこの物思ひ、このあこがれこそ私には何よりもいとしい戀人のそれよりもなつかしうおもはれまする。友はどう思ふてか……矢張り逝く雲の行方を忸と見て居ましたが。

第一感興に乗つている第二文章に力がある、第三場所が好い、時季が好い、第四天然に對する印象が深い、第五文字に素養があつて而かも窓くはない、扱ひ方が新しい、以上此作の五個の特色、新美文の名に背かぬ傑作です(評)

三等

結婚前の手控へ

青山 杉浦翠子

廿歳の今日まで是といふ苦勞はした事がないのに、今日此頃の不安さは一通ではないのもその筈。私の身が岡様の物となるか、香川様の物となるかと云ふ一身分目の時だもの。それは母様も被仰る通り、岡様は資產家の御息子でありお履歴も立派だが、いはゞ見ず知らずの他人であるが、香川様は兄様の友達でもあり、今でこそお役が多忙しいので互に疎遠にもなつてるが、まだ大學にお出の頃は日曜毎に遊びに御出になつたので、尤も其頃とて戀も誓もあつた譯ではないが、何だか好きな懐しい方のやうに思はれたが、今でも矢張り香川様の事を幻に思ひ浮べると、云ひ知れぬ懐しい微妙な感が胸に仄めくのである。――お眼の凛々しいお口の締まつた――ホ……矢張り戀かしら。然し戀とすれば極めて淡いものだ、何故といへば二人は親しく話し合ふた事もなく、只兄さんの友達といふに過ぎない交際だつたのだもの。然し母様兄様の御許可があつて、私が若し香川様の妻となることを得ば、今迄の二人の淡い色にも言葉にも現はされなかつた情交が、中々に結ばれた曉には思ひ出多き戀の歴史ともなるではなからうか。一樹のかげに休らひし二人が、年經てか

ら神の導によつて再び今度は赤縄のもとに邂逅ふたら、その昔の一樹の陰が如何に尊い紀念ともなるであらう。たゞ兄さんの友達としての交際にも花を咲かせれば香も放とうが錣がへつて私が岡樣に嫁つて終たなら香川樣とはもう異舟の客でその昔行きずりに一目見交したばかりの路傍の人ともなつて終ふのである、惜しいではないか。まあ兄樣や父樣は香川樣の方へ賛成らしいが、母樣は頻りと岡樣の肩を持つから或は岡樣になるのかもしれぬが、若し私にと御相談のあつた時は何と御答へしやう。私は親にも反對してまでも香川樣へ嫁き度いと主張する程の勇氣はないのだから、もう御兩親の良いやうにと云ふより外はないのだが、あゝ孰方に決まるのかしら、何事も運命だからもう瞑目して出雲の神のお手に任すより外はないのだと斷念めて見たが、どうして心が落ち付かぬ。なんぼ親でもこんな事を諄々と聞くのもきまりが惡いし……所詮この二三日に決定するのだが、どうも待遠しくて不安で仕方なく、かうして自分の机の前に坐てるのはいゝが、たゞ茫乎とこんな事ばかりを考へて居る、ふと私は島田の髮に挿した銀簪を拔いた、是れから友達に教はつた獨占ひをして見るのである。まづハラリと當もなく宙に抛げた銀簪はひらりと輝いて疊の上に落ちる、落ちた簪の脚の止まつた處の疊の目を起點として、私は疊の目一個一個を代る〴〵香川樣か岡樣かと右へ數へ黑線の盡きた處で出た名の方が即ち私の未來の良人との暗示と心得る。最初この占をして見ると岡樣が出た、をやと思つたが何の手の振り加減もある、もう一度と、して見るとまた不思議にも岡樣であつた。二度までもと私は少々胸を躍かせたが、三度目こそ正直よと今度は信仰を籠めて占ふと、抛げた銀簪は疊の面に戞然と聲して宣告を示した。數へて見ればこはそも如何に依然岡樣ではないか、私は二の句も次げないのである。

あゝ矢張りかうなるのが天の配賦かしらと思ふと、人間といふものは片意地のもので――かうなると妙に緣のない香川樣に未練が殘つて無暗に惜まるゝは、失せし實の大なると思ふと同一の感であつて、急に失戀を氣取つてキツピツトを恨んで泣かぬばかりの意氣悄沈……この兒戲に等しき戲事を恰も神託かのやうに大騷ぎするほどに私の心が迷ふて居たのである。

二三日過ぎてから御兩親は私を御膝下に招んで被仰るには、岡樣の名門の世繼に競べては香川樣は是といふ資產もないが人格の高い眞面目の人物ではあるがお前嫁く氣はないかとお訊になつた時は實に夢かと計り驚いたのである。誠によく理窟の分かつた御兩親だと今更ながら感謝に堪へない。神から賜はつた、女の誇い

尉と丈なる暴變、この天賦の誇は、黄金や名門や權勢やの人爵に嫁がれやうか。色貴る女ならいさ知らず、私は私は厭である。清淨無垢なる乙女の情操と結ぶ物は色ではない形ではない心である誠である愛こそ神の司配す可きものではないか、結婚は愛の結合であると神聖な考をして、ここに位を棄てゝ心の人に嫁ぐ可く御兩親の前に誓つたのである。嬉しい日は日々に過ぎて結納も取り交はされる。私の荷物も愈々明日は先方に送るといふので、今日は自分の持ち物を片付ける、第一に文箱の裡を分類する。亡き友のや先きに嫁いだ友のや夫れ〳〵の手蹟によつて追想が浮ぶが、茲にひとつ氣の毒なのは奥平の秀夫さん――私が嫁つてるのも知らずによくも寄こしたこの手紙――讀んで見るとこの澤山な手紙一言一句が皆熱烈の文字である。百夜の想ひの深草の小將の哀を思ひ出されて、私が嫁つてから後の失望の程が察せられ可愛想のやうな氣がするが、この一掬の同情が今まで君に對した無情さのお詫びである、許し給へと斷はつて、帶とも長きこの卷紙の文殼を初は色紙の幅に裂き次には短冊の細さに裂きしをまた裂きまた破りて紙縒とも糸とも細く裂いた。色があつたら草の葉とも見やう、外なるカードや繪葉書の捩り捩つた、片々には紅や黄やあちこちと個々に彩色が留まつて、恰も花片とも思はれるのを、皆嵐のやうなつれなき手に掻ぎられて丸められて、傍の火鉢の裡に抛げ入れると、きな臭き匂ひ紫の煙が立つて、若き人の心血の文字は目のあたり紅の炎と化して燃えあがつて、罪多き私の頰や額をハット――火照つたが、それも暫時、夢は束の間、戀は儚し、火宅の裡に亡者の妻と殘つたはこの冷灰。鳴呼茲に煩惱の犬、色慾の餓鬼、盡く鳥邊野の煙に成



（二等）草刈り　牛込　佐野貞子

佛して、未練を洗ひ去つた私の胸には翳す雲だになく、清淨の私は彼の君の妻として二心なく生れ出てたのである。

結婚を前に控えた女の心を極く眞面目に書いたものです、文學的價値は第二位に落つるかも知れませんか、女らしい文字の扱ひぶりと、或る明白な誰しも感ずる感じを傳へた手柄は沒すべきものではありません、要するに常識の發達した好文章です。（評）

四等

意地に身を彈く獨り者

阿波　長曾我部菊子

母樣のお前で淋しう小さう坐つて居つたが物思ひ漸く重るにそひて、ぱらりと膝を涙が傳うた。丁度互互の顏もおぼろに暮れて居つたのでさいはひ、不覺の落涙をみとめられずにすんだけれどもうしやうなく泣けて來るのでたまらずに、すつくと立つて冷たい椽に出で冬暮れ方の空に見入つた。綿帽子の樣な黄色の雲の一かたまり、ぽつと半空に浮いてゐるのが、しんみりと沈んだ黑色に刻一刻そまらうしてゐる。私の魂はすぐ黄雲の中にはせたがつきせぬ涙は仕方がない。湯のやうに熱く流れるんだものああ私は母樣を見るごと私の四十路はどうあらう。だれもだれもたよる人なき獨身の私の行末の心ぼそさ!!。それを思うて涙が落ちる。私は弟を見てもあの子も今十年の中には配たる人を得て我家の家督にすわるのであらう。弟嫁！それに甥といふ凛々しいのや、姪といふ愛らしいのや、そんなが、ちよこ〳〵と今にはそこゝから走り出すのであらうを、その場合私は！、私はどこへどうして出ては居らう。弟夫婦の傍に私はたとひ一日と雖同居したうない――弟は私をいたはるのだけれど、私は意地に身を彈く獨りもの。なか〳〵に同居は獨身者に慘酷である、と思ふにつれて――

黄い雲はます〳〵夜の色に染つて行く。離家の祖母樣はどうしてゐらつしやらう、ああ祖母樣と言へば私の最後の光景はどうであらう、最後！、おゝ最後。思へば十七の春。ある日、（あなたが臨終の床には必らずわたしが行つて、夢にも心細かるまじく手を握ります固

く〳〵と約したYなる人はあつたが――。一旦とほく離別すれば、たれでも〳〵やがては人に配ふのだ、既婚の人に臨終を見てもらうては私に何の誇があらう。我れを守るもの「吾」あり、それで不足はない、ああ私は華な、たとへば血を吐くやうなめざましい死期がほしい。

私の年は今二十一歳、死をゑがいて笑むはあるひは早いかも知れないが、愛を惡み、婚嫁をのろひ、人をいとふ身に、たゞ一つのこれる光明が「最後」といふ二字である。

最後よ。華やかに來れ、吾が末期よ!!!眺めやる彼の黄の夕雲は今はほとんど暗色になつた。ああ私はあの雲のやうにずん〳〵滅んで消えて闇にすはるゝやうな死は非常に嫌だ。あんなには死なない、(死なない!)と黒くなつた雲に向つて思はずひとりごとすると部屋から母樣。(何かまた辛がるのぢやないか。風邪をひくからおはいり!)とおつしやつたので、涙を拭うて立ちなほつた。

中年以上の者か斯う云ふ文章を讀むと、なんだ若いのに生意氣な、はなやかな死もあるものか、今に死れと言つても、汚くても生きたいと言うやうになるぞと、斯う思ふに違いない、それも然うです、けれども此世の中の或る道筋!を一切ぬきにして、生れた――死ぬ――斯うと考へて居る間ほど情の美しい時代は再び無いのです、私は此意味に於て、例へ不健全の非難はあつても此種青春の血のみなぎるやうな作を愛します(評)

五等

醒めし日

東京　暗き花

何かの機みで出た先生の薔い手紙を眺め乍ら、私は何物かの深い思ひに撲たれました。沈乎と目を据へて見て居ますと、手紙の方の字は段々ごちや〳〵になつて了つて、却つて頭腦の中へ瞭然と字の形が映つて居るのです。

――御宅の御都合のよい時には遊びにお越しなさいまし、又私に用あれば何時でも……私は御身を案じて居ります――

忘れぬ文句を讀むともなく心の中で繰返しましたが、同時に堪へ得ぬ苦痛が抑へ樣もなく湧いて來ました。私は先生に背いて居る、我から先生の慈ある膝の中より離かつて了つたのだと思ひますと、もう實に堪まらなく苦しいのです。

すまない、眞に濟まない。先生の事を想ふ時にいつも先立つのは此思ひです。雖然弱い私には斯う思ひつゝ鬪へるのみに過ぎませんでした。

三浦先生と云ひました。今も慿う目を瞑つて心を一つに寄せますと、まはりをつめた束髮にして、色の淺黑い、痩せ形でどこか梅花の凛としたやうな、しつかりした先生の袴姿が歷然と見えて參ります。

なつかしい先生!! 私の心は叫ばふとしますが、思切つて叫べないのです。

暗い、重たい心地が胸を覆ふて來ました。

多くの生徒を心服せしめた力ある眼、其先生の眼が私一人に絕えず注がれて居るやうに思へました。先生は實に私を愛して居て下さつたのです。

不良な生徒を叱られる時、いつも善良な模範として引合に出されるのは誰でせう。先生の遲刻された時などに、代りとして教壇に立つものは私でした。

級で級長の互選があつたとき、私は最高票で級長となりましたけれど、幾分か先生のみ心あつての事ではと今でもさう思つて居ります。何故なれば其時おなじ級に居た武藤さんと云ふ、其方の方が私よりもずつと能く出來ましたのですもの。

何しろ先生は眞に私を多くの同窓から仰望されるやうにして居て下すつたに違ひありません。師の信任厚いのを知つて。小さな矜りと歡びと、私の胸は奈何に明るかつたでせう。

冷たく寂しい家の內に、肩幅狹く生立つた身には、優しい先生が母とも慕はれて、學校へゆくのが何より嬉しかつたのでした。

幼いより心さいなまれて、自然と人に懷き難いやうにされて了ひましたから、私には多くの友の樣に、先生に縋つたり戯れたり、打解けた眞似は出來ませんでしたけれど、心では人一倍先生を懷かしく、實際先生のお心がよく感じられたのです。

あゝ深かつた師の慈愛、雖然今はもう夫れも自分の事じや無かつたやうに思はれます。淡々しい少女の時を人は美しい追懷の繪卷の中に描きこめて、繰返すとき快い笑みがあるでせう。併し私には其稚い夢の跡を辿るのも苦痛なのですもの。

昨日を逐はず、明日を思はず、只現在の一瞬時の連續に曳かれてゆく私の心の中には、何時か先生の俤も薄れがちになつてゆきます。彼麼に愛して下さつた先生

に背いて私は何て罪ある人でしやう。恁う云ふ風にならうとは決して思ひませんでしたものを。

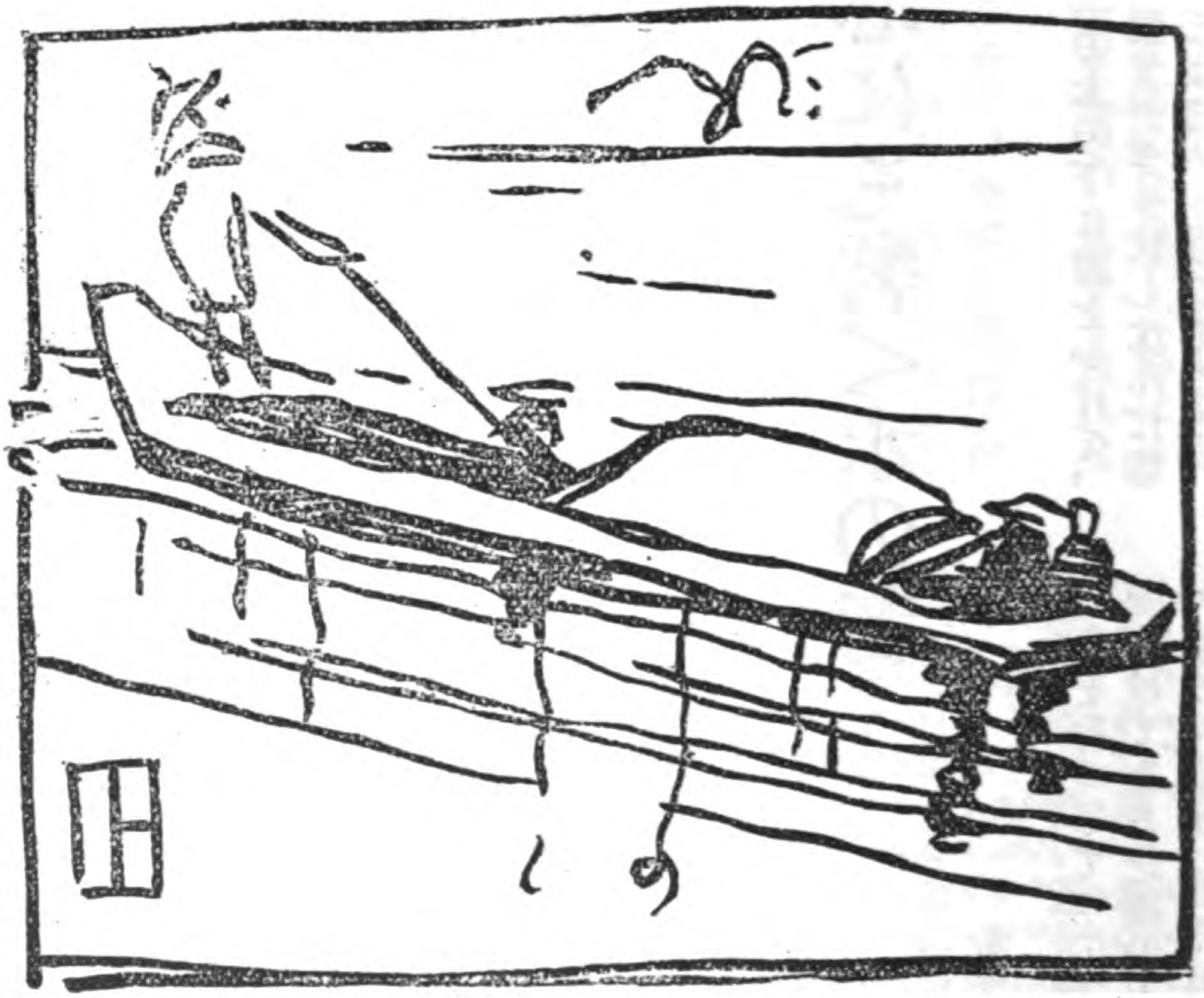
これと云ふのも私の性質が自然に恁うして了つたのだとは自分から覺つて居ります。兎角に怯ぢて我から隔て丶了ふ心、先生の事でも實にさうです、事繁い世の中は敎への庭を出てから先生と私との間を裂いて、段々に遠ざからしめました。伸ぶる若芽を摘むやうにして、抑へられた境遇も大きに與かつて居ましやうけれど、音信絶えては濟まない〱が先に立つて、追々と先生に會ふのが怖ろしいやうに感じられ、稀に學校の前を通つても、見付らないでと何かしらず足早に行過ぎる樣になりました。

手紙を上げるのも氣が咎めて、把りし筆投げたも幾度だか知れません。實に私は弱い、弱いのだと覺つては云ふ方ない涙を覺へますのです。此手がみも卒業した時、卒業後の私を案じて下すつたもの　前にも後にも只一通の先生の手紙、是れなくばと今迄もいく度か思ひましたが、流石に燒くに忍びず、今でも手筐の底ふかく藏めておきます。我から苦痛を增すとも、心强く燃す事も出來ないのですもの。

怯者とは私のやうな性格を云ふのでしやうが。

會へば先生は喜んで下さるでせう。無音の罪を許しても下さるでせうが、私には夫れが出來ないのです。

淺間しくも哀しい私の心。もう先生とは千里の遠きに隔たつて了ひました。私が今恁う思へばとて先生の胸には通はないだらうと思ひます。會はないだけに先生の思ひが感じられて、年二



（三等）冬の渡し　青森　立花とも子

季の校友會にも、もう出られなくなりました、先生の眼を避けて居度いからです

俤は忘れ得ずとも、先生はもう私の胸より永久に去つた人ではありますまいか。力ない手で我に近づく人に縋らうとはしますが、怯へて遂に告ぐる魂の別離、悲しう背ける心を何れにか返す由がありましやう。

懐かしい先生！、私は聲を放つて泣きたいけれど哭けないのです。聲を擧げて泣いたらば此胸より苦しさ切ないさが消へてもゆきましやうに……あゝ處女の身であり乍ら、私にはもう純な感情が許されないのでせうか……

涙の滴ちた目を伏せて、私は壓されるやうな胸を安めるべく庭へ下りました。

日は近い杜の陰に沈みかけて、杜は美しく輝いて居ます。乾き切つた寒い風が、夕べの街の響きを裹んで吹いて來ました。

暗く沈んだ胸には刺すやうな痛みがあります。何物にも親しみがたき我れなるものを省みて、私は云得ぬ寂寥の慄にきました。

文章は確かです、考へも確かです、じみな、おちついた人格が表はれてゐるやうに思ひます、今の青年の人の胸を躍らすべく、餘りに沈みすぎてゐます、作者の言葉で云へば、處女の身でありながら、感情が燃えてゐません、けれども此の冷靜な態度で、なほ深く文章の道に進んだならば、前途の永遠が想像されます、彼の花火の火のやうに、一時にパツと咲いても直ぐ消えるやうな只わか〳〵しいだけの文字とは同一視すべきものではないと思います（評）

六等

子供の心にも響く水の音

北海道　悲しき人

孝は今日も芝土手の、枯れた柳の木の下に腰をかけて、ぼんやり考へこんでゐる、見渡すかぎり伏し沈んだ畑の、寒さうに骨ばかりに成つてよぼ〳〵立つてゐる、桑の木の根つ株に、こゞえ切つて結んでゐる白い霜のいろをみつめて………。

腰かけてゐる芝堤の上にも深い霜柱が立つて、どんより曇つた空からは、日の光一つ見えはしない、どてのすぐ下を流れてゆく川の水音の、すんだ音につれて、寒

い〳〵風がひくゝ吹て、枯れた柳の下枝をゆすつて、あかとんだきたない孝の「ぬのこ」をくゝつてやせた肌につめたさうにあたる。孝の頬は紫になつて、唇はわな〳〵ふるへて、目は寒さにうるんで、見るも哀れな姿である。

孝は村の小使をして居た「作」の子で、今年の夏「作」が脳病で死でから、まだ十五の幼い身を、はや孤兒となつたのである（作は渡りもので此村にきた時から孝の母はなかつたので孝は母が有つたとも氣が付かないでゐる）

孤兒となつて間もなく「作」と遠い縁引の、寅と云ふ水呑百姓の家にしかたなしに引取られて、女房にこきつかはれて、まがりくねり大きく成つてゆく可愛さうな兒である。

秋のとり入がすんで、山深き信濃は、いざ冬ごもりにはいらうと云ふ昨今、つかいこくつたあげくのはて「くいつぶし」と口のはし〴〵に、寅の女房にのゝしられるのがはらだゝしさに、ひまさへあれば此どてにきて、エラさうに考へるのが此頃の孝のくせと成つてしまつた。

此しば堤は孝にとつては忘られぬ「記憶」がいくつもせきとめられてあるので。それは死でしまつた父の作と二人、村の人にたのまれては、春のぬく〳〵した日にこゝの青しばをざく〳〵刈つては、田のこやしにいれてやつた事。尋常三年の時先生が「芝堤」と云ふ作文の題をだした時、此芝堤の模様を書て、上手に出來たとほめられた事、秋のしまひにやつぱり父と一緒に、又來年の春、青い芝を萌させる爲に、かれた芝に火をつけた時、パチパチ紅の火が面白くこゝを走つた美しい事、それから今年の夏、父の柩のあとについて、「燒場」にと急ぐ道すがら、此どての上の柳の木の下で一度休んで、かついできてくれた人が「たばこ」をのんでゐる間、孝はじつと默して居つた其時に、此川を流れる水の音が何とも云へない遠い深いなつかしいひゞきを聞してくれた樣な氣がして、其後孝は父なき淋しさに此堤に來て、川の音を耳にすると、あだかも其時其まゝに、時も水も流れ去らずに有つた樣に、あり〳〵胸にかはらぬひゞきがつたはるので、何とは知らず此堤がなつかしいものになつてしまつた。はたから見れば孝はまことに詩人的の兒であつた。

今日も孝は其なつかしい音を聞てゐる、孝はふとあの柔な春の草を刈た頃の事を思ひ出した、思ひ出すとすぐ其思ひがあり〳〵かたちをとつて胸に浮ぶが孝の常である、——現ともなく夢ともなく、土の新しいにほひがほか〳〵湧て、蠟を流した樣なつやゝかな桑畑の中から石ころのかげと云はず古わらじの下と云はず、て

ら〳〵美しいかげろふがもえてゐる。柳の枝がゆら〳〵するあたりを黄色い蝶がまつて、あたゝかい日の光が紺の一枚「ぬのこ」にぽか〳〵さして、青い柔い草をわけなく刈つてゆく光つた鎌のさきが二挺、調子よくそろうてうたでもうたつて見たくなつた。細い目の下に力なくひろがつた口に、あつたかさうは「たばこ」をふかしながら、せつせと刈つてる父の方を、ニッコリ笑つて見つめたと思ふと、バット消えて、たちまち夏の午ごろの日ざしに、小さい柩のかげをかゝれて、村の人が三四人、汗をふいたりたばこをのんだりして、川風の涼しいのに息づいているそばで、しよんぼり立つた自分の影、耳をすますと何とも云へない極樂の水の音を聞く樣な、永い〳〵川のひゞき、きれそうで切れないどこまでも〳〵つゞいてゆく川の流れの音を深く〳〵きゝ入つて居る――かうして靜まりかへつた心に、忽ちいやな聲がひゞく、「くひつぶし」――と。そうして其にがみ走つた、おはぐろまだらのにくひ顔が目にうつつて、孝はほろ〳〵涙をこぼした。悲しさうにじやない口惜さに。

どうかして立派な人に成つてあいつを驚かせてくれたいと思ふ、思ふとすぐ孝の胸には、日頃あくがれてゐる繪其まゝの、胸にきら〳〵「勳章」をさげし、身には金モールをかざつた大將の姿の上へ自分の顔がついてしまつた。―そうだ、大將になつてあいつを驚かせてくれ樣!!とこう思つてバット見ひらいた孝の瞳はらんらんと詩人さながらにかゞやいて、深く光つた。孝は自分は學問のない事も、父が肺病で死んだ事も知らない、たゞ大將にあくがれてゐる。あくがれるそれがたゞちに孝の性質であるとは孝自身は知らないので、おそらく孝は孝の詩の天才を、死まで知らずに、失敗の生涯を送るであらう。

「孝」と云ふ少年を描き出すのに、極力感じを傳へやうとした筆の香は、たゞの駈出しの人ではない、此筆で短篇小説を書いたら葉舟式のものが出來るでせう。水の流れを聞く處が最も好い、大將にならうと云ふ少年の心もかなり表はしてある、美文と云つても何れは小説になるべきものですから、此行き方は贊成します。(評)

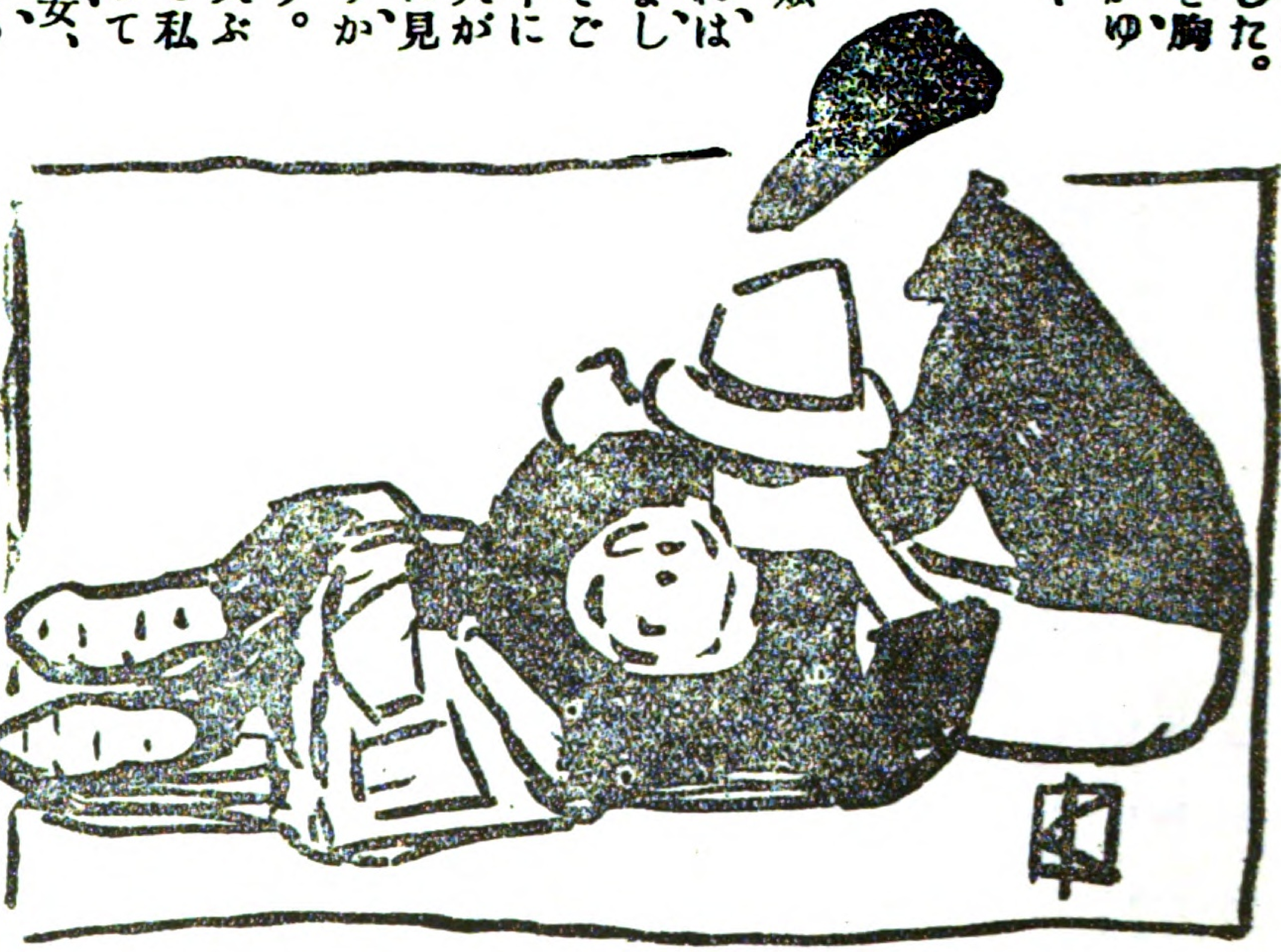
七等

わが靈の顫ふ夕

四谷　河野　槇

なつかしい夕べの色は跫音をぬすんで、窓に迫つてまゐりました。仰向にねて目をとぢてぢつと胸に手を組んでゐると、呼吸がゆるやかに、蒲團がふうとふくらむと、またしづかにさがつてゆく時、かるく重みを感じます。

今年の秋を、はじめて私の頬に紅味が潮しましたの、それはどんなに多くの人に喜ばれましたでせう。今、泪のあとこそございませんけれど、夕闇の中にくつきりと蒼白く、もしか人が窓の外から山茶花の葉ごしに見たらば、きつともう私は眠りから覺めないのかと思ふでせう。クリスチャンだと云はれ詩人ぶりとからかはれても、だつて私には結へませんものと、云つておきます。けれど私だつて少女、形はともあれ、もつれないやう



（四等）苦學の友　名古屋　吉田とき子

に毎朝きれいに梳つておいた髪も、白い枕の上に亂れたまゝでもう二十日あまり。「大晦日までに洗はないと、お下髪にするのに困るけれど……」、二三時間前、私はふと春めいたのどかな日影をガラス越しに見て、こんなことと思ひました。ほんとに不思議です、どうしたのでせう、あゝさう〳〵律子様とお約束があつたつけ、お揃ひのリボン、靴、黒の紋付、元日の朝迎ひにきて下さる時の懐しいお姿が……思はず目をあきました、と本箱の上の暗いところに、眞白く百合の花がさゝやくやうに見えます、うすいゴムに浮出して、花瓣にはビロードがはつてある美しいクリスマスカード、けさ程妙子さまからいたゞいたのです、ぢつとみつめてゐると、其の花そつくりな優しい贈り主の俤が浮

んできて、いつものあの頬のゑくぼが魂を吸ひ込まうと致します、我からも吸はれやうとして、ふともの怖ぢ心地にたちろぎました。三年前の幼い心に、深く〱銘された、強い力のこもつたさうして涙のいつぱいたまつてる、悲しい瞳、あゝそれが今胸にうつたのでございました。汽車の窓から泣きながら「ねえ槇子さん、この後いつでも、夕方に日の沒るのをごらんになつたら、西の國でこちらを向いては泣いてゐる私を思ひ出して頂戴ね」つて私をごらんなすつた幾子樣のひとみ……。大阪からのお便りにはいつも「こんな悲しい運命の私は槇子さんひとりがたよりよ、あなたがいらつしやらなければ私は泣き死してしまひます」ときつと書いてあります、あゝなぜ神樣は幸うすき幾子樣をお救ひ下さいませんの、私は母樣の秘藏兒、赤ちやんのやうに甘くされるたびに、この愛を半分わけてあげたら、と思ひます、おいたはしい幾子樣、かはりたうございますよ私は。

こんな心の汚い私のために、優しい妙子樣は生命をもさゝげて祈つて下さいます、心淸き妙子樣がいつて下さるものを神さまもきつと……とは思ひながらも歌いたくて〱も歌ひ得ず胸は裂けさうに苦しい時、弱い私の心は、もしや〱自分は詩に生きることを、許されないのぢやないかしら、と幾度か失望の淵に沈んだでございませう、學校への行きかへり、運動場の片隅、いつも眞ある律子樣のお言葉に、私は新しい光を見出しました。「あゝ私、何よりうれしいわ、きいて下すつて、私あなたの御胸に身も心も捧げたのですもの」私が胸の中の萬分の一ほどお禮を申しあげると、いつも律子樣は兩腕を前から脊に胸をかたく抱きしめてかう仰有るの。

「姉と云はるゝ年ならば、うき身を膝になげかけて、疲れし額胸によせ、たゞ一時を眠らまし」私はいくら苦しい事があつても、すがつて泣かして下さる御胸があるから幸福だといつも感謝してゐます。

今闇に身は包まれてゐますけれど、あたゝかい人の情は、流れめぐつてつきません。それをば、何故に、何故に、華やかな夢に包まれて、あゝ私の幼い靈は、顧つてゐるぢやございませんか。罪！罪！私は大きい罪を犯してゐる、皆樣の尊い眞の愛に報ゆるものを私は持つてゐるだらうか……さうかと云つて、それをふりすてゝとても〱自分は自ら孤獨の寂しさにゆく勇氣はない、もしできたところで、たゞ淸い皆樣の御胸を傷けるばかり、どうしても自分は罪を作らなければならない。あゝ私は皆樣の御胸にうつッたやうな、淸い心ではないのです。僞善者、私もさう云ふのでせうか、憧憬に胸のなる時、嫉妬の炎の燃える時、堪へがたき悲憤に血の湧きかへる時、狂するかと思ふほど苦しい時でも、私の肉體はいつも〱今のやうにしづか

なのです。

めだつやうな姿をしては街を歩けない、お客樣がいらつしやれば母樣のかげに隠れてしまふ、恥しがりの私が、この間の夜でした、目がいゝので椽近く琴をさらつてゐて塀の外を書生が「あゝ世は夢か、まぼろしか、ひとやにひとり思ひねの…」とうたつてゆくのを聞き云ひしらぬ哀愁に胸をそゝられるやう、ふと獄屋の中に月の光にてらされる囚はれびとの蒼白いやつれた面わを思ひ浮べました、いつてなぐさめたい、いつしよに泣きたい、きつと〳〵少女の眞心には冷たい胸もうごくであらう、わけもなく湧きかへる胸の血、爪なげすて、泣いたことを誰が知つてゐませう。人は私を内氣な子だと思つてゐます。お友達も私をいつも笑つてるお人善しだと云つていらつしやいます。うけた恨みは忘れないけれど其の人のお泣きなすつた時、一番親切になぐさめてあげたこともございます、我眞の感情を冷い理性でおしつけて、むりにうその戀の瞳をもつて誰にでも接したいと願ふ私は、世を人を自分をもあざむいてゐたのでありました。

あゝしかし律子樣、妙子樣、幾子樣、あなたにばかりは、私も其のをり〳〵の私の心は僞はらないで御胸に接してをりましたものを。お許し下さいまし。このやうなことかりそめにも思ふのは、神樣の聖旨にもそむき、父母にも大變な不幸ですけれど、今私はこの病氣が癒らず、いやな十六にならないうちに、皆樣の温い愛に包まれて、しづかに死にたいのでございます。「ああ逝きぬいとし子逝きぬ、暗きやみ墓を包めり、されど主の愛のともしは、汝がみちの栞なりけり」。いつも妙子樣がうたつて下さるけれど……。主の愛にそむいた私の魂は、闇に迷はなければならないのでせうあゝそれでもいゝわ、罪の魂は、皆樣の熱い御涙に、ほゝゑんで眠ります。

おゝ百合の花も見えなくなりました。毎日丁度今時分になりますと、戸を閉めるためにこゝの窓に立ちますいつも明星を仰ぎます、水のやうな空、しづかに〳〵心が澄みわたつて、我靈と、宇宙の大なる靈と同化してしまふやうな……其の時です、私が眞の我心の姿を見ることができるのは。あゝ其の瞬時の私は、誰も知りません、妙子樣だつて、律子樣だつて、幾子樣だつてあるをりをりの私は御存じだけれど。たゞあのお星樣！、お星樣は默つていらつしやいますけれど、何か絶えず暗示されてゐるやうで、いつかそれを解き得る時が待たれます。

罪を犯したイブはエデンの園の木蔭にかくれました。この幸福なクリスマスの夜を、暗きにかくれて、小さい罪の胸に秘むる、いとほしの此の願ひ、ひとり暗い床の中で、私はお星樣に祈りませう。

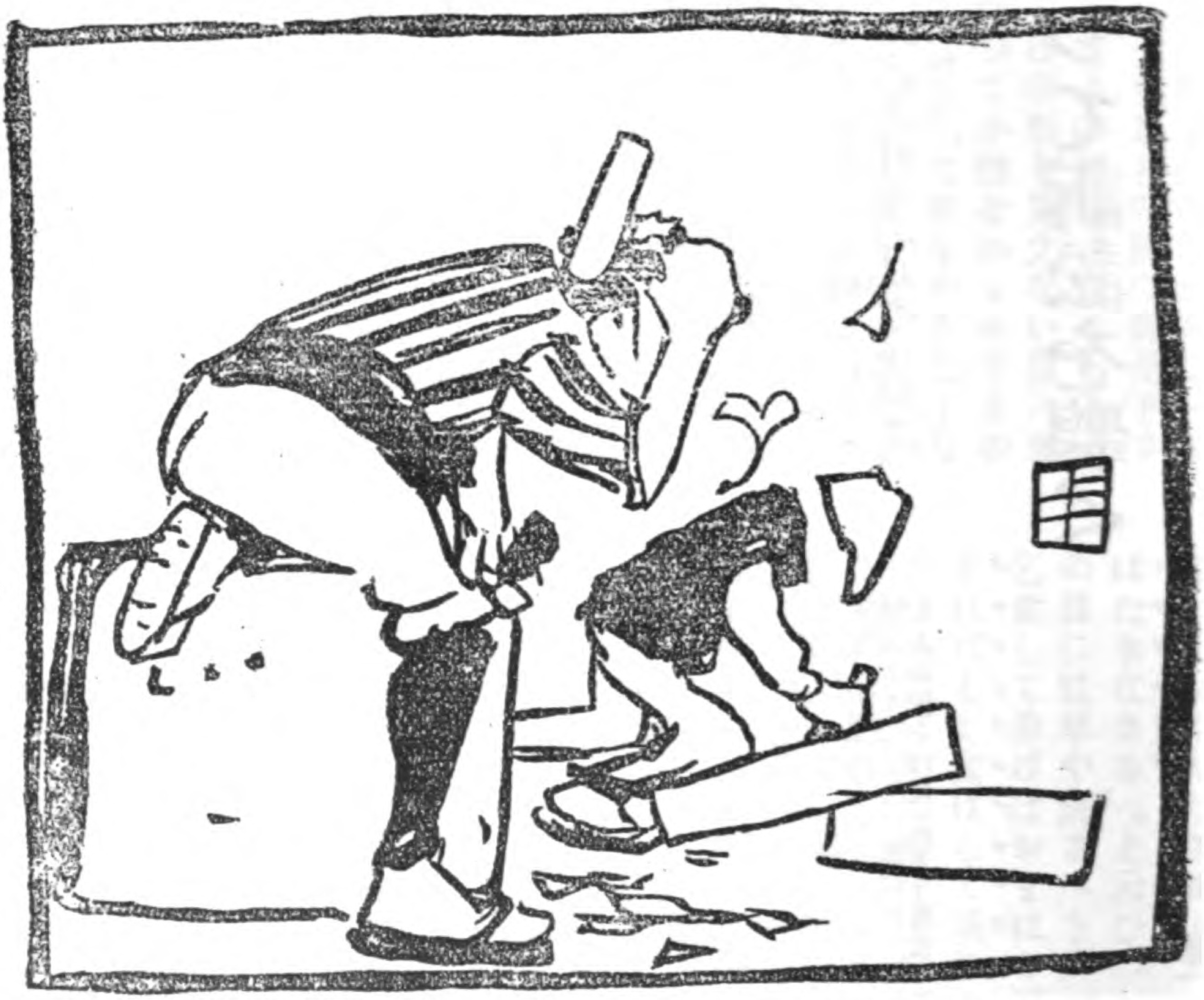
感情一方で何處までもつきつめた思想を純潔珠の如き筆で飾らず飾らず書いてある、罪、罪と云ふ言葉が溢れ〳〵て叫いて居ますが此難境の處女に素より人世の汚れた罪のあらう筈はないのです、只人間生れながらにして持つ野性を指して言たものでせうが、然う思はない人に誤解されてはいけませんから作者に代つて一言を添えて置きます。（評）

八等 銀行からの歸り道

日本橋 佐藤眞壽子

古綿をのべた樣な雲があちこちに出て空は今にも泣出しさう、往來の人を見ると皆氣づかわしさうに上を仰ひで足早に行く、「萬壽ッー」と階下で父さんがよんだ、「はいッ」大きなこゑで返事をしながら、はしごたんをかけ下りると、「あゝちよつと銀行まで行て來な、」と云て通帳とお金を渡した、「はあ」かるく答へて戸外へ出る、今年ももうわづかとなつて、どこの人も皆いそがしさう、ふだんのきさうな子守までが、何となくせわしさうに見える、橋を渡つて五六間くると、細い雨がぽつり〳〵ふつて來た、引返さうかと思たが別に遠い處ではなし、ぬれたつて知れたものと小ばしりに貯藏銀行へ還入た、此處は又そとの寒さを忘れる程あたゝかい、直ぐ預金口へ出してすみの方へこしをかけるとたん、「あらッ」と横から「まあ佐藤さん」と、云はれてびつくり「まあだれ」ふりむくと、「おほ……妾よ」見るとまアおなつかしい山本さん、妾……妾嬉しいほんとに〳〵嬉しくつて、自分でもわからない程うれしかつた、で、只「まあ、まあ」と云ふ計りひしと手をにぎつて、……私はなぜこんなに嬉しいのかしら、この樣なうれしさはだれにもわからないでしよう、學校退つて裁縫へ壹年、拾三の年に實家へ歸つてから、拾五になる今日まで、お友達などは一人もない、こつちへ來る時伯母樣が、「日本橋へ歸つたらけつして近所の娘さん方と御交際してわなりませんよ」と、くれ〳〵も云はれたのを悲しうは思たけれど、「えゝきつと遊ばないわ」ときつぱり答へて來たので、其に今しかも學校に居る時は實の姉樣とも思つて居た山本さんにあつた時の私の嬉しさ、少しも無理はない、山本さんはしげ〳〵私の

顔を見て「あなた學校に居た時より大さうきれいになつたわねえ」と云つて、妙に沈んで仕舞た「おほ……そんな事ないわ、しかしあなたどうしてこつちへ入らしつたの」「え、私、妾しね伯父の所へ來て居るのよ」と、何を思ひ出してか急にいやな顔をした「あらそれじやあ皆さんと一所に居らしやるのじやあないの」と、聞くと「えゝあんな……」と何か云かけ樣としたが、隣りに居た人がじつと耳をすまして居るので「ほゝ」さびしく笑てまぎらし「かへりにね」と、こゞゑでさゝやく。私は何かわけがありさうだと思たから、「えゝ」すなをに答へた、其



（五等）石切る音　名古屋　吉田とき子

の中に通帳を受取て「では御一所にかへりましよう、だけどあなた伯父さんのお宅は」「え、本町なのよ、此間からおたづね仕樣かと思てたんですけれど、何だかきまりが惡いからよしてたのほゝ」「まあいやだ妾二三度お手紙上たけれどお返事ないから、まあずい分ひどい方だと思てたの、かんにんしてちようだいな」と、話しながら戸外へ出ると雨はふつてないが、風が出て寒い事をびたゝしい、二人は足早になつて「どうして伯父さんの家へ來る樣になつたの」「それはね、こういふわけなのよ、貴女も知て居らつしやるけれど、妾の兄妹は五人あるでしよ

う、其の中で妾が一番ふきりようなので……ほんとうに父さんにも母さんにも、似てないのよ、それだからにくまられるんだわ……」山本さんはうつむいたまゝためいきをついて「其に信が人なみより顔でもすぐれて宜いから、姉妹ならべて見たら、そりやたでもすぐれて宜いから、姉妹ならべて見たら、そりやあ父さんでも母さんでもいやになるでしようけれど」と、話しゝて居る山本さんのこゑは次第にくもつて來た「私の身になつて見ればかへつて親等をうらんで居るのよ……醜いなら、かざつてもきれいに見せ樣と思ふが親のじひじやあないでしやうか、それを……それをはしのあげ下しにほんとにお前の顔は見れば見る程きたない〳〵と云ふですもの、妾だつて……妾だつて腹も立つわ……」目はいつしかうるんで涙がはら〳〵とほゝにつたわつた「其れに學校卒業した時だつてそうですわ、始めからゆうとう計りでしたのに、何一ッ言葉もかけて下さらないのよ……そりやあ何もほめていたゞき度くはないけれど……」と目をしばたゝいて、「信が優等取た時などそれは〳〵大さわぎしてね御ほうびだと云ていろ〳〵な品や何か買てやるんでしようそを一々見せつけられるんですもの妾だつて……つらいわ、だから伯父に話したら大變怒つて、そんな家にゐずと内へこいッて其れで、私日本橋へ來て居るのよ」かたりをはつてざびしく笑つたが其目からは涙がをちて居た、妾は聞きながらはなをすゝつて居たが此時顔を上て「それじやあ貴女そんなつらい思なすつて居らつしやつたのね、まあほんとにお氣のどくな……あら大へんだわこんなに行き過ぎちやつて……」わらほんとにさうね、久しぶりにあつて飛んだお話ししましたわね、そんなら此度お遊びに入らつしやいな、伯父も伯母も面白い人ですから是非ね」「えゝほんとにをじやまにあがる事よ、では左樣なら、」妾は山本さんに別れてかへつたが、其の夜は山本さんと自分の身の上を引くらべて心のそこから泣いた。

囚はれてゐない文藝とは斯う云ふ作を指して謂ふのでせう、殆んど文字に囚はれていないのですもの、然うして場所も、人物も、對話も、情緒もそこ〳〵に表はれてゐて、此の事を書いて見やうと思ひ着いた心の働きはなか〳〵面白いと思ひます。（評）

九等

父に代つて訴訟を聽く

[illegible]　秀子

今年の夏、或る日の午後流れる汗を拭ひながら、一生懸命に裁縫をして居りました、すると玄關に御免下さいお願ひ申うす、と云ふ聲がするので出て見ると八十位のお婆さん、見れば垢だらけの形も見えない位の單衣を着て破れた菅の小笠を持つて小腰をかゝめてるので、例の乞食だらうとは思ふたけど、言葉もやさしくなに御用なのと聞きましたら、こちらは郡長様の御宅で御座りませうか、さうですよ、では少々お願ひが御座りまして參上致しました、と云ひながら傍に寄つて來ました、何にしろ何日も湯に入らぬと見え、顔は垢と塵にまみれ身體は汗によごれて、そのくさい事、然し何にか譯かある事だらうと聞いてますと、彼女は土に手をついて語り出した「私は此の一里許り田舍の〇〇村のもので大泉たつと申す者で御座りますが、今年取つて八十三になります、今から四十年前亭主に死に別れ、續いて子供二人もなくなりまして私獨りになりましたので、染次郎と申すものを養子に迎へました、ところが手くせがわるくて離縁致しました。

其後は致し方も御座りませんのでお上の土地を拜借して百姓したり、人の使したりして暮して居りましたが此頃村の役場に書役して居なさる藤村常吉と申す人がどう云ふ譯だか知りませんが、私の借りて居る土地を皆んな取り上げて自分で使ふて居なさるので、何うする事も出來ません、それで書役様にお願ひ申して土地返しておくんなさいと云へば、何にも云はんで私の頭はたきなさる」。と云ひつゝ毛のなき頭をなでながら老の目には早や涙さへうかべて「仕方御座りませんすけ乞食して歩けばおまはり様乞食しるなと云ひなさる。それだとて食はして呉れる子も孫も御座りません。おまはり様に前の事申上げて、それなら土地返して下さる様にお願ひしておくんなさいと申ましたら、然し土地を返したとて其身體では百姓は出來まい、今に何とかしてやるから今日は歸つたらよからう、之れで何にか買つて食べろと十錢おくんなさいました、十錢おくんなすつたでね」、と又うれしげに涙を流しながら「それで困るものは助けておくんなさると云ふ吉田様にお願ひ申しましたら、其れは氣の毒だから救ふてやらうと云ふて居なすつたら、又それ藤村様があの婆さん金持だから救ふに及はぬと云ひなはつたてね、私金持つてればなに乞食なんかしたく御座りませうば、何んと云ふたとて食はしてくれるものが御座りませんかね、藤村様とれ位私かにくいやらの」、その氣の毒なみすはらしき有様を見ては同情にたへかねてはては私まで思はず涙かこぼれました「さうして宅に願ひとはどんな事」「ハイそれで御宅の旦那様の御威光で先に借りてた土地を又私に返しておもらひ申たいので御座ります、御年貢はきつとおさめますで御座ります」、「でもお婆

さん土地を返したところでそんなに年取つて、百姓出來ないでせう」、「それはお前様若い時から百姓して居りますけ、出來ますで御座ります、早や秋大根の種蒔かねばなりませぬ、どうか旦那様にお願ひ申しておくさんないましお願ひで御座ります」。「それではお父様お歸り遊はしたら何んとお仰るかお話しゝて見ませう、然しその身體ではとても百姓は出來ないでせう、何んとか村で法を立てゝ食べられるやうにしたらよいでせう何にしろ歸つたら話しはしておきますから」。あまり可愛さうなので折詰に御飯を三度ぶり位と梅干を入れて「さあ之あげるから家へ歸つてお上り、家はあるの？」、ハイ小屋見たいのでは御座りますか私の家は御座ります」、「さうそんなら早くお歸り今の事はたしかにお話しておくから」と云ひなから渡すと、もうボロ〳〵涙をこぼしなから、「私におくんなさるのかね、マア何んとしたらよかろ、お有りかたう御座ります、御禮の申上けて見やうも御座りませぬ、お孃様おありかたう御座ります」と土に頭を付けて辭儀をしなから歸つて行きました。後姿を見送りなからつく〴〵と年老ひてから、あの様になりたくないと思ひました。八十三と云へは不自由のない家なれば、高齢者としてもてはやされるのに、いくら不運とは云ひなから死に近づいて、其日々々の食さへとる事か出來ないとは、何と云ふ可愛さうな事ではありませんか、いくら食べさせる者はなくとも若い時から貧乏のなかゝらでも何程かを貯金しておいたなら勞働者（はたらきて）はなくとも金さへあれば人か食べさせてくれるものを。私は今は日用の事には別に不足なく暮して居るけれど此後どの様な不幸か起つてこないともかぎられぬ、もし其様な時にたとえ獨立して行かれるだけの修養はしてあるとしても、あのお婆さんの様に年老ひてから困らぬ用意はきつとしておかなければなりませぬ、私はもう指環も金時計もほしくはありませぬ、美しい衣服もいりませぬ、もし求められるたけのお金かあつたらきつと貯金しておきませう、あゝあの老婆かなによりのよい手本、あのあはれな様子。今でも時々あの老婆の事を思ひ出してどうしてるたらふと母とうはさをしております、其後私は奢侈の心の起る度にあの老婆の事を思ひ出して、心のいましめとして居ります。

お孃さんの訴訟を聞いて居る態度は、如何にも郡長の令孃らしく、一擧一動其人を見るの感があります、文章は健實、終り稍平凡に陷したれど、是とて間違のない處で、好い綴話です（評）



十等

谷中

谷中わたりの薄月夜、書窓の許にほとゝぎすを聞くも可笑しく候。

とは私がまだ國に居つた頃、照子さんの手紙の一節、如何にも詩的な處だと存じましたが、今思ふと、それは當時照子さんが御自分の境遇をかくさうが爲、强ひて町内を美化したのです。

一體、照子さんのお父樣がおなくなりなさるや、間もなく御一家は上京して、一年近くそよとの風のお便も有りませんでしたが、ふと頂いたのが谷中町からの御手紙でした。

其後の御消息には妙に、庭の梢がどうしたの、座敷の内がこうだとか、くど／＼しいまで書いてありますのは少なからず、興を醒まさせました。

見ぬ都の戀ひしさは、私も遂々出京して伯母の手許に居りましたが、何かと其日／＼にとりまぎれ、照子さんを一邊も御尋ねしませんでしたが、谷中と云ふ處はお寺の多い抹香臭い陰氣な町だと知つたのみ。敢て薄月にほとゝぎすの詩趣は頭に浮びませんでした。

英丈

本郷　峯子

然しこの町は永い記憶を私にあたへるのです。

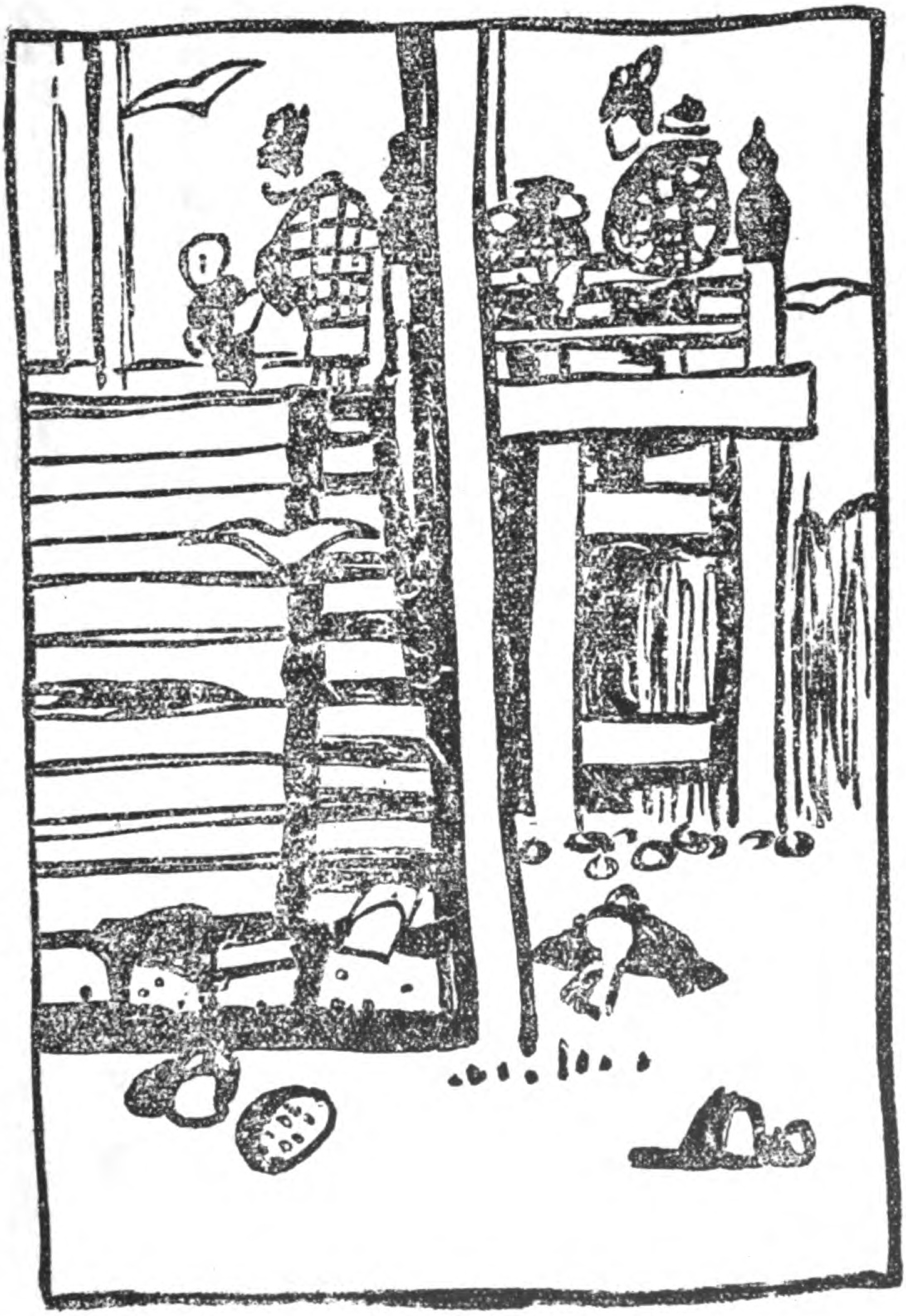
今、天王寺に照子さんのお墓が有ります。お墓の下の照子さんが薄命な一生を忍ぶと、過去現在未來、交々に谷中の町を忘られぬ思ひの露に、私の袖は濡るゝのです。

靑葉若葉の谷中町、蒸暑い南風に颯と立つは、石屋で刻む御影石の粉、氷賣の影が横町にかくれたあとは、人通りもとだへた茶屋町の角でバッタリ照子さんにおめに掛つた。「まあ久らく、御上京つて事は知てましたが」と照子さんは何だか落着かぬ御樣子。「いえ、私こそ遂ひ御尋ねもしないで失禮しましたわ」。

見ると、もう學校もお休みでしやうに、袴をはいて、形のさめた中形を着て被入る。「どちらに御出掛けでしたの」と尋ねますと「え、あの學校……あの、夏期講習に……」とひどく慌てゝ面伏せなのに、何だか私も妙にてれて、簡單に今の宿所をお敎へして、わかれました。

それきり又、ふつゝり交際がとたへましたが、一年後の

秋、照子さんから突然、病める身の命幾何、息ある内御目にかゝりたいから、といふお端書、驚いて私は初めて初音町のお宅を音つれました。谷中の町は殊更に秋風たつて、青葉は紅葉に、萩の葉ずれの露はら〳〵軒ならびの町家は、せゝこましく、鼻を垂らした子守や、向うの駄菓子やに馳け込む腕白、黒い門のお寺の前で、眼のしよぼ〳〵したお婆さんがイむでる、何處からか鹽鮭をあぶる香がします。



（六等）社殿　青森　松尾千代子

やう〳〵尋ね當てた、新屋の路次を這入りまして、井戸の傍、ひよろ〳〵とした野菊が搦てる竹垣のまばらなのにそふた棟割長屋の、はづれに、須山といふお家流の表札を見ました時、之があの照子さんのお宅かと暫し案内の聲も出ませんでした。

「まあ善くね」とお阿母様はいそ〳〵澁茶をくんで下さる。煤けた壁によつて照子さんは臥つて破入る。肺病た相で、やつれながらも、ぽつと血色は好い、「肇さ

ん」と私の顔をみるや、ほろ〳〵泣いて居られるので「照子さん什麼具合？私の見た處ぢやもうお癒りになるわ」と申しますと、淋しい笑を浮べながら「肺なんですもの、でもよく這樣處へ來て下すつたわね、私本當に今迄貴女をだまして居たの……世の中の波にもまれたあげく私……」と云いかけ急に咳き入るので私がはら〳〵してるまに阿母樣がさすつてお上げになる。お土產の林檎を出すと、一個むいてあげると「まあ甘味さうね……」と喜ぶので、「あ、雪ちやん被入つたの……一個おあがんなさいな」と私か云ふと「えゝ」とガタ〳〵何か片つけてる音がして、雪ちやんが來る「窓をおあけ」と云はれたので橫手の窓をあけると、微風が流れ込む、天王寺の五重の塔がよく見えます。

阿母樣は涙を溢して語られる。不幸つゞきで、杖柱の照子は、電話局に務めて、其俸給と自分の手内職とで暮す内照子か病氣、醫藥もとゞきませず、たゞ氣を揉てばかり居る内、局から免職されました、局務都合だ相で、詰り欠勤がつゞくからで、お役所と云ふ物は薄情なものですねと、聲を濕ませて有仰います。

何といふ非慘な御境遇でしやう、私は頓になくさめ兼ねて、湧き上る御同情の涙を抑へて俯向きました。

井戸端では呑氣相にお女房達がおしやべりをして居ます。生若い男が黃ろい聲で浪花節をうなつて居る、どつと笑ひ聲がします。同じ處でもこんな呑氣相な人達も住まつて居ますのを……。

夕方點燈夫か急はしげに馳しる谷中の町を私は云ひしらぬ淋しさを胸にきざむで、見かへり勝ちに歸りました。再び谷中へ行ました時は照子さてはもう土の中に埋まつて了ひました。

紅葉は散つて吹きまさる木枯、墓地の奥では梟が鳴きます。照子さんのお墓碑はしよんぼりと立つ。朝の霜、夕の嵐、絕えまなき世の中をすてた照子さんは幸でしやうか。

年新らたなる谷中の此頃は、冬木立もそろ〳〵と、梅も蕾が一つ二つ見えます。初音町の通りも、おしなべて、變りはありませんで、草もえ出つる春を待ちますけれ共、あの淋しい照子さんのお墓は矢張りしよんぼりと一人ぽつちで御座います。

無理に人を泣かそう〳〵と涙もろい字を積み重れたのではなく、此作のやうに自然に悲しさに誘はれてゆくやうな筆の匂いは得難いものです、谷中の町の樣子も、照子の家の樣子も、能く目に浮んで來ます、女性の美文には斯んな作が最も尠の無い方面を代表していますす（評）



秀逸

妹を置いて鄕に歸る道すがら

栃木　みぞれ

汽車の窓に倚た私の胸と……窓の外にたつ妹の胸には其時寂しい寥しい思が滿されて居た。世に敗れた身の兎に角、志した港を望むまでは歸國まいと心に誓つた漂泊の身に、病を抱いて、賴みに縋る妹一人を激しい都の巷に殘して歸る我身。物學ぶ身とはいひながら靑春の若き煩に思ひわびつゝ、すべては姉の爲す儘に、思ひの儘に委して、心強いと喜んだ心も身も弱い怜しの妹。行く方ぞまだ慰むよしもあると聞たが、今妹も何處に心細いのであらふと思ふと、悲し相な眼をあげて憫みを乞ふやうな妹を殘して行くのが偲びられない思が胸をつく。「もう何も用はないの……？。この問は私の口からもう何度も出たのである。茫として物思ふ妹には喧しい人の聲も群集も何もない。たゞ姉と妹二人の世界の樣に思はるゝのであらう。自失したやうに見ゆるのであつた。「姉さんよく癒つてね、今年の内に來て頂戴ねえ」訴るやうに言ふのである。「あゝすぐ來るよ、何でもねえ、心配の事があつたら姉さんの所へ言ておよこしよ」。

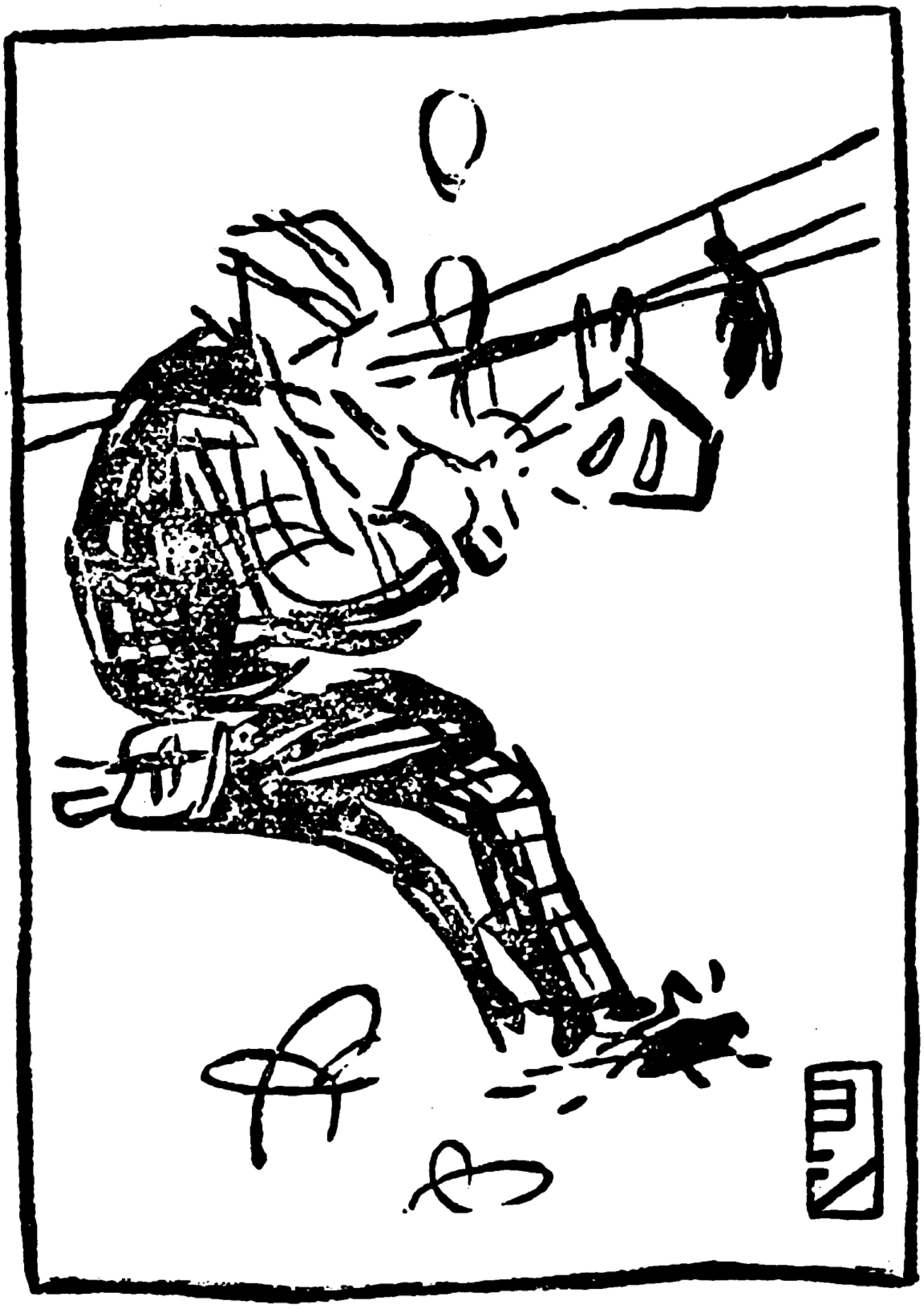
汽笛は高く……妹も「姉さん」と手を握つた、强く／＼痛い程、汽車は徐々に……徐々に二人を割て動く。

妹は車と共に二歩三歩窓に沿てあるいた。「露ちやん笑はれてよ」と言た時、妹も我にかへつた樣に車内の人を見て顔を赤めて停つた。私は窓に倚て立た、寂しい二人の視線は一つに凝つた儘遠つてゆく、汽車はたゞ進むのである、他の見送りの人にはもう脊のみ見ゆる中に紫のショールに浮だ白い顔が小さくまだ見ゆる、汽車は廻轉した、其刹那に妹の小さな顔が頭を下げたのを見た。投げるやうに腰を下して涙も出ない。

田にも畑にも消然と立た妹の顔のみが見える、眞晝の日影は弱いながら明るく澄んで居る。停車場を二ッ三ッ過ぎた迄はたゞ夢の樣であつた。大宮で長い停車の間に病んで居る腸がシク／＼と痛む、癒る病氣であると呟て見た。私隣に農夫らしい男が鞠のやうに痛々しく脹れた、右の足裏を汚いのも忘れて、手を舐めては撫てゝ居る。病む身にはいたく同情される。あゝ私が今、思ふ何事もなし得ずに病んで歸つたなら後妻といふ名の下に、すべて控目の母樣は兄さんや嫂さんに嘸そ御氣毒なさるであらうと思ふと、今日私の歸りを待つうちにも、御心配なさる優しい母樣のお顔が見えて來る、止つて靜養してはと親切に言て下すつた人々の言葉も聞ずに、なぜ歸る氣になつたらふと不安の念

が春々と胸を襲ふ。種々の思ひが亂れて窓に顔を支へて伏した、同車の人の話も耳には入らぬ、思ひは思を誘つて果しない。知らぬ間に夢に入たらしい。烈しい汽笛に驚た私は乘替るべき小山を過ぎた……の?―と波うつ胸をおさへて四邊を見まはした、足を惱む旅の人は私と同じ様に下車するのであると先の會話で知た私は其人のあるのを見てホツト嬉しく感じられた。

水戸線に替へた。乘客の少い質素な穢しい室内は一層の寂しさを強めたのである、都の言葉を語る人はない、濁つた鼻聲が厭に耳にさはる、乘る人のすべてがどことなく卑しい態度が故郷に近い懐しかるべき人々ながら都人を見なれた眼には、情ない不快な感じが催される。汽車を降りて出迎の車夫を見た時いひしれず嬉しく思はれた。



(七等)農夫　陸奥　井上よし子

人車に揺られて四里の道を行かねばならぬ、冬の日の澄み切つた空に描いた様ななつかしい筑波加波が聳えて、果もない平野は秋をおくつて更にあはれな眺である、日影はいよ〳〵西に落ちて神秘めいた光は冬枯の野に弱く射しつゝ、眠然と暮れ行く冬の夕。尾花は力のない白い穂先をボヤリとそこ、こゝに浮した様が丁度、行方定めぬ魂のさまよふかとも思はれて悲しい思が沁々と身に迫る、野路には逢ふ人も稀に、たゞ影は見えぬが馬子唄が折々聞える、松原の茶店に柿の真赤なのが夕日に照

らされて、ならんだ上に、埃が白く浮いて見える。煤けた壁に倦み疲れた樣な、卅女が灰色の胸をひらいて萎びた乳房を、抱た子に含まして居ながら、鈍い目を上げて走る車を見た。おゝ彼の女にもこの世に生を得た自覺があるのであらう？――と考ると何とはなしに暗愁が湧り寄て來る。美しい田舍特有の夕の空の色に氣を奪はれて居た私は野を見た時、夜の幕が下されたのを知た。乘る私も招く人も語らない。夜風は寒く身に泌みて、思ひ出した樣に痛みを覺ゆる、木の葉が車にさら〳〵と落ちる、都の妹、あゝ若い戀に囚はれつゝ胸のなやみ語らふ人もないあはれな彼女は今頃……病むときゝて心つかひし玉ふ父樣母樣は………と暗い車上に物思ふ胸を抱て目をつぶつた。野はつきて村に入つた。家々に火を焚いて酒をくむで居る。眞黑な顏が赤銅色に輝て何やら罵りさはぐ。車夫が「今夜は田舍の蛭子講なもんであんなに賑やかなんでさ――」と說明してくれたので忌はしいと思はれた其光景もある興味をもて頷れたのである。

仄に明るい町に車が進んだ時、不安の中に躍るやうな懷しい血が身内を環る樣に思はれた。

門を入つて茶の間に上つた時、出迎て下さる母樣の優しいお顏と蛭子講の家例である風呂吹大根の温い煙の中に陶然と機嫌よく勞つて下さる父樣のお顏を見上げた時、もう病む身も不安も忘れて、たゞいひしれぬ淚がほろりと人知れず落ちたのである。

卷物を舒べてゆくやうに、それからそれと移つてゆく道すがらと感じの動いてゆくさまを、少しの掛引も、見榮もなく書いてありますが、文は堪能な方だと思います、奇を弄してないだけ、底に動かぬ力が籠つてゐるやうです　（評）

身おも

岩代　梨花

自分は、無意識に吐く息も、傍では嘸ぞ辛ひのだらふ苦しいのだらふと、思て居るらしい。

娘時代の頃、身の重い人を見ると、恥かしいと思ふまひか、辛くはあるまひか、あゝ嫌やだ〳〵、誰がお嫁になんか決して〳〵往くものではない抔と考へてをりました。けれども、今自分が其の身になつて見ると、恥しいとも、苦しいとも思ひません、却て、婦人としての天職を全うする事が、出來ると曰ふ、云ひ難い自信力が起て來て、人に誇らしい感じが致します。併し、限りなく嬉しくなつて見たり。限りなく悲しくなつて見たり、大凡姙娠中の心程、變化のあるものは在るまひと思ひます。

一寸他へ出ましても、子守の背に可愛い兒が眠て居るすぐに覗いて見る、雜誌の口繪にあどけない幼兒の寫眞が乘せて在ても、やがて、生るゝ赤子を想像する。而して、帽子の形は何が好からふ、よだれ掛けの色合は何、着物は、男なら筒袖、女なら、やはり筒袖が見

ても見好い抔と、最う〳〵寢ても起きても子供の事計り考へて、果ては、乳を含くませてる夢なんど見て、さめて後迄、微笑みを禁じ得られぬ事もあります。

今朝も、新聞紙上下、竹田の宮妃殿下、二月中旬御分娩遊さるゝやに洩れ承はる云々の記事を拜しまして、餘りにおそれ多い話しでは、ありまするが、御結婚は、私共より十日お早く入らせられました。そうして、御分娩の月は異ひましても、同じ年に、自分もお產する事が出來る抔と、御勿體のない事迄、考へて居ります。

『何方に似ても可愛い、赤ちやんがお產れになるでせう』抔と、近親の方々に云はれます。

お世辭とは知て居りますが、嬉しくて〳〵、早く生み落して見たい、玉の樣な赤坊を生んで、人々に誇り度いと、思はぬ日は、一日もありません。

始めて乳を呑まるゝ時は、どんなだらふ。少し成長くなつて、母ちやんなんて曰はれたら什麽感じがするで在らふ。

抔と嬉しいこと計り考へても際限がありませんが。悲しい事を考へはじめたなら、それこそ、手の付け樣もなくなつて、自分乍ら、呆れて了ひます。

初產は恐ろしいもの、初產の爲めに、一命を奪はれた人は、幾人あるか知れませむ。何時自分も死の手に抱かれる事やら。

ふたり一しよなら好いけれど、私計りで赤子が後へ殘つたなら、人々の心は什麽だらふ、今縫て居る晴れ着に手も通さないで了ふのではあるまひか？

そうなると、却て人々に涙の種を殘す樣なもの、いつそ、仕立てない方がましかも知れない。と思て針を投げたくなります。

何處からか、赤子の泣く聲が聞える樣な感じがする。

而すると、それに元氣付くと曰ふ、理ではありませんが、十人が十人女と生れた以上、お產は是非仕なくては、ならない。決して、命迄奪はれるト極まつたものではありません。自分の身體さへ壯健でありましたなら……。

あゝさうだ〳〵こんな事を考へて居ては、優しくして下さる良人に對してすみませむ。

早く初孫を見たいつて樂しむで入被る、お母さんに不孝になります。ほんとうに惡るかつた、決して、悲觀しまい、何でも、未來を樂しむで居樣、現在の苦痛は誰人も味ふので在るから。と始めて、安心して、針の手を運て居ります。と此頃、めつきり、はげしくなりました、體動がピク〳〵する。

毎日の事では、ありますが、餘り好い心持ちでは、ありませむ。少し氣晴しにと、庭下駄を背戸の方に運で見ました。冬枯れの何の、趣味もない、景色をぼんやり眺めて居りますと、身の內がぞく〳〵寒い、妊娠中の寒氣は、話しにならないとか、姉上のお言葉が思ひ出されます。

西の山々は一日ましに、白くなる計り、彼の雪が消え

る迄には、未だ、餘程かゝるでせう。而して、彼の雪が全く消える頃には、私も、人の母親となる事が、出來るので御座います。

此文章を書いた方は、未だお娘様であつた頃から、本誌の寄稿家として折々好い文章を寄せられたのでした、結婚前後のことも拜見しました、今また懷胎の記事を見て、私は深く感動しました、何れ青春の時代は去ります、殊に女の盛りほど短いものはない、それに斯うして奥様になつても文章を綴り得られる方は幸福だと思ひます、反抗するのは間違つてゐます、女子の一生は斯くして行く間に美しい感化さへ傳へてゆけば足りるのです、あゝ四の山々の雪が消へる頃、玉のやうなお子さんを擧げて、其目出度い記事を又本誌の上で見たいものだと思ひます（評）

みえぬ姿に心そゝろなりし音樂會

東京　胡　枝　子

如何なすつたんだらう、たしかに行くつて御しやつたのに昨日の音樂會にとう〳〵御見えにならなかつたわ、と思ふと何だか不安な樣な氣がしてならない、それは音樂會にはいつもしやれて行くんだけれど、きのふは高山さんがいらしやると思つたので色の配合なんかもどこからどこまで注意してかみも念入に氣にいつまで結び直して、嫂さんに笑はれる程長くかゝつた御化粧して行つたのに、（私何もつとめてさうしたのではないけれど自然に氣になつて萬事注意してつくつたのかもしれない、）とう〳〵あの莞爾笑を含んだ御めもとで默禮して下さる方はなかつたのだもの、そんな事なら、こんなに骨折つて支度してくるんでは無かつた、と馬鹿々々しい樣なきがして、うちに歸てもなにか氣拔がした樣、嫂さんが伊十郎の矢の根五郎はきゝものだつたでせうなんと御しやるのも腹がたつてならなかつたわ、聽物も何もありやしない、高山さんがいらしやらなければ音樂會なんて至つて無味乾燥なものだわ

高山さんといへば一體あの方の御氣がしれない。隨分諸處に女の御親友があるらしい人だけれど、でもそんな墮落な方ではないとは兄樣の保証でたしかだけれどあゝして女の方と交際して平氣でいらしやるのはあんまりな樣に思はれる、私だつて何もよくばりにあの方を獨占しやうとは思ひはしないけれど、あんまり多勢、御親友があつては實のところいゝ氣持はしない、そうかつて何も私があの方を大して深く慕つて居るとは思はないけれど、これがやつぱり戀といふものか、絶えずあの方の事を思ひ續けて居たつて仕方が無い、早いもの、去年の春清岡さんの紹介ではしめて兄樣と交際なさり、まもなく私もお近つきになつてから丁度一年、この一年はほとんどあの方の事を忘れた間はないのだから妙なものだ、でも此一年は全く高山さんに滅茶々々にされたのだとも思はれる、すつばりと私のあ

たまから高山の二字をとりさつて仕まひ度いと思ふけれど取り去り度い、取り去りたいと思ふ念がやはりあたまに殘つて居ればおんなし事だ。

「高山は女の氣に入る樣な事をいふのが上手だよ」と兄樣はいつも仰しやる、ほんとにさうかもしれない、あの方の御手紙みるど胸がをどる樣、うれしさが身にぞつとしみ込むのだもの、一年間に下さつた御手紙みんなまとめて手箱にある、よんだらやいてくれといつも終りに書いてあるけれど、如何して／＼燒かれるものですか、燒けばまたよみ返して胸どきつかせる事が出來ないのですもの、「高山からだらう、嬉しさうな面してるぢやないかどれおみせ」といつも兄樣にからかはれて眞面目になつて辨解する樣子が可笑しいつてはまた兄樣は御笑ひなさる、兄樣はもとから好きたつたけれと此頃では高山さんの御友達などおもふとなほなつか



（入等）　寄席　　小樽　　鈴木とみ子

しい、うちのお秀もすきになつたわ字はちごふけれど我英樣とおなじ名ですもの、今頃は如何してゐらつしやるだらうと机に向つて讀書して居てもすぐ思は高山さんの方にとんで行つてしまふ、そんな時はすぐ手紙をかき出す、

「今ね先日の續をよんで居りますの、でももうあきて貴郎は如何遊はしてらつしやるかと急に氣になつて仕方がないもので手紙かき出しました」とまではかいてもあとは別にいひたい事書き度い事は無い書きたい事は有るにはあるけれどまさか露骨に「女たらしと知りながらあなたが戀しくつて仕方が無いのよ」とも云へはしないし、つまりは有耶無耶に誰さんが何といつたの、いつ何處でこんな事が有つてお笑しかつたの、下らない事をかきならべて郵便箱に投げ込む、すると翌日はきつと秀が御手紙が參りまし

たと持つてくるのだ、情こもれる御玉章に接しそれに勵まされて昨夜は勇氣を以て勉强を終つたことの、君の玉章が懷に納めてあるとおもへばうすき上衣も常になくあた丶か味を感じるだことの、如何かすればいやみな文句がこれ以上加はらない事もないがそれが無い時は矢張物足りなく、事實これが樂しみなのだ。

これが私の高山さんに對するおもひなのだから行らつしやるつもりで樂しんで行つた音樂會に御顔が見えなければ、がつかりするのも無理はないわ、我慢が出來ない、手紙書かう、あの方の御好きな水色の洋紙出して一行二行かきかけて居ると「初ちやん!!何してる」と、お丶吃驚した兄様が後に立つていらしやるのだもの「戀する娘は仕合せだね」とだしぬけだ、「そう?私なんかにはそんな事わかりませんわ」とすましながらそろ／＼と書きかけの手紙の上に「趣味」をのせてかへす、じろ／＼とそれを覗ながら、「しかし登りつめれば下り坂だよ、御要心御要心」ともう廊下に出て「ピス、ピス、來いよ」た。藤枝さんに片思ひしてかなはなかつたものだから、ホ丶それが失望のうめき聲なのだ、御要心、御要心、なんて氣味がわるい、お丶いやな事、それとんだ邪魔が入つて遲くなつた、え丶と「妙なるしらべもをかしとは覺えず」、此つぎは何と書かう、オヤ驚いた、秀だつたの?手紙?早くおよこしよ、え丶、じれつたい、裏出して渡せばい丶のに、い丶よ、こつちの事、早くあちらに行つておくれ、何の事だ哲子さんから、墨でなんかあの方がお書きなすつた事は無いのに間違へるなんてよつぽど今日は如何かしてる。

戀の爲には心を抑へつけることも、制することも出來ない吾儘な想ひが、有りのま丶に出て居ります、流石に品格のある文章だから、少しも挑發的でない、人を動かさうと技巧したものでなく、自ら動いてゐるのです、又、現代的の一文（評）

白き鏡

山城　松田まさ子

『はた、ばた、はたり、はた、はたり』

梭に曳くは、一線の黑き絹である、只一線の黑き絹の糸で有る。糸に曳かれて鳴る管は、絶えず、悲しさうな、物足らぬ、そして胸そ丶る樣な音に呟いて居る、すすすと悲しむで、呟いて、勤勞の糸を吐き出して、骨をけずる程働いて、そして管は瘠せて行くので有ります。管が瘠せた空骸は、かくして、寂しき箱に葬られて行くので有る、若々しい胸の思ひを呟く嘆聲を、管の歌とでも聞いて喜ぶ人は、人の最後の苦痛の聲をも、まあどんなに思ふので有らうかと、お後は獨り胸を曇らして、重い睫毛を伏せました。曾てある森の奥を、戀を語つて、夫の順治と通つた事が有りました。松か何かの常盤木林で、日陰に育つた柔い熊笹や白い苔の踏むに心地が良く、戀を語るに良い場所でした。

ふと背後の岳の陰で鋸の木の幹に食ひ入る音がし初めました、初めは小川の石に水の跳るが樣に、やゝそれが細くなつて石に落つる雨の音の樣に、遂には、絹の表を走しる霰の樣に、サラ／＼と、落ち着いた、然し何處やらに強い力の有る音が響いて居たが、それは二人の胸に沁むには餘りに質素な、餘りに單調な響で有つたので、もつと強く、もそつと早く、などゝ歌の柏子に數へたりなどして、河鹿か、蜩が鳴く位に思つて居ましたが、やゝそれも忘れて居た頃、どつと恐ろしき音を立てゝ、木の倒るゝのを聞いて、二人は云ひ合した樣に、屹と立ち止りました、そして、死滅、癈壞、終焉、等、物の終りの悲しい事を考へ合ひながら、默つて森を出て家に歸つた事が有りましたが、それに比べると、あの木は、まだ幸福で有つた、彼は投げ出さるゝ其際に悲しく叫んで世に訴へる事が出來たからで有る。活働を止められた管は、梭の間から、二本の指の輿に乘せられて、寂しい箱の棺に葬られる。そして又新らしい油ぎつた肥つた一つは、二つの指から、梭の間に運ばれた。あゝ、舊いのは、斯くして忘れられる、自身の運命も是れでは有るまいかと、お俊は、涙ぐむだ、日は斜に照つて、涙をもつた目には、七彩に、只眩しく光る。

『とん、とん、はたり、はた、ばたり』

手は空しく梭につれて動いて居る。されど一度、葬られたる人の頬は蒼い、其頬にもつるゝ鬢の毛は日增に細い、頸が寒いと思ふので手を延ばすと、かたい骨を抑へました。

あゝ、湖の鏡は今日も曇つて居る。底は蒼黒く、波には氷雨飛び片曇りせる空は比良山から其暗き片手に湖をとらうとして居る。動かぬ湖の鏡は、かくて曇り晴れぬ。鏡は晴れぬ限りは、お俊の胸も晴れぬ、お俊は、只湖の鏡に曇りの無い日を待つて居る、華やかな、波を舳に切つて、晴やかな光を背に浴みて、順治は鏡の面を歸つて來ると思つて居る、必ず、必ず、あゝ、順治の湖に浮んで歸ら無くなつたのは、三月の晴れた日で有つたもの。

順治は湖の家を忘れて去つたので有つた。

『はた、はた、はたり、とん、はたり』

音は湖に響けども鏡は再び浮ぶ樣も無い。生れた家の子になれ鏡を破れと、親は云ふた、强いた、叱つた。然し、お俊は、湖に別れ樣とも仕無い。遂に、破られぬ樣にと、舟が出て行た水路に、全き鏡を沈めた。波は屢々搖れるけれど、鏡は全く圓い。水は時には濁れども鏡は白く輝いて居る。機織る窓から、湖を見るお俊は、必ず其白い光を見る、白毫は、眞に、お俊の胸に泌み入つて、魂の動搖を抑へたかわりに、あゝ此時

から、お俊の胸に、冷い水の精の魂が出來て、痛みは骨の髓に蝕み入りかけたので有つた。

片明りの日光は窓に照つて機は眩しく輝く。

二人の昔の戀はとお俊は思つた。見る／＼織り行く布の面に、絹の光の七彩は渦卷いて、只一つの、火の輪は忙しく環る。二つの陽炎は、相聯つて、めくり、めぐる。今のお俊から見ては、苦しかりさうに見ゆる、恐ろしかりさうに見ゆる、然し、其當時の二人は、只樂しく、嬉しかつた、あか／＼と照る戀の炎の環に映して見たる物皆は、只華やかに、活々と輝いて二人の眼を喜ばした物計りたつたもの。

温かで、樂しかつた追想に耽つて居る耳を驚かしたある者に、お俊は只悚然として耳を壓ふた。物悲しい、祈禱の聲は、今し一しきり高くなつたので、やがて、汚れた白い衣を着た修驗者が、手にした綠の杖を、後に續いた姑を見返つて、門口の杉の柱に押しつけて、何かつぶ／＼と呟いた。やがて煌々匕首の樣に光る釘と蒼黒い鐵槌をふり上げて板を柱にうちつけた。其カタカタと乾燥びた音が、空洞とした屋内に響く度に、修驗者の濃い眉の尻がピクピク動く、其蒼ずむだ顔、引き締つた口吻が、何と無く野の石人を見る樣で、寂しく聖かつた。修驗者はかくして去つた。然し、戸はまだ開け放されたまゝの厩舎には、「青」の呻く聲が聞える。「青」は、其盤色たる躰に人を求めて悲しく腸を破る樣に呻く。彼は順治を乘せて滿洲の野を走せ巡り、そして又購はれて、順治を乘せて、此の湖沿ひの村に來たので有つた。「青」は俺の足だ、此の足が有つたから俺は生きたと云ふた。「青」は直に順治の生命で有つた。「青」の在る間は順治は再び歸るで有らうと、お俊は思つて居る、けれども順治は歸ら無い。

梭の往來に管は瘠せる。

『はた、はた、はたり、はた、はたり』

音は寂しくお俊の病に響いて、痛む胸は日毎に瘠せる、都にも、筆の毛の線を曳いて、白妙の紙に順治は機を織つて居る。糸を曳く度に筆の毛は瘠せる、順治の胸もかくして病を得た。筆の機を織る人と糸の機を織る人とは、三百里を隔てゝ、西と東とに病人で居る。そして二人共重い。お俊は自身の病を忘れて「青」の病を思ふ、都の人ゝ聞けば必ず同じで有らう。「青」は將に死なんとして居る。其の人を求むる聲は悲しい。

湖の鏡は浮ぶ時は無からう。梭の冷い調に、鏡の白い光は、お俊の病に蝕み入るのである。

技巧の點に於ては、今回の集中第一位に推すを憚りません、物語めいた、叙事詩のやうな、ロマンチックな、好い作です、一方から云ふと文學は日に／＼人間に接近しすぎて、人間界を離れしめやうとする高級の文字に欠乏してゆきます、時代の思潮とは云へ、吾等は他の一方に此種の人を欣はせる好文字あることを忘れてはなりますまい（評）

扉外七篇

扉

紀伊　伏見八千代子

ギーと開いてギーと閉ぢる大きな扉。影の樣な人を呑んで、影の樣に人を吐く。

塔内に這入ると薄暗い、かび臭い空氣はヒタヒタと前髮に逼る、世紀の異つた空氣は一種の濕りをおびて居る。

私はどぼ／＼と歩き出した、上草履の音のみ高くひゞく。手毬の樣な黑い物が頰をかすめて飛んだ。

聲がする樣だ、――情慾にうゑた少女の聲が、妾はギョッとした、此處は安息の場所だと思ふて居たのに、何處までもあの聲は妾を追ふてくるのだらうくる／＼と。

妾は熱い涙を冷たい板の間にこぼした。

白しらした壁畫、古雅をおびた彫像、むい此處に咲く花があったなら鈍色であらう。

活動

妾は小提灯に足下を照しながら泥濘の多い田舎路をたどり／＼村の入口にきた。

闇夜だ空には冷たい星が何萬となく輝いて、ヒューと吹く木枯が提灯の火を食ふとする、袖でかばうた。

姦しい笛の音、少女の聲。

武者窓の樣なのに取りついて内をのぞいた、幾寸の洋燈はまぶしう輝いて、緋、白、萌黄、紀州ネルを纏つて居るのだ、少女は皆一樣に寄ぎった肩から上の肌をあらはして居る。

此の寒いのに裸形だ、妾は小さい聲で活動と叫んでショールの巻いた首をすくめた。

蠟はつきて灯は消えさう。



(九等)同じクラス　下谷　水野稻子

蘇鐵

生

お米を洗ふ手を止めてふと眺めた、しめじめして厨の大きな水甕の暗い影に何か芽をふいて居る。まあ――何の芽だらう、そして何時生えたのであらう、育つだらうか、此の寒いのに――此の肥氣のない處で、あのよわ〳〵しい芽で花が咲けるであらうか。
土をかぶせて私は生の意義をつく〴〵考えた。

うつゝ

耕の花の咲き亂れた野に出た。
向うからつかれた歩を運びながら來る少女の一群がある、皆半裸形だ。
皆一樣に白い胸に黒づんだ血がにじんで居る。
花を折ろうともしない、歌もうたはない、だまったまま行き過ぎた。
と、知らぬ間に妾も其の跡を追つて居る、胸には何時のまにか小さな矢が立つて血潮がぞく〳〵流れ出る。
花の陰からけら〳〵と笑い聲。
「射てやつた！　射てやつた、」男の聲――。

似顔

妾はふり返った。
眸は似て居た、夢みる樣な……。
淑子さんに違いない、でも獨身主義であつた女があんな美しいお髭の人と、やつぱり淑子さんも――。
と、車の上の人もふりむいた、街燈の火の光に浮いた白い顏、輪廓がくつきりと見えぬ、丁度霞の中の白芙蓉の花一輪！電燈の光であればよいに。
「淑子さんじやなくつて」『……』。
車は轍の音高く走り去つた、木枯の寒い宵だ。

二人

神無月公孫樹の葉の降る樣に散る日。
母の墓參の歸るさ舞ひ込む落葉に半戸さした通夜堂をのぞいた。
夫婦らしい二人の通路は背合に坐つて居る。
男は俯いて何か白いものを食つて居る、女は眼をつぶつて腹の上に手を組み氣味の惡い程血ぶとりのした兩足をだらしなく投出して居る。
。。。。。。。。。。
二人の間には戀らしい匂もない。
佛燈は薄暗く四邊を照して天井や荒壁には蝸牛の匍つた跡がきら〳〵の樣に銀色に光つて居る。

弦聲

ピ……ピク……ペン。
とある片側町の夕暮、妾は思はず歩を止めた。
淋しい音ははげた道者宿の看板のかゝつた家の内から

聞えて來る障子の破からのぞいた。
四十ばかりの男が薄暗い室の片隅に坐つて頬に綿を打つて居る。頭から肩には綿屑で灰でもかぶつたかの樣。ビ……と絕えず弓弦は振動して……ペンと白い吻が飛ぶ、文明といふ母が紡績會社を生んで日々其の煙突から毒々しい煙を吐く樣になつてから此の淋しい土の中からでも聞えて來るかの樣な音が次第に聞かれなくなると思ふと止どなく涙が流れる。
淋しい物をしとうて淋しい涙が。——

落葉

葉がちる萬木の葉が。
黃金の蝶の舞う樣に。
日蔭は冷たい。
白膠木——はんのき——はじ——胡桃のこずえからはら〳〵と。
冷たい風が吹くからであろう。
妾は思うた、丈なす千人の少女の黑髮を編んで散る葉ちる葉をうけ止めてやつたらと。
そして土に朽ちる運命からすくうたらと。
少女の手力で萎ない葉が靑くなつたら小さな花が咲かう、よわ〳〵しい實を結ばう。
歸り花。
淋しい歸り花。

賤、生、活動、二人、蛙聲を最も宜しとします、散文詩と謂つても決してはづかしくありません（評）

現實の影

府下　水野ゆみ子

十一月から十二月の末にかけて雜司ヶ谷あたりの木立では、風が吹く度に黃ばんだ木の葉が頻りに落ちる。櫟や、楢や、樫や、田の畔に植つてゐる柳などの葉が濕つぽい風にひつきりなしに散つて、やがて木枯しが露はになつた冬枯の木立に、わびしい音をたてて過ぎる——代々木野、千駄ヶ谷から雜司ヶ谷あたりの冬はまことに此の林野の色彩が多くて、感じが深い、秋の末から冬の初めになると、野立の雜木をかすめて、時雨がふる——さながら遠き野をこえ、森をこえて吹く風のやうな音をたてて時雨がふる。その度に木々の葉が夕日に色づいて來て、栗の實や、どんぐりが草の上にかすかな音をして落ちる。乾いた日が十日も二十日も續くと、野には朝ごとに白い霜が降り、丘の家には寸にも餘る霜柱が立つ——落葉たく煙りが野の末や枯木のひまからする〳〵登るのも此の頃で、淋しい夕鳥が枯れた木立から飛んで薄い夕燒の雲にかくれるのも

此の頃である、都會の生活にあきた人は、この淋しい――而しながら靜かな自然に憧かれて郊外の生活が試みたいといふ、……… 妾は厭きてしまつた、私は都會の生活の裡に身を投じて現實に生き、現實に死んでみたいとおもふ。

空には白い雲の影が浮いて、薄い冬の日が靜かに野に照る日、わたくしは枯れた田の畔に沿ふた小みちを歩くのが何より好きであつた、何處からともなく往還を通る車の轍の音が、穩やかな冬の空氣に漂よふて響いてくるのを聞くと「あゝ靜かな、」といふ感しが胸をついてくる、遠く森の彼方には煙突が見えて黑い石炭の煙りが横になびいてゐる、折ふし近くの田圃を百姓が鍬かつぎながら通つてゆく。―― 而し、それらの自然も、それらの人も、空想から醒めて現實の我にかへつた。妾の胸には、春風に觸れて鳴る琴の絃ほどの響も殘さなかつた。現實! この一語は私の――凡て穩やかな、空想にあこがれる若い女の心を破壞する鐵槌であつた。

何日だつたか、―― ある晴れた日曜の朝、私は庭下駄を穿いて、かなり廣い庭に出て、コスモスの花に向いて立てゐた、と、がらりと門の扉の開く音、思はず眼をかへすと、チラと襟頸の白いのと、赤い手柄が眼につく、飛んでゆくと、葡萄の小籠を下げて妹の露さんが來た、――暫らくしてから日當りの椽に座布團を敷いて坐つた。

「始めて島田に結つたもんだから、重くつて。」

問ひもせぬのにこんなことを云つて、二度も三度も手でいじつてみる、私も島田に結つてみようかしら…………と思つた。

「此家へ來るみち〳〵で見ましたが、ほんとにいゝ處ねえ、田や畑があつて、森だの丘だの見えて。」

來る人ごつてにみんな此んな事をいふ。

「そんなに好くつて。」

「え、こんな處に住んでみたいわ。」

「駄目よ、露さん、妾なんか街中に住んで、どん〳〵働いて、どん〳〵生きて見たいわ。」

「男のやうね。」と露さんがいふ。私の頭には重い力が働いてゐた。

「妾なんか然う思ふの、とても夢や、空想では生きてゐられるもんじやないて、眞面目でなくつちや駄目よ、文學だの美術だの、ほんとにつまらない、スコットの詩を學校で敎はるひまに、雜巾の縫ひ方でも覺ゑた方がほんとに好かつたと思ふの。」

而し露さんは若い女であつた。驚いて、

「姉さんも餘程變つてきたわ。」

と云ふ、私は云ひました。

「人間は變はらなくつちや嘘よ、娘の時と、嫁にいつ

た後と疑らないんは噓なのよ、露さんもいづれ私たちのやうに自分を覺る時が來るだらうと思ひますの、妾なんかごく眞面目に生活してみたいと思ひますの。」けれど餘り教訓めくから止めた、
赤い白いコスモスの花には日が美しく照つた。
露さんの瞳――やさしい夢を見るやうな、瞳にも、何日かの現實に、醒めた時の寂しい影は映るとおもつた。

* * *

夕方、露さんを送つて家を出た、大根畑を逦する泥濘の小みちを辿つて、鬼子母神の森に沿ふて出ると、遙かに枯れた木立のひまから母校の白堊と、尖つた屋根とが見える、と、なつかしい學生時代が思ひ出されて空想の盛んであつた頃の事がしのばれる、あゝ空想は現實の影に破れることがあつても、この追想だけは永遠に忘れたくない。
妾は露さんと、默つて、默つて、田畑の小みちを辿つた。

文才が豐かなので、郊外の自然などはなか〳〵隅へは置けないほど巧みに描かれてあります、情は筆ほど動いてゐない、けれども兎に角文學の素養の淺くない方だとは誰の目にも分ります(評)

贈物の意味

名古屋　八代やゑ子

それは私のお下髮の尻尾を、脊に廻した手でやつと握まる位の年の事、十二でしたか姉樣は十八でせう、姉樣は白い花の好きな方でした「處女のやうな」と云つては强い眼光で嬉しさうに瞶める、淸楚な佳人とは此時の姉樣だと思ひます。
淺い春の日でした。姉樣の御友達、美津子さんが被入て三人で野を歩きました。
秋の空のやうに能く晴れて、秋草が初々しく薰つて、何かなしに嬉しくつて堪らないやうな氣がします。かぎろひがゆら〳〵と縺れ〳〵て昇つて、春の香を奈邊迄傳へるのでせう。小川の水は花の影の搖れぬ程、そして、活々した草の間を、花藻の薰する海へ跫音和やかに――辿つて行きます。
「ねー美沙子さん、貴女此頃大變新體詩が旨くおなりなすつてよ」「隨分ね彼麼事ばつかし」美沙子さんは輕く姉樣を叩いて不躙水に撮つた姿見て「もう最終の島田よ」「あら惜しかなくて」「惜しい事は惜しいけど……」「けど何なの？ホヽ」「いゝわ、何れ御返報は致しますから……」など御二人して春々しい御話をし乍らそゞろ歩いて居られます。
美沙子さんは可愛い花を見付けて、そつと摘み頰摺りなさいました。櫻の新芽のやうな細りした眉尻り、睫の下から僅かな膨らみを持つた頰、高い島田で採上げの長いのが大變優しく見えます。うつとりと何か幻を

追ふやうな眸で紅い花を見て彼在います。姉妹は誇りに充ちたやうな面地で晴々しい空を仰いで居られます。夜寒が原に、春の精のやうな處女が遊んだ紀念として、理想の花束を拵へやうと三人して好きな花を探しました。私の理想の花つて、自分のやうな少女らしい花が佳いと極めて、紅い可愛い花を探しに「可愛い花よ……」なんて出鱈目な曲節で呼び乍ら歩いて、蓮華の花を見付け、指の輪に充滿に成る位摘んで姉様の所に行きますと、

若紫の菫の香を吸うて彼在た美沙子さんの後で、姉様は覗いて「詩の人見たいだ」と小さく微笑んで彼在たから「姉様。詩人つて何?」と訊きましたら、うつゝのやうな美沙子さんは、せき止めた水が柵を除られて迸るやうに高笑ひなさいました。

姉様は白い花が無いとて、水苔を添えて御髪に挿して彼在つた、御内の花苑に咲いた何とか云ふ難い名の花をアスパラガスと一共に混せて、花束は出來ました。

「まあ何て奇麗でせう」「悄れちや不満らないわと私が云つたら「ぢや私、寫生してチイちやん許へ一枚上げませう」と美沙子さんが。「それぢやねーチイちやん、是は私共の心の御祝ひとして、美津子さんに上げませう」と姉様は彼仰る。私は賛成しました。

「乾度ね、其時は彼入て下さい」と操り返し〳〵仰被た美沙子さんを、熊徃分けて堤の影になる迄見送つて、私は唱歌謡ひ乍ら、姉様は默つて内に歸りました。

其年の秋、姉様は肋膜を患つて、一時大變重かつたのです。秋も中半を過ぎた或る日の眞晝過ぎでした「寒くても能いから障子を開けて」と彼仰るものですから丸窓を一寸、そつと開けますと姉様は喜んで、楠の上に見えて居る白い雲を眤と見瞶めて胸の戰ぎに堪へられないやうに、眉寄せて彼在いましたが、錦木のハラハラ落ちるのを看て「もう葉も散るのねー」と情けないやうな聲で彼仰つて「もう私も逝くんだわ、どうせ死ぬなら、鳥渡でも美沙子さんのやうな境遇になつて死に度い」と寂しさうに微笑んで「ねーチイちやん」と云はれます。私は美沙子さんが春、御嫁に入らした事は私も呼ばれて行つて知つてますけど、それから鳥渡も御見えになりませんから、甚麼境遇に彼在るか判りませんでた。

其頃、私は御好きな白い花を種々あさり集めて、花瓶に挿して上げましても、姉様は、紅や紫を混せてと彼仰います」姉様。白は嫌ひになりまして。」訊いたら「いゝえ、然うぢや無いけども一色ぢや寂しいわ、燃えるやうな緋や、彼麼若紫も無くちや」と御答へなさいます。「そんなら恰度、美沙子さんに上げた花束見たいになりますねー」「ああ然うねと」うなづかれた。

私の幼い想像力では姉様の御心を解する事が駄目なのでした。

今私は夜寒が扉に立つて居ります。今はやつと咲いた野菊の、小首傾けて未だ嫁菜と云はれた時分を追懐ふやうに、私も不圖首傾けました。か濶く澄んだ空の下に。

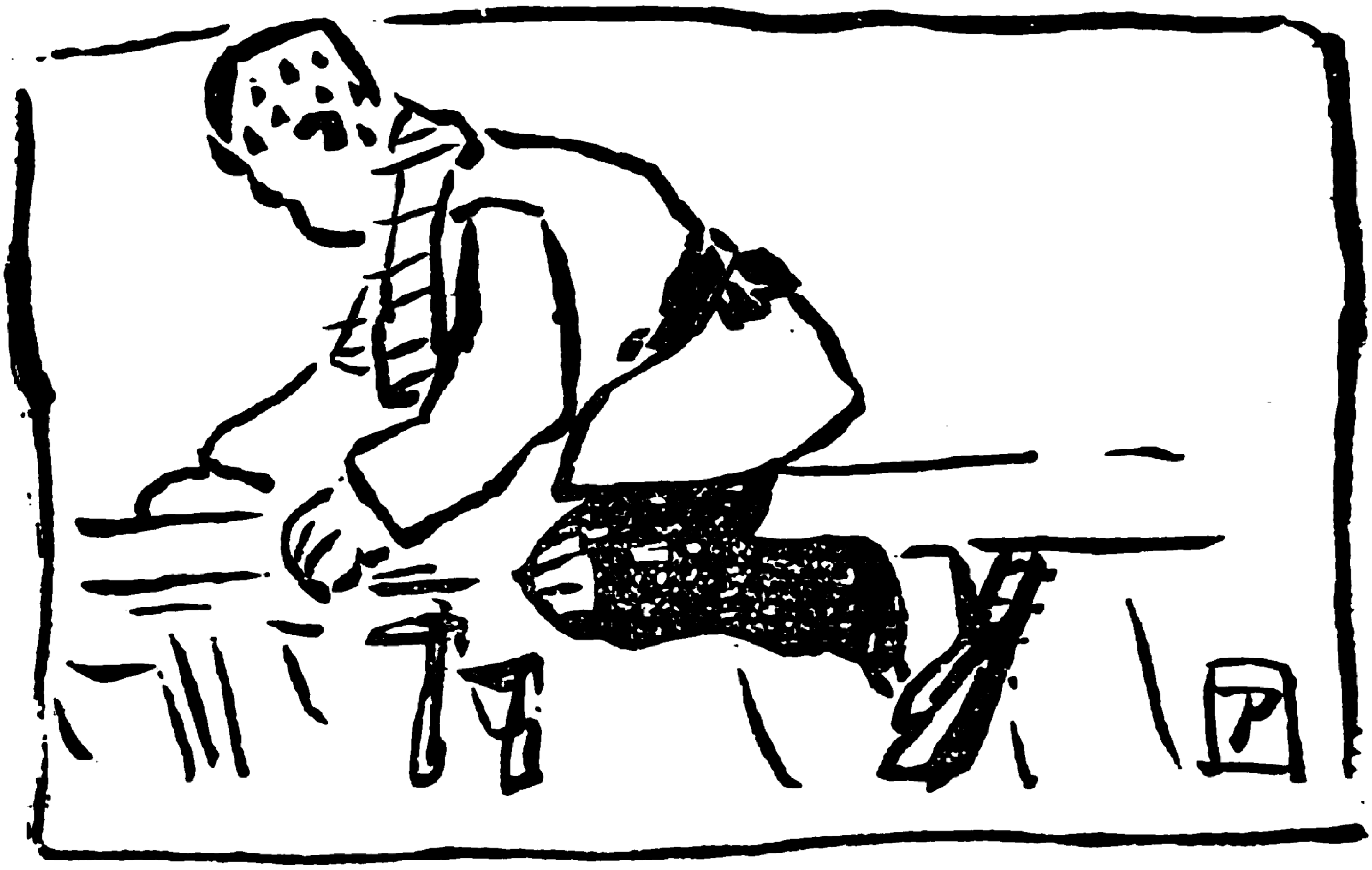
優しい姉樣。今は母と成られました。義兄樣は理學士それはハキ／＼した方なんですが、姉樣は冷い人よ、とこぼしては手紙にあります。

美沙子さんに贈つた花束の書それは姉樣が東京に持つて嫁かれました。過日の手紙に（美沙子さんのは紫が褪めたさうよ」とありましたから、私は（姉樣の白に染まつたのでせう。私の紅も褪めましてよ。すつかり）と書いて上げました。

姉樣の御病氣の時の花の意味、今は略了解ります。

空は朧しく輝いて居ります。瑠璃色よりも、もつと美しく。誇りの色とでも申しませうか。あの奇麗な幕に包まれて、私は强い思ひを感じるので御座います。お仕舞ひには、染まるか褪めるか知りませんが私は今白が一番好きで御座います。

氣取つてると云へば氣取つてるかも知れませんが、少しも輕薄な文字はありません、おとなしやかに出來てゐます、少しのび／＼した氣味があるやうですから今一層引しめると極く可憐な小品文になつたでせう（評）



（十等）　左官　原田あき子

弓取る手

神田　英子

ドアを押すと、瓦斯ストーブが、ムッと暖い。崩れる樣に、長椅子に、身を投げかけるとたん、ちらと、大鏡に映る姿に、ちつーと目をすえて、……あい氣紫の、裙模樣美しく、帶の模樣は、私の圖案。決して惡くはない心算、……あゝなんて、小幸福、……今宵、花電氣赫く下に立つて弓取る時、羨望に、欽慕に幾多の若人の胸の血潮を躍ら

せて。眠つた樣な聽衆を見渡す時の額の誇は、……あゝ考へる丈でも、ぞく／＼する。まこと此世に、授かつた生なら、隨分と美しい花咲かせて勇ましう散りたいもの、……ふと氣付けば花瓶の薔薇の、吹く呼吸が、湯ざめの頰を、ひや／＼撫でて居る。冬の薄日が、窓掛を通して、ほの白く映し込む邊り、まぼろしの樣に、プログラムの、私の名が浮出ると、又今更の樣に、ヴイヲリン肩に、靜に弓を絃に觸れた。靜に、低音に、……又徐々として、大きく高く、音色は輪の樣に、ゆるく室内をめぐる。何時とは知らず、曲は佳境に入つて我ながら夢心地、……或は神女の來つて、耳許に舞ひ、或は萬里の波濤に、船浮べる思ひ、……或は高く、笑ひ或は低く泣く。……嗚呼此の心地、此の美、此の樂、……之を知らぬ者こそ、世の最不幸者だ。あゝ私は虛榮を捨てゝ、一生、此の天職の爲に、歌ふて彈じて、其儘倒れやう。此れこそ、眞に神が私に授けた天職……私の胸は、一點の濁りも無くすみ渡つた

今少し長かつたら(評)

美しい波と暗い心

麹町　小島やよひ子

八月三日。

兄樣は爺やの案内で嵯野へ行らしつた、勝手で婆やは、糸車を操つて居る、キイ／＼といふ音が靜かな晝の空氣にたゆげにひゞく。

私は光線をのせたキラ／＼しい浪を見ながら、筆を取つた、たるい、なやましい、其くせに、何かゞ戀しいやうな日である、「浪は美しい光の内に輝いて居る…と書いた、あとは續かない、いやになつて筆を置いて居ると「ご勉强ね、」と突然呼ふ聲がする、見ると枝折戸の外に、磯子さんは立つて居る、「お一人？」と又一寸首をかしげて見せる 例の癖である、

「まァ丁度いゝ處よ、よく入らしつてね」と自分は心から嬉しかつた、これありがたう」とお磯さんもう這入つて椽端になげるやうに腰をかけた「よくお書きになるのね」と稍嘲けるやうな目を使ふ、私は苦笑した、汐風が原稿用紙の端をヒラ／＼と動かして居る、自分はふとんを二つ持つて椽端に來た、白い足で鼻緒を弄びながら、焼けるやうな砂の上をジッと見つめて居たお磯さんは急に目を返して「この頃何を書いて？「いゝえ、何にも書けないことよ」と私は團扇をすゝめながら答へた、

「オホ……お株ね」と白い齒を見せて笑ふ、何だか疲れたやうな顔をして居る、

「貴姉こそ嘸澤山に……」と私も一本つきこんだ、

「どういたしまして」とお磯さんは一つ輕くおじきをして口にほゝゑみながら、目をうるませた、

「あの横寺町の先生の處でお目に掛つてからもう幾年

でせう」私は何氣なく云つた、

「そんな事云つちアいや」とお磯さんはクルリと顔を背けた、私は自分の肩に手をやつた、肩上げを下りて一年の餘にもなる、あの時にはまだ友禪の被布を着て紅いリボンをかけて居た、島田に結つてキユッ扱ゑもに着物を着た下町風の娘さんはこのお磯さんであつたあの頭から見るともう別人のやうである、顔の澤も失せ口元の花やかな笑も淋しくなつた、あの縱横であつた才氣は、急に人を嘲るやうな目附をしたり、意氣に出づる聲を吐いて諷したりすることだけに殘つて、今は悲しげな老嬢(オールドミス)のスタイルと變つて居る、私は其無雑作にとり上げた束髮の後れ毛が細いゑりあしに下つて居るのを見て何ともいはれぬ悲しみを感じた

「オホ……しめつぽくなつちやつてね」お磯さんは突然聲たかく笑ひ出した、其響きがいかにも上かすりのした安心の出來ないやうなこゑである目には涙のあとか見える泣いて居たのかしら、

四日。

淡い朝風かふく、おだやかな波はサラ〳〵と白砂の上にころげて居る、天氣の都合かして引あみかないから磯には波の聲かはしいまゝである、片手をかざして舟を見て居ると、爺やの緣の小ヒーローは馳つて來た。

「東京のお嬢さん、梨畑にゆかないかね」と云ふ。

私は云はれるまゝ足をむけた、歌人に見せたら早速に田子の浦梨とでも泳みさうな梨の畑丁度今熟して居る、私でも背のびをすれば樂にもげる位の木においしさうな實は朝露をうけて粒々を光つて居る、小ヒーローは早く三つはがりよさうなのを取つて呉れて自分はもうかじつて居る、私は冷つこい實を手の平へのせた、浪の音は遠くから慕つて來る、心地よい朝である、私は梨の木の間を縫ふて再び磯に出た、小ヒーローもついて來る。

「ヤア、五軒家の內のお客樣だア」と小ヒーローの武雄か叫んた、と見ると目の前にある磯馴松の根に腰を下して大きな寫生帖へ何かしきりに圖どりをして居る——野崎さんである——私か默禮すると彼方も一寸禮を返して目は再び紙の上に返つた、「野崎さん!!」と私は呼びかけたい、そして物こ盡るすべてを言つてしまいたい、私は身も世もあらず情なくなつた、强て冷かにして居る其人の橫がほを見て私は其處に突立つたまゝ唯すゝり泣いた——あゝ私は、いつまでこんな誤解の內に居なければならぬのかしら。

私は堪へきれなく悲しくなつた、私は踵を返して廿歩はかりスタ〳〵と行つた、そして家にもあらす振返ると、かの者も見送つて入らつしやる、目と目はハタと合つて同時に背けた。

五日。

終日悶えにもだえて、何の考へも捕ええぬ、日はドップリと暮れた、風は出て來た、波の響はもの凄い、私は草履をはいて庭の木戸から濱へ出た、空は暗い、水は黒い、其黒い沖合からいくつとなく波は白いかしらをもち上げてザ、ザッと磯に碎くる、私はこの暗々とした砂はらに稍暫らく泣いた、私はむしろこのまゝ絶え入りたく思ふ、けれとも私はこの波濤の中に身をまかせほどの勇氣はない、あゝ闇い、過去も未來も皆闇い、望もなく戀もない未來はあの雲の色より暗い、野崎さんのお心をたしかめたい爲めに此處に來たあの方はもう私をすつかり誤解して入らつしやるらしい、私はあの君のお心に背いたいなむしろ誰れのお心にも背いて居る、秋の望、私の愛、生れぬ前に定められた夫は海のもくづとなつて居るといふことは誰れも思つて下さらない、あゝ私は虛榮のためにあの方のお心にそむいては居ない、思へはあの艦上に破裂した砲彈か恨しい、私の愛は一つであるけれとも萬一私は一つの愛を守られないなら何處に求めやう私か、かの君のお心に背いたのは決して他の心に從ふためではない――私は云ひ表したい。

私は顏をあげた、さらつて行きさうな大きな波か足元で碎けた、私は覺えす飛ひ退つた。

「やよひさんぢアなくつて――まア如何なすつて？」

女らしく呼ひかけながら磯子さんは近づいて來る、

「あら磯子さん」私は何だか胸の秘密を皆見やぶられたやうな氣持がして自分ながら異樣な聲を出したのであつた、

「あゝもう私つく〴〵厭になつた、あんまり單調（シンプル）で」

磯子さんは私の肩に手をかけて叫んだ、あゝ磯子さんも戀の失敗者である煩しい都をのがれた彼女は又この單調な敎師の生活に飽きて居る、

夜はます〳〵暗い、浪はいよ〳〵狂ふ、私は潸然として泣いた。

例の如く感情一方のものですが、何處と言つて取り立てゝ褒める點もありませんが、また欠點もない、海邊のさまが上手に書けてある大分煩悶が複雜してゐるらしいと想はれました（評）

見合から里歸りまで

大阪　山下彌世子

三月廿一日

今日は見合ひの日、朝から髮を結ひ、お湯に入り、着物を替えて待てゐる、風通お召に羽織はぶどういろのちりめん、髮は桃われ、十時頃仲人とむこ君と門の外にちらと見えて、臺所のガラス障子から見て居た私は殆無意識におくの方へにげ出した、あとで姉樣のスタコラにげ出した顏つきの面白かつたことと、弟に笑はれた、とう〳〵母樣に部屋から引張り出されて、煙草ぼんやらお茶の道具やらをはこばせられた、顏ばかり

あつく、ワク〳〵して仕方がない、ジットうつむいてたゞつき出してにげて來て仕舞た、モーあれでおしまひですか、私はいゝですが、御令孃は一寸も見られん樣でしたが、あとでアンナ男とは思はなかたがなどゝ云ふ樣なことが在ては、折角御大切の令孃をいただいてもすみませんから、モー一ペンドーゾよくごらん下さいといといふお聲、いくら男でもあんまりシヤ〳〵してゐるむこ君だと思ふ、イエモーあれでイ、そうですといふ父上のおこゑ、やがてお歸り、玄關の式臺まで御送りして、ヤッと胸をなでおろした、母樣のかげで弟たち三人で、姉樣活潑ナいゝ人ですから行て下さい、私の兄樣になるとウレシイネとやかましく云ふ、母樣にドンナお方とソット伺つたら、色も好く、髮と眉とは濃いと云はれた、おヒゲの在た丈は私も見たが、外の所はわからなんだ、フロックコートにオーバコートを召してゐられたのは知てゐた、

四月一日

いよ〳〵結納來る、祖母樣につれられ、所々の親類へ御いとまごひに行く、髮は島田、着物は糸織に紋盬瀨の羽織、お友だちの所へは、一人でゆく、ドーしても嫁に行ますとは云へず、親類の兄樣と松島見物に行くから一寸と云って、おく、御保養にゐらつしやるにおいとま乞ひをかしいネ、兄サンって第一あやしいと云はれる、エヽいとこナノといゝかげんにごまかして歸る、マーよかッた。

四月四日

いよ〳〵其日も明日と成った、机のひき出し本箱などスッかり形付ていらない物は皆お勝手へ持つて行つてやいてしまふ、パット火を付ると赤イ〳〵ほのほの舌が、ベラ〳〵ツーと舞ひ上る、白い灰、實に心もちがいゝ、皆やいてしまつてあとの灰へ、火箸で誠心とかいたら、直に風が來て消えた、夜父樣のお居間へ行て、御いとま乞ひを申上げ、御秘藏の短刀一口いだゞいた。

四月五日

いよ〳〵今日と成た、お臺所の方は出入の者でにぎやかだ、今迄御養育をうけしお禮やら、此後の覺悟やらをかきおきとして、母樣のお硯箱の中へソット入れて置た、仲人の所から使が來て、天龍川出水のため、橋がおちて荷物がこされぬと云て來たから、仕方なしに滊車つみにすることにする、ひる頃から荷物を車につんで停車場まで引き出した、門迄見送る、途中一町程行た所で、三番目の車を引てゐた、うちの萬(下男)がハッピをぬいだら、眞赤に成た赤のシャツをきてゐたとみえる、ヒーキンナ人だこと、夜は私の生れた時、

世話に成た産婆やら、乳をもらつた人やら、其外こん意の人を招て送別の會を開たが、今日ばかりは、私の好ナごちそうの數々も、一寸もおいしくない、八時の滊車で出發、モー七時に間もない、ソロ〳〵でかけ樣とのこと、父上樣はチヤウチンを付て、門前まで見送て下すつた、車にのつていざといふ時、行て參つますと云て笑はれた、いつまで學校へ行くつもりだらう、途中村の子供が、ヤーお嫁樣のおよめ入りだと、大勢かけ出して見に來て困た、しかしくらいから分るまひ、停車場へおりたらおどろいた、お友だちがモー先に來てゐられた、矢張分つたと見える、岡本さん水戸さんからは、お祝品まで下さった、モー仕方がナイと度胸をすえたもの〻、何とも云はれぬ心もちがする、九時近く向ふのステーションへ着く、マー大變な提灯だこと、中々車も通れぬ位、やう〳〵中休みの家まで行て一休み、着物を替えたり、髪をなで付たりして、十一時頃先の家へ着た、仲人に手をひかれて、直に扣室まで行き、こゝでいろ〳〵仕度して、夜半過きいよ〳〵式、綿帽子で少しも先が見えぬから、仲人に手をひかれてせきについた、式は細川氏の定められたので、簡單で宜しい、たゞむこ君のはかまのサキがチラ〳〵見えるばかり。

四月六日

舅君につれられ、我等兩人はお先祖のお墓參り、夜に入り姑につれられて、近き親類へ披露にゆく、

四月七日里歸り

うれしい樣ナ妙ナ氣がする、夫と父上と兄上と里からつれて行た下女など數人、十時發の滊車にて行く、夜、夫は尺八、私は琴にて君が代を合す、舅君兄上は一足先に歸らる。

四月八日

弟たちと共にうらの山へ、わらびとりにゆく。

四月九日

今日はいよ〳〵歸宅、何となく名殘をし、夫の任地仙臺へ行く、仕度にて大さわぎ、いろ〳〵の荷造りす。

四月十日

所々へいとまこひにゆく。

四月十一日

いよ〳〵出立、御兩親はじめ親類の方々、近所のたれかれステーションまで見送らる、噫わが新生活に入るべき門出、

見合から里歸りまで、新婚前後の日記ですが至つて飾のない書きかた、ところ〳〵に挿んだじやうだんもわざとらしくなく、讀者も一しよに婚禮がしたくなるやうてうです、それで人生の一大事と云ふ覺悟も見えて居るやうです、生半熟に煩悶の苦痛のと云ふ人より、斯んなお孃さんを貰つた方が男の幸福かも知れません、如何なものでせう(評)

霜の朝の位牌流し

京都　春日桃牛

四七日か濟むだので、亡弟の位牌を流しに行く。家を建増するので、其間丈祖母の家に同居する事となつた。で、祖母が今朝は寒いので未だ寢床から、佛の國へ行かつしやれや。といふ。妾は風呂敷に位牌を包むで猿戸を潜る。



櫻咲く頃　　青森　松尾千代子

霜は土橋を薄化粧した。所々土の崩れ落ちた小徑はうつすり霜を散らして白砂糖の樣にキラ〳〵する。枯草は霜を粧ふて老女の化粧の樣に凄い。濕つた土に幾度か辷り落ちやうとして、新道へ出る。牛乳屋の木柵は、下部に焦がした部分を殘す外は、皆炭素を剝落して生地を露出して居る。小川は藍鼠色に濁つて流れる。水面からは湯氣の樣に白く、水蒸氣が濛々と蒸發する。

路傍に置いた數十本の材木は、片側は霜が解けて、片側は霜が眞白である。畑の蕪の葉には霜が解けて、露が生々して、葉陰には霜が未だ殘つてうそ寒い。朝日が輝くと、數多綫の切れ込むだ廣い、綠葉と綠葉と接する凸凹に明暗を生ずる。刈田の落穗藁は霜に塗れて濕る。紺足袋の爪尖が痛い程寒い。

献燈の瓦斯燈は赤く黑く塗つた、柱の片側丈を霜が塗る。金理敎會の石橋の掛つた、深い溝の少い水に石油が泛むで、缺けた德利や柄の拔けた柄杓が滯つて居るのを見ると、汚穢な溝の香が鼻を突いて、不快な感を抱かしめる。杉垣が枯れて、雨戸を鎖された廢家の椽に塵埃が溜まつてゐる。チシャ畑は霜が解けて、小さい若葉がズッーと野中の稻荷に續く。華表は赤いが塗が少し剝げて白味を帶びて居る。

道の溜水には薄氷が張つてゐる。空は灰色に曇つて、少しく朝の光が明く赤ふ射す。

華表の前へ來ると石橋である。下を水がチョロ〳〵流れて行く。小泡も浮いて行く。道の兩側は枯草が遙々と生えてゐる。何處へ御行きやすのや。といふ聲がする、見ると知己の阿婆さんだ。忌の挨拶をせられるのが面倒故唯捨てに行きますのです。と簡單に答へる。それでも別に根掘り葉を掘つて深くは尋ねぬ。時候の挨拶等して連立つて行く。

新築の湯屋の前を通つて踏切へ來る。湯屋は昨日開業したので、小奇麗に體裁好くしてある。煉瓦の臺の上に鐵柵を載せて、其中は叩土で松が植えてある。二階も硝子、障子が篏めてある。横手には石炭の畚が積み累ねてある。屋根には長い竿の尖に溫泉の旗が翻る。

湯屋の隣にも普請しかけてある。

枕木の兩側は霜が白く、中央は人の足跡に黑く蹂躙されて居る。だら〳〵を下りると御師匠（裁縫）さんの垣根である。未だ早いので誰方も見えて居ぬらしい石家の裏口に女が立つて居る。御内儀だらふ。家の内から男が二人出て來た。今仕事に掛からふとする所である。

幅の可成廣い川が泡を卷いて、西から東へ流れる。流れが一寸變つてゐるので、念の爲め阿婆さんに尋ねる黃色の顏に頰肉が落ちて、眼が少し凹むで黃な齒が疎らに、白髮交りのもぢや〳〵とした、阿婆さんの顏が水に寫る。東へ流れますヱ。と答へた。此處で別れる川に沿ふて家の横手を拔け、レールの側の針金にも躓かず、綫路を跨げると、畔路傳ひに又湯屋の裏手へ出る。迂廻したと思ふたが考へて見ると、川幅が廣くて飛ぶ事も出來ぬし、渡した板も無いのである。

此處で位牌を流さうとすると、小徑の曲角に肉附の善い色白の若い婦人が、男の子を帶縛りにして、洗濯をして居る。傍に七歳位の男の子が立つて居る。掛け渡

した細い板に霜が眞白だ。是に氣が注いて氣後れがした。人目を憚る樣な心持になつて躊躇する。其後を通つて南の方へ畦を傳ふて行くと、右は一面の芹田である。半丁程向方は街道が坂になつて、人や車が通つて踏切を越える。

金槌の音が頭の上で響く。見上げると茶畠の丘に、普請と見えて足代が組まれて、大工が三四人働いてゐる。見られぬ樣に躊躇つて、大柄の模樣を白く抜いた萠黄の風呂敷から位牌を取出すと、頭と臺とが離れて居た。それを差し込むで、扔捨て樣として又堅く握つて、無言で戒名をじつと見詰める。

思ひ切つて一間程向方へ投げると、チャブンと水に浸されて濡れる。タプ〳〵フワ〳〵と輕ふ水に泛むで流の調子につれて少し宛、上下して流れて行く。二間程向方へ行くと、水の光る陰になつて位牌が分明らなくなる。と哀愁を誘ふて、亡弟の紀念は永久に妾の温い掌を離れたのだ。。。。。。と強く意識する。

枯草の霜が朝日に輝いて生々する。晨を告げる鷄の聲が明瞭に聞える。白銀の針の鋭氣、純潔な色、清新な香―初霜の朝は何か意味が有る樣に思はれる。

家の側や堤の下を流れて森の中に入り、朝の光を浴びた村を幾個所も過ぎて桂河に出ると、最早大海の木の葉同樣に橋桁の下を揺られて、泡沫と共に泳ひで行く時、車の音が橋の裏へ響くであらふ。鐵橋の下を潜る時若し列車が轟々と通過しても、窓から覗く乘客には位牌に氣が注かぬであらふ。新しい木の香に餌と間違へて、水の香に飽いた魚族に幾度かつゝかれ乍ら、鵲の渡せる橋に置く霜の消ゆる頃、淀の町に入り、動かぬ水車を彼と眺めて城趾を偲び、夕陽の眞紅に落つる頃、林立した檣頭に船章の花が滿開する、大阪灣に入るであらふ。積荷の唄の賑やかに錨を下ろした汽船の舷を叩く波に揉まれて船底を潜り抜け、寒月に千鳥の聲も凍る淡路島を鳴戸の渦に吸ひ込まれて、荒波に苦しみ潮に翻弄されて。極樂境の四國に入り、鯨泛ぶ太平洋に出で、水平線より水平線へ奔流する、黑潮に捲き込まれた果は、龍虎の羽翼を得た樣に十萬億土に到達するのであらふ。

四七日以前天に上つた小さい靈と地中に埋めた冷やかな骸と、孤獨と寂寥不安と畏怖を經驗しつゝ、水の旅する位牌とは何時同一に皈するであらふ。徐ろに思ふと悠久の感に打たれて茫然となる。

絶對無限の大自然の權威の前には妾は弱者たる女性であるから、飽く迄も慴伏して其偉力を讃美せねばならぬ。噫、初霜の朝は大自然が垂れた教訓を妾が直覺した忘るべからざる紀念日である。

寫生式の微細な觀察は容易に眞似られないほど巧みですが、存外深さを缺きました、文字上の骨折は稱揚すべきものです(評)

洋行を仕損つた私の苦心

駿河　三四子

此頃私は皆に、どうしたの？、とか、妙だと不思議がられて居升、其筈でせう、樂天家、とはお友達仲間から付けられた、假名で名も苗字も云はないで通ると云ふ位、又自稱『平和の人』など云つて物事凡てに少しでも悲觀的の事は大嫌いで、苦、厭、悲、など云ふものは全く露氣もない家庭に生活をして居たので、貴女の側へ來ると實際氣が晴れる、とか、眞とに羨ましい、とは誰一人云はないものはなかつた程の私が此頃と云ふもの胸が休まらない、爲か時々泣きたかつたりじれたかつたり、まゝ隨分厭世的の事を云ふ樣になつて極々陰鬱な性と變つたのですもの、自分ながら何故急にこう變つたらふ、アゝ以前の樣な日が送りたい、とはつく〴〵おもふのです、けど……アゝ我には僅かに一つの事柄が此頃の私を思ふ存分に苦しめさせて居るのです恰度春の胡蝶が狂ふ樣な思の女學校時代に、「洋行」と云ふ事が私の理想でした、矢張其頃、よく私が獨立だの何のと云ふと、中々ソーは側でさせておきませんよと年上の方は誰でも笑ふのを「何故でせう」と不思議に思つて居た私が、學校生活を送いて漸々一年經つか經たない……理想の夢もまだ覺めはてない……のに此頃私は「結婚」と云ふものを殆ど同時に兩方から持込まれてゐたのです、一つは女學校の頃から愛されてお友達からは今だに、貴女のマヽさん、と云はれてゐる君田先生からの申込で、一つは兄の知人から、其で先の候補者と云ふのは一つは先生が昔からの異性の友で今米國ニユーヨークの某會社の副支配、一つはまだ早大の文科生と云ふ、曾て先生が此話を申込まない前先づ私の意中をと云つて問はれた事のあつた時御返事もできなくて只「宅へどうぞ」とばかり云つて居たけど、渡米、と聞いた時の私の胸はどれ位をどつたでせう、私は大きな滿足を與へられた樣な氣がして心の中で理想通りを一人喜んだことは云ふに云はれなかつた程です、そして學校生活時代からどちらかと云ふと餘り好かなかつた裁縫、又割烹の事も急に精出したくなつて一針でも一つでも多く習いたいと思つて力を入れました、處が、申込があつたけど航海を嫌ふ母の不承知でお斷りさせた、と云ふ事を其後一ヶ月ばかり經て初めて聞いた時の私は、モー二度と上られない谷底へでも落された樣な、と云はふか、一人子に逝かれし親御のお心中と云ふのか何とも云へない悲味を覺えてそれからと云ふもの三度の食事も求めたくもなし裁縫など勿論なげ出したきり、友のお玉章へお返しもし樣とせずに只明けても暮れても机の前に座つてつぶしたきり、をり〳〵アゝ絶望――と心の、心の心、底から吐き出

して叫んでは失望に泣いてました、すると一方の話は其頃内々まとまるらしく非常に賛成した母は頻りに私へ「諾」を進めるのです、けど私が何で其氣になれませう、只、幾度もせめられて二三年は此まゝ、と云ふ返事で動かないので色々した末には、今度は、ではエンゲージだけ、とまたせめるのです、せめられる私はせめられる程、前の落膽の度は倚々高くなつて、益々きかない氣が強くなつて來るのですもの、私は自由など決して好まないけど、チャンと理想へ誂向の話をそがれて此通りの私がどうして好かないものに今從ふ勇氣があらふ、文科、學士、立派でせふが播きよせる程ある學士なんか……ア、殊に先生、アレ位敬愛して居るやさしい先生にだけにもすまない若しこんな事で疎くなつたらどうしやふ、と思ふと矢も楯もたまらなく胸がさはぐ、ア、矢張此まゝに居てそして先生にお詫びもして元通り御指導を願ふ……など心を働かせて居るのに此頃の樣に顏さへ見れば、口說いたりすゝめたりされては……生れてから十八年目の今日初めてこんな事に出逢つた私ですもの、ア、どうしたらよいのかと氣は轉倒して終つて胸がいたいのだもの、安心、氣の晴れる、と云ふ事が片時もないのです。ア、之れが煩悶と云ふのだらふ。

ほんとうのお話しでせう、結婚と云ふ者は能く此んな波瀾を起させるものです、并行と云ふことが、それほど好いことでも又たいしたことでもありませんけれど、一圖に思ひつめゐる人の爲には無上の悦楽とも想へるのでせう、現代女性の一面を窺ふには好い文章です（評）

欺かされて麻拉へ誘拐されし我が一條

マニラ　西村ふみ子

三年の昔なりき、その頃までは、父君も母君もいまだ世に在して、姉樣は近郊の小學校に敎鞭をとり居たれば、貧しき中にも妾は小學を卒りし後も引き續き裁縫のお稽古に通はせて頂くことを得たりしが、その年の師走、ふとせしことより父君は病の床に臥せられて、遂にあの世の人とならせ給ひぬ。さなきだに悲運に傾き居たりし妾が家はます〳〵困難に陷りて、果ては都の住居も堪へ難くなり來りければ、姉樣はその筋に許を乞ひて、長崎より西に十里餘の田舍の學校に御轉任となり、母君を伴ひて引き越し給ひぬ。妾はひとり都に殘されしが其後は母方の遠き緣家に預けられて、覺束ながら僅ばかりの賃錢をうけて、仕立屋に稼ぐ身とはなりぬ。

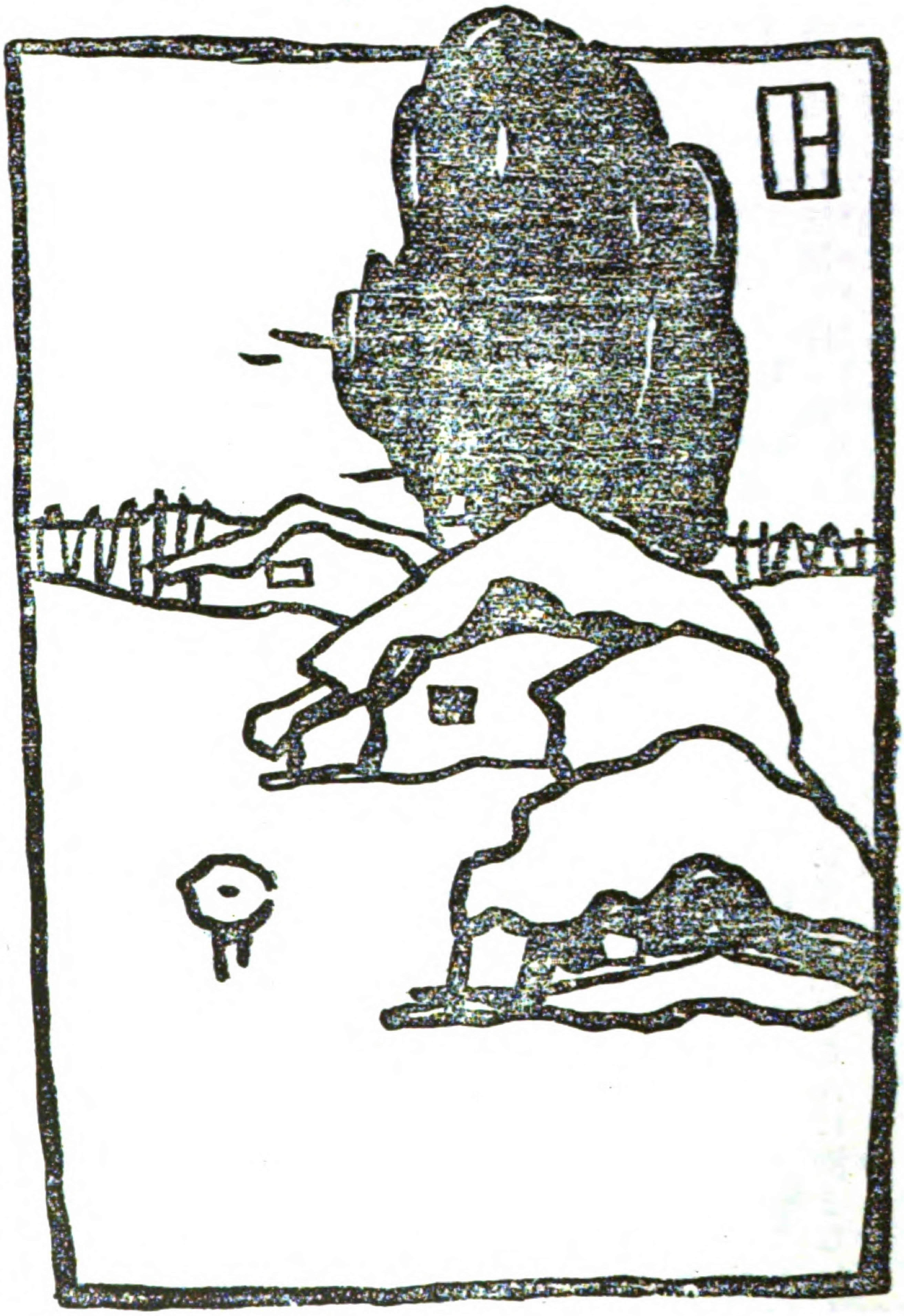
妾はも一人姉樣を持ちたりしが、妾の六才の時ふと家出せられしまゝ、何處に月日を送り遊ばされるにや、更にお便りもなく手がゝりも無きものから、父君はいたくお憤り遊ばして、わが子とは思はぬ、と口癖の如くに仰せられしが、母君のお顏には絕えず言ひ知れぬ憂

みと悔の色の潜めるありき。

ある夜のこと、外は春雨ふりしきりて、人車の往來も漸く絶え、一入ひつそりとなりし部屋の中に、小暗きラムプの下、妾は己が袷物を取いで丶單物に仕立直さむと、せつせと針の運びを急ぎ居たりしに、障子の外に足音聞へて、やがて入り來ませるはこの家の伯母様なりき。伯母様は常になき優しきお言葉にて、色々と妾を慰め或は勵まし下されしが、稍調子をかへて、お前もかうして居たつて何時まで立ても芽の出さうにも思はれず、田舎のお母さんにだつて早くお加勢申してご安心させる事も出來まいし、かつはお前のお身の爲にも良くあるまいと思ふがね、かう言たら恰度お前が宅に居るのをとやこう思ふて、追立でも言ふやうにお思ひか知れぬが、わたしは決してさうぢやないのよ、お前さへ良ければ何時までも宅に居て貰い度い、宅に居て貰た方がわたしの爲めにはなんぼい丶事か知れないのだが、さう仕て居ては第一お前のお母さんに濟まないし、又お前のお出世のさまたげにもなるからと思つて、わたしは疾うから何がない丶事をと、あつちこつ探して居たの、さうしたらね、幸ひ願てもないやうない丶事が有てよ、こんな事はめつたに有やしない、それがね、お前さへ承諾がいけば直ぐに出來ると云ふお話なので、わたしは平生お前の氣質は知つて居るしお前ならば屹度出世が出來ると思つたからね、お前に是非周旋せうと思つて、餘程骨折てたいていお話は極めて來たんだがね、と例のお上手なる口を極て詢々と説き出されぬ。それは、マニラと云ふアメリカの新領地に和洋裁縫店を開ける長崎の人にて、〇〇と申す方の今度歸朝せられて、目下女工の募集中なるが、應募者には月手當三十圓、運賃、雜費等はその方が一時負擔して、マニラに着き就職の上にて、月々手當の半額づ丶を拂ひ込ませる。と云ふお話にて、尤もその方とは以前より懇意の間なれば、お前が一年でも二年でも歸るまでその方の處にて、萬事お世話して頂くやうに頼むであげる故、是非ひと奮發して見よ、と伯母様は附け加へ給へり。

妾はマニラと聞きて、一時は驚き、且つ大にためらひぬ、されどその翌晩、〇〇と申す方に會ひて、猶くわしく様子を承りて、成程外國と云ふ處は骨折甲斐のある處だ、と感じ入り、かつは行衛分らぬ姊様のそのマニラと云ふ國に被居る如き氣も起りつ丶燃ゆるが如き青春の血汐は全身に湧きかへりて、深く考ふる程もあらず、妾はかれこれ後事を叔父様伯母様へお頼みして、田舎の方へは斷りなく、その方に從ふこと丶決心しぬ。妾の外に應募者もある由なれど、他はあと船へ廻す事とせられて、妾のみ〇〇様と共に、六月四日、丹波丸

と云ふに乘じて、門司の港を出帆しぬ。さるほどに、シャンハイまではその方の養女○○しげと稱へて來りしが、不思議や途中しば〳〵名を變へ年を僞りて、淸國のカントンよりホンコンへ渡り、マニラに上陸せしは、忘れもやらじ、三十九年の七月一日なりしなり。あゝ、妾は全く○○樣に欺かれたり、拐されたりと覺えし時は、すでに遲かりき。されば、覺悟は決したれど、此後如何なる憂目を見ることかと思へば、さすがに、くやしくもあり、恐ろしくもあり、さて



寒村の冬　青森　立花とも子

は、悲しくて、悲しくて、日夜人知れず双の袖を濕しぬ。かくて幾日をか過ぎたりけん、雨の日なりし。妾は○○樣のお膝下に呼び出されて、或は怒るが如く、或は宥るが如く慘々に嬲れつ、終に說き付せられて、悲や此身は世の闇路を流るゝうき川竹の魔ケ淵に沈まねばならぬ事とはなり了んぬ。此時の妾は、いつぞや新聞にて讀みし、無實の罪人が死刑を言ひ渡されしとき、逆上して氣絕せしとやら云ふやうに、殆むど妾も氣絕せむばかりに悶え苦しみぬ、狂氣せむ許りに悲しみ泣きぬ、縋らむ人もなきまゝに二日二夜を悲しみ悶

えつ、泣きて泣きて泣き暮せしが斯くては果てじと妾は漸く心を決しぬ、それよ凄く閃めく西洋剃刀は、あはれ亂れ毀れし島田の髷を妾が膝にころがしぬ。

あゝ、それから此方巳に三年、今に涙の絶ゆること無きを如何にせむ。

此原稿は確に海外より來ました、手は正しく女です、して見ると此話は眞實でせう、欺かれて海外に誘拐されたる女、何たる悲慘な話でせう、戰慄して卒讀に堪へません、此作者の一生の哀史は實に血と涙を以て埋めらるべきものでせう、あゝ最初の無分別、恐るべきは青春の人が門出の第一歩なるかな(評)

船から身を投げた人

臺灣 稗貫美津子

靜かな土曜日の晩です、家にじつとして居るのも徒然ですから夜風は病ひに毒だとは知りながら、あまり遠くへ行かぬつもりで、そつと、裏庭へ出ました、今日やうやうほころびそめた二三輪の可愛い一重櫻の花は、折りから雲間を出たおぼろ月の影をあびて、くつきり白く浮き出て見えます、滿開の櫻花も美しうございますが、あまり華やかすぎて、私は好みません、かへつて、此の方は憐れな風情を自ら備はつて、趣味深う御座います、此樣に、地は花もて飾られ、空は又銀色の星もて飾られてあります、この花と星との間に立つて、私は、凝つと耳を澄ましますと、遙かに靜かな波の音が聞えます、常々見慣れぬ海ですのに、今夜はいつになくなつかしくて、急いで裏門を出で、四五間程で一面の沙原へ出ました、その上をすた／＼參りますと、潮の香を包むだ風がすうと私の身を一度ゆくとりまいて、そして、過ぎてゆきます、砂原を數間參りますと、もう樣々の形した大小の岩が、彼方此方に横たはつてをります、その中最も大きい岩の上に腰を下ろして、果ても知れない大海原を見渡しますと、ひつそりとしづまりかへつた海の上には往來の船もなく、一羽の鳥影すら見えませず、海の水は油を流した樣に毒々しく黑くて、只岩に打ち寄せて、さつと散るしぶきばかりは、ま白く、岸を洗つて引き返す小波ばかりは、金色に銀色に輝いてをります、此時突然此靜寂を破つて「あら姉樣ぢやなくつて」と、冴えた聲が致します「あつ――たれ――」私はふいに云はれたので、驚いて斯ういつたきり默つてふり返りますと「おゝやつぱり姉樣だよまあ――こんな所に――伯母樣がね早くお歸んなさいつて」と、云ひ／＼走りよつたのは從妹の敏さんです「まあ敏さんいつ來て」と問へば、「あら姉樣 私伯母さんに濟まないんだから家へ歸つてからお話しませう」とさつさと行かうとするので「まあお待ちなさい家のおつ母樣つたらいつでもさうだからさう急がなくとも宜いのよ、さあこゝでお話して頂

聲」と無理に私の傍に腰をかけさすと「さうよくつて」と前置して「妾ね今日來たのは明日お休みでもいつもの通り遊びにばかり來たのじやあないのよ」と一寸小首をかしげて「それとも姉樣御存じなんか知らん新聞で――」と伏目にちらと私を見る「否えこの一週間ばかりは本も新聞もちつとも讀まないの」と云へば、安心したやふに「さう――それぢやいゝわあのね姉樣と同窓生の藤野ふさ子樣と吉原琴子樣ね――」「えゝ彼の方々どうなすつたの」「あの藤野ふさ子樣の伯父樣が布哇に出かせぎに行つてらつしやるんですつてね、その伯父樣の所から「布哇は宜い所だからふささんに來いつて、もう、うるさい程云つて寄こしなすつたんですつて、その事は姉樣も御存じでせう」、「あゝ知つてますよ、何だか布哇は、非常にお金の儲かる所だからふささんが來さへすれば、幾何でもお金を蓄へさしてやるつて、その上彼の地の言葉もよくおぼへとくと、後々のためになるとか、何とか、大層宜い事ばかり云つてよこしなすつてね」、「えゝよく御存じだわ、それでね、藤野樣のお母樣も遣る氣になりなすつたのよ、でも一人手離すのは不安心なものですからね、琴子樣のお母樣に琴樣をお遣りなさいつて、相談なすつたんだつて、吉原樣のお宅もあの通り困つてらつしやるんでせう、だからすぐ承知なすつて早速二人で横濱から汽船にお乘んなすつたのよ、そしたらね――ねえその船の中での事よ――」と云つて、敏さんは何か恐れるやうに妾の傍へ犇と寄り添つて「二人が船に乘た晩から大變船が荒れて、ふさ子樣も船暈つたが、琴子樣は非常に船暈つて其翌日は一日苦しみに苦しんだですつて、けれど、用事の多い布哇航路船ですからね、三等客などへ十分世話をしなかつたさうですよ、そして其翌々日の夕方琴子樣はとう／＼血まで吐いたんですつて、血をねえ、――そしたら琴子樣はあの通り心の弱い人でせう、だから氣が狂はしさうになつてね、翌日二度ばかり吐いたらば、ふさ子樣も船暈つてよく注意せぬ間に、琴子樣が、甲板へ飛び出したんだつて、それが丁度日暮でしと／＼雨の降つてる時でしたつて、給仕が甲板を通る時は、琴子樣が海の水のために身體がびつしよりなつて、綱につかまつて居たさうですよ、それが再びそこを通ると、誰も居ないで、只「アッ」と叫ぶ聲がして、ざんぶり凄い海の中へ人が沈むだんですつて、それから騷いだんたわ、けれど浮嚢も用が立たず、小舟もこんな海にはおろされないのでそのまゝになつちまつたんだつて、こはいわね――けれど妾のは大略よ、ふさ子樣のお手紙は尙ほくはしいわ――」と敏さんが語り終へでじつと空の星を仰ぎました、いつか月は傾いて春まだ淺からぬ風は、身を刺すよふに吹

いてをります。

あゝ、吉原琴子の命を奪つたもこれと同じ海でしたら、この海も今でこそ此様に靜かなふりをしてをりますけれ共、一たび、雨ふり、風騷いだならば、狂瀾怒濤逆卷く、凄い恐ろしい有様となるでせう。

子供の單純な口を借りて、其夜の凄い話を語らせる、話には順序もついて居り、少しも亂れてゐません、只、話の筋は大事件ですけれど、筋だけに止つてゐるので、割合に人を感動させる度が薄いでせう（評）

眼を病みし時

大塚　眞佐子

生木は皆若芽を出し、子供等には腫物が出來る、櫻の花も咲き初めて、春の陽氣か室の隅、土瓶の中迄も滿々て居る、一日は佐和山神社の祭禮で、學校生徒も參詣する、其日母様かトラホームであつた私に、大勢の人が歩くと塵が立つて眼に惡いから今日はお休みと、仰る、行き度くて〱泣ひて願つて登校する、埃のモーモーと立つ道を四列に並んだ中へ入れて貰ひガーゼで目隱してお友達に手を引かれて行く、頭の上から日光が輝りつけて、ジットリと汗になる。野路へ出る小川は細い音を立て、雲雀は高調子にないて居る、お社の方からドン〱と頭痛がする様な太鼓が聞える、あゝ蓮華か菫がとお友達が仰る、そつと目を開く、黄金のむしろの様な菜の花、青々した麥、蓮華草などに日が射して、まぶしくて、五色の吹ぬきのなびく彼方のお宮は見渡す事が出來ぬ、こんな思ひしても學校から行き度かつた。

其夜から兩眼とも腫れふさがり一寸先も見えぬ様になり直く入院する、にわか盲目の事とて、母様にお飯を食べさして頂く、妹か側からくす〱笑ふから手探りで食べる、少しも味がない、まるで砂でも嚙んで居る様、お菜の小芋がお箸から何度も轉げる、仕舞には泣き出した、小さな妹が、まゝまゝ、と膝に溢れたお飯粒を私の口へ入れて呉れる、眼を開かうとしても痛くてあかれぬ、どちら向ひても眞くら、お人形を眼の側へ持つて來ても見えぬ。

母様丸髷にして緋の羽織召して奇麗な友禪縮緬を擴げて被布を縫ていらつしやる、藤色地に孔雀を染め出した模様があり〱と見える、お母様それ私の、と手に取らうとすると、黒い雲が降りて來て、お母様のお顔も友禪も見えぬ、あらお母様ー、と大聲出す、夢たよ〱と搖り起される、醒めても矢張り黒暗。

絕間なく痛んで、洗つたり藥をさして頂くのがつらく目からは湯の様なウミが出る、寢臺の上で聲を嗄らして跳ね廻る、一ケ月の後快癒の見込なしと院長に云ひ

渡されすぐ京都へ父上兄上に伴れ行かれる事になる、母樣は長女を生れるもつかぬ不具にしてとお泣きなさる、私は平氣床の上でお手玉をする、私の命をお絶ち下さつて娘の片目でも見えます樣に、と一心にお地藏樣を拜んでいらつしやる、雨の眼をほう帶してお正月に着る扇模樣の着物に、緋縮珍の帶を立矢にしてお祭禮へでも行く樣ニコ〳〵した私を母樣が抱いて、車の父上の膝へ乘せ乍ら、京都でも駄目でしたら大阪東京と少しでも見える樣になる所迄連れて行つて下さい、と涙聲で仰る、車の上で帶や長い袂を撫でまわして喜んで居た。

京都で病院へ行く道すから御苑内を通ると、コボ〳〵と蹄の音勇ましう騎兵が操練して居る、劍の音がガチ〳〵して面白さう、お父樣何にも見たい事無から兵隊さん丈見せて頂戴な、と云ふ、おう今ぢきに見せて遣るぞ、と鼻聲で仰る、博士の診察を受けたが、お小さいのにお氣の毒ですがとても、と仰る、相變らず目をいぢられると大聲で泣て大事のおべゝをハナだらけにする。

宿屋で快活な兄樣が元氣のない聲で、お母樣に今日の結果を知らせばどんなに落たんなさるか知れませんね、と仰る、明日は千本頭の眼科醫へ連れ行き駄目たつたら大阪へ行かうと沈たお聲、私はお菓子を食へ乍ら門通る樂隊に合せて、あな嬉し喜ばし、と足拍子にして歌ふ、翌日千本頭の病院でも余り泣くから魔醉藥をかけて診察して貰ふ、口の上から辛いとも苦いとも何とも云へぬ匂ひがしてくるしい、お父樣死ぬ、と云ふ、死なせんよ〳〵、となつかしい二聲をおぼろに、後は夢中。

ふと氣がつく、前の嫌な匂ひかして胸が惡くて空エヅキをする、耳元でおゝ氣がついたか今暫くすると兵隊さんも見える樣に院長樣かして下さるよ、と活々したお聲、暫くは自分の身體も人のものゝ樣覺えがない、片方丈見える樣になるとの事で入院する、翌日母樣妹を連れて來らる、汽車中で年子位の孃樣がお兩親に連れられて博覽會見物にいらつしやるのを見、鈴の樣な眼がお琴の師匠さんの樣になるかと思ふと悲しくて、とないて居られる、庭の若葉を吹いて心地よい風が軒の風鈴を搖つて居る、ポン〳〵と花火が上る、妹が椽へ出、あゝ奇麗靑い火赤い火、と騷ぐ、さう奇麗どこに〳〵と這ひ出る、ちつとも美しい事ないよ綾子此方へ來て姉樣とお遊び、と鼻聲で妹をお叱りなさる、遠方から見に來る大博覽會も京都に居り乍ら母樣は一度も見物なさらぬ、野山は紅葉し稻穗は黃ばみ柿の實色つき栗のほろ〳〵と落ちる頃、再び此世の光に接した、黑暗から白い日の光、靑空、父母のお顏を見た時の嬉

しさは一生忘れぬ、生れ變つた樣である、馬や牛を見ると恐しい、遠方や小さいものは見えぬ、姉樣奇麗な鳥がと指さす彼方を皿の樣な眼しても見えぬ、見えないわ、と云ふ、そんな大きい眼して、見えないの、私こんな細目しても見えてよ。と糸の樣な眼する、私にもし慈愛深い父母かなかつたらば、永遠に此世の光りを知らずに終る所でした、東京名所、大連の風物に接する事は出來なかつたのであると思ふ度兄妹よりも一倍孝養せんと思ひます。

此れだけの事を書くには、實際眼めくらになつた人でなければ、分らないだらうと氣の毒におもひます、達意を主とした文章で、能くこれだけお書になつたと感服しました（評）

自ら願ふた踏切番

長門　さくら子

山陽道の鐵道線路が彼の靜かな海を東がわに、こんもりしげつた森かげをすぎて、兩方が田になつたその所に、踏切があつて、そのすぐそばに小さいわらやが一軒あります。このわらやが私の生れて十六年間生ひたつたなつかしい家でございます。私の家は踏切の番をするのでありますが、父樣と母樣は畑の御仕事がありますから、踏切を守るのは、私の役目であります。それで汽車の通る二三分前になると、讀みかけてゐた女子文壇を置いて、一寸髮をかきあげて棚にある白い旗をとつて出かけます。

そーして、ちやんと通行留の綱を張つて誰も通る事の出來ないよーにします、すると汽車が勇ましく黒烟をはいて通ります、この汽車が通る時窓にのぞいて居る人を見るのが何よりの樂しみであります、實は、のぞいて居る人が見たい爲に、父樣にお願ひしてわざ〳〵踏切の番をする位なのです、汽車が前を通るとどの客車にもどの客車にも目を注ぎますが、何分速力が早いので、しかとは、わかりません、海軍服をきた可愛い坊ちやんが、私が立つて、白い旗をもつてゐるのを見て、手を高くさしあげて萬歲を、云はれました時には、大そーうれしうございました。

いつでありましたか、美しくきかざつた生徒さんが、どこか、旅行にいらつしやるのでせう二三十人ばかり、私のみすぼらしい姿を、じつと見られた時には、恥しく、又うらやましく思つて其日一日、うきたちませんでした。

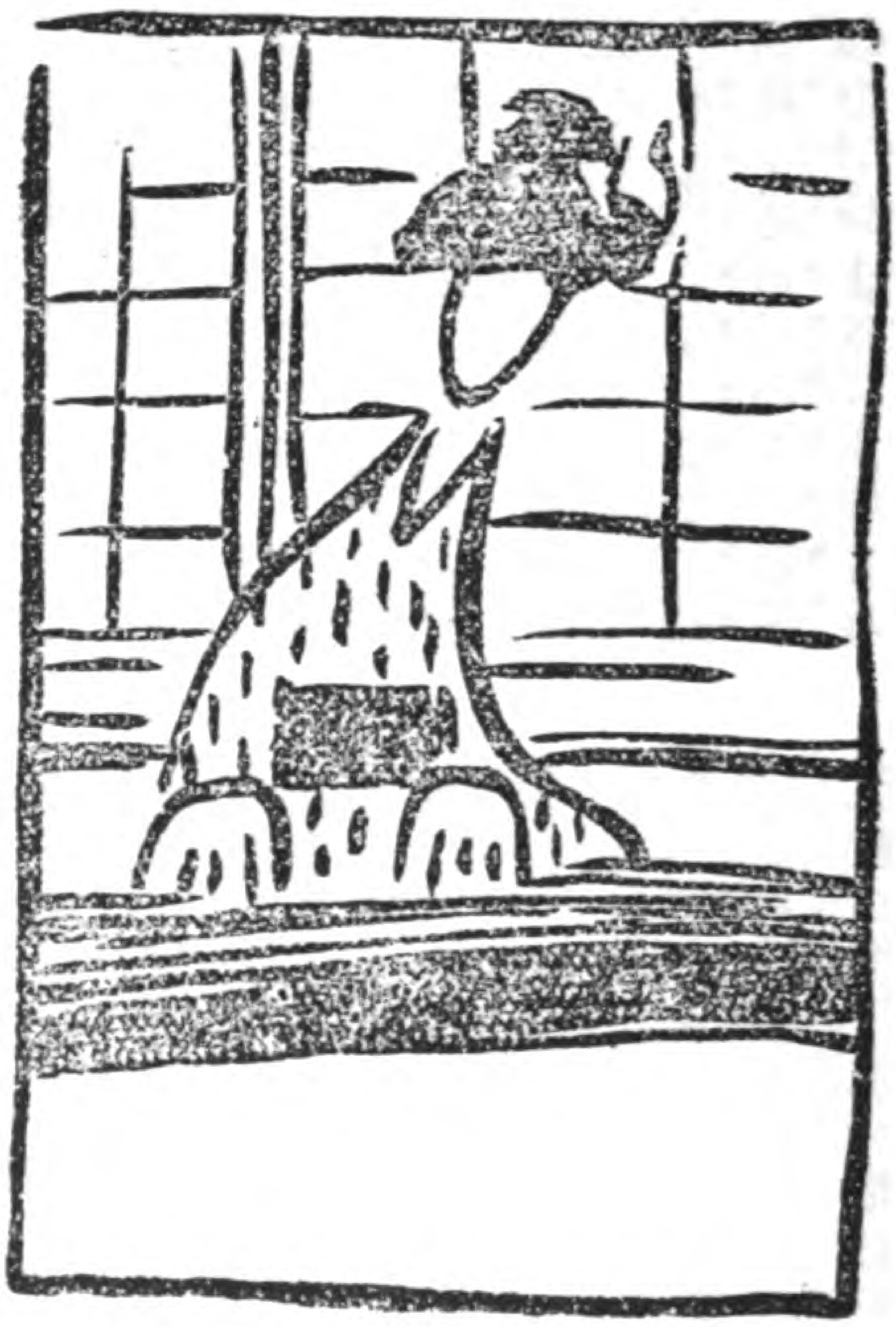
けれ共、私の大好きなのは、此の踏切を番をすることであります。私は一生老いず今のまゝで、踏切番を業として暮しとうございます。

踏切番に讀者があつて、而かも文章まで書かれるとは珍しいことです（評）

病める姉と優しき弟

東京　赤崎あい子

門口がガラ〳〵と開くと弟の聲で「おッ母さん、空がスッカリ晴れたよ」。といふのが聞えた。「さうかい……」。と母は針の手を一寸休めて氣の無いやうに答へた。二分心のラムプの光がウッスラと漂ようて六疊の室はうす暗い。南の壁の方は尙更暗さが增して、その暗い、中におせいの白い顔がクッキリと浮んでゐる。おせいは眠つてゐた。弟がガタ〳〵と躁々しく唐紙を開けると、母が眉をひそめて「何んだねえ、靜かにおしなさいなねえ……今姉さんが寢てゐる所なんだから……」。弟はブッ〳〵言つて「だつて僕は知らないんだもの！」と不平顔。母は默つて又急はしなさうに針を運ぶ。弟も默つて今買つて來た少年世界をふところから出して、眼にズーッと近づけて讀み初める。此家の姉弟は二人とも生れながらにして眼が近い。おせいなどは美人だけれども瞳孔のダランと開いたのが少し缺點だといふ評判だ。母も若い時は近眼だつたさうだけれども、年を取つたら却つて普通の眼になつて了つたと言つてゐる。「外は寒いだらうね」。と暫くして母が言つた。聲が寒さうに慄えてゐる。「ウム」。と弟は申譯だけに返事をして、夢中になつて少年世界から眼を放さない。暗い中の白い顔が寢返りを打つと、途端に輕く唸つて續いて力の無い咳を三つばかり續ける。



おさらへ　青森　松尾千代子

「おせいどうしたい、苦しかないかい？」母は心配さうに立ちかけた。「いえ……………」とおせいの聲には力が無い。「今までよく寢てゐたのにね」。と母は搔捲の襟のあたりを輕くたゝきながら言ふ。おせいはパッチリ眼を開いて母の顔を見つめてゐたが「おつ母さん、妾夢みてよ」。と言つた。「さうかい、どんな夢を？」

「何んだか恁う怖しい者が後から追つかけて來るやうで、逃げても逃げてもどうしても敵はないの……足が丁度地面にひつ付いたやうでね、妾死ぬのかと思ふ程苦しかつたわ」。「さうかい。さういふ夢は誰でもよく見るよ。それよりかお前安心して寢た方がいゝよ」。と母は快活らしく言つたが、言ひ知れぬ淋しみが音に

含まれてゐた。「ゑヽ」。とおせいは素直に返事をして眼をつぶる。頬の骨が出つ張つて色が透き通るやうに青白い。母は靜かに立つて又元の所に歸つて針を使ふ。弟は矢張り本を見てゐた。「おつ母さん」、「何あに？」「眞ちやんは？」「眞ちやんは此所にゐますよ。眞ちやん！姉さんの傍に行つてお上げ！」。

弟は初めて本から眼を放して、姉の方へ向き直る。姉の顏のボーッと浮き出てるやうに白いのを見ながら「姉さん、何あに？」といふ。蒲團が薄ぺらなのと姉の枕元に藥瓶のキチンとしてゐるのが、何んとなく淋しい感じを弟の頭に起させる。それに熱つ臭いのと、油をつけない髮の汗臭いのとが、最も激しく鼻を衝いた。弟は淋しい暗い心になつた。すると不意にガラ〳〵と格子戶が開く。「誰だらう、今時分」。と母がふり向いた時に、唐紙の間から叔父の顏が顯はれた。母の兄で鼻の頭の赤い頭の深く禿げた、デップリ太つた人である。始終縞の密い衣服を着て、皮の角帶を締めてゐる。羽織の紐も赤つちやけた皮の細いので、おまけにふところをタップリと膨まして、書付とか、新聞の米の相場と言つた風なものを常に入れてゐる。弟が途中で會つた時など、何時でも日和下駄を穿いて、右の手に洋傘の色の變つたのと、左に小さな鞄のやうな物を持つてゐるが常だつた。弟は曾て母に向つて恁んな事を言つた。

「齋藤の叔父さんは餘つ程日和下駄の好きな人だね」。

「さうかい」。と母は笑つてゐた。

「おせい坊、どうだい氣分は？」と室に這入つて來るや否や伯父さんは言つた。おせいはやせた體を少し起し加減にして、「入らつしやいまし」。と細い聲で答へた。おせいは今年もう十七だといふのに伯父さんは未だ坊の字をつけてゐる。妾が肩揚げ下してお嫁に行つても、伯父さんは矢張りおせい坊つて言ふかと思つて彼女は一人で笑つた事があつた。母は押入から薄ぺらな座蒲團を出して長火鉢の向ふに敷く。伯父はその上にドッカと座る。火鉢には湯が沸つてゐた。「今日などは隨分好い方なんですが、何分熱が引きませんでね」。と母は又針を弄りながら言ふ。「それは困るね、おせい坊苦しかないかい？」「はい」。とおせいはつゝましやかに言つた。「伯父さん、外は寒かつたらう」。弟の調子は誰に對しても同じである。「あゝそれは寒かつたよ」。おせいは又眠つて了ふ。母は針を弄つて、伯父は煙管を出し始めた。「大變佳い衣服じやないか」。と伯父が母の手にしてゐる織物を見て言つた。「ゑゝ、だけれど人の物を縫うやうになつちやお了ひですよ」。と母は淋しく微笑んだ。弟は默つて自分とは沒交涉といふやうに天井を見つめてゐる。おせいの寢息が輕くスー〳〵と響く。

「眞ちやん、お前一寸れ使に行つて來てお呉れな。」と可也立つてから母が言つた。「何處?」と弟は頭をふくらす。「彼所のさ、角のそば屋まで!」そば屋と聞いて眞ちやんは急に元氣がつき出した。イソ〳〵として飛び出して行く。十二月末の夜は寒い、空は名殘なく晴れてるけれど西北の風は容赦もなく頰をかすめる。町は賑かだつた、福引きだの、賣出しだのと言つて騷きまはつゐた。

弟は羽織かぶつて馳け出した。風は矢張り寒い。弟の頭には姉の病氣の事も、母の老いた顏も、そして太つた伯父の來てゐる事も、その瞬間忘れられてゐた。唯風が染みた。

描寫が細いと言ふだけで意味が無い、小說なら小說の氣で讀んで見ますが、小說ともつかぬやうです、何れかと云へば小說に近い方です(評)

血の痕ある看護服

金澤　雪子

いく度か、洗ひそゝがれても、猶朧ろなる鮮血のあと、此服を着て、荒みたる冬の日に、苦しみのうめき聲、泣聲の間に居りますと、云ひ知らぬ淋しき、寧ろ恐ろしき感にうたれます。

あゝわたしは、何故悲しみの間に居らねばならんのでせう、泣く爲に生れて來たでせう、明るきを慕ふ靑春の血は、此悲哀の中は、かれて行んだと思ふと、厭で、どんなに、もがきましたか、あゝわたしは、終日笑聲に接する事か、出來ません、表を笑つて通る女學生などを、見ますと、まだうら若い此身、羨ましくつて〳〵なりませんでした、死……

……たえずわたしは、これを見もし、思もし、いつそ天國へと、思ふ事もありますけれど、老いたる母、幼き妹、これを考へ出して、安々と死の神に命をさゝげる事が出來ません。

あゝ父上さへいまさば、今頃は美しい花がわたしの胸に、咲いたであらふものを、

血のついた看護服を、すてゝ、うめき聲の中から、ほつと息をつきますと、いつも此土橋の上で、日がくれます、美しかつた夕ばえが、だん〳〵と暗黑に襲はれて來ます、土橋にうつつた細長きわたしの影も、うすれて來ます、あたりは急に、ほの暗くなりますと、またうめき聲が聞える樣で、なりません。

服の血の主……

いつでも、わたしはこゝで思ひ出します、永久に眠つた人を、忘れません、もゆる望を抱いて、男には稀な、淸い姿、却つて不幸になるの、もとでありました、多年の勉强は、遂に水の泡となつたのです、靑白き顏、肉落ちたるからだで、わたしの受持の室に入られました、あゝその當時わたしは、肺ちやあるま

いかと、若い胸にどんなに、烈しい鼓動を覺えましたか、
凄い程、靑くなつた顏、日に〳〵やつれて行くばかり、某の君も、それと覺られたのか、活氣のない目に、かすかな涙をうかべられて、
『もう駄目かなあ』
と血の氣のない唇から、もらされたその言、側に居たわたしまでも、どんなに失望しましたか、
『御親切な看護、死んでも忘れません』
とあの靑細き御手で、わたしの手を握られたその刹那…………。
ほどばしり出た鮮血、それがわたしの服に滿つたのです、
それからと云ふものは、室は一しほ悲しみの幕に、閉ざされました、谷間にむせぶ溪流の、それよりも弱きうめき聲、却てわたしは安からず思ひました、
『雪夫……雪夫しつかりおしよ』
母上が物苦はしく呼ばれても、答ふる聲もしませんでした、わたしは人事とも、思はれず泣きました、
あゝ短かい生涯、もし世にまことの不幸と云ふものがあるならば、もゆる望を抱いて眠つたこの君ほど、不幸な星の下に生れて來た人は、ないでせう、
あれもう……日はとつくに沈みました、美しい夕映なんかもう見えません、身を切る樣な寒い風、ヒユーと吹いて來て、わたしの鬢を強く弄びます、かすかに聞ゆる汽笛の音……勞れし工女等の嬉しき響か、わたしの唯一の慰籍なる唱歌を、聲低く歌ふて、ガタピシする戸を開けますと、おつかさんは、夕食の仕度最中、わたしの顏を見て、早や涙聲。
『おゝ寒かつたらふ、お前にばかり苦勞かけて……』
あゝまた泣かされる、笑つて下されあえゝに、あゝわたしは笑を好きです、笑つて下さい、何卒笑つて下さい、わたしは思ふ存分笑つて見たい、妹、小兒らしい可笑な事もせず、年にはませた涙つ兒だねえ、
可笑しき夢でも見て、樂しまうと床にはいつても、わたしの看護の下で、死なれた人々のまぎわの顏が、影燈籠の樣に現はれて、終には痛つとしがめた靑い顏、あゝ恐しやと目がさめます。
明くれば同じ病褥の側、うめき聲を耳にして。

看護婦の境遇を書いたもので、これほど痛切なものは今まで見受けませんでした、
實に然うでう、呻き聲、泣き聲、咳き聲の底に葬られてゐる身の、笑ひ聲が羨ましいと云ふのは至當だと思ひます（評）

第三者の見たる見合ひ

但馬　西垣ことゑ

丁度春の花は咲きはじめて、裏の櫻の木が賑はふ頃私は試驗休で郷里へ歸つてから四日目の事で有ました。不意に近所の人が『今嫁見らしい者が私に此家を問ひましたから、敎へるは敎へたもの丶、今直ぐ行かして

に用意がないだらうからと、モジ／＼して居ますと幸ひ茶屋は何處だと聞きましたから、わざと遠い平安亭を教へて置きました。で早やう御支度をなさい」と注意して呉れました。其の時折り惡しくお父樣が留守であつたものですから母樣も姉樣も大騒ぎ、『今日手紙が着いて明日來ろつもりだつたのだが』ともう周章てて臺所の方を片づけろやら、庭を掃くやら大變な事になりました。それから姉さんは一番のお方だから、早やうお髮を結ばなければならぬと云ふので、近所の髮結さんに走らせて、急いで鏡の前に座らせました。妾は見合ひつて何んな事をするのだらうと思ひながら獨り國爐裏の傍で編物をしつゝ店番をして居ますと、ものゝ三十分も經つた頃、重さうに入口の障子がゴロゴロと開きました。見ると先に入つた人は知りませんが後から入つた人は確かに姉さんのお婿さんにならうと云ふ人でムいました。と云ふものも私は先日寫眞を拜見したので知つたのです。私は此の二人を見ると、急に動氣が高くなつて參りました。そして鳥渡答禮をしたなりで直ぐ奥の間に馳け込んで行きますと、姉さんの支度はまだ半分しか出來て居ません。妾が『もう見えましたよ』と申し上げると、見るまに姉さんのお顔は赤くなりました。お母樣は『なに、まだ來る時分でないに、戯談お言ひぢやないよ』等とほんとうにせられません。妾が眞顔になつて『いえ確かにそうですわ、後から入つた人は此間の寫眞にそつくりですもの』と言ひますと、お母樣はさも困つたらしく、急いで着物を着換へて出なすつた樣な事でした。

實際其の人であつたのだから、お母樣も驚いたげに、其の邊の二枚折を少し後の方へ引き寄せて、挨拶をなさいました。

媒介人が、鳥渡でよいから會して呉れと頼むとお母樣は『あの只今丁度お髮を解いた處なので甚だすみませんが、巻き／＼になとして直ぐ御挨拶に出しますから、どうぞ今少時、』と言つてサッ／＼と奥へ入つて行きなさいました。殘つた妾はそつとお婿さんの顔を見ると、寫眞とは素顔の方が餘程よい樣に思ひました。二人共、奥から口まで、見まわして居なすつたが、私はどうぞアラを見付けられればよいかとそれ計り心配して編物の手も休み勝ちでした。

お母樣が歸つて來なさると、すぐ世間話が出ました。媒介人は先日お母樣が訪れなすつた事があるから、極心易すさうである。やゝあつて姉さんは、誠にあつさりした、服裝で、お髮は一寸と庇にふかして、白い大きなリボンを一つぎり掛けて、そろ／＼と出て來られました。

私は、あちらへ去こうかと思ふたが、ものづきに、見度くつて堪りませんから、國爐裏の隅の方に小さくなつて二人の方を見て居ますと、お婿さんは、わざと、顔をそむけて、見ない振りして居らつしやいましたが早く見たい／＼と言ふ樣な風が、ありありと顔に讀めました。

姉さんは何と被仰つたか知らぬが、それは／＼小さい聲で、媒介人に先に挨拶をしなすつた。其の間お婿さんは時々外目で、姉さん見ていらつしやつた樣でした。次に愈々姉さんとお婿さんとの挨拶であります。お婿さんは括潑に、少し頭を下げなすつた限り、姉さんは碌々頭もよう上げずに、また二度程お辭儀なしてそろ／＼と奥の間に入つて了ひなさいました。お母樣や姉樣のお胸の中はどんなでしたらう、妾までが、すむとほつとしました。

二人は、又夕方お父樣が御歸りになつてから來ると云つて歸りました。

妾はすぐ姉さんの處に行つて、樣子を聞くと、姉さんは如何にも困つたげに、

『文ちやん、妾困りましたよ、生れてから、こんな困つた事はまだ有りませんわ』

と冷汗をかいてゐらつしやる。『お婿さんの顔を御覽なすつたか』と聞くと『もう恥しうて少しも、よう見なかつたのよ』と御笑ひなさる。『お寫眞とは餘程好い樣でしたわ』と妾が云ふと、姉さんは何處なく、嬉しさうに『虚言ぢや無くつて』と妾の羽織の紐を見てゐらしやる。

妾だつたら、穴のあく程見るのだに』と言つて見ると『妾かつて、文さんの樣に學校に出て居る頃は、いつも然う思ふてたんだけれども、實際そんなものぢやないよ。あゝほんとに困つたわ』と今度は妾の持つて居た編みかけをお取りなすつた。

此んな事のあつたのも遂に此の間の樣にしか思はれませんが、此の姉さ

んは、昨日はじめて、あの時のお寫眞とそつくりの、可愛らしい、「睦ちやんを抱いて遊びに被來いました。

私の寫眞帖

東京　多　美　野

私の、寫眞帖を、あけますと、先、第一にあるのが、永尾磐子様。御年はお二十。月の様な、眉、美くしい、生際。様の御ぐしは、流行のマガレツト、御召は、恐地に、白で、松上の鶴が、裾から、腰まで、ぼかしに出て、下は、お白二枚、鶏の、亂咲き模様の、丸帯を立て矢の字に、恰好よく、御しめなさつて、椅子に、御かけ遊ばした、御姿、さすがは、大家の御令孃、どこか御品が、そなわツて、ゆつたりして、いらしやる。……とは、私はかりではない、家中の評判。

次が内野君江様、これは又、ずつと變つて、品のいゝ、御島田。空色――らしい――に、梅の枝を、江戸褄模様に、染め、出した、御裾を、お後に長く、引き、御手に、御扇子御持ちになつて、スツと、御立ち遊した、御姿は、どう見ても、花嫁様。海老茶の、御袴て、御通學の時とはまるで變つて、なほ〳〵、御うつくしい、未來は、法學士の御奥様だとか、云ふ御噂。

其の後のは、野邊横様。去年某女學校を、御卒業遊ばした方。御ぐしは、思ひ切ッて、廂を出した、そくはつに、幅の廣い、リボンも、似合はしく、糸織の、御召と、御羽織と、御つひの、群美な、かすり。寫眞の、御好も、すつとハイカラな、海岸のところ、少さな、岩に御腰を、掛けて、讃美歌の、御本を、見ていらつしやるところ、實に小説の、口絵にでも、ありそう。「これは、一寸涙子を、氣取つた、ところよ」とは此の寫眞にそへての御手紙……。

其次の、小さなのは、ホ、千代子様と私、いつか、二人で、旅行した時、取つたのです。千代子様はそくはつ、私は、日本髪、「千代子様は、よく取れなすつたけれど、私は、へんてすわ、田舎の寫眞屋は、だめれ」、と兄に、申ましたら、「すや〳〵寫眞屋も、やりきれない、髪だから髪に取れたのさ、贈路でも、つかッたら少しは、きゝめが、あつたかも知れないに」ツて仰ッしやるの、私は口惜しくつて、私そんなに髪がしらと、つく〴〵いやになつて、仕舞ました。

其次に、はさんてある七分身のは、今、女子大學の、寮舍に、寄宿してゐらつしやる、山本信子様、眉のキリツとした、口のしまつた、御美くしいと、云ふより、すごい、と云ふ方が、適當な位。御頭が、廂、御召は、紋羽二重、しこんの御袴を、少し、ひく目にはいていらつしやる、いかにも、御活潑。外交官の、令夫人が、御理想てゐらつしやるとか。……、

その次は、園田貞子様、私とは、幼さな時からの、御稽古友人。つや〳〵して、御ぐしを、意氣な、島田に、御上げなすつて、紹に、水仙の花の、御裾模様の御召物、御帯は、よくは、わからないけれど、大かた夏帯でしやう、それを、きちんと、丸くむすんで、片手に、御扇子持つて、御座敷に、立つていらつしやるところ、私などこんな、御つくりしたら、それこそ、妖怪見た様だが、貞子様は、御きりようも、よし、御様子も、いゝから、どう見ても、意氣で、御美くしい、今はもう、日本橋の、大きな商人の、御かみ様。

その次は、正ちやんの、寫眞。去年三ツの、御祝で取つたのを、姉様に、ねがつて、一枚戴いて來て、この中に、はさみましたの小供は無邪氣だからよくうつるとか、ほんとに可愛い見る度びに私はもうこんな可愛子の御叔母かと思ふとうれしくつてたまらない、

水兵服もよく似合つて玩具の軍艦を引つぱつてまるで戰爭からでも歸へツて來たやうに威張つて居る、そして一寸首をかしげて片ゑくぼよせてる所。何とも云へない程可愛い。何んだかこんな可愛子を持てる姉様がうらやましい様な氣がして。

次は、森山澄子様、朝夕一所に、學校に行つて、一ツ、クラスで學んだ時分とは、別人の様に、かはつて、氣のせいか、女髷として、細かな、かすりの、銘仙に、しこんの御袴、めして、御ぐしは、廂、ひさし。御うつくしい、御目には、ふちなしの、御目がれかけて……今に、私が

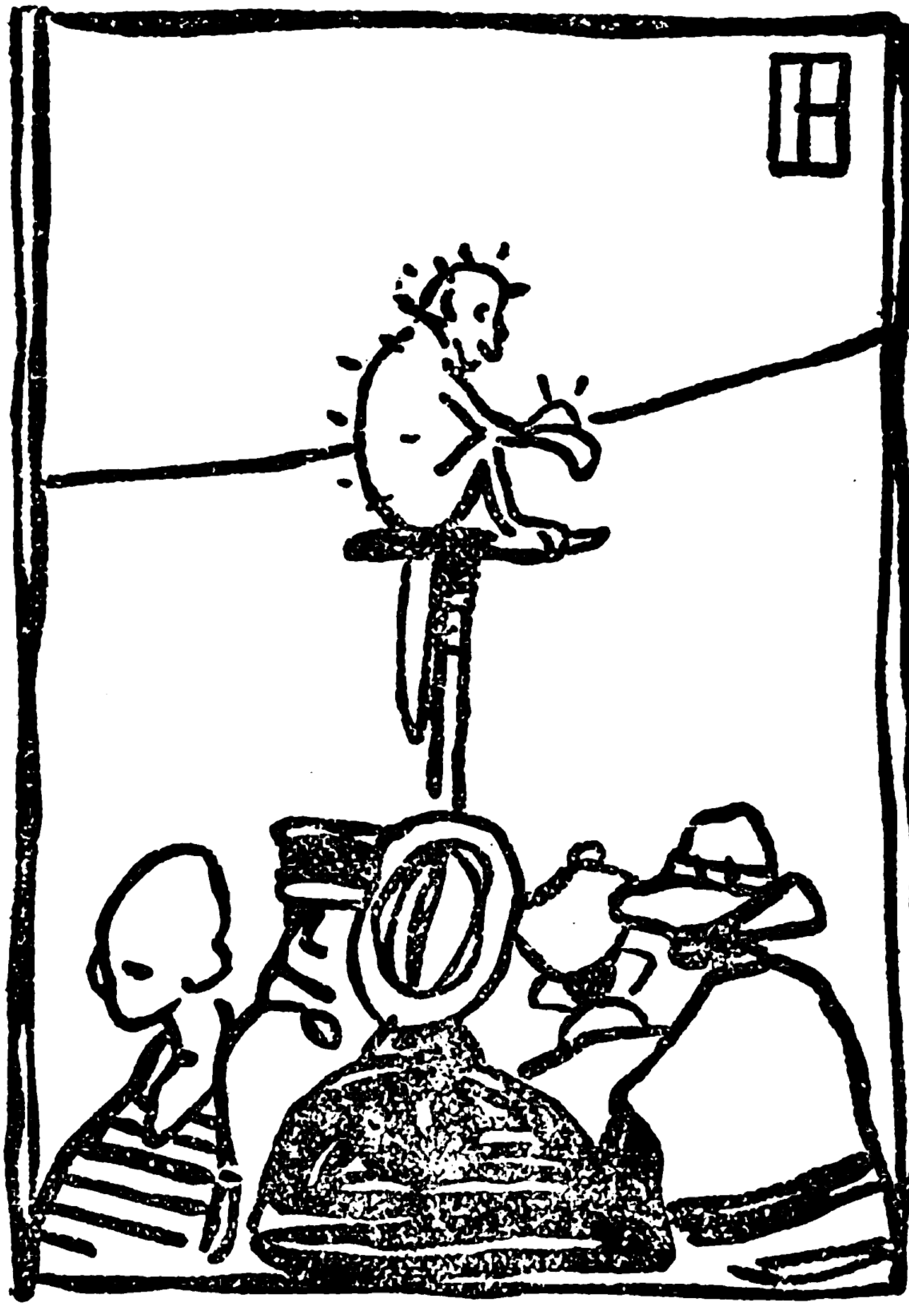
時々遊びに伺ふと、「貴女一寸御覽な」なんて御手を御出しなさるのよ。何だか御顔みて居ると、おかしくなる。

一番終りのは、ネヽヽ？今年の御正月母樣に無理にすゝめられて、初めて島田に、結つて取りましたの、相かはらず變な風もう／＼一生寫眞なんか取らない。

絶交

常陸　木村那賀子

同じお友達の、澄子樣と濃子樣が絶交なされたと云ふのを聞いて、私は少なからず驚いた、併し其原因を知つた時は一人苦笑せずには居られなかつた、此お兩人と私は小學時代から同じクラス、其上家は近所なので、春はお花見に夏は納涼に、何日も三人は、はなれた事はなかつた、其中で一番年上は私、澄子樣と濃子樣は同年なので、お兩人とも妙に私に義理立てする、澄子樣は稅務所長さんの一人娘と云ふ幸福な身の上、なか／＼虛榮心の強い方で、いつも居張つしやつて、能くお召物や髮飾り等のお話が好きで、間に私が小說の話等を初めると直ぐ「私外に用事が有りましたの、遲くなると大變だから又此次ゆつくり上りますよ」と仰言つて歸つてお了いなさる、其れから私が一寸した流行品等などに着て居ると、直ぐ見つけて「貴女これ何處でお買ひなすつたの」と訊くから何所其所と教へて上げると、其次參入る時は必と同じ樣なのを着けて來る、たまには面白半分に教へて上げない、時もあるけれども感心に能く探しては買つて來る何日か此麼な事があつた、恰ど初茸が盛りに出る頃なので、三人で友部まで汽車に乘つて茸狩りに行く事になつた、愈々行く朝になると澄子樣は籠がないと云ふ騷ぎ、平常から負け嫌ひな澄子樣お召物は自分が一番立派なので、大變滿足の樣子でしたが、私と濃子樣が藤で編むだ手籠を提げて居るので、私も那麼籠でなくつてはと仰言るので下女のお梅さんか、お隣りや近所の知邊へ借りに行つたけれど、生憎何處にも無い、澄子樣は何うしても私達の樣な籠でなくつてはいけない其れがなければ行かない等と云ひ出した、幵麼話麼して居る間に時間が過ぎて、豫定の汽車は出て了ふ、すると澄子樣のお母樣が「それではお氣の毒でも又此次にして頂きましょう」と仰言るので到頭、待ちにまつて居た茸狩りも中止され



見物　青森　立花とも子

て了つた、後で私と幾子樣と散々不服を云つたら、其れでも其時は、「彼の時は實際私が惡かつたのよ、免して頂戴な」と謝まつた、其後半年ばかりは何事もなく過ごして來た、所が此月初め大町へ用が有るので、爽巡りを行くと後から「道子さん」と云ふ聲に、振り返へつて見ると幾子樣だ「あらまあ幾子樣何ちらえ」「私一寸其所まで、ご一所に行きましよう」と二人連れ立ちて歩るきながら、幾子樣は其時私に此麼事を話した、「此頃澄子樣は貴女のお家へいらしつて」私は變な事を訊くと思つたけれど「久しく居らつしやらないわ」て云ふと「そうでしよう」と意味有り氣に仰言るので「何かお氣に懸けた事でも有つたのでしようか」て訊くと「いえ其麼事ぢやあないのよ、けれどね、先達て私の家え被入つた時此麼事仰言つたの、「道子さむは何日でも文學のお話ばかりして少つとも面白くないわ、ですから私此頃足が向かないのよ何んて仰言つて居たから」て云ふから「あゝ左樣ですか道理」と其時は氣にも留めず其まゝ別れて了まつた、其れから五六日過ぎて澄子樣が被入つたので、私は初めから終ひまでお召物は何が流行だとか髮飾りは、何香水は何がいゝなんて、其麼お話しばかりしてやつたら、例にない長居して二時間も遊んで居らつしやつた、そして歸る時「私今日程愉快に遊んだ事ないわ」て仰言るので、云ふまいと思つたけれど、例の好奇心がムラ〳〵と起つて、「つい」文學のお話しがないからでしよう、これからは決して小說のお話等しませむから、懲りずに居らしつて下さいな」て皮肉に云つたら、大層驚いた樣でしたが直ぐ悟つたと見えて顏を眞赤にして「あらつ其麼事何誰が仰言たの」て訊くから「何誰つて……仰言た方が仰言つたのでしよう」て云ふと「まあ非道い方いゝわ私……」と後は口の中で何かブツ〳〵仰言りながら、お歸りなすつて了まつた、其れから恰ど三日目今度は幾子樣が被入つて「貴女先達て私が云つた事澄子さんに仰言つたでしよう」て訊くから「あゝ云つて上げてよ」と平然として云つたら「あら貴女隨分だわ、云つて上げてよ、なんて澄まし込むで被入るの、私昨夜澄子さんに散々恨み云はれたり、おしやべりだの おべつか使ひだのと、惡く云はれた上に、絕交されて了まつたの、什麼に口惜しかつたか知れませんわ」て仰言るから「其れやあ貴女自業自得だから致方かありませんわ」と笑ひ〳〵云つたら「貴女にまでそう仰言られては私もお賴みする者ありませんから……致方がない絕交なら絕交でも……」と後は獨語の如に極眞面目で仰言つた、けれども私は決して其時絕交と云ふ事は信じなかつた、まさか是れ位ひの事で振り分け髮からの交りが絕たれやうとは夢にも疑ぐつた、其後他の友人から幾子樣と澄子樣が絕交したと聞いた時、「眞當でしようか」て云つたら、「貴女知らなかつたの」と仰言るから「幾子樣が其麼事仰言つたけれど私信じなかつたのよ」て云つたら「其れあ實際よ、澄子樣のお家ぢやあ大變よ家中して幾子樣を惡く云つて居被るの」と仰言るから「それぢあ澄子樣が無理よ」て云ふと「でも澄子樣の方では貴女に叱られるとか、恨むで居らつしやるだらう、等と大騷ぎして居るの」て云ふから「おほ……つまらない那麼事で」と其時は一笑に付して了まつたけれど、生れてから覺えぬ程の不快を感じた。

飢ゑたる人

松山 草村瑩子

遠く潮の鳴る音が聞える。

まもなく汽船が出ると云ふので、海岸通りの廣い道を急いでゆく。片側はそろつた石崖になつて下はすぐ海所々段が下りてゐる。片側は土藏造りの問屋と、奥の暗い宿屋と、大抵は菱形や丸の中に三や、山形に米など店の印を入れた白壁の倉庫とが立ち並んで、どの問屋も乾鮭、甘藷、蜜柑などが積んである。

二月初めの侘しい日、雲は鈍色に沈んで雪もよひ、午後もう二時過ぎ。埠頭を越して彼方、黑い海はところ〳〵白い浪がしらを立てゝまたごうと潮の響。

問屋の店はがや〳〵と騷がしい。船の積み上げる箱や叺や莚包やを、仲仕は急かしく町を横ぎつて倉庫へ運ぶ。

腥さい乾魚の匂がする。小供等が二三人、獨樂を回してゐるのが、はた／＼とかすかな砂埃をあげる。がらがらと空の荷車がゆく。門先で急がはしく荷造をしてゐる。藁の切れはしが埃と一緒にはげしくとぶ。ゆく人もかへる人も、みな急ぎ足に、暮師走近かい港の町の忙しさはひと通りではない。煙草の空箱を山の様に積んだ荷車が通りすぎると――

「掏摸だ、ちぼだ」

急にけたゝましい人聲が起ると共に、どや／＼と走りくる跫音、人はみな立ちどまつた。私も立つてふりかへつた。ともうやがて鰹問屋の前に人だかりが出來た。縞の厚衣をきた男や、帳をさげた仲仕や、箱をかついだ男や、歯をそめた女や、白粉をぬつた女や。私もいつか人渦の中にまきこまれた。と。

「畜生、知らないたア何だ」と、憎々しい濁み聲の罵り「図々しい奴だ、現に持つてゐながら」

人の頭の間からちらちらと色の蒼白い髪の長く額にかぶさつた、眼の鋭くきよろりとした男が、縞入らしい破れたのゝ上に破れた單衣を着て――その痩せた腕を捉へた、魚の脂と血に光る黒い絆天をきた若い男と――私は人だかりを離れた。

「なあに、辰己屋の乾魚をとつて逃げたんだつて」

「この間から町で見た奴」

男の眼はギロ／＼とみなを見て、ぜろ／＼と喉を鳴らすだらう。「どうしてやらうかなあ」

紛と腥さい匂――血や汗や脂や――男の人が私の肩につかまつて爪立する「巡査に渡すさアな」

鈍色の空はいよ／＼鉛のやうに重くたれて、弱い日光のむらさす暮の街。

どよめいた。波打つた。私もたぢ／＼とした。「逃げやうたつて駄目だッ、馬鹿ッ」

人々の憎しみは益々加はつた。男はもう最後の方法もなくなつて、只首を力なくたれたらう。私はたまらなくなつた。

「何か落ちたぜ、袂から」

「大根だ々々」

「盗つたるぜ」

「盗つたるつて」

私はたまらなくなつて、路傍の大根をとつて盗つた「饑餓」「自然の力」私は恐ろしくもなつた。ピーと高い氣笛がけたゝましく鳴るので。むならすも、また逃れるやうにあるき出した。遠く潮のひゞきも――。

暗い横町

群馬 森下花子

私は今しがたお使にいつた歸りに、ある暗い横町を通つて來た、そして横町の中程の、竹の家といふ瓦斯燈のついた家で、珍らしい女をちらり認めた、ほんの一と目みたばかりであるが、確かに彼女だと思つた、それとゝもに私の幼少のことが思ひ浮んだ。

私の父が地方の小學校教師をしてゐた頃のこと。

何がし町といふ田舍宿に、私が九ツの時から十二の年まで住んでゐた、その町に佐渡屋といふ家があつて、大きな古い構えだつたことや、家の後方に高い榎が聳つてゐたことを覺えてゐる。

此町は御維新前までは街道だつたので、家造りも大きく、昔はみんな旅法をした樣子がみえる、佐渡屋は旅籠屋だつたと聞いた、廣い廊下の蹠つてる多くの客間は、いつも戸が引いてあつて、どうかすると所々あけた雨戸の間から日が差込んで、縁付の疊のふけて白くなつたのが外からも見えた、佐渡屋の人々はいつも勝手の方に住んでゐた樣に思ふ。

佐渡屋に其頃私と同い年の娘があつた、お悠さんといふのだけれど、どうしてかおいさん／＼て皆が呼んでた、おいさんの上に兄が一人あつて、藤馬鹿といつても、佐渡屋のあぼ藤といつても誰も知つてた、兄妹でゐながら、おいさんは負けぬ氣の確り者で、少し眼が大きすぎたけれど顔立ちも可愛らしかつた、それで兄の仕事も皆みんな引受けてゐ

て、折々あぼ藤の爲に男とも女とも喧嘩した。そこへ相かはらずにこにこらであぼ藤が出て來ると、ヤーイあぼ藤の野呂間ヤーイと相手が手を拍て笑ふ、こんな時においさんは兄にむしやぶりついて泣き〳〵した、妹か泣くとあぼ藤も悲しくなるのかいつも後から泣き出す。時にはあぼ藤の泣聲を聞いて、女親が驅けて來た、そうすると町の子はみんな逃げるのが例になつてゐた。

女親にでも捕へられやうものなら、それこそ大變だつた、大きなあぼ藤を其子供の家へ引摺つていつて、其家人のみゐ前で散々に打ち毆いたりした、女親は狂人みたいな人だつたが、あぼ藤なぼ別けて可愛がつてたあぼ藤のことに就ては誰でも相手に罵り喚いて、父親に『まあえゝやさ〳〵』の十度もいはれない内は一人でもわん〳〵いふてゐた。

佐渡屋では主人が一番いゝ人だつた、お神さんが何たいつても、あぼ藤が何をしても、必ず『まあえゝやさ〳〵』といつてゐた。あの人は嫌らめのいゝ人だ、と其頃みんなが噂するものだから、私もそう思つてゐた。

此外に盲目の婆ざんが一人居た。

婆さんはくちや〳〵した顔をして、いつもうん〳〵唸つてゐたから私はてんから忌だつた、それでもお神さんに叱られて潰れた眼をしよぼ〳〵させる時には可愛相にまあと思ひ〳〵した。

かういふ五人が佐渡屋の家に、毎日張合のない様な日を送つてゐた、婆さんが唸る、お神さんが喚めく、あぼ藤がにや〳〵笑てゐる、主人が傍で埃だらけになつて腕を組んでゐる、古い家がなほ寂然として見えた、佐渡屋にはお怪けが出る、といつとなく近所で噂さがたつた、おいさんは多く家にゐなかつた。

そんな話をきいてたので、その當座夕方なんか佐渡屋の前が通れなかつた、私でも背戸の榎がたゝろんぢやないかと考へてゐた。

もうその時分からおいさんは遊び癖がつひてた、學校は高等一年までしか上らなかつたと思ふ、初めは大相仲がよかつたけれど、だん〳〵おいさんの方で私と遊ばなくなつた、何だかいやらしいことを平氣で話してゐた、佐渡屋の娘はませてゐるといふのを幾度も聞いたことがある。

丁度その頃、千金丹の流行初めで、町にも若い賣子が一夏宿つてゐた、何でも秋の末に千金丹が國へ歸ると同時に、佐渡屋の娘もゐなくなつたと、後で大家の小母さんから手紙が來た、私共一家はもう其町には居なかつたので。

その話を母さまにしたら、『いくら早生れだつて、お前と同い年ぢやないかね』。と呆れたお顔付きでいつまでも私をみてゐらッしやる、私は何だか恥かしくなつちやつたッけ。もう五年あまりにもなる。

どうしてあんな家にゐるのだらう、何だかよほど可笑しい、けれどもたしかにおいさんだ、あの强つ相な大きい眼がどうしてもあの人だつた。よく分らないが大相めかしてゐた、三四人の中で一ばん綺麗だつた、併し妙に淋し相にみえた。

全躰あの暗い横町は何だらうか、解らない。

火ともし頃の湯屋

東京　小　草

起きるとすぐから寒い〳〵の云ひつゞけ、家内中皆寒いと云ふ事について研究でもして居るかの樣、寒い〳〵とつぶやいては考へて居る、針仕事など出してもなかなかざりで一針も運ばない、今日は風のないしつとりとした雨だ、時々あられでも交るのかさら〳〵と音がするばかり……今日の樣な日はお湯にはいると又一種別な感じがする。でいやだと云ふ姉を無理にひつぱつて出かけた、半ばひろげた紺の蛇の目に欅の葉がばら〳〵と散つて自分の下駄の音がいやにひゞく、でも町中へ出るとさすがに人通りは多い、入口からそつとのぞいて見るとがや〳〵と大分こんでいるらしい、まあ……此の降りにこんなに……皆んなもやつぱり自分と同じかんがへか知らんと思ふ。格子をあけるとゝ衣物を着る人ぬぐ人寒いのでなか〳〵手ばしこい、自分も、そいでぬいてガラス戸をあけると湯氣がむつとはなをうつてシャボンの匂ひだの白粉の香が鼻をかす

つてゆく、これでも人並に濁氣で曇つた眼に向つて一生懸命にみがきはじめる、と「私しやねきゝわけがいゝのがなほ更ふびんでねー」つて云ふのが聞えるので、ふりかへると六十位の婆さんが、湯槽に五ッ位の女の子を入れながら、こう云つて、居る自分もなにがなしに聞きたいのでいそいではいつた、話の相手は三十位のお内儀さんだ、

「何しろ此の子がお腹の中に居るうち死んだのですからねー」「へーいつの戰ひでござんした」「何んと云ふ所でしたか私しやぢきに忘れますがね、何しろいちばん終りの時でしたよ……それまでかすり傷一つなくていましたからもう大丈夫と安心していましたらとう〳〵やられてしまひました」といつて婆さんは子供の頭をひとなでした。「まあ……お氣の毒樣でしたねー、私共なんかじやねえもう死んだと思つて葬式まですましたんですよ、すると一月ばかりたつてロシヤの本國から便りがありましたんですよ」「へー運のいゝお方は擒になつても生きてお歸へなさるからねー、うちの倅なんか全く運がなかつたんでございますあーね」あゝ運命……運命と、……あつてもないと同じ樣な親をもつてそしていやな〳〵病氣にまでかゝつて、さつき姉が水がたまりそーだねーと肩のくぼみを見て、……こんなにやせた私の運命……私しばかりじやないけれ共……どほなるのだろー、たゞ運命と云ふ事にのみ私の頭は走せて居た、急に熱いのが背中をついたのでびつくりするともう電燈は今白粉をつけている丸まげ美人の襟り元にかゞやいていた

いつまで獨身で居るのぞせう

大阪　鈴木ふさ子

空のたえまに星は見え乍ら、はら〳〵と小雨のかゝる宵、親しい美代さんを訪れた。お内は小間物屋で、丁度美代さんは店番のかたはら何か縫つて居有した。

「御精が出ますのね。」と這入ると、生際の美しい白い額を上げて「おやしばらくさあ此方へ」。と座蒲團をなほして下さる、「いゝ柄、このお羽織貴女の。」尋ねると、「さうだといゝけれど、他家のお仕事よ。」と一寸首をかしげてつまらなさそう、「この衣は貴女の春着でせう。」「それは京さんの事だわ、妾なんかつまらない……。」「なぜ。」と笑ひ乍ら問ひ返すと、何時にないいら〳〵したやうに、「もう來年は三ぢやありませんかつてお仕事をやけに横へやつたまゝ。

妾は默いた、美代さんは苦勞を知らないやうなあつさりした氣性が何より好きで、……話でもすると、髮を洗つた後のやうに快い、煩悶をふりまわしなどは少しもしないのだから。

「美代さん、……何も隠さずと云つて頂戴ね……。」「え妾もう……。」と涙聲になつて、何時まで此つらい内に獨身で居るのでせう、此頃はすまないけれど、御兩親だつて恨めしいよ、内は一切義兄さんがやつてるのですもの、それは氣苦勞で居られやしないの。」「さう。」と妾もつりこまれる、「御存じの通りの義兄ですから、誰が何とかつては、すぐ實家へ歸つて了ふのですもの、ごた〳〵の絶間なし、……新道の小間物屋中ぢや、内の店が一番淋しいのよ、一つ年をとると、身の定りも遠くなるやうな氣がして、たよりなくつてねえ。……」と泌々仰有るので、今更のやうに戸棚の流行おくれのかんざし等が目について、店先のリボンあれも春だつたなら色も褪せかけて居るだらう。と思ふと美代さんのお言葉や、おばさんが早く小さい家へ行かなくちや、と仰有るのも無理はない。慰める言葉もなくて「でも貴女は、人一ばい若く見える方だから……」「さうでせうか、けれど昨日、……」と口惜さうに下唇をかんで、「貴女如何して。」「え、妾皆云つて了ひますから、……裏へ出ると「淺野樣のは二十過ぎてませう。」「さうですとも、先好みでせうよ。」なんか妾の許をいろいろとね、それだけなら忍びますけれども、「もうきづもので、貰手が無いのかも知れませんよ、つてまあ、……妾また、……」と思ひの込み上げたのでせう、小さい聲さへ立てゝ。と、又氣を變へてか、縫ひさしの羽織を手に取つて、「京さん、貴女たつてもうすぐお嫁入ね。」「まあ、もうその時は貴方いゝ奥樣よ。」「さうだといゝけれど、もしか、〳〵獨り殘つたら、淋しいのね……。」と横を向いて、ガスの光を半面に受けて、片頬は暗い冷たい影になつて居る。

美代さんはやはりだまつて、針を運ばして居有した。

四人姉に立つ心の苦しさ

稲島　野の花

あゝ私はどうしたらよいのだらう！雜誌を見れば、結婚の婦人の天職の等といふことばかりかいてある、けれど私は自分の境遇を考へると、果して婦人の天職を全ふすることが、できるかどうだかわからない、否或は一生をオールドミスですごさればならないかもしれない。私の下には弟妹四人ある、この四人の弟妹が皆人並に教育をうけることができるだらうかと、いふことはうたがはしいのです、私は兎に角高等教育まで受けたが父が或事業に失敗した爲、今は破産の身の上、生活にこそ困らないが、とても四人を教育することはむづかしい、それを自分丈は高等教育もうけたのだからとて知らぬ顔して濟して居られやうか……私はそれを見て居ることはできない、忍びないから身を犠牲にして、四人を教育しやうと思つてる。

それに折あしくも、今結婚問題が起つて、先は何もかも一通りそろつてるので、兩親は行けつて仰有る親類中でも行つたらよからうとすゝめてくれた、しかししがしどうしてゆかれやうあの四人の弟妹をおいて……そのことを話して斷らうとしたら兩親はあとはどうなりとしても決して人に後指さゝれるやうなことはしないから行けと仰有るし、又親戚でも決して心配することはない、信一のことは高等の教育をさせて、立派に家名を立てさせてやるから、美しい花の時代をむざ〱其まゝにすごすのは惜しいことだからきめたがよからうと、しきりにすゝめる。けれども、このごろめつきりやせたあの兩親に、四人を託してゆかれやうか……又いくら親戚の者があのやうに云ふて口の通りにしてくれても、いざ立派な其の時になつて考へたら、弟は如何にかたみかせまく思ふだらう！　折角家名を立てたとてちつとも頭が上がらないじやどんなにつまらなからう！私とてもやはり同じだもの、あゝ嫁だいつそきつぱり斷つてしまはふかしら、そうすると折角兩親が私を少しでも幸福にさせやうと、思つて下さる御心にそむかればならない、元まで何一つ御心にそむいたことがないのに、今度ばかりはと思ふと一層くるしい……又婦人の天職も果すことができない、今までは正行の母ワシントンの母一豐の妻などいふ人の話をきいて、やがて　自分もと心ひそかに期して居たのが空想となり、心がひれくれて嫌なものといつてた所謂老嬢となつて、社會の罵詈の表面にたゝればならないのかと思ふと、弱い女心にどうして悲しいと思はずに居られやうか、どうしてなかずに居られやうか！人と生れて其天職を全ふすることができない程、あはれになさけないものはないだらうと思ふ。

だから考へるとどうしたらよいかわからなくなつてしまふ、兩親からは返事を催促される、自分の心の中では何れとも判斷がしかれる、月日は用捨なくすぎてしまふ。あゝどうしたらよいのだらう、こうゆふのを煩悶といふのだらうか？君さんも煩悶があるといふ、しかし同じ學の煩悶でも事實はまるでちがつてると思ふ、あゝ私は！どうすればよいだらう――

變化の無い生活

備後　すみ江

私は又椽に出て白い雪を眺めました、もう一尺以上積ッて居ます、今日は何日かしらお正月はもう直きだそうなが、では私の十六と呼ぶ年もあと二三日で行くか、私は何となく殘り惜しい、只分けもなう殘り多い、私は年をとればとる程苦痛を増すように思はれるから年はとりたくない、だけど仕方がない光陰は矢の如しで一年や半年は夢の間です、以前はこれではなかッたのに何故此頃はこう早く日が立つのでせう。
毎日々々一人で淋しく暮して居るからだらふか。

毎日々々寢ても醒めても、同じ山に同じ家同じ人を友として無趣味な仕事をくりかへす、面白い事もなけりやあ、なんとも無い、退屈になればこうして椽に出て雪を眺める、そして夕方になればあゝ今日もくれたかと嘆息するのです、こうして同じ事を繰りかへし繰り返して行ッたとて

先には何がありませぬか？何もありません、霧の中を歩いて行くようなものです、私はもう倦いで終ひました、此れが三年も五年も續いたなら其れこそ、私は、私の魂は死むで終ひます、時には自分ながら、あゝつまらないどうかしてこゝをぬけ出して見たい、新らしい空氣が吸ふて見たひと思ふ事も度々ありますけれど、か弱い女の身、殊に病身の私、何とも致し方はありませぬ。人と云ふ者は少しは變化がなくちやあ駄目です、人は變化によつて生て居ると云ても過分はありますまい、變化のないものは床の下に生へた草の芽同樣です、ひどい嵐にあてちれる心配の無いかはり、あたゝかな日の光に浴する事も出きれば、情ある露の惠みに生ひ立つ事も出きません、なんと情ないじやありませんか。あゝ私は其の床の下に生へた草の芽である、と深い／＼溜息をついた時熱い涙は頬に傳はりました。

冷い風が雪の上を渡つて來て頬の涙を乾しました、けど矢張後から後からぬれ行きます。日は全く沈むだらしい、あたりが薄暗くなりました、今日もとう／＼暮れて終た、こうして一日一日と暮れて行くのが、何かに近寄て行くのだつたら其れは嬉れしいでせうに、私のは其れ丈け樂しい時代から遠ざかつて行くのです。嗚呼



子守　　近江　竹村光枝

草取と硝子拭き

仙臺　松音子

『一時頃から草取と窓の硝子ふきを致しますから早く着物を着更へてゐて下さい』此う云ひながら日當に當つてる阿部さんは室々をまはつて來られた、今日は土曜日で午前の授業も終へ、今し方晝御飯がすんだばかりです、『まあ阿部さん草取と硝子ふきですつて、私し雜記ものが澤

山つて、忙しいのに、困つて了ふわ、又六時頃までかゝるんでせう、」と大谷さんはプツ〳〵云つてゐる。「アラ私しどうしませう、この綿入を今日の内に先生にお目にかけなけりやならないですが」と裁縫してゐた一年の但木さんは當惑顏に同じ組の入木さんに小聲でいふ。「少し位後れたつてい々でせう」、と私が口をはさむと「アノ一體今週の中になるべく早く仕上るやうに申されたのですけど、大層後れて了つて……」「さう、でも最早や縫ひ終るでせう、衿ぐげと袖口が殘つてるの、ぢや明日になさいナ一日位後れたつて叱られないでせう、」「それでは、」と裁縫を片づける。

「須永さんのお顏色の惡い事ね、御加減がわるいでせう、お掃除に出なくつてよござんすよ、靜かに休んでいらつしやいな」と部長の三年の小木さん。須永さんはいつもの蒼い顏をなほ蒼くしてゐられる、「ほんとに須永さんお休みなすつたら」と私も云ふと「ちつとも、どうでもありませんの、そんなに顏色がわるいでせうか」と全く自分にわからない樣子。

「御免、アノ室の人數を二つにわけて草取と硝子ふきに出て下さい、草取庖丁は玄關におきますから自分のとつたのはなくさないやうにして下さい、鈴がなつたら直ちにはじまるやうに」と阿部さんは忙しさうにいふて行く、間もなくカラン〳〵〳〵〳〵と勢強く鈴の音、廊下は急にバタ〳〵忙しい足音、隣室の橋本さん「一寸深澤さん貴女も草取か?ぢや一所にね」。草取の連中は玄關さしておしよせ、庖丁手にして庭にゾロ〳〵「岡崎さん、一所にあつちの花壇のをとりませう、八木さん、高野さんこつちへいらつしやい、お話ししながら取るから」。「大内さんこゝへいらつしやいよ」。「大沼さん」。草取りするのに仲のいゝお友達を呼んでゐる。こつちに三人、そつちの方に四人づゝかたまつてペチャ〳〵何かしやべりながらやつてゐる。「オヤ須永さん、出なすつたのね、お加減はもーお好いの?遠慮なく休んでいらつしやればいゝのに」「いいえちつとも、アノ一寸ばかりなんでしたけれども、どうでもございませんの」「矢張どこかおわるかつたんでせう、無理をしてわるくなると大變ですよ、ほんとうに」「有り難う」、と蒼い顏をニツコリした、ほんに此方は無口な方、痛いとも痒いとも仰らずにいつも默つてばかりゐなさる。一年でも上級となつてるのだから、いくらか遠慮なさるのかも知れないけど、私共にそんな遠慮はほんにいらないのに。一體どうしたのだらう、わるい病氣がついた事でないかしら……と草取りながら考へた。「花壇の草とつてゐらした方は菊に注意してこわさないやうにして下さい」と阿部さんは大聲でいふてゐる、今は菊は眞盛りである。舍監の先生も出なすつた、ペチャ〳〵しやべるのがやまぬ、「お話しばかりしてゐずに、さつさとおやりなさいよ」此の一聲にそこらにゐた人はびつくり、話しは止むで一生懸命とつたが先生があちらに往かれると又ペチャ〳〵「菊池さん明日は外出なさるの」「え、叔母の家へいつて遊んで來ますわ、貴女は?」「私しどうしやうかと思つてますの買物があるんですけど、貴女失禮ですが買つてきて下さらなくつて?」「ハア何んですか私しでも出來る買物なら買つて來て上げますけど、貴女明日外出されない用事でもあつて?」「用事つて別にありませんの、でも保證人の家へも行きたくないしね」「あなた叔母の家へいらつしやいませんか、ちつとも遠慮がいらないのよ、私し家のやうにしてるんですから、ヴアイオリンでも持つて一日遊びにきませんか、ねいゝでせう」「でも御迷惑でなくつて」「アラ迷惑だなんていやですよ……」「一寸たつて下さいナ掃きますから、と後の方からはきたてる、こつちの方では勉强家が二人、しきりに地理の問答をしてる、そんならね、スカンヂナビヤの地勢をいうて御覽」「スカンヂナビヤ?アラ私地勢なんてよくおぼえてゐませんの、知つてた丈いふてみますよ西の方は……」「塵取を持つてきて草をはこんで下さい」。といふ阿部さんの聲がするので「ぢや問答はよして草のはこび方しませうね」と連だつて彼方に行く。硝子ふきは今し廊下の回轉窓にかゝつてる。「深澤さん〳〵」と呼ぶ大谷さんの聲に窓の下まで行くと「硝子を御覽下さいナ、綺麗になつたでせう、アルコールつけてふきましたの」と得意顏「奇麗になつたやうですね、こちらからよくみえませんの」かくしてる内に草取はよしてはき集め方にはこび方、しばらくして遂に終つて了つた、硝子ふきも終つた樣子。

「大分奇麗に出來ましたね」、花壇や何かを御覽なすつて先生は阿部さ

んにいはれる。

「風呂がもうわきましたよ、大内さん直ぐ入りませんか」「入りませう」「御飯は未でせうか」「最早や直きでせう御馳走が澤山あるさうですね」。カラン〳〵〳〵〳〵「オー御飯です」と食堂にいそぐ。

夜はお掃除の慰勞として私の好きな開化庵の最中十個づゝの御馳走。

ピアノの主

下谷 細谷鏡子

何時ものばら色のお顔を殊更赤く染めて、長いまつ毛に涙をためて居らつしる、三浦様を見ると、妾はもう〳〵お氣の毒で堪りません、なぜ皆様は此おとなしい邪のない方を寄つて、たかつて、おいぢめなさるのでしよう、放課時間にストーブをかこむと何かの話の末には、きつと三浦様のことがでるのです、そしてしまいにはお可哀想に恥をおかゝせするのです……もの、

「森田さん、貴女士族ネ、それから野田さんは華族てしよう、」と意地悪の川口様が被仰る、「私の家え、子爵よ、」と、野田様は得意然となさる、「佐々木さんは」と誰かゞ云と、「私平民よ、だけど元は士族だつたの」と隣りの人のすボンの曲つたのを直して上げながらお答になる、川口様は一寸衿を直しながらあら、「貴女平民なら結構だわ、其上に新のつく人さへあるのです者」と三浦様のお顔をヂロとごらんなさる、

あゝもうそろ〳〵始まつたと思ましたから、私は三浦様のお手を取つてあちらに行きませうと、立ち上ると、「まあゆつくりした事」と云なすッで私等の居た場所をふさげながら、「私何が嫌らいつて新平民位いやな物はないわ」と誰かのお言葉につれて、私もよ〳〵、と口々に被仰る。

「ホヽ——でもそれが立くつて始終一所に居らつしやる方か有るのです物、殊によると彼の方も新かもしれないわ」なんて聞こえよがしに誰かゞ被仰る、此時ばかりは私、思わず下くちびるをかみました、

ストーブの温みも此所までは通はない、音樂室の前まで來て、「三浦さん貴女決して、お氣に掛けない樣になさいネ」と申上ると、「濟ないわネ……私はほんとに皆様のお被仰る通りだから何ですけれど私をかばつて下さるばかりに貴女迄が」と、聞き取れぬ程の小聲で被仰りながら、ホツとかすかな吐息をおもらしになつて、いつの間にか時色のハンカチを、顔にあてゝいらつしやる、私は無言のまゝ其のいたわしいお姿をぢつと見つめて居ますと、けたゝましく鈴がなりましたので、しかたなしに又元の教室にもどり、三浦様と手を引合つたなり窓ぎわの、いつもの席につきました、皆様はさぞ又何とかお思召して、ひそかにお積なお引合なすつたで御座いませう、けれども、私は少しも恐れませんの、此う申上げては失禮ですけれど、人義も道德も御存じない樣な方々に、どんなに輕視されましても、邪のないお氣の毒な方に同情した方が、どれだけ人の道かしれないと思ましたから、皆様が三浦様を排斥なさればなさる程、なほ〳〵親しくして慰さめて居ります、ですから三浦様も私を無二の親友として色々の事を御相談下さるのです、

ある土曜でした今迄ついぞ欠席なすつた事のない、三浦様のお姿が見ないので、さすがの皆様も何となく物たりなさそうな御様子でした、彼の方の御欠席なさつた事情を存じて居るのは私だけで御座いませう、丁度此日無據ない買物が御座いまして、四五人の方と麹町へ廻つたのです、其中には申までもなく川口様もゐらつしやいました、番町を通りますと、ある立派な洋館のお邸から妙なピアノの音がもれて居りましたので、眞先に足を止めたのは川口様で御座います、「まあいゝ音ネあんないゝ音聞くと私何だかひいてる方が忍ばれてよ、」と何氣なく被仰る、「ホヽヽ貴女のあふせの通りあれをひいてらつしやる方は美しい女神の樣な方ですわ」と思わず私は心にもない此樣な皮肉を申ました、

「では貴女御存じ」と横合から杉山様が顔をお出しになる、えゝ存じてますわ三浦様のお宅です物」と私は得意然と申しましたの、「まあ、」と皆様は一度に互のお顔を御らんなさる、此時私は云ふに云はれない程心持が宜うございました、たゞ何とはなしに三浦様の平常のお恥をそゝいだ様な氣が致しまして………?

ですが此ほこりはほんのわずかの間でした、川口様がさげすみの目を向ながら、「まあ新平民のくせにピアノなんか生意氣だわ」と被仰つた此

お言葉を聞いた時は、餘りの失禮さにあきれて人様の事とは存じながら口惜しくてなりませんでした。

あゝ新平民はなぜ此様に卑下されるのでしやう……ア、それは昔は賤しいとして有つたかも知れません、けれど、今となつては何のそんな事がございませう。

それなぢきに御身分の事を云だしては三浦様を困らして居らつしやる、川口様なんか御身分どんなか存ませんが、日頃から三浦様と首席あらそいをなさるのですけれど何時だつておまけになるので御座います、三浦様はクラス中で一番宜くお出來なさる、そうして美人でおとなしくて申し分のない方ですのにほんとにお氣の毒な、御自分でもどんなにおつらいか知れないと思ながら、見返り見返り、廣いお邸の前を通り過ぎました、ピアノの音はまだかすかに耳にひゞいて居ります

答へぬものとは知りながら

大阪　はるえ女

とうすれば、忘れられやう、こんなに思ふた當時でした寫眞をしまつたのは。

ちやるめらの笛、きびたんごの音嘗我家の前に止まつて（軒深き故か）縁（つど）ひくろ子らは、ばんく〳〵の家!!とかたみにのぞくのですもの、どうして、思ひ出さずに、居られませう、淋しいはては、すこやかなよその子供が憎らしいくらいあさましい心もつい出て……　とても忘られぬものならば、心の儘に思ひ出て、心の儘に泣いても見やう、一年の短い間今にして見ればはかない當時を紙上に樂しんだ、形見はこればかりと再び床に寫眞もかけました。

見るに堪へぬといふ人は見れば、忘れて居るからでせうどうしても忘れられない私しは、見る方が樂なので……お池の鯎（うに）のつりあみで、遊ばせた時の事も、淡雪の美しい、初春に、おんぶして守うたのかはりに、唱歌を唱ふた時の事もあり〳〵と浮びます。

さりともなき病の改まりて夢心地にも猶母を慕うと、白衣の人の指をしかと握て居りました時のことゝ　注射（ちうしや）の時にアーーーとそれは〳〵何ともいはれぬ、…ほそい聲に泣きました時のことだけは思ふまいとしますほど尙思ひ出されてあゝ胸がさけるがのやう——。

寫眞は生れて六ケ月、すこやかな時に、寫したので、この口でした小さい乳房も含みかれてれむき目をみひらきましたのは。愛らしい二重まぶたもほんにこの通り、兩の乳房を弄りて媚げに見あげた其時罪なき姿はこうもまあよくうつるものかと、じつとみつめた私、思はず廣ちやんとよんで見ました答なしとはしりながら。

魔風も一時、戀風も一時

水戸　重子

魅力（チャーム）、あゝ恐しきは魅力（チャーム）、今、考へ出すと心か、ムシヤクシヤして、いやな氣になる、心臓を病んだので、叔母の家へ保養に來て居た時だつた、朝は未明に床を出て、早稻は青々として、露を帶び、見るから清々しき畦を踏んで、毎朝、毎夕、そゞろ歩きするのです、ジリジリと太陽に照り付られて、汗水流して野頁に働いてた、人等か、鍬をかついで家路へ急ぐ、或る夕方だつた、從妹の芳ちやんと、常の通り野を歩いてると、芳らやがん、牧塲へ行て見やう、つて云ふので行くと、大きな、牝牛が七頭も居る、牛方や配達夫など〻共に、チヨツキ一枚で、セツセと、牛小屋を掃いてた方に、兄様姿の姉様よ、つて其時、私は、何故か眞赤になつて、一寸、會釋した計、芳ちやん嬉しいだらう、えゝ兄様よりか好いわ、などと話してる間に掃き終へて、好い物見せるからおいで、芳ちやんも私も後から尾行て、西洋室に入ると、テイブルの上に、白百合がさしてある、寫眞帳やと、雜誌など出して見せた、歸りに名刺をくれた、西野常雄、あゝなつかしき名、私にもあんな兄様があつたら、何んなに樂みだらう、何時までも何時までも、此地にいたくなつた其から毎朝、毎夕、の運動ながら行くやうになつた、日、一日と過ぐるうちに、

あの優しきもの、常様が、なつかしく忘れる日がなかつたのでゝ、逐、近所の不動尊の縁日の晩だつた、お隣の方が入らつしやいつて、誘いに來たが、行きたくないので斷つたら、自分で行きたいので、女中迄が入るつしやい〳〵て、せめ立る、仕方なしに行く事にして、裏門から出で行く、常様は來て、居らつしやるかしら、などと思ひながら、石段を渡つて、お鳥居まで行くと、境内は一ぱいの人、何所が道だかあるく所がない、女中を先きに、人を押分、押分、お參りをする、今、芝居の幕が開いて居る、黑山の様な人の中を、ずん〳〵は入つて行く、もう此所でよいと、云へば、眞中へ、は入り込む、何をやつて居るのか、がや〳〵して一寸もわからぬ、前の方は背の高い人が、ずらり、揃つて見れぬ、肩と肩との間から見たり、首を延ばしたりして、見ると、首がくたびれる、足は棒の様、汗は流れる、耳は、がん〳〵する、早く幕になればよいと、思ひつゝ、フト空を仰ぐと、何萬の星は、キラキラと、下界を笑つてるやう、幕は、フワリ、フワリ、と涼しさうに、突然、前の方を振返りざま、ヤア今晩は、喫驚して前の方を見ると、後の方で、オ小林か熱いな、其癸、あゝなつかしき彼の君、氣が付いて無言のまゝ會釋だけしたが、妙に胸が、ドキドキする、友はと見れば、一心に見て居る、もう幕で御座いますよ、と女中の注意、オゝ嬉しいと思ふ刹那、大きな手が、私の左手をギユと、握つた、ハツとして、振り切らうとすると、指も折れるかと許り、命握りしめる、胸は早鐘を搗く様、顔は火が出そう、ヲツと俯向いてると、幕が閉つて、ワアツと群衆が、動揺出したのを幸に、夢中で、往來へ逃げた、其夜からだ、私の胸中は怪しくなつた、一時も常様を忘れる事か一層出來なくなつたのです、毎日の散歩に頗合す度、紅くなつて、今迄口を聞くのが恥しい様な氣になつてならぬ、或る時は、私はお嫁に行く身ではなけれども、若し、ひよつとして、結婚したら牧場の手傳へもする、妹等と、お琴の復習も出來る、眞實なら何んなに嬉しかろう、などゝ勝手な空想に耽つた事もあつたが、其んな事の出來るわけがない、自分で承知して居て、忘れる事が出來ないのです、此んなのが戀なのでせうか、毎日お互に人に知れるのを恐れて、然ゆる胸中を押包んで、早、秋となつて、紅葉色付く頃となつた、雨のシトシト降る晩だつた、女中の話に、彼の方はお向ふから奥様が入らつしやるのですと、と聞いた時、私は只ボーとして、何を話て居るのかわからなくなつて、床へは入つても其夜はまんじりともしなかつたが、口惜しいとも、悲しいとも、思はなかつたが、お向ふから奥様、之を思ふと、當付られた様な、いやな氣がして、病氣が重ればいゝと思つたのです、又、常様を思ふと、今頃は何をして入らつしやるか逢はないと氣がすまない、牛を見に行く、風をして行つて見ると、お室の窓はピツタリ閉めて、決してお姿を見せない、私を、除け様、除け様、として居る様に、奥様が出來たつて私が何んとも云やしないのにと、斯思ふと、今迄の事が馬鹿らしく、男は斯も薄情なものかと、つく〳〵思つたのです、其後は牧場へ行くのが嫌になつて、家に許り居たので、裏へ行つて見たくなつたので、門の所に立つて、霜枯れの野を眺めてると、姉さんて呼ぶ人があるので、聲する方を見ると、常様が莞爾して手招きして居る、何故か行くのが嫌で、ツツト身を門中に戸をピシヤリ、人を馬鹿にして居る、胸が済々したのです、あの時は何故逢つたらう、あゝ魔力（チヤーム）。

人なつかしき日記の一節

相模　内藤千代子

一月廿四日　晴

朝起きて洗面掃除、食事を濟まして裁縫に通ふ。これが私の日課である。年は改たまつても私の境遇——物質上の——はちつとも變化しない。毎日〳〵同じ事を繰り返す單調な生活が、此頃はつく〳〵厭になつた。何だか物足らなくて溜らない。

今朝は久し振りで髮をほごして束髮に結ひかへる。外の髮なら兎も角島田のみだれたの位、不好らしいものはないから。すると母様は、また厭にお脅かつて怖なさそうに貌をしかめて被居る。ほんとに私の様な跣つ返りに束髮がいけなくなつて、優美な日本髮の方ふ似合つてのは、何う

いふわけなんか知ら、

平時より後れて行つたので、同輩はもう來揃つて居たが、各々に私ばかし見てさゝやき合つてる。頭が違つたからつてなんだらう。あまりとは失禮な。

川口さん昨日博多の御帶が出來上つたと思つなら、今度も御自分の御紋附羽織を縫つて居る。否、此度御自分のだらう。紙をおほふた五ッの紋は御定紋の三ッ柏。袖丈もたしがに六寸以上と白眼だからである。まあ好いわれえ。暮にもあんなお立派な一襲が出來たに又、併し黒縮緬に葡萄色綸子の裏、は餘りくすみ過ぎてる。もしかお嫁入の——ぢやないかしらん。

何しろ着物の事よりか川口さんは、裁がお上手だから羨ましい。私なんか上着と下着どころぢやない、上前、下前の恰好さへ片ちんばになつて仕舞つて、裁のためにはまつたく少なからぬ苦勞をして居るのに、何うしても先生のお氣に入るやうなのは出來ず、實に泣き出したい程の折がある。殊に今日生徒一同に對して愈々裁縫始めすべて技術は精神にともなふのだから、神に入られば見事な出來榮はせぬものだ。それなうか〳〵外の事なんか考へて居たり、肝賢な技術を卑しんだりする人は、一生上達の見こみはない。つまり熱心にやりさへすれば、自づと出來がよい。うまく出來れば次に興味と熱心が起る。その熱心と興味の極が神に入るのである、と云ふやうな事を長々とされた時には、覺えず顏が熱くなつた。まるで私は當てつけられたも同然。馬鹿に口惜しく恥かしい。が、いくら先生だつて自由な乙女心の胸中の秘密にまで、立ちいる權利はないものをと思ふと、非常な侮辱てもうけたやうで何だかムシヤクシヤ息使ひさへハッ〳〵とする。あゝ私はどうしてこんな風になつてしまつたんだらう。

叔母樣の綿入がやう〳〵出來上つて、午後から山田さんの御子息の衣服を縫ひ始めた。紡績の上着に黄八丈の下着。まだ附の少い人形の多いこれを手にかけると、またしても若山さんの事が、思出されてならぬ。あはれ思出多き歌留多會よ。せめて今一度若山さんと一時打の勝負がして見たい。あゝ若山さんと……否々私は一時の快樂のために、永遠の苦痛を買つて仕舞たのではないか。もしもあの夜、高田さんへさへ行かなかつたなら——實に逢ふ事の絶へてしなくばなか〳〵に、あゝ昔は物を思はざりけり。

四時に裁縫が退けて、何誰かからお手紙が來て居るかしらと樂しんで歸つたが、何もなかつた。夜は足袋繼ぎをして被居しやる母樣のお傍で、稲科の袖を縫ひ乍ら、心行くまで物思ひに耽つた。

おゝ血に飽くような木枯吹きすさむ晩なるよ。冷たい寄宿舍のベットに結ぶ人の今宵の夢には、そも何が通ふであらう。あゝ私だとてかの毛の光澤も並越へて美しき紅リボンの君を、微かにそれと覺らぬではないけれと…………

廿五日　はれ

六時半起床。相變らず強い霜、珍らしく張つた手鉢洗の厚水には、お日樣がきら〳〵と反射して、冷たくまぶしく美しい。

今朝から胸がつまつて、御飯なんぞ欲しくもないが、無理にお茶漬を一膳食べてお湯ばかし飲んで置いた。行がけに郵便か來た。待ちこがれた松村さんからのお返事である。嬉しくて〳〵道を歩き〳〵封を切ると、先達私のあげた手紙について、やれ御身もうはべばかり美はしき塵の都にあこがれ給ふかの、やれ女の道は文舞よりも糸針なるべし。昔より詩を作るより田を作れてふよき訓言もあり、などゝわざとかは知らないが、矢張お母樣と同じやうな事仰有つてある。私こんな文句を聞きたくてまあ洗ひざらひ心の底まで、恥かしい異性の友に、申上げたんぢやない。少しは同情してなぐさめても貰ひたかつたのに…………

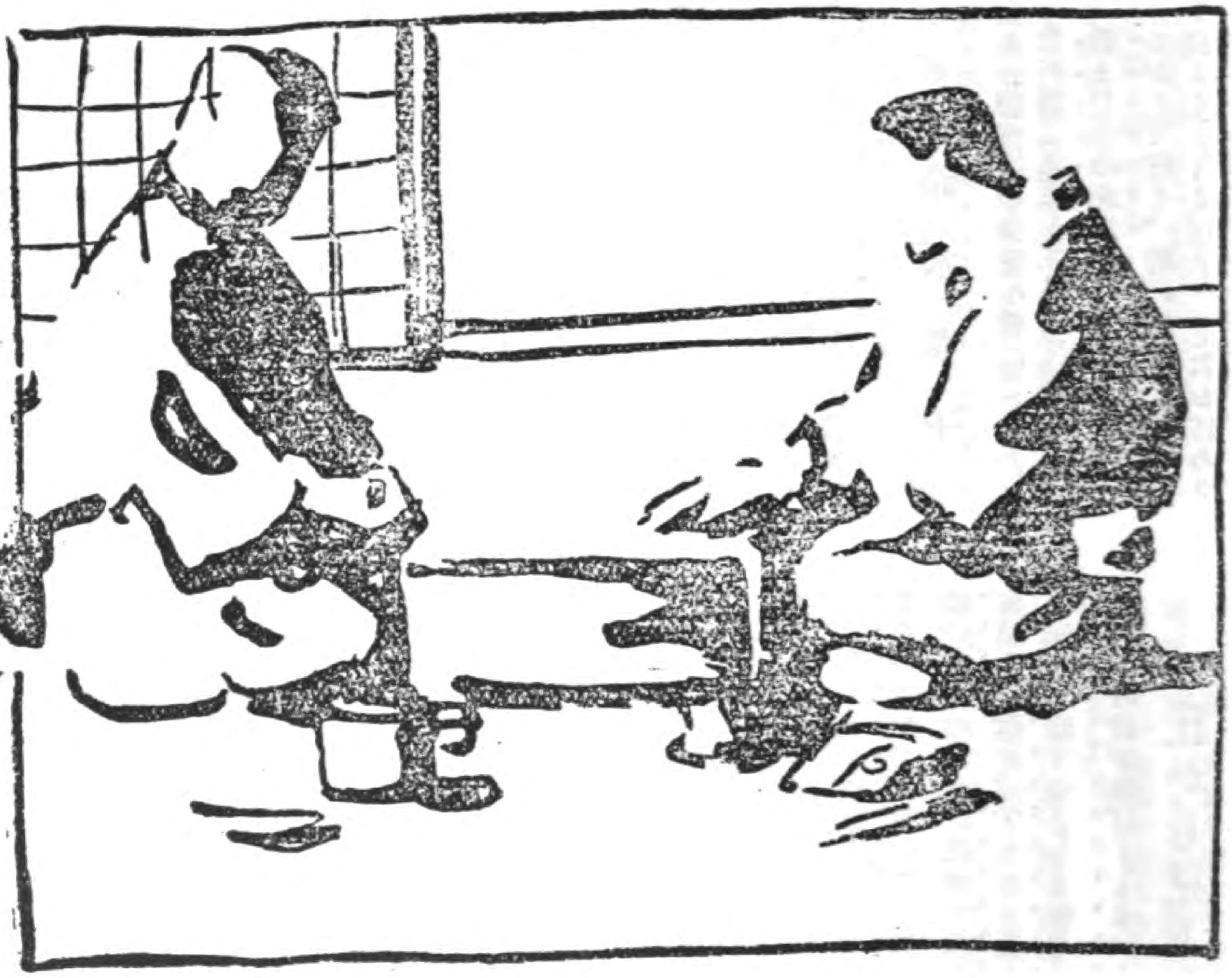
あゝ苦學——私はどんな辛い仕事をしてゝも、勉強がしたかつた。たとひ五十年の定命が三年五年にちゞまつても、勉強のためになら喜んでたほれる覺悟であつた。が、たゞ母樣か……長らく女の手一ッでこれまでに背丈ものばせて下すつた母樣に私に出來得る事ならば、よし孝行はつくせずともこの上の御苦勞をかけたくないと、それがため思切つて家を出ることもせずつい……あゝ併しどうせ私は駄目なんだ。如何なる誘惑にでも辛苦にでも打勝つて見せるつもりで居たけれど—— それが何う

であらう。此頃は我と我が心をさへ制し兼ぬる苦しさに、かうして毎日悶へて居るではないか。どうしても――あゝ私のやうな者は名もなくくち果てゝ了はねばならぬ運命なんだ。もうこれで滿足して居被しやる母樣に御心配さへ見せなければ……物思ひつゝいつか先生の門をくゝると何うしたの、大變顏色が惡いわ、と同盟に聞かれた。あはれ今日に始まつた事ではない。忍ぶ色にもとう〳〵現はれたのである。

今度は常よりも捗がゆつて上着の口綿、丁度四時出來上つた。何時になくほめられたが、嬉しくも何ともなかつた。

夜業をすまして後、日記をつけるべく机の前に座りこんだが、あてもない空のある物を見詰めて居ると、眞珠のやうな玉がパラ〳〵と綴つた罫紙の上にこぼれた、と見る〳〵中に赤い罫がパッと滲み出す。あゝと初戀にうけた傷手から血しほのにぢみ出るのも、丁度こんなであらう思ふと、長い睫毛を傳ふてまたポトリと落ちた。まあ私はこんな風で末にはどうするのであらう。我乍らあまりの醜がひなさに密に得堪ぬまで、身がうづく。が、熱い涙に冷たく頰をぬらしてなほも十二時闘くまで孤燈影あはき机によつて居た。

淋しさを抱いて入る床にまた今夜の夢は、どんなに悲しく寒からう。あゝ…………



合戰　本鄕　萩原みさほ

田舍吳服屋の賣出し

澁谷　のぎく

夏衣新柄大賣出しといふ大看板の側の入口を、おかあ樣につれられて這入りますと、早いと思つたのにもう店さきは人が一つぱい。少し奥まつた正面に水色の絽縮緬に川骨の裾模樣ある紋附をつけ、焦茶地に利久茶と白の芒模樣ある紋博多の夏帶をお太鼓に結んだ人形が飾られてあります。一寸角の米屋のきいさんに似た顏と思ひました。

田舍の事とて主婦も娘さんたちも店へ出て御世辭をふりまひて居り升。私共の隣には商家のおかみさんらしい人たちがしきりと揃の浴

衣地なみてなり升。多分女中にやるお盆の仕着せでせう。軍人の奥樣らしい廿五六の婦人が田舍に珍らしいハイカラな、派手すぎると思はれる夏帶をみまわして、どうも目うつりがして困るといつた樣な顔。よせ切の處にはまた。田舍のばあさんやら娘さんたちが しなさだめかしましくて。

軈て私共の前に運び出されたかず〳〵のメレンス地の浴衣(ゆかた)地の中から番頭の、これは東京の流行でといふに、かあ樣これとおきめ遊したのを見ますと、白地にお納戸色で秋草の染め散らし。私も綺麗と思ひました。でも、嬉しかつたのは、從姉のつう樣とお揃だつたせいでせう。かあ樣は赤の縮珍のおみ帶が、うつりがいゝと仰いますけど、私えび色のお帶の方がいゝと思ひますわ、などゝ心の中に思ひつゝ、かあ樣のあとをついて陳列場へ向ひました。

此處もひどい人ごみで、名も知れぬ立派なお召物や おみ帶やら八千草咲き匂ふお庭の花壇よりも美しいと見ました。大きい人の間へはいつて背のびしながら見て行き、場外へ出て初めてホッと息つきました。やせぎすながら美しい叔母樣の、近いお嫁入の時、高まげにあの秋草の絽模樣ある淡色(うすいろ)のおみ帶をたて矢の字に遊したら、などゝみちすがら考へました。

これはもう五年の昔がたりで、美しく、優しかつたおかあ樣は暑さし知らぬ石塔の下で、蟲の音樂をたのしんでゐらつしやいます。

夜の田舍道

府下　鈴木春子

「お氣をお付けなさい」と優しう仰言るお師匠樣の御聲を後にこと〳〵と敷石傳ひ、ほんのりと白く暮殘つた石橋こは〳〵すり足に越えて、つひ此間砂利敷いた許りの路に出た。霰まじりの北風がすうつと上氣した頬を掠めて、手に持つた水仙をゆるがして行く。暗い夜路を一際黒くすい〳〵と杉の木が群立つて、丁度よく〳〵よぼ〳〵 したおばあさんが賣りに來る田舍縞の樣灰色の布敷いたやうな小川はずーつと林の闇をぬけて細く流れずつと田圃の端の土手下のお茶屋から、 ちらちらと絣の樣に燈火がもれて何となくなつかしい。小川について小中町とある板橋渡つて左に曲り半ば雨戸の閉つたお魚屋の前に出た。垣根々々の絶間々々にぽつ〳〵ある家々も大抵戸をしめて、某伯爵家の電燈が一つお庭松が頭を見せた黒塀の邊りを晝間の 樣に照して居る。ふうつと又風が來る、ばら〳〵と雨が烈しう傘を打つ。じやり〳〵とひどい下駄の音が行くての暗がりに起る。ぶらん〳〵と提灯が荒波の上の小舟のやうにゆれて、流れる樣にだん〳〵此方に近づいて來る。粗い絣の綿入裾みじかに足袋なしの藍緒下駄、顔は見えないけれ共どうやら弟らしい、私はふと電燈の下に立止つて其灯を見つめた。「姉さんぢやないの」「うそよ」私はわざと空とぼけて水仙の花で顔をかくした。「姉さん母ちやか怒つてたよ」ぶり〳〵しながらずん〳〵先へ立つて歩く。「姉さんのゐいなあ」投出すに樣云放つて一目散にかけ出した。私もつゞいてかけ出した。角を右に曲ると兩側に家が町 の樣に並んで、さすがに賑かである。ポストの前を過ぎつて八百屋の店先和かいランプの光が往來一ぱい廣がつて、雨にぬれた小砂利に砂利の一つ一つにキラ〳〵と美しい輝きを添へて居る。ねぎや漬菜 の靑菜や大きな籠にうづ高く盛られた蜜柑のつや〳〵した色や、たばねた大根の 拔ける程眞白い色が、黄色いランプの光に映えて暖かい調和をなしてゐる。兩側の家々の燈火が往來へ種々の形を描いて居る。いつでも可愛らしい紅緒の下駄が、ずらりと並んでゐる下駄屋の店から、月の 樣な青ガスの光が二條すつ〳〵と往來にさしてゐる弟は又かけ出した、 とたん足袋屋の時計が急げ〳〵といふ樣に、けたゝましく時を打つた

丘から見下した私の村

青森　夢野雪子

妾は今日も亦丘の上に立ちました。
　淋しい日影はあたりの榛の木立に薄く射して、まばらな其の影は、萱や枯草の上に投げられて居ました。風もないうらゝかな日で、天地はすべて温かい神様の懐に抱かれて居るようです。
　妾は持つて来た詩集を手にしたまゝ、其の榛の林の中を逍遙しました。何といふ静かさでせう、四邊は少しの音もなくまるで眠つて居るやうです。それが妾が歩く度に、萱や草ががさ々々と詑しい音を立てゝ寂寞の中に些かの響を傳へましたが、ふと立止まると又た元の寂寞にかへりました。
　眠つて居るのでせうか。此の林はもしそうなら、足音を立てゝ覺ますのは心ない業、いつまでも静寂の眠よりさめさせたくないものだと、妾は悄然として立つて居ました。
　其の時ピイと小鳥の鳴く聲が、絹でも裂いたように聞えました。小鳥の影は見えません。そしてもう一度ピイと鳴きましたが、よほど遠くなつて居ました。其れつきり又たしんとなりました。妾は魂を奪はれたようになつて、何者かを求むるように耳をそばだてました。けれども何の響もありませんでした。
　妾は又た歩き出しました。それはあまりの寂しさに響が悪しくなつて来たからです。そして歩きながら自らの足音に注意しました。かサ々々といふ音が地の底からでも湧いて来るやうに感じられます。木の枝を洩れる薄い日光は妾の肩先や袖のあたりへちら〳〵と射しました。
　此の時妾の胸には何とも云はれない寂しさが湧ひて来ました。それは人に死に別た寂寞の感ではなく—といつてとても筆では云ひ盡くされない淡い、悲哀を感じました。自分でも取止のないような感じですがそれでも何となく頼りないように思はれました。妾には父母も兄弟も姉もあります、皆な農業に従つて居ますが妾だけ女學校を卒りかうして毎日近い丘や林に入て、自然の懐に抱かれて居るのです。一つは身體の弱い爲めでもあります。
　いつか林のつきた處へ来て居ました。振り返つて見ると、木は依然として薄い日影を浴びて立ち並んで居ります。此の沈黙が妾に何かの暗示を與ふるように、思はれました。此の時サヮ〳〵と柔かい風が吹いて来て、枯草や萱は各々やさしく囁き合ひ、日の影がゆれるように思はれました。
　此處からは妾の村や國道や川や水車やが見えます。そして廣い田の向ふには松の林、におはれた小山が連なつて其の後には雪を戴いた山が見えます、時々来ては見渡して居ますがいつも飽かずに見られるのです。
　空はよく晴れて居てしみ入る様な蒼い色をして居る、中に暖かい日影を浴びて乳色をした雲が、向ふの山のあたりに浮び出ました。なつかしい雲と心の中で思ひました、ふんわりとしたその姿は浮世の羈絆にかゝはらないようで、心行くばかり見とれて居ましたが、その雲は動くか動かないか解らない程に向ふの方へ遠ざかりました。悠々たるは雲の姿ではありませんか。昨日は高き峯を過ぎたでせう、明日は何處の野邊を行くことか。風のまに〳〵無心は漂うて行くのが限りなく妾を憧れしめました。
　目を落とすと妾の村の藁ふきの屋根や、白い藏の壁が日影を浴びて浮んだように見えます。淋しい村です。妾の永劫の墓はあの中にあるのです。幾十人の先祖も皆この村に眠つて居ますし、又これからの幾人も此處に葬られるでせう。夢のように雞の聲が聞えました。妾は此の淋しい—我が墓となるべき村をさして静かに下りました。

—(十二月廿三日)—

渚にて

長門　田中華子

秋の日は静かに照つてゐる。
　自分は砂の上に坐つた。朝から小雨が降つてたのがさつき漸く晴れた位で、砂の上はしつとり濡れて、衣服を通して冷えが身に泌みる。きれぎれの白雲がフヮリフヮリと漂うてゐるのが、ちやうど眞綿をちぎつて放つたやうである。その影は水にうつつて、蒼い海の面にうすい

斑點を印して居るやうに見える。

雲は西へ流れる。後のは前のを追うて西へ西へと流れて行く。それに連れて影も行く。

ぢやぶぢやぶ〳〵と波が戯れたり笑つたりして、波打ち際に寄せてくる。寄つてきた波頭はぐるりと縺れてついゝうと今度は遠く〳〵沖の方へ逃げて行つて渚で見た事、聞いたことを沖の波に語ると、こんどはそのきいた波が好奇な心で寄せてくる。

ぢつとそれを見てゐると、すうと眼がかすんできて、もう何だか恍とりゝなつて、世界が夢でも見てるやうになつて了ふ。

ずつと沖には白帆が並んで、吹き送る風にゆるゆると行き交うて居る。

自分は眼をうつして、持つてきた藤村詩集を開いたそして小聲に「舟路」を吟んで見た。

海にしてひゞく艫の聲
水をうつ音のよきかな
大空に雲はたゞよひ
潮分けて舟は行くなり
靜かなる空に透かして
青波の深きを見れば
水底やはてしも知らず
流れ藻の浮きつしづみつ。
緑なす草のかけより
湧き出づる泉ならねど
おのづから滿ちくる汐は
海原のうちにあふれぬ。
さながらに遠き白帆は
群をなす牧場の羊
吹き送る風に飼はれて
わだつみの野邊を行くらん。
雲行けば舟もしたがひ
舟行けば雲もまた追ふ
空と水相合ふ彼方
諸共にけふの泊へ。

自分は靜かに詩集を置いて眼を瞑つて。そしてしづかに考へた。かうしておだやかな騷ぎの無い自然に對して、かうした自然をさながらに寫しだしてある詩を讀みふけつてゐる自分が、どうして自然さながらの靜かなおだやかな心になれんのであらう、

暗い影が胸のどどこかにひそんで、ともすれば頭をもたけんとするすべてを投げだして信ずることが出來なくなつた。

あゝどうして以前の美しい、聖の心になれんのであらう。

自分は冷えゆく信仰を哀しむ身である。

大吹雪

枝幸　涌田ひで子

朝から吹きつゞけてまだ止みそうにもない、こんな日は早く寢るがよいと云ふので、四時頃夕飯をすました。皆樣はこたつにあたつていらつしやるが、私一人は二階へ登り硝子越に外を眺めた。天も地もまつしろ、ごう〳〵と波の音がするけれ共海面が見えぬ、白いものにさへぎられて。荒れに荒れてる北風はヒユーヒユーとすごい音を立て、屋根の雪を飛ばし、地の雪を舞はし、昨日の道に今日は雪の山を作り、向ひの硝子戸を、あれ程高く積んであつた薪もたゞ白いとより見えない。ごう〳〵といふ波の音と、物と云ふもの皆とばす風の勢とが相合してゐるすごい音、何も譬へたらよいであらう。自分はたゞ恐ろしい。

「もつと元氣を出せ」と叱るやうな聲がきこゑるので、思はず軒下を見た。親子であらう。三人連此吹雪中を何もきず、此寒さに足袋をはいてゐない、三人が三人共。時々ぼろ〳〵と小切の見えるのは、きつと衣服の破れであらう。

「寒からうが」と後は聞えぬが女の聲きつと母親であらう、子供は聲がせぬ、たゞ風の音のみ、やかましい。ギチ〳〵と靴の音がする、暖かそうな外套に毛皮の首卷、こんな吹雪なんかと、云はぬばかりに元氣のよい

青年が、親子の前を通り過ぎた。けれど振り向きもしない、彼の人のの心にはあの元氣のない姿が見えぬのであらうか。哀れな者と思つたら一度でも振り向きそうなものだのに、知らん顔して、ギチ〳〵といふ音のみを殘して、いつてしまつた。

今迄より一番强く吹いた、瞬間に「あゝ寒」と云う聲が、耳に入つた。あ彼の男より發せられた言葉か、はた、女よりか。又は子供が云ふた言葉か、自分にはわからぬか、たゞ「あゝ寒」と云ふ聲が何だか、今にも死にそうな人の口より發せられたようで思はずヒヤッとした。あゝあの親子これからどこへ行くのであろう。男の大きな荷物を負つていた樣子と云ひ、女の採取用の道具を、もつてゐたところを見ると砂金山へ行くらしい、行くは雪中の破屋、熊すむ山中、さぞ寒からう。行きつく迄に手や足が凍りはしまいか。と思ふと氣の毒になつて、氣の毒になつて、思ふやうになるなら、わたしのこの着物をあげて、暖いと喜ばしたいが、それもならぬ、たゞじつと後影をみつめた。暖い暖爐の傍で浮世の波風を、知らぬ顔にくらしてゐる人もあるものを、あゝ運命、運命、あの親子は運命の神に弄ばれる薄幸の人、我身はと思ふと、もう人の身の上どころでない、堪らなくなつた。昔の我家であつたなら、今頃は思ふ學校へも、入學させて戴けるものを。思へば今春、御兩親に、遊學を願つた其時に、「世が世ならば」と母樣の言はれし唯一言。思ふまい思ふまい、まゝにならぬが浮世の常、世には日一日と、暮すに困る人さへあるにと。あきらめはしたものゝ、ふじさんや、光さんの、事を思ふと、人は心弱い者と、笑ふかもしれないか、此寒村に、朝夕何の樂、何の希望があつて暮してゐる、のでおろうと思ふと、自分で自分の心がわからなくなつて隙間から入つた、雪が融けて冷たくなつた戸に頭をあてて泣いた、思ふだけ泣いた、なみだのあるかぎり「秀子〳〵」と、母樣が呼ばれた聲に始めて、我にかへつた。力ない足で階子を下りた。燈下では義兄さんが、母樣の肩をもんでいらつしやる、小姉さんは、文壇の光の横濱石川樣作の、變化をよんで居られる、世には似た身の上の人もあるもの。

悲しい〳〵晩

麻布　河合しげ子

何だか哀しい晩です。

が、何が哀しいのかと云ふと、別にこれが哀しいと云ふ事件もないのです、たゞ譯もなく涙が流れて來ます。今、お父樣はお寢つて被居ます。姉樣は竹(下女)を伴れてお買物にお出になつて、まだお歸りになりません。婆やが獨り茶の間の長火鉢の側で、しきりに居眠をしてゐます。家の内は丁度死の寂寞に閉された樣です。哀しいと云ふ感じが沁々と胸を壓しつける、大きな聲を上げて泣いて見たい、けれども何だか聲が出ないやうな氣がする。

二分心の置ランプがジーイーと哀れな音を立てゝ薄暗い光を投つてゐます、丸で臨滅の苦しい叫びのやうです。それが私の心を益々暗くして行きます。見倦きた天井も今夜は妙に薄暗く曇つて見えます。丁度ランプの上になる處がパッと明くつて、それが隅の方に行くにつれて暗くなつて、壁はぼつと灰色をして居ます。それか隅の方は笠の影を受けないで何程か明るくなつて居ます。

私は何かの雜誌で見た、あの男の心は灰色の壁だ、と云ふことを思ひ出しました。私の心も矢張壁ではありますまいか、そうです、壁です、壁です、灰色の壁です。それや以前は温い血の跳ることもありました。壁の隅の方の明いのは以前の私の心です。嘘、今は薄暗い灰色です。

床に臥す身は怨した寂しい、悲しい思ばかりするものでしようか、眞實に私の病氣は癒るでしようか、死の冷い手が私の胸を押へてゐるのではないでしやうか。あゝ、お母樣が戀しい、お母樣は相變らす情深いお顔して被居る。口元に優しい笑を含んで、あの凋みを持つた御瞳、あゝほんとに脱け出していらつしやるやうです、如何して彼のお寫眞がおかたみとなつたのでしよう。あゝ、お母樣のお膝に縋つて思ふ存分泣いてみたい、泣いて、泣いて、泣いたら必然とお母樣は慰めて下さるでしやう。優しい、温い お言葉で私の得心のゆくやうに慰めて下さるでしや

う。一所に泣いて下さるでしやう、お姉樣は涙もろい方でしたから、否や、お母樣でなくとも、お父樣だつて、姉樣だつて必つと〳〵慰めて下さるでしやう、けれども〳〵私は何故、お父樣や姉樣のお膝に縋つて泣けないでしやう何故お壯樣でなけりや頁けないでしやう、若しもお母樣が此處に被居つたら、ほんとに私は泣けるでしやうか、また私が思ふまゝに泣いたら、この悲しい思がなくなつて私の心は明くなるでしようか、ランプの光を強くしたらあの壁は明くなるでしやう、けれども私の心はとても明くならないと思ひます。若し私の病氣が癒つたら如何でしやう、否や、それは儚ない望です。

姉樣はまだお歸りになりません、時々お父樣のしわぶきが聞えて後はまたもとの靜寂に返つて、ランプのジーイーと云ふ音がまたしても耳につく、ほんとに哀しい音です。胸が妙にジリ〳〵焦られる樣で、涙がホロホロ流れて來ます。何だか寂しくて、哀しくて仕樣がありません、早く誰か來て吳れゝば頁いがと云つた氣がします。私はもう堪え兼ねて、「婆や―婆や―」と呼びました。婆やは返事をしません。私がいらいらして、「婆ヤツてば……」と大きな聲を出しました。婆や「ハイ」と氣のない返事をして、私の方を向きました。面白い夢を覺されたのが不服だと云つた顏をして居ます。眠さうな眼を擦すり乍ら「何か御用ですかと訊く」否え、だけど、もう姉樣のお歸り時分じやないの、お寢巻を炬燵に懸けとくと頁いわ」と云ふと、婆やは澁々立ちました。

「早くお歸りになれば頁いが」と思つて居るゝと格子が開きました。「オ、寒かつた」と姉樣はショールを脫り乍ら被仰いました。そして私の枕元にいらつして「しげちやん如何です、これはお土產ですよ」と云つて〇〇雜誌を下さいました。私は「どうも……」と云つた限り、胸が込み上げて後は何も云ふことか出來ませんでした。涙がとめどもなく流れて來ます。姉樣の温いお心が沁々と胸にこたえます。

をさなき日

相模　倉持菊子

前の雜木林と大海のどよみの樣に木枯がわたつて、さびしい夜です。

私は明日子供に話してやらうと思つて、お伽噺をよみはじめました。それは「水仙姬」といふので、讀んでゆくうちに、いつか一度きいた事のある樣に思へて來ました。此女は斯う、此次はかうと、幽かな記憶を喚起しつゝ讀んで行くと、其通の話でした。はて、何時きいたのかしら、いつ讀んだのだらうと考へると、幼ない昔の事がしきりに思ひだされて懷かしくて堪らない。私は本を置いて、それからそれへと思ひ出のいとを繰りかへしました。――これは私のくせです。

灰色の霧の底に紅い灯がちら〳〵とちらつく寂れはてた故鄕の町、その町端の門に無花果の生ひかぶさつた白壁の崩れた家――暗い其家の奧にはお母樣の蒼白い顏が見えます――、藥のふろ敷包と赤い毛糸の辨當袋とをさげて毎日通ふた丘の上の小學校、毛毬をついたり鬼ごつこしたりした遊んだ川邊の辨天堂、その堂の傍の菓子屋の、額に大きな瘤があるので瘤取爺とあだ名したおどけ好きの爺さん、よくおどされては泣いた事があつた――、其時一所に泣いたのはみいちやん、よつちやん、さあちやん、仲のよかつた惡かつた學校友達の面影があり〳〵と浮ぶ――！それから東京の寄宿舍時代のこと、みんなして頰を染めてペストマンの品評をした事もあつた、沁々と運命を語りあつて泣いた事もあつた―、あゝ懷かしい小沼さん、本多さん、卯之木さん、中村さん――。

私は手箱の中から卒業紀念に寫した寫眞をだして眺めました、みんな愉氣な顏してゐます、未だこれをうつす時は斯う淋しい世とは知りませんでしたのに。

それから私は手箱の中の數々を出しては眺めだしてはながめて、追憶の懷しさ淋しさを味ひました、前任地で寫した寫眞や其兒童が送つた手紙など見ると、あゝ故鄕を遠く、世にこんな處がありとさへ知らなかつた此山中に過す月日――と、この身の流轉が思はれて賴無い樣な哀しい樣な――涙が自ら睫毛をうろほしました。

私は心弱い身です、進んで未來に憧るゝよりもふりかへつては過去をしのぶ――すべてたゆたひ勝な性質なのです、私はこれ迄知つた人はどん

な人でも忘られない様な氣がします。私はこんな事を思ひます、この限なき時この廣い世界に、時々同じふし國を同じふして生れたのさへ淺からぬ縁ではありますまいか――。袖振り合ふもといふのは陳い言葉ですが私には實に痛切に感ぜられるので、たとへ一寸と交際した程の人でも、別れると妙に懐かしくなつて忘れてはならぬ様に思はれて、忘れるのがかなしい様に思はれてなりません。

はてなき思ひ

木村まさ子

十二月は何處の家でも忙しいにきまつてゐが常が寂しいだけお年頃時の今日この頃は賑しさた覺える母様はかうして我々が飢ゑず凍えず消光さして該くのは皆このお蔭だとて元氣よく表の間へ出て居られる今も來てゐ米をあけるらしい音がして居る、私の七八ッの頃はあの米の山へはいるのが好きだつた鼻監の凹みでぐうとはいつて行くのが何より面白かつたことそれも十年の昔になる其時分はお父様はあのお母さんの坐つてゐらつしやる所に及びす樣みたやうな顔してゐらしたまだ見えるやうな五年前までは見る事も出來たが、あゝ年月といふものはあのなつかしいお父様をうばひ去つたのであらうかお母様もその頃から見るとお年をお老りなすたらう私等は何とも思はぬけど、時々「あゝ年老た仕事に根つめると眼がまく／＼して腰か痛い」と、まだそんなお年ではない、お母様は評判の氣丈者だそうなのに、兄さんが中學を卒業なすつた時兄さんはもつと勉強したいといふお父様はあまり學問しすぎると御先祖のお位牌のお守が出來なくなるとなつしやる、その時もお母様は一生懸命に兄さんの肩お持ちなすつてとう／＼兄様は高等學校へお入りなすつた、それで兄さんはいつでもお母様はわかつた人だの、こんな義膣が上手で柔順しかたら満點を得られる吾家の御家人様で置くのか惜しいのなど〻お賞めなさる去年の夏學士になつてお歸りなさつた時も



父の墓　紀伊　稗田みつ子

「こんな尺でますやうな家の事は隱居の留守番がてらで結構だ若い人は自分の思ふ所へ出て思さまはたらきしておいでなさい」と兄さんは大よろこびだつた今は大進にゐらつしやる。お母さんは氣丈者だ、まだ三十年も五十年も娶らぬだらうつて伯父さんなどはをつしやるけれど夜など腰をさすつて上げたりなんかすると心ぼそい事斗りをつしやる。いつかもだつた私が親類へいつて五日ほど泊つて歸つて來た晩歸るなりお母さんは「オヽきいちやんよく歸つておくれだつた今夜もだつたら明日迎にやらうと思ふてた所を」と仰しやつた私は其時は何かなしに母さんのおひざの上にすがりつきたいやうな氣がした私に稼談でもいふて來ると「きいちやん年といふものかゆかないと可いになし」と、私は何時までもこうして居たい如何しても此家をはなれる母さんの傍をはなれる氣はしない三十になつても四十になつてもどうして居たいが女といふものは如何しても年頃には嫁かねばならぬものだらうか柏山の衣江さんあんな美しい何でも上手な方が後れた爲婆あ娘〱と云はれたあげくにあんなつまらぬ所へお嫁づきなすつた私はいつそもう少し勉強して女學校の先生にでもなつて一生獨身でゆかうかしらいや〱そんな事兄さんにでも話したら云はぬ先から叱られるだらうそりや實際先生もつまらんし、兄さんはまだ〱當地で住まふともをしやらんたらうもしもし私が居なひやうになつたら母樣一人さぞ寂しいだらうつまらん所へ嫁く位なら獨身で居る方が好いのだけれどなど〻針箱にもたれて想ふてる耳元へ「大吉からお歳暮持つて來ました」と小供らしい高い聲夢から覺めたやうに我に歸ると先の程までおか〱とまへの紅絹を照らしてた太陽はいつのまにやら薄暗うなつて恐しげな風が鳴つてる「また例の鳴くれましたよ」と母さんのお聲いつになうやさしう聞えて私は涙がこぼれました何といふ事なしに

變屈な車掌

攝津　寺　部　君　子

私が夕方門へ水を撒いて居ると、金井樣が竹細工の手提にお辨當の入れたのを持て通つた、笑らつては入被るが、挨拶はなさらぬ。此方から仕たので辛つと首丈「おや晩くから」「ハア今夜は宿りです」とさつ〱と行て了ふ。

金井樣は〇〇驛の車掌で、私の家とは親からの懇意で有るが、誠に風變りな人で何日來ても、時分時に成つて、御飯を出しても笑らつて計り居て手も付けなければ見向きも仕無いで歸て了ふ。何うも異しい何んぞ氣に入らぬ事でも有るのかと思うて見るが那麼風も無く矢張ちよい〱出て來る、が喰べ物を出すと直ぐ歸る。何日かの話に、人の家へ行て物を招ばれるのが大嫌ひ其れに招ばれると又何かせねば成らぬのが煩さいと言つた、一寸招れて御馳走樣だの何んだの言ふのが厭だと、眞個に變り者で詰りは交際嫌ひで有る。金井樣がまだ驛夫で居た時、或る人が「驛夫で今何程の給料です」と言ふと「驛夫！驛夫等は知りませんね」と言つたが其人が歸ると直ぐ「何んだ人に驛夫など〻失敬な」と言つて怒つた。

一體が無口で何も言はぬ人だが、汽車の事等を話すと熱心に車掌は外見は樂に見えても中々責任が重いの自分等は慣れて居るから動いて居る汽車に飛び乘り仕ても何とも無いの、慣れ無い驛夫が大膽に飛び乘り仕て片足引かれたのと、種々の事を得意に成つて話する。元が好かつた物だから、何う仕ても氣が高い。

車掌に成つて始めて家へ來た時に、當るべからざる大氣焔を吐いた。今度同僚が大分車掌に昇進たが皆袖の下や、ひきが有つて成つたのだが自分計りは然うで無い、獨特の力で昇進つたのだと、そして「私も何日迄鐵道に噛り着いて居る氣は無いのです、ほんの當座の腰掛ですから、爾う無闇矢鱈に此頭は下げられません、那麼安つほい頭じや無いのです、此後計り出世仕まい物でもありませんかられ」と「併し今の世は餘り何んでも損ですよ、矢張上の人々には愛嬌の一つもするのが徳ですよ」と言へば「否や」と力を入れて「人は何うか知りませんが私の頭計りは、上の人だからとて遠慮はいりません、當然への外は木樁でも下げ無いのです。お世辭や袖の下で昇進仕た者に、いらぬ頭の一つも餘計に下げればなりますまいが、私は私の力丈ですから誰に遠慮も恐れも入りません」

と言つて居る、其故驛では名を言ふ者は殆ど無い、皆理金で何の譯でも通つて居る。

其から既う六年に成る今日、以前に昇進仕た車掌等は大方驛長若くは助役位には成つて居るが未だ金井樣は車掌で居る。勝氣な女房は其が焦燥くて成らぬ、果は愛憎をつかして里へ逃げて歸つた。金井さんは怒るまい事か、火の樣になつて、八年も連添うて居て未だ良人の心が分らぬのか、馬鹿め厭ならいやで可い、二度と歸らうと思ふなと言つたが、五六日立つて人を迎ひに遣つた。「何も女房は何うでも可いが、小供が可哀想故」と言つて居る。

今も相變らず辨當提げて通うて居る。氣の精か知らぬが何んだか、前の樣な元氣は無く、悄然りと仕て入萎る樣に見える。

疲れたる黄昏の色

丹波　糸井はつ

また、夕暮がきた。

疲れきつた樣な、濁つた空、壓迫される樣な、不安に、彩どられた、重くるしい空氣、私はいつもの力ない姿て、私の家のすぐ手前にある街道へ、出て見た。

雨が今にも降つて來さうだ。

身をきるやうな木枯が、折々音高う呼ぶと、所々に突立つた、太い電柱が、ブーンと唸る。

大概は、古うなつた軒の低い町家の家根が、メキ〳〵と危ふさうにいつて、なりから戸を閉める其音に交り合つて、ひしめく、非常に騒しい。

どこ迄も〳〵と、うち續いた轍の跡が、水溜のある所だけ、とくに深かく喰ひ込むでゐる。

私はこの騒しい街に立つて、何故か非常に氣が滅入つて了つた。これはなにも今日に限つた事ではない。凡そ、いつでも夕ぐれに立つと私の心は滅入つて終うのだ。

たゞもうさびしい、哀しい。ことにこうした、冬の黄昏れなど、一入深く、幼時の追憶にふける。そして白雲遥く三百里のあなたに、兩親とわかれて漂泊の旅路にある身を思ひめぐらすと、地へたにしがみ付いて泣きたい樣だ。

人が大勢通る。どれもこれも皆、不安を帶びた眼に、疲勞といつた、忌はしい影が閃めいてゐる。

——「疲勞」——「倦怠」——「絶望」——「弱者」——、何て忌しい言葉だらう。けれ共これが——弱者——これが或は最後の眞を示すものではあるまいか。人は老いる人は死ぬ、あゝ萬象ことごとくが是だ。こう思うと、これ迄非常に尊とく、また心強よく思つてゐた「美」とか「希望」とかいふ事が何だか僞りの樣に思はれてならぬ。同じくこの世も又僞りの樣な——幻の樣な氣がする。そしてこの黄昏は有より無へ、美より醜に移る一瞬の象徴ではなからうか。

私はこう疑つた時、もう耐えられなかつた。私の頰には、涙が傳つてゐた。

歸校の前後

松本　大口巨樹

一月も前から樂しみきつてゐたこの寒中休も、もはや今日限りとなつてしまつた、明日は一番で、樂しい樣な厭な樣な寄宿舍に歸らなければならぬ。

この休中はよく遊んだ、姉の所へ泊りがてら遊びに行つて、漸く昨日歸つた許で、それこそ本などは一枚もひろげなかつた、それでもまだ遊び足りない樣な氣がして、どうもこの故郷をでるのが何となし名殘おしい、と思ひながらも、行李をだして荷造を始めた。

二枚の障子をからっと兩方へあけると、冬の日が縁側の中程まで射してゐる、庭は雪が三四寸も溜つて、二三本の枯木は、ふつくりした梅の花でも咲いたやうに、雪がまた枝に殘つて、そこへ午後の日がかつと輝いて、清々した雪景色である、暖國の人は「あゝ厭だ寒くつて」、と話だけにでも首を縮めてしまふだらうが、寒國生れの私にはやつぱり

この雪が懐かしいのだ、どうも去り難いのだ、いつか行李の手をやめて、庭の景色に眺め入つた。

時計が午後二時をうつ、驚いて又荷造にかかつた、こんな本など持つてこなければよかつた、荷物に斯なつて一度も見もしないにと、八九册の本を詰込み、其上に着物や襦袢やお餅や種々の物をきちんと入れて、蓋をした、「さあこれでいゝ、おゝ冷たかつた」、と急いで炬燵には入いた、「あゝかうしてあたつてゐたいな、明日からつまらない」、と誰にいふともなしにいつて寢轉んでゐた、其中にいつかうと／＼したらしい、母の音が勝手に聞えるので吃驚して起き上つた、もう洋燈がついていつか障子も閉められてあつた、夕暮の色に淡い洋燈の光が映つて障子の紙が青白く見えた、私は急に淋しくなつて勝手の方に行つた、今年五つになる弟が頻に何かねだりながら母の後につきまわつてゐる、「さ喬ちやん姉樣と二人でかるたしやうね」、と突如いふと、「さ、さ、いろはかるたね」、ともう本氣になつて私を炬燵につれていく、私はいつた鄙の仕方なし一所にきて相手になつてゐると、年始に出た父が歸つてきて、間もなく夕飯になつた。

私の大好物のおしるこ、一家揃つて笑つたり話したりして樂しくたべた、すむと四人皆炬燵にあたつて種種な話をして笑つた、喬ちやんは口もよくまわらないに、生知の唱歌を可愛い聲で歌つて賑やかしたが、いつか母の膝ですやすや眠つてしまつた。父は行李の荷を締めにかゝつた、私は明日着ていく物を一纏めにして床の間においた、母は忘れ物のない樣にと、一生懸命で氣をもんでゐる、全然整つたのでお茶をのんで床についた。

次の朝目を覺すと、母はもう疾に起きてゐた、まだ外は眞闇だ、何時だらうと時計を見ると四時半、もう遲いんだと急いではね起きて、流し場へいつて顏を洗つた、母は「靜かにおしよ喬が目をあくと騷いで困るから」、と氣をもみながら朝飯の用意をしてゐる、私はいはるゝ儘に靜に髮を結ひ着物をきかへた。

父も起きて、お茶がでたが私は一杯のんで一人先へ朝飯をたべた、門出の祝にとか鹽鮭の頭付、母に「澤山たべておいでお腹がすくから」、と進められたが、如何もご飯の通りが惡い、やうやうすまして炬燵にあたると、頼んでおいた車が氷つた道をがた／＼と寒さうな音をたてゝきた、「お早う」、と大きな聲をかける、其音で喬ちやんが目を覺した「さあお起き姉樣が又學校へいつてしまつてだよ」、と母は抱いて出てきた、車夫が行李をのせる、私ものつた。

まだ東の空が少し白んだ許で、明け七ゝの空氣が、しんみりと身にしみる、「喬ちやん左樣なら又直にくるゝ、今度何んなお土産かつてこやうね」、といふと、ねぼけながら、「あのね喇叭と刀」、皆一緒に高く笑つた、「きつとかつてくるよね」、と答へると、父も母も「それじや氣をつけてね、體を大事におしよ」、と口を揃へていふ、「はいじやいつて參ります」、私がいふと車夫は一寸頭をさげて引きだした、「車や樣よく頼みますよ」、母の聲が後に消えていつか門を離れた、後を振り返ると、三人ともまだ縁側にたつてゐた、其中に影も見えなくなつてしまつた。

まだ四周はしんとして人聲もしない、唯こゝ彼處で犬の吠える聲が寂寞を破つて淒い樣に聞える許だ、雪の上を流れてくる冷たい氷の樣な風が、ひやりと顏にあたる、覺えずショールをかき合せて、其中に首を縮めた、車はいつか停車場についた、乘客がプラットホームにもう一ぱい、車を下りると約束しておいた友達の正子樣が、もう先にきてなつて私を見て「お早うございます」、と懷かしさうに嫣然した、私は「ま、お早いのね一寸今朝の寒いこと」、と返應した、車夫がチッキを出してくれた、私は正子樣と並んで汽車の中に腰を下ろした、「新聞に雜誌」……、と物賣の聲が賑かに響く、やがて汽車は動き出した、町を離れ廣々とした野原に出た、「一寸淸々していゝ氣持ね」、と二人は窓から外を眺めた、人家や木立が淡白く呆然と表はれてきた、塒をでた鴉が二三羽頭の上を通つた。

汽車はがた／＼大きな音をたてゝ駛せてゆく。

其中に朝日がぴかぴかと東の雪の山から登り初めた愈々明けきつた空を一刷毛に眞紅の色にいろどつた、白銀の野――木立――人家、皆其光を浴びて眩ゆい許きら／＼と輝く、「まあいゝ景色ね」、二人は思は

す顔を見合せて、笑を含ませ合つた。

私はふと立つて窓から首をだして、家の方をふり向いた、もう幾つかの村の蔭になつて見えなかつた、夢の様にけさ迄の種々の事を思ひ浮べて獨で微笑した、今日から又あの厳しい寄宿舎に起臥するのかと考へると厭な感もする、又面白い事も浮んでくる。

汽車はがたく〳〵音を立てて雪景の中を進んで行く。

私に種々な事をくり返しながら腰を下して、やつぱり同じ様な思に耽つてゐる正子様にいつた、「一寸學校に近くなる許よ………」。

慈善劵賣り

明石　おちば子

「あなた先に」「いやあなた」、と格子造りの家の前で、友と自分とは暫く讓つたが、結局は私が先に這入られればならぬ事になつた。困つたなと思ひつゝ、肩掛をはづして、友に渡し、手袋も脱ぎ、更羅紗の風呂敷包みを右の手に持ち直して、がらがらと入口をあけて屈むで這入る。友もこれにつゞいた。二人は目を見合せて、やつとの事で、「御免下さい……」、と呼んだ。「へー……」、と奥から返事聲がする。すると、自分の胸は急にそはそはしだす。「向ふがかういつたら、そうそうこんなに答へるのだ。私がこんなにいつたら、向ふはかういふ風にいふだらう」と學校を出る際、先生から敎はつた事を、胸に描いて居ると、足音が耳に入る。うつとりとして居た自分は驚いた。頭をあげると、すぐ左の方の室から、黒い絽の羽織を着た人がすつと出て來た。主婦らしい、二人は一歩進んで、丁寧に禮をする。頭をあげると、彼方は如何にも不思議さうな目付で、此方を凝乎と見て居る。自分は又一寸進んで、風呂敷包を火鉢の側においた。そして「私等は……」、といひ初めたが、一寸いきどまる。頬も耳も眞紅になつた。然し、又風呂敷包みをあけながら、「私等は、あの人丸山の下の師範學校の生徒でございます。今度――今度、大阪の汎愛扶植會といふのがたてゝ居ります、孤兒や、それからあの捨兒などを、三百人計あつめまして、養つて居ます所から。此所の入雲座へ來て、活動寫眞なんかいたしますので、たのまれまして、その時の劵を、こうして賣りまわつて居るのでございます。可愛想な子供を助けてやると思召して、どうぞお買ひ下さいませ。まことに御邪魔ですけれど」、とつゞけた。そして趣旨書を一枚、彼方の手に渡し、もつて來た入場劵を並べた。

傍で袴の紐をいぢつて居た友は、近寄つて、「この白いのが五十錢、青が三十錢、それからこの赤のが二十錢、子供衆や、學校の生徒さんは、十錢のこの桃色でございます。ほんとに一枚だけでもお願ひいたします」、といつた。

無言であつた主人は、一寸と此方を見て、火箸で火をつゝきながら、「えらい高はさんな、一たいその孤兒院て大阪のどこだすいな」、と調子の低い聲でいふ。

「天王寺のすぐ西の方でございます。もうあつちではよつぽど信用もございます。何分あなた、三百人もの子供ですから、年に二萬圓も費用が要りますので、困つて居ります。あつちや、こつちで、おたのみ致しまして、まあやつと暮して居る様な、あはれな事でございます、お情をもつて、一枚だけでも買つてやつて下さいませ」。今度は一心になつて自分がいつた。彼方は、

「此頃はよう孤兒院や、とか何やとかいふて、來なるけるけんどな……」、と考へた樣子、「折角だッけど」と、すげなくいつた。「ほんとに高くて、御氣の毒でございますが、どうぞ助けてやると思つておかひ下さいまし」、と二人が二人泣つく樣にたのむ。

「買ひましても、行く者がおまへんで、――芝居だしたらな、又だれでも………」。

と彼方はかへす。さあと、自分は「もしお出で下さる事が出來ませんでしたら、劵だけでもお買ひ下さいましな。活動寫眞や、唱歌や、遊戯や、お話や、ありまして面白うございますよ。御宅にはお子供さんはありませんの」、と彼の顔に目を注いだ。

「えゝ一人ありまんのや」、と彼は慈善劵を見て居る。

「そうでございますか、それではこの十錢のでも一枚お願ひたしたうございます」、と友は泣きつく樣にいふ。自分も「一生の御願ひでござい

ます」と迫つた。

「そんなら、一寸間ふてきます」、詮方なくてか彼方はつと起つた。どうぞ」、と二人は口をそろへた。

彼方の姿が見えなくなつた時、太息をついて」二人は顔を見合せた。無言のまゝである。「いらないつていはれたらどうしせう」、と案じはしたが、こゝで始めて、我れにかへつた様な心地がした。きよろきよろとそこらを見たのだつたが、ふと一番先に、正面の鴨居の上の大きな貼紙が目についた。「明石質屋中」と大きい綴りに書いて、四角印が捺してある。「ふうんこの家は質屋だな」、と思つて「大變な所へ來たものだ」と、飛び出したくなつた。直ぐ下の、硝子の戸棚は、券のついものがしまつてある。それから四疊の隅に、帳面をつける所がある。然しそれ等は不思議ではない。

がらがらと、中戸があく。振りかへると「尋」といふ徽章を、横向けにキャップを着た、可愛い男の子だつた。變な顔をして自分等を見ておいて、表へ出た。外では、金輪を廻す音がする。「今の子供だな」、と出て見たくなつた。「可愛子ね」、と私は友を見た。「ほんとにね」、と返事をした。「奥で何していらつしやるんでしよう。あんまりおそいわ」と、二人ははつと欠伸をした。今度は、前の方の襖を明けて、例の婦人が出て來た。彼方は一寸と跪いて、「少しですみませんけど、赤二枚と桃色一枚ともらひます」、といふ自分はうれしかつた友はどうであつたらう？

「それはどうも」、といひつゝ

赤二枚と、桃一枚とを、重ねて、自分は彼方の手に渡した。彼方は五錢の白銅二枚と、二十錢一枚と、十錢を二枚と、風呂敷の端に置いた」友はそれをとつて、用意の袋に收める。自分は入場券をしまう。二人は「どうも有難うございました。ほんとにうれしうございます」と禮をした。「どうかそしたら、九日か、十日の晩には、御見物に」、とは友がいつた自分等は又退いて禮をした。彼方は自分等を見送つて居る。「さようなら」、といひつゝ、友が先になつて、自分は後から、入口を出た。そしてあとを閉めた。

二人はやれやれといつた風に、軒の下に彳むだ。ほてつた顔に、針を包むだ様な冷たい風が、すうとあたる。藁包みを澤山積んだ荷車が、二臺きしつて行く。

一寸時計を見ると、まああの家で、四十分もかゝつて居た。

なき人

金澤むらさき

私が毎夕御稽古に行く道、ちやうど四つ辻の曲り角で、私よりも一つ二つ齢上らしい娘に、いつも逢はないことは、有ませんでした。其娘は顔は白いと云ふより青くていつでも下ばかり向いて、私に逢ふ毎に上目にちらと見て行過るのが常でした。所が昨年の春文壇の花を見てから妙に私は其人が、懐かしく感ぜられました、それは新論文の天當選者であつた田中久子様のお像と何だか余程似てゐる様に思はれましたから。否其横顔は久子様にそつくりでした、それで私は久子様が東京においでになる氣がせず、何だか目と鼻との間においでなさる様な氣がして、時には言もかけたい樣に思ひました。其後文壇上の久子様は、益々天才が發揮されて毎號當選の榮を擔はるゝを見る度に、人事でない樣な氣がして嬉しう思つて居りました。そして、道で逢ふ娘も、近頃は私の方をなつかしげに見て行きますので、一度言をかけたい〳〵と思つて居りましたけど、妙に恥かしいので、つい過しておりましたら、此一月程前から頓と逢ひませぬ。不思議に思つてもしや私が早くなつたのでないかと、同じ町を二三度くり返して歩いて見たけど逢ひません。それでは遅いのではないかと、或日は餘程早目に家を出て四ッ辻の所まできましたが、矢張影も形もありません。其當時は物たりない氣がしましたが、日を經るに從つて其娘の事は忘れましたけど、久子様の事は片時も忘れた事はありませんでした。そうしてなります内十二月の文壇を、少し晩れて見て、私はほんとに如何に驚きましたでせう？ 久子様はあのまだお若くて前

途に赫々たる光明の、おありになるお體でありながら、病には勝つことが出來ず、遂に逝かれたのですて。私はすぐ文壇の花を出してきてお寫眞をじつと、眺め入りました時に、あの四ッ辻の角で逢つた娘の事が、朧にひらりと、思ひ浮びましてある限り泣きました。

月下の氷辷り

光枝

御夕飯の箸をガラリとおくと弟は、北極からくろあの寒い〳〵風の中へ出く行つた、もの好きな私は處在なさに、その後からついて行くと、外にはおなじ氷辷仲間が四五人外套羽織つたのもあれば衿卷に深くいが栗頭をつゝんだのもあり、皆思ひ〳〵の態して、ひくひこま下駄に當地のいはゆる函館下駄金やスケート下駄金をうちつけたのを手にして大聲で話ながら行く。

七日の月は雪に照り返へされて晝間の樣。草履をはいた足は下からつめたさが透していたい、やがて弟らの連は小川の邊へ出た、すでにすべつてゐるものもあり、今仕度をしてゐるものもある、弟らもこゝで下駄をはきかへ、しつかり紐でいはへつけて五足六足は大またに勢つける爲に走ると、體は自然に平均を保つてスー〳〵と面白くすゝむ、其早い事といつたら、少し體がぐらつきだすと其まゝ兩手をひろげて足を外に外向けて、二足三足進むと、又身體は平均を保つてスーと進む

氷の海山こえた風は相かはらず來る、少し休まうとて岸邊によつた子供らのいが栗頭から盛んに湯氣が立つてゐる。

月は大分傾いたが子供らはなか〳〵止め樣としない、私の體は感覺がないまでに冷へた。



行商　青森　立花ともこ

小鼠日記

紀伊　桐葉女史

ドタンバタン。

何をしてゐらつしやるのでせう、兄さんは？と思つて、兄さんの書齋へ行つて、唐紙の引手へ手をかけると、

「こら、開けちやいけない、鼠だ〳〵」と、氣色ばつた聲。

ドタンバタン。

「ヤッ駈けやがつた」と云つては、塵拂ひか何かで、障子を擲ぐる音。

『今度は机の下！』と云つては、机の脚をうつ音、壘の上を、鼠が駈ける音。

『兄さん、もうおよしなさいよ、机なんか破れてしまひますわ』と、妾が唐紙の外から云ふと、

『なに、もう余程疲れてゐるんだ』と、呼吸のはづんだやうな聲。

『うぬッ』

『やつ失敗つた！』

などゝ、矢張りドタンバタン。

かうして小十分もたつたと思つた頃

『ヤッ』と云つて、二つ三つ續けさまに打つたやうな音がすると、

『もう開けてもいゝ』

妾が這入つて見ると『あれ見い』と云ふ兄さんの額には汗がにじんでゐました。

兄さんの指ざす柱の方を見ますと、あはれ、一匹の鼠は、横さまに倒れて、口からは、生々しい血を吐いて、まだ時々は、尾をぴん／＼させてゐます。

『まあ兄さんは酷い！』と、妾が云ふと、

『あゝ、これで溜飲が下つたと云ふもんだ。』と、得々としてゐらつしやる。

妾は何だか、可愛さうに思へてなりませんでした。

* * * * *

『探し物があるんだが、分らないから手傳つてくれろ。』と、兄さんがおつしやるので、押入の戸を開けて見ますと雜誌やら書物やら手紙やらが、玩弄物箱を引つくりかへしたやう。

『まあ、何うしたのです？』

『見たい雜誌があるんだが、何うも分らないのだ、これを一々外へ出して呉れ。』と云つて、兄さんは、押入の隅へ上つて、鼠の糞尿でよごれたのを妾に渡してくれる。

何だか臭くつて／＼、たまらんでした。

『臭い／＼、彼奴のお陰だ。』と、兄さんは苦い顔をなされるが、それでも、得意らしいやうな樣もうかんでゐます。

『變なものがあるぞ』と、兄さんがおつしやるから、妾も押入の中をのぞくと、兄さんが、何かきたないものに觸るやうな手付で、隅の方から、引き出して來た一塊の紙屑。

まだ眼の開かん赤ん坊の鼠が五六匹、一塊になつてうぢや／＼し乍らゆう／＼泣いてゐます。

親の乳房を探るつもりでせう、兄さんの指にすがりつかうとしてゐます。

『彼奴の子だな。』と、云つて、兄さんは、面白さうな顔をして居ます。

妾は悲しくなつて來ました。

『兄さん、お止しなさいつて云ふのに、殺してしまふもんですかられえ、この赤ん坊は、もう乳房に離れてしまひましたわ。』

兄さんの顔にも、思ひなしか、幾分か曇りがかゝつて見えました。

くりすます

岐阜　滿佐子

今日はクリスマスである、妾は午前九時を待つて一冊の聖書を手に青々とした森をさして出かけた。嚴めしい――鐵門の前には菊の花もてアーチをこさへ日丸の旗と十字のはたとが美くしくかざして有る、中には煉瓦立の三階造りが雲衢かと許りに高く聳え、庭には多くの常盤木が植えてある、松や檜の綠葉は冬枯の寂しい庭を飾つて希望の色を染めて居るが其の間に交つた、無花果の木は葉が皆落ちて枝ばかりになつて居る。會堂につどう善男善女や天使の如き小供等は皆樣お早うと、ほゝゑんで迎へてくれる、あゝ何んと可愛い日曜學校生徒であらうか、やがて讃美歌の聲がしだした、只今迄にぎはしかつた堂内も今は靜かに、せき一つする人もない、やがて牧師の祈禱も終えた、妾は一人少さい胸にお祈りした。あゝ天にまします全智全能の尊きかしこき神樣私は今あなたの御力によりまして此の汚れた中より救はれようとして居る誠にあはれな

者で御座います、何卒神様夜の汚れたる悪魔の世より救ひ出して、喜びの永遠にいつ迄も〳〵盡きなひ天國に導き給はん事をお願ひ申ます、あゝ神様よ私はあたりの迫害が多くて信仰に乏しい、よはい〳〵者であります、又愛や同情にも薄い〳〵者で御座います、どうぞ〳〵信仰の力を與へさうして、あなたの清い〳〵愛の泉の幾分かを汲み得る事の出來まするようにして下さい、おゝ神様よ私共兄弟姉妹をして一人も多く、あなたのお惠の露によくする事の出來る力を與へ、さうして私共をして一時も早く天使の如く清い〳〵誠のクリスチヤンとなる事の出來まする様にお願ひ申ます、此の願ひと感謝を尊きイエスキリストの御名を通じて一心にお願ひ申ます。アーメン。あゝ此の時こそあらゆるけがれた思ひは美くしく、ぬぐひ去られて一點の汚れも無かつたのです、其の内に演説もすんで間もなく又、さえ渡る讃美歌の聲は、滑らかな美くしい、オルガンの音に伴はれて靜かに〳〵。「いそぎて來たれ、すくひの道に、世の罪人よ、罪のゆるしを。あすを思はゞ、折こそさらめ、露のいのちの、きえうせぬ間に。とく立ち歸れ、父のみもとに、おもはぬ時に、ほろびは來たらん、天津さいはひ、いそぎもとめよ。

晝過ぎの光は弱く照り、ゆきゝの人の足音もようやく、せわしくなりし頃今は餘興も全く終えて午後三時をかぎり私共親しき兄弟姉妹は互に〳〵名殘をのこしてベルの音と共にドーアを開け階段を下りるのである一人、二人、三人ぞろ〳〵と親しげに話しながら門を出て行く、何れも聖き神の宮殿に半日を暮して、溢るゝ許り强の愉を胸に貯へたので歡んで家路を迎るのである、群集の顔にも滿足と安心との色が仄見えて居る。

かはる思ひ

信濃　靑葉

鉢植の秋菊が、獨り、淋しさうな憂れた影を疊に落して、室内の物總ては、今、夜中の平和の夢路を迎つて居る様に思はれる。時々、苦しさうになされるお父様の咳が妙に頭に響く。妾は、一雄様への返しを書かうと筆を握ると、何となしに氣が騷々して落ち付かない。「あゝ、妾はなんで遣臣心になつたのだらう。君枝様が何で羨ましいのだらう。俸給だつて妾の方が上だし、容貌だつてずつと〳〵……、夫れに家庭だつて、君枝様より幸福だのに、まあ、なんて、妾は馬鹿だらう。でも、毎日、あゝして、光二様と親しさうに話して居らしつしやるのを見ると、如何しても、妾は、君枝様を羨まずには居られない。といつて、妾は、光二様に何の彼のといふ心は毛程もない。いえ、妾には、一雄様といふ立派な、光二様より、ずつと〳〵立派な……、さうして、何時も、親切に慰めて下さる。光二様だつて、私に親切にして下さる。妾さへ其氣なら、君枝様より、却つて可愛がつて下さる。けれど〳〵、妾は、何だか光二様に口をきゝたくない。君枝様への顔あてにも……。今日など、あゝして、教室で向ひあつて、楽しさうに小説など見て居らつしやるを、如何しても、君枝様を羨まずには居られない。全く、妾は悪魔にみいられて居るのであらう。あゝ、既う遣臣な事を思ふまい。一雄様に對しても申譯がない。」なんて、遣臣事を想つて居ると、チリン〳〵とベルがなつて、ごめんなさいと優しい聲。妾は、思はず厭な人つと咳きながら立たうとすると、既う障子が開いて、這入つてゐらつした。「よく、まあ、此の御寒いのに、」と云ひながら、座蒲團をすゝめて、茶をさして居ると、君枝様は、無雜作に風呂敷を解いて、立田姫をお出しなされ、長々有難うと、机の上にポンと置かれた。一寸と、封筒の上書を御覽になつて、「東京の義兄様の所へ」、つて御聞きなすつた。妾は、聲高に「えゝ」と答へて、例にもなく平氣だつたが、君枝様は、疾ましい、淋しい、何とも云ひ様のない寒い笑をお洩しなすつた。そして、何時も活潑の君枝様が、此晩は、妙に鬱いでゐらつしやつた。けれど、妾は、別に、強いて引き立てやうとも思はなかつた。「まあいゝぢありませんか」、と云ふと、「何だか、頭が重い様ですから失禮します、」と、もう、前を掻き合せてゐらつしやる。「ぢや、妾も一寸そこまで」、と、手拭を持つて表へ出ると、

露を帯びた夜中の櫻花嵐が、ヒー〳〵と着物の裾を吹いて、妾は、思はず「寒いのね」と云ふて、ショールに首をうづめた。普光寺境内のアーク燈が、時々息を窘ませて、淋しげに見いて居る。パツ〳〵とベルの音がすると、大きな包を負ふた長い影を殘して、自轉車が通り過ぎた。哀れな、憐を乞ふ様な按摩の笛の音が、後の方にして、カラコロと夜中の寂寥を破る下駄の音が、沁んみり胸にこたへる。二人は、無言のまゝ「ツヽキヤ」と、色鮮かに記された瓦斯燈のある吳服屋の前へ來ると、インバネスと、アヅマコウトとの、若い二人連が、厭になまめかしい香水の芳を殘して、店をのぞきながら、妾等を通り越して、さつさと行てしまふ。君枝様は、凝と見てゐらつしたが、又、沈むでしまふ。突然、君枝様は、「あなた光二様の事御聞き？」、」「光二様の事つて何？」と云ふと、「あなた御存じないの？此頃に結婚なさるさうですは、」とおつしやいましたので妾は、吃驚して、思はず、聲高に「あらまあそう、妾は一寸も知らなかつたは」と云つて妾は、別に、詳しく訪ねやうともしなかつた。けれど、此瞬間に、妾の鼓動は、怪しく響き、胸が開けたやうな氣がして、云ひしらぬ壯快の血汐が滿身を流れたやうに感じた。君枝様は、矢張り無言のまゝ俛首れて歩いて居られる。電話局の角を曲つて後町へ出ると、急に人通りが多くなつて、本堂まで、兩側に續いた電燈が、眩しげに、赫々と夜中の街道を照し、人を照し、家を照してゐる。けれど是れ等の花やかな夜中の景色は、何一つとして、もう妾の目には映じない、妾の腦には止らない。「ぢや、こゝでお分れしますは」といつて、暫時ポストに身を凭せて居ると、君枝様は、矢張り悄然して歩いてをられる。妾は裏通の方へ運ると、急に、君枝様の淋しい笑顔、沈みきつた容子が、あり〳〵目の先に浮むで、氣の毒な様な、同情したい様な感じが、胸一杯になつた。そして、澄み渡る普光寺の鐘の音も、妾の耳には、宛ら光二様の無情を告める様に聞えてくるのである。

女學校卒業の前後

君枝

三月二十四日

今日でやつと苦しい試驗も終つたが 明日は物理の試驗があると先生から言ひ渡された 時の大騷ぎしたこと何ページあるの少いの多いのとあちらの隅でも向ふの階子の下でも 本を袖に入れて見て居ると誰か一人番をして居てホラ先生が居らしたと云ふと 狼狽てゝスマス風の自分もあの様かと思つてお可笑しかつた事もあつた。

だん〳〵日が迫つて來るに従つてヤレ誰さんは 東京に行らしやるのですつてネあなた何學校にお入りになるの等寄ると障ると 其話許りもう遊戲圓木やテニスして面白く暮すのも今日限り今日は答案頂いた。 喜ぶ人も不平の人もあつた。 仲の好い友達が二三人寄つてはあなた先にお見せなさい何甲々等いふ聲も處々に聞えた。

二十五日

今朝は何となく氣か落附いてがつかりした様だ。 あまり好い天氣なのでお庭に下りてポチを相手に遊んで居るとお玄關の方で 郵便の聲がする急いで行くと 從兄から又面白い事をおつしやつてお寄こしになつたのだらうと思つて見るとほんにいつも〳〵笑談許り 今度こそ負けずに御返事差上げようと種々考へたが自分の氣象としてか 出ないのは殘念であつた。斯様に遊んで居る事は好いが淋しくなると又卒業式が心配だ何番だらう鈴木さんのお叔父様か見にいらしやると云ふか もし尻から數へる方が早い様な番號だつたらどうしようと床に入りながらも 心配だ。又卒業してからどう仕様か等くだらぬ考へを起した。

一日　後

考へれば月日のたつのは早いもので悲しい様な 喜しい様な卒業式も無事に濟んで美しい紀念品も頂いた。 今日は卒業したことをお兄様にお知らせしたがどんなお返事下さるだらう樂しみに待つて居る。 從兄や友に手紙書いてポストに出しに行くと 石渡さんに 御目にかゝつた。何だか袴ばかりはいて居たものだからいつも着物の着様が 下手のこと皆に笑はれるが自分ばかりと思つたら 石渡さんもお可笑しな着方して

いらした。午後から本箱や机の引出しを掃除する座りつけないものだからシビレが切れて仕樣がない。夜新聞を見たら女學生の〇〇と云つて恐しいことが記してあつか。あゝ恐しい〳〵そんな星の盃のと騒いで居る人々にいつも聞くありがたいお説教を聞かせたいと思つた。そんなことを見たり聞いたりするとやつぱり田舍に父母と共に樂しく暮す方が幸福だと思つた。

二日

久し振で雨が降つて居る今日母樣が日本髮に結へとおしやる何だか氣まりはづかしくて外に出られぬからと申上げると雨が降つて居るからと折角おしやつて下さるので結んで頂いた。いやに頭が重い髮をかこうと思ふがどうしても丸髷の銹が附いてかけない。午後からバイオリンを出して姿見の前に立つて彈く我姿をうぬぼれらしく見詰めて居るとひよつと氣が附いて後を見るとアラいつの間にか兄樣が見て笑つて居らした隨分氣まりが惡るかつた。今晩は高枕で窮屈だ、雨も少し止んで隨分淋しいなんだが今晩は眠られないので色々卒業式のこと入學當時の事ども思ひ出された。自分が女學校の入學試驗に及第した時の嬉しかつたことゝまるで大學にでも入れた樣。イヤに威りたかつて小學校の生徒などに逢ふと馬鹿に胸を突き出すが上級生に逢ふと小さくなつてゐる。又上級生になると道で逢ふて挨拶をしないとなんだ新入生の癖になど云ふ。學校の中でもテニス、フートボル抔して運動場逃げ廻るが新入生は小さくなつて隅の方に見てゐて蔭ではいつも惡口をいふ自分も經驗があるから好く知つてゐる。

三日

今朝起きて見たら枕が遠くにあつたので皆に笑はれた。母樣に髮を梳で附けて頂いて遠に出て三越タイムスを見たがほしい物許りマア好いコート御覽なさい此模樣を父樣に申上げると ほんとに女の子程うるさいものはない朝から晩まで着物の話許りすると笑つてゐらした。午後バイオリンを彈いて居ると兄樣からおはかき下つたマア可愛らしい西洋人のベビーが母樣らしい人に抱かれて遊んで居るゑはがきアラ嬉しいお禮にリボンに三ツ櫛を送るとある早速母樣に申上げるとほんとう餘計なお小遣を遣つて困るネといつていらしやるが樂しみ〳〵でどんなの下さるだらう。巾の廣いのだと好いが男だからお氣が附くまいまして兄樣は至つて無頓着の方だからそれが心配で早く明日がくればよい。

ある夜

海棠女

西新店にお湯が御座ゐますと、松やが云つて居た故用事をすませて、樣と洗粉手拭とを手にして裏口を出た、お月樣は早高く出て居るのが、お倉の屋根をこして處々に陰をうつして居る、………ひつそりとした暮秋の夕、駒下駄の音が耳立たしく聞ゆ、長い倉の軒下を通て、路次、をあけて外へ出た、

あゝいゝ月。綺麗な光、………萬物は皆神聖………木の葉も枯枝も空氣までが、銀色に光て居るやうは思はれる、向の松の枝ぶりのよさ、ちようど錦に織込だ景色のやうだ、足もとの水仙の花、まばらになつた樹の下に、かり住ひの如く、白くゆら〳〵として居る、芳しい薫りがぷん………と來る、白く床しい花がなよ〳〵と何とも云へぬ眺め、仙境とも云ひたいやうである、

今日あたりはお醫者が見えそうに思はれる、何やら氣がせいて急いでいつて歸つた、

盥の水で洗をふかと思つたが、裏の井へ行て見やう松の枝が水に映てそれへ月がさして居るのが水に映てゐるだらう、銀杏の枝柿の木の骨ばかりが天をつくやうに立て居る、其へりに、蘇龍が可愛らしい赤い實を附て、しようぼりと、松の巣のそれの如く操正しく立てゐるのに、月がほんのりとさして居るだらう、見る物皆詩的だらう、おゝいゝ景色それを見やうと裏へ出た、

殘念やまだも少し月が昇らなければ妙所でない、井の中は眞闇がり、松

り枝がかゝめば取そうに映て居る、非常に失望して急いで顔を洗つて歸つた、

お座敷へ行くと叔母様は拍子ども取りながら 謠をうたつて居らつしやる、 お湯上りのほてつた顔をなでながらぼんやりとして居ると、敷石づたいに靴の音、 私の思つた通りと、急いで台ランプに火をつける、お蒲團を進めやうとすると早座について居らしやる。

容體などお問ひなさる、 一寸溫度表を御覽になつて早目はお床の掛物に移る、 しきりに見てゐらしたが御立派なのがかゝつて居ますれ、誰ですと床の前へ近づかれました、 私は何とも答へないで、あかりを近づけた滲屋ですかよく出來て居ますれ、よ程やかましい物なんですよと、 こちらを御覽なさるよく知らない私と叔母さんはそうて御座いますかと一所に答へた、

煎茶を進めた、 先生はお茶をあがつてすぐ診察なさる、御手洗湯も出してすんだ、 叔母様は病氣について何やかやお問ひなさる、 先生はつばをつけては鬚な上へ上へとおひねりなさりながらお答へなさる、 ほんとに宜肥えた方、 いつもお湯上りのやうなほんのり赤いお顔に、金縁目鏡がきら〳〵光つて居る。

叔父様が葉卷入の箱をさげて出て居らした、 病人はそつちのけと云つたやうに書畫の話ばかりなさる、 之で三度お茶をかへたと云ふ時、叔父様が可笑しそうな顔して、 なんと相場師と云ふものは妙なものですな……一方の畫を非常に珍重するそうですな、 なぜかと聞ますと、もうかる一方だと云ふですそうな、

先生笑ひながら、損する一方ではないのですがと、 それですな庭瀬の木村に新築の床に一方を掛て居ましたがやはり 相場師のもうかる一方なんですかとお笑ひなさる、 私達も可笑しく、つい笑聲が高くなつた、其と反對に竹孫の畫を非常に厭うです、ちく〳〵損するそうですと叔父様がおつしやる、

先生そんな人がよく有るもんですよ、 いつか倉敷の大原へれ泥はいりませんかと賣りに來ましたそうです、 すると主人が非常に怒こり何あし、あしなんぞ何にするわし何でも「あし」と云ふ事は いやじや、よしなら買てやると云はれたそうです、 なぜかと聞ますと、惡しと云ふ事は何にかけても惡い、 善しならばなんぼでも買てやると云はれたそうですと、皆大笑ひ

先生は次へ〳〵と書畫のお話して歸られた、 後で火鉢を見るとしきしまの吸がらが十一本もありました。

寫眞帖に現はれた人々

土佐 宮内ゆき子

昔話を十も續けて、 美鶴子はやつと夢に入つた。 もー七時だのに、湯殿のにぎはしい事、 小父様達のだみ聲に交つて、 若々しい笑聲も聞へる。「一寸皆様待ちかれるんでせう、これでも 御覽なさいな」。例の寫眞をもちだすと、 がらがらと、 くぐり戸の音がして、 兩髮が三つ、等しく黃色な顔を、 其所へならべる、 手藝學校の生徒である。 御年役にお近さんが手を出して、 知らない人ばかり、 我關せず焉、 といつた風にずんずん見て行く最後に現はれたのは大形の寫眞、「マー澤山な人。ホホゝゝここに奥様が」「ドレ」「ドレ」と二人か眼を見はる。

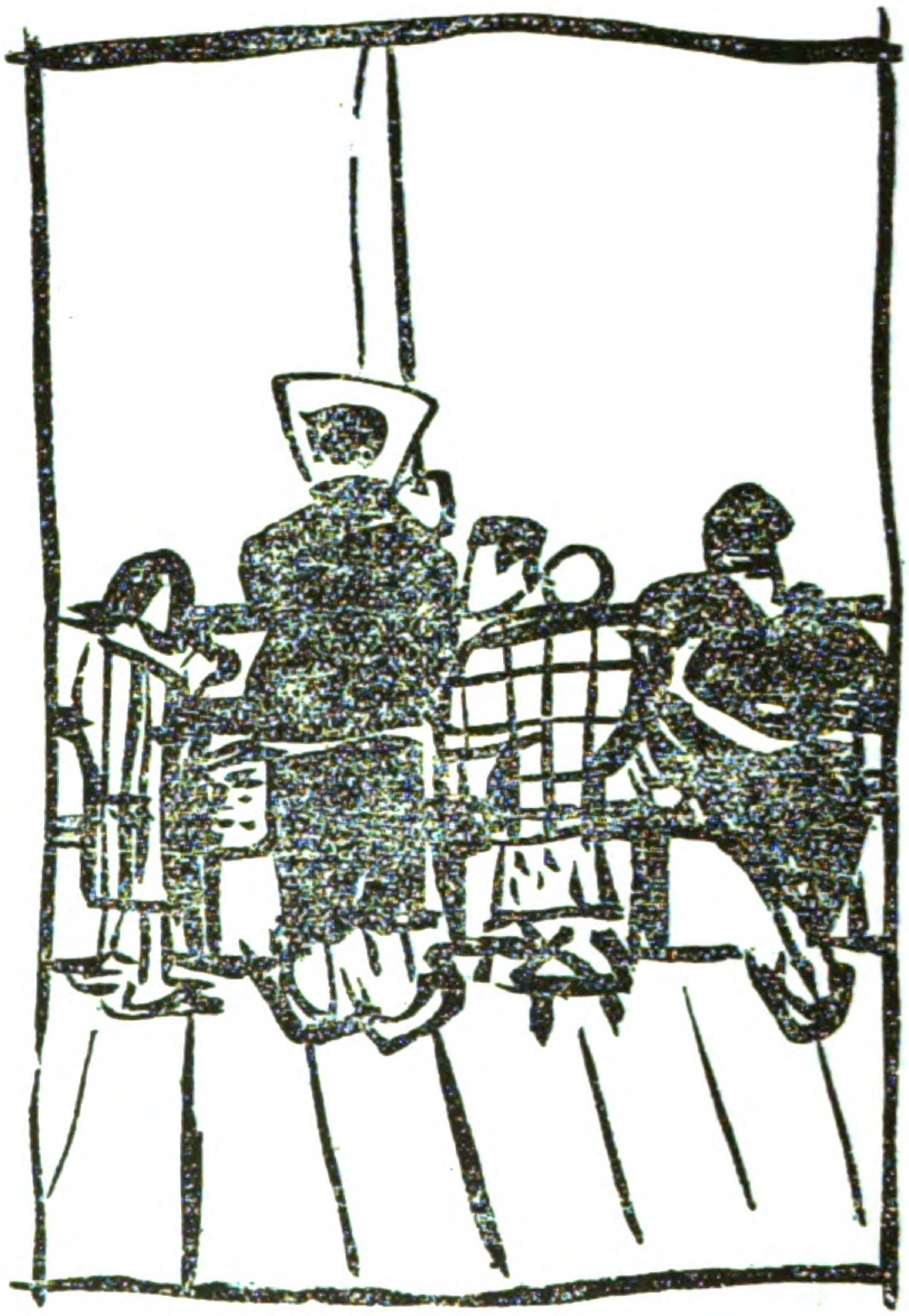
「ホホゝゝ可笑しいでせう、卒業の時のですよ、皆餘所ゆきの顔ばかりしてるんですものネ、 エエ、 まう大方御母様になッて いらつしやいますよ。 上の學校へいつてる方もありますけれども、 そら私とならんでる方、ネ、 なくなられた和様ですよ、 こんなに肥つて居らしつたのにネー……。 二列目の中程に美しい方が二人、 忠子様と、 お濱様と、後の右に紋付召した淑様、 小說的三美人と申してましたよ、 今は、旦那様と東京に居なさるさうですの。 淑様の右が文子様、 新聞記者です。この露様が私と一の友達、 歌と文章とが御得意で、 それはそれは面白い活潑な方、 この方が榮様、 よつく女子の友へ投書なすつたッけ。 眞中の美しい日本髮が隆子様、 交際上手の海軍士官の夫人です。 金ぐさりなんか衿へ掛けて被入ゐますよ。 それはネ大勢の中ですもの、 種々な方がありますとも、 全く十人十色ですよ。 私の、 今はちつと御母様ぶつて居ますけれども、 隨分御轉婆でしたよ。 運動會で競爭もしたし、ラツケツトもふりまはしましたけ。 朝結ッた桃割が夕方にはいつも日

和を見て居ましたつけ。ホホヽヽ、全くですよ、人はわかひ時が一等面白いんですネ、貴女達位が花ですよ。かう古女に成ッちや、もダめですよ、ホホヽヽ」。「次はだれ？出るから、かまへて下さいと」。新に來た人であらふ、かん高い聲で、湯殿の方からしきりに呼ぶ。何だか、人なつこひ夜だ。

使

相模　角田秀子

之れから一里半計歩いて少し汽車に乘つて或る町へ使に行くのだと思ふと何だか詩的な感がする、家を出ると、外は、鮮やかな光が滿々として居る。近所の者にも逢ふた。未だ寢亂れ姿を仕て居た。駄菓子を持つた末の女の子を背負て向ふの方から歸つて來たのだ。歩きながらホッと長息をつくと同時に忙しなく出て來た事が意識されて何か强い考へ事でも仕た樣にきッとした頭が澄んだ、淸新な、朝の空氣に彩色の鮮やかな、四邊の景色に覺めた樣な心地になる。でも何が物を想ふ樣にうなだれて自分は急ぎ足に村端れの學校の前まで來て了つた。細い流れの橋に懸ると、からころと自分の下駄の音を氣にした。水の面には長く影かゆらめいてる。後ろで學校の窓から先生でも見て居る樣だ、氣かして渡つた。之れから人家が無くなる。茲を獨りで行くには餘り寂しいと云ふよりは、寧ろ恐ろしく感じる女の不安に……行けば遠く山——畑田——仰げば靑と澄む空に一物も無い。野、道邊の畜厩、枯れた色たゞ眼に入る、自分の足音さへ怪まれる。葉も無くて枯れてる樣な、いばらの枝に少さな、赤い實が取り殘された樣になつて居る、其の下を、ちよろ／＼と流れの音ばかりが靜心無く聞える。野の靜寂に野のさゝやきを、聞く自分の心は一層淋しい。春の頃此の邊な通ると、長閑な、暖い陽か當つて畑の堤には、可愛らしい菫の花が咲いて居る。而して床しい鶯の音か……追懐は返へり咲きの花を見る樣だ。



釣　　青森　松尾千代子

向ふの山で薪を伐る、音が寂しく聞える、野を行く自分は、山の麓に倚り添ひ度い樣に心細い。

嬉しかつたのは、道連れが出來た事だ、其れは山越して里へ歸へる若い女で在つた。籠を背負ふて中からは大根が見えてる。手拭を被つて藁草履を穿いた見も知らぬ人で在る、淋しさは、終に此の二人を語らしめた。之れも斯ふした何に物か不可思議な、緣であろう。同じ年頃——同性——田舍風——と云つた所が妙に嬉しい。山蔭の道端に霜の樣な、冷えた灰が在つた、行き暮れた乞食、落ち葉たき火杯と、思ひ浮べながら主でも住む樣な池の邊を行くと、冷やかな嵐に、すゝきが戰いて居る。何處かで百鳥かけたゝましく鳴いた。里へ出ると、彼方此方の家へ冬の日が當つて道邊に行列して居る、藥束には、今朝の霜がとけて、幽かな煙の樣に立つては消えて居る、此の里にふさはしい老爺にも逢ふた。連れの女にも別れ

て。見送ると、女の歩みは一入遠くなつた。職務に多忙いのであろう。日向ぼつこの姿も見へない。停車場で二十分待たなければならなかつた。自分は待ち合ひ室の一隅で見るとも無く見、聞くともなく聞いて居た。話してるのは筋向ふの一組だけで他に、自分と同じ様な、獨りぼつちなのか二三人に過ぎない。中一人の西洋婦人は、小形の洋書を默讀して他は時に出たり這入つり仕て居る、筋向ひの話は平凡なもので在る、三十前後の婦人が二人で頻りに受け答へを仕て居るに過ぎない。其れへ絞る様な、愛嬌を振り散して、枯れた様な笑ひ聲を側て聞いて居ると態とらしくて、厭な感じがする。其の傍に妹らしいのが居て其れは、絶えず微笑を湛へて居て、然かも一言も語り得ないで居る、年頃十九位の當の花、やゝともすれば春の色を、眞の豔かな、頬に包み切れず一脈の暖かみと、恥らひは知らず〳〵あらはれて居る。島田の髮に簪の蝶も舞ふで在らう。暖かな室、銚釜、花染の長襦袢、紅絹の衣裏抔と、つぎつぎに此のうら若い人の花やかな人の青春を連想させるので在つた。處女時代の思想は名殘なく變化して居る、二人の物語には、恐らく此の若き人の笑みは沒交渉なものであろう。平凡な對話の内に、何物か互に敗けじ劣らしとする、暗鬪がほのめく様でも在ッた一寸と、話がと絶へて一方の婦人が室を出た。火の無い中央の暖爐が一層室内を寒からしめた。北窓の硝子越しに絶へず山の草木が戰よいで居るのを見る、けたゝましいベルの音と共にぞろ〳〵プラットホームに集つまつて來る、布子着た田舍の老人や、コートに身を包んだその婦人連れや。人は皆々冬の姿である、逗子の停車場は、寒い風が吹いて、自分は思はず肩掛けに顔をうづめた。

墓前の尺八

牛込　平塚白百合

ご遺愛の鹿毛にまぐさをはまして、寢床をしいてやつて馬小屋から出ると、物影もないやうないい月夜、例の法被をはをつて青山墓地へといそいだ。

永年つかへた將軍は一週日前土の下へと葬られたのである。青山通を左に折れて進むと邊はひつそりとなつて電車のベルの音がかすかに遠から聞えるばかり墓地の邊は淋しい、いはゞ灰色の死のかげおほうて居るといつたやうな陰氣な氣がみち〳〵てゐる。

けれども空ははれ渡つて星もまばらな月の夜である。

さむい木枯にふるひ落された枝もあらはな銀杏樹の梢にかゝつてゐる月は角の石屋の大理石の墓石にてつて白く光つてゐる

一足墓地に入るとしめ〳〵とした土のにほひは肌をおそふて、どの墓前にもしきみがかれ枯にさゝげられてある。いくつかの墓前を過ぎて左に曲ると今にも絶え入そうな尺八の音が細々にひゞくかすかに傳るのである。

あゝ此の月の夜尺八の音、二年前滿洲の野營に聞いたそれを思ひ出さずにはならないのである。

荒涼たる夜營の陣ではあか〳〵と盛に火をたいて此處かしこ一圖と散つてゐる。見はたす百里の滿洲の野は月の光に皎々とてらされて、しづかにふけてゆく其の夜、月下に吹き出たれた尺八の妙音、隣までもしみつてたゞもう物音もなくヒッソリと咳のこゑさへ聞えず、ほしいまゝに尺八の音が流れた、何事か密々議して居られた將軍も老の身を忘れて寒風すさぶ山上にさらされながら一夜をきゝあかされたのだ。

と過ぎし戰地のさまを思ひうかべて今は世になき將軍のおもかげ思ひながらしらず〳〵涙を流したのである。一歩〳〵近きゆく墓前に尺八の主はヒツタリと座して手向の曲を吹奏して居るのであるその後姿服こそかれは去にし戰地に別れの悲曲ふきて決死の隊にと身を投じたる面影につゆもたがはぬ巾顔の眉、來し方ゆく末を思ふてしらず足はとどめられたのである。尺八の音は高く低く餘韻ながく墓の上を流れて。

笛の音に醉はされてうつとりと墓石にもたれてゐると、カサ〳〵と落葉ふむ音、ふとわれにかへるといつの間にか尺八の主はわが前に。おゝあなたはと互に口をついて出たのはこの語。しばしは感慨無量こと

いもつゝかず立つくした、月は靜かに照りて夜風が淋しくなきたてるばかりである。

五年振り

青山清子

フランの肩掛に中ば顔を埋め、ぬげさうな草履を氣にしながら、私は友の家へと路を急ぎました、師走の冷たい凍るやうな風は、用捨なく顔や頭た撫ぜる、けれども私はそんな事には一向お構ひなして、只だ獨り嬉しい思をくり返しながら……それもその答、今日は夢にも現にも忘れかれた、親しいなつかしい友の花様を、五年振りでお尋ねするのですもの、二人は尋常一年からの大仲好、小學卒業の春、私は女學校へ、花様は、お母様とお妹さんとのお三人で、お父様の御任地の米國へいらしつたのです、そうしてあちらの女學校へ入學なさつて長い間の寄宿舍生活、御勉强の効が表はれて、今年優れた御成績で御卒業なさいましたの、それで今度お父様の御任期のお滿ちなされたのを幸に、錦を飾ざつて一昨日、五年振りで御歸京なさつたのです、「けれどもお情け深いあの母様は遂に御一所ではなかつた、」

「花樣きつとお變りなすつてよ、そうしてさぞハイカラに、長い間溜めて置いた事、何からお話し仕樣、」などと色色の事を絶え間なく思ひ浮べながら、いつか御門前まで來た、只もうわけなく嬉しい。おどる樣な胸を押さへて、お取次のお女中に名刺を渡しました、すると間もなく、今度は花樣御自身て、もう飛んで出て入らしつた、續いてお妹さんも……

「まあ暫くーと」、二人は手を握きつたきり、我慢して居た嬉しさが一度に込み上げて、もう何んにも云ふ事が出來ない、只だ嬉し涙にむせぶ許りでした、暫くして

「まあ此處はお玄關でしたに」と、涙の顔に笑を見せて、花樣は私の手をとつたまま、ずんずんと御自分のお部屋へ、轉ぶやうに坐つて、膝と膝を押しつけながら……

「ほんとうに久し振りねー」「夢の樣な心地がしてよ、」「お目に掛かつて見ればやつぱり變らないものねー」等と、こんな事を幾度も繰り返へしました、

お床の間には亡きお母樣の御肖像が飾ざられて、寒菊が淋しそうにお供へしてありました、お話の糸口は先づお母樣の御上から、二十日餘の航海も無事に上陸し、ほつと息つく間もなく、まだ領事館へも程遠き旅館で、盲腸炎におかかりなされて、なみなみならぬお苦しみ、皆樣の御介抱も甲斐なく遂に、世をお去りになつたと。それは米國に於ての第一信のお手紙で知りざんざんに泣いた、けれども今又其れを伺つては、再び御臨終の樣がしのばれて、私は滋の樣もうお氣の毒で何んとお慰めてよいやら言葉も口へ出ませんでした、「ほんとうに今度もお母樣がお居てなすつたらばさぞお喜びなさるでせうにねー、」と申しましたらば、「ええ」と、うなづきながら「あなたは御兩親樣が揃つて居らつしつてお仕合ねー、お羨しいわ、「女は母親がないと困る事許りよ、」ともう私は又胸が一ぱいになつた、花樣はと見ると、切れ長なお目をしばだきながら、ぢつとして居らつしやる、お妹樣も悲しそうにうつむひて……その内に、「まあ切角いらしつたのに悲しい事許りお聞かせしてすまなかつたわねー、」もつと陽氣にしませうと、元氣よくおつしやると、お妹樣も、「そうねー」と、ニッコリ……船中の樂しかつた事や、學校の有樣や、寄宿舍の模樣や、お話はそれから、それへと枝が出來て、ちつとも絶えない、蓄音機を聞かせて下さる、三人合せて歌ふ、笑ふ、ずいぶんにぎやか、ペン畫も見せて下さる、

お寫眞も又……

もう色々のお饗てなしにあづかつて、その上お土産のブローチ、リボンまで頂いて、夕暮おいとましました。みちみち、こんな事を思ひながら

「あゝ花樣はちつともお變りなさらない、あのお優しいお靜かな、どうしても米國歸へりの方とは受けとれない、お變りになつたのは、神々しい樣にお綺麗におなりなすつたのと、指輪の數の澤山增したのと只それだけ、漆の樣なお髮をローマ卷にして、水色の幅廣リボンのうつりよく、すらりとしたお姿、ほんに何にもかもよくそろつたお方」と、……宮益坂を下つた頃はもう日はどつぷり暮れて、澁谷川には月の影か浮ひて居りました、

私の胸には言知らぬ滿足があふれて……あゝ持つべきものは親友だとしみじみ思ひました。

都の人となりて

日本橋　杉山米子

洋燈の火が切なさそうに呼吸する、黑い煙は其度每に吐かれる、光が段々に弱くなり、屛風や、障子の陰より冷たい陰が刻々と迫つて來る。今に消えるなと、思ふが別に妾は消すまいとも思はない、火鉢に手を翳して餘念なく熟視めて居たが、ふと火鉢の緣の冷たいのに感じた、櫻炭は何時か、若う、白い衣物を被ふてる、

六月五日……

それは、底冷のする、うす寒い晩であつた、妾が都の風を吸つた二年と言ふ長い過去の歷史の糸を迴つて行くと、何時も、此の寒い六月の五日と言ふ夜に止まる。斯樣思ふて、妾は「ヂャ……」と、油をを吸ひ上げては四邊の影を動かしてる洋燈を眺めた、ふと妾は、其朦朧として消えようとする洋燈の下を見た。

あゝ六月五日、其夜の狀態、妾は知らず戰慄した。暫くすると、其の血に飢ゑた惡魔の顏が優しくなつてた、哀れな、少女の影は何時か見えなくなつた、

そうして、優しく成つた惡魔の顏が蓑はしくなつて來る、血の雫のしたゝれた凄い劔は、黑朱子の包みにかくれ、血走つてた眼は愛くるしく、黑い瞳には情の泉が流れそう。

はーと、冷たい風が私の頰に當つて流れた、拂ひのけられた、白い白い霧の中には、以前の惡魔が立つてる、そうして血に飽た笑みが見える。

あゝ、今の今、憧憬れて居つたのが耻かしく、恨めしく、口惜しく成つた、悶へた、自分の胸は縱橫に掻きむしられ、疲れ／＼果てゝ倒れた。

ふと、目覺ますと、洋燈は既う消えて、靑白い冬の月が朽ちかゝつた引窓から流れ込んでる、きつと臘の樣に成つてた妾の寢顏を照らしてたに違いない。

妾には、あの月が如何にも憎らしい、何んだが妾の魂が、既う月に奪られて、月がぬけがらの妾を笑つてるかの樣に思はれる。

全く今の妾の身體は、月に笑はられるに違いない、廣々とした大海に漂ふた、海月の樣……

誘惑と言ふ浪が押寄せて來ても、逃げ樣とも思はない、實際逃げられないから、只、恐ろしい浪のまにまに身を任す、後には、反つて變化があつて面白くなつ來た、元より、自分の身にこれぞと言ふ當度はない、今では一人としても多く自分と、同じ境遇の者を增す事のみに務めてる。なれど、人寢靜まつた、靜寂の夜半、時計の時を刻む音聞ゆる時は、如何しても身がひきしまる、行先を考へずに居られない、自分は既う、浮ぶ瀨の無い淵に沈んでるのだ、ふと夕べまで往き來の人を汚れた淵に誘なうとした罪の、今更恐ろしく感じる、妾は既う／＼、昔しの淸淨の身には復れない。

妾は田舍物だ、二年程前迄は、靑い田と綠の山の外には何も知ら無い女だつた。

うら若い妾には、田舍の親切と都の親切との區別が出來なかつた。都の親切と言ふものには誘惑がある、薔薇の花の樣で紅粉の粧が美しい其の色香に迷ふ傷しらぬ子は、間なく其の淸き翅を毒の刄に汚さる。

妾も、其淸らかな蝶の子であつた、都の濃い虛榮の影が、淋こい田舍の教育にうつつた時、妾は憧憬ながら都の人となつたのである。

薔薇の花の色香は絕間なく、我が飢へた身を襲うた、妾は終に其一瓣に觸れる機會に出會した、自から求めたのだ、

霧の晴れた時の樣に色香に溺め、誘惑と戰ふとした時は、既う羽はちぎれ、胸は破れ、浮世の風になぶられたまゝ、妾は霜の荒野をさ迷ひ迷ひ汚れし淵に落入り、今噎き／＼底に沈み行くのである。

堪へがたい胸の病みに悶へた妾は、ふと頭をもたぐると、棚の化粧鏡に寫つた妾の白い顏に、紅の香が黑く滲つた。

妾はこの淺まししい姿を、見堪へないで倒れた。

「ぶろいゝ」と、風にあほられた破れ戶を洩れて、師走の街を閉め殘つた店々の燈火を便り／＼、たどつて行く辻占賣の聲のさびたか弱い聲と、調高い下駄の音が聞える

妾は、辻占賣と自分との幸なさゝを引竝べ始めた……あゝ、妾はこの先如何いふ運命の經路に弄ばされればならぬかしら。



一等 短篇小説

復讐

當選 秋山欣子

私はもう決心した、猛烈な復讐を試みる爲に、或手段をとるべく決心した、で殊更念入に夕化粧して、靖樣の下宿を訪ねた。正面に名乘つちや駄目と思つたので、態と第三者たる藤井樣の名をかたる、とやがて靖樣が降りてきて梯子段の處からヒョイとのぞく、私は御辭儀するでもなく險しい眸にチラと笑をみせた、

女主人の手前不承々々に、「まあ上りたまへ、」といふ。居間へ入ると、靖樣は障子をピチンと締めてむきあひに座る、不安氣な眸を強いて包まうとするらしく見えるのがもう私には心外で〳〵、ニコリともせずに居ると。「何か用があるんですか、」と恐る〳〵訊く、

「ホヽヽ、」私はつい失笑した、靖樣は眩しそうな目をして、心の底を讀むかの樣にまじ〳〵とこつちをみる、

「どうしたんです？」今度は少々男らしい聲、

「え、どうもしやしませんけどもね、とんでもない藤井樣が舞ひこんで、嘸御失望なすつたでせう、と思つてね、ついホヽヽ、」「馬鹿な、」と苦笑して、「兎に角、用事を伺ひませう、」「はあ申上ますとも、」と眞劍になつて「あの私ね、少し思ふ所がありますから、これ迄の二人が事をありのまゝに、あなたのお父樣へ申上げ

る積で草稿をかいたんですが、一寸見て戴こうと思つて、」と極めて冷靜に構へて、原稿紙へかいた一篇を出して「それから、こんなもの屑屋へやらうとしたんですけれど、もし御入用ではと思ひ直しましてね、持つて參りましたの、」と、手紙やら、寫眞やら、カードやら、以前二人が情熱の海に溺れて望むは幸の影のみだつた頃靖樣から送られた――を押しやつて、どんな反動があるか、と待つ間を好奇心に輝く眸を凝と其顔に移したチラと見た靖樣の目には、それは凄まじい恐怖の影が現れて「柳樣！貴女一躰何と思つて、」と憐を乞ふ樣にいつたが、ふつと調子を更へて「ねえ柳樣、僕は、僕は今大望のある身なんだ、ねえ、そりや柳樣が怒るのも無理はない、尤だか僕の身にもなつて呉れたまへ、藤井との事は、僕は是迄ちつとも知らなかつたのだから、柳樣ともちかつたのだ、が今更辯解したところで柳樣の誤解をとく事は望まれんから、甘んじて侮蔑は受けやう、併し父へ話す、それだけは斷じて止めにして下さい、え柳樣と、」唇をなめて情なさそうな吐息を白く吐いて「ねえ、僕斗りぢやない、これから新生涯へ入る柳樣の爲にも、」「否構いません！」と鋭く腰を折つて「一旦ふみにぢられた殼ですもの、ねえさうちやありませんか、壓へる樣に云つてすつと胸を張つた。

藤井園樣と靖樣とは許嫁の中、私はそれと知らずにだまされて、今度二人は結婚するといふ、私は格別、胸もさわがなかつた――實は靖樣の品性についてや丶飽きたらなく感じて居た時だつたので、が其儘不關焉として濟ますといふ事は大いなる恥辱だと考へた、で褪せたる戀の勝利者としてヴアニチーを滿足させる爲に猛烈な復讐手段を講じたので、今其手段によつて、棄てられた自分が、反對に棄てやう――といふ目的に向つて驀進しつゝある、そして形勢は刻、一刻に良い方に移らうとする。萎れた聲で「柳樣、あなたも昔とは變りましたね、ヰオロンを敎へて呉れた時代はもつと僕にも優しかつた、」靖樣はしみ〴〵いふ「え何ですつて？動機がなくつちや變りませんわ、心つてものは、」キユッと上唇をかんでまともににらむ、靖樣は額を押へて「そりあ全個僕が惡い、が藤井の件を知らなかつたのは事實なんだから、父へ話すなんて無謀は、撤回して下さい、ねえ、」沈みきつて手をつかん斗にいふ。私の胸は勝利を得た新らしい歡喜に高鳴つた、けれどもこれだけではまだ〳〵限りないヴアニチーを滿足さ

せるのにはあまりに輕い、もつと〱涙をみる必要がある、一旦捨てた命の器を再、拾ひ上げさせる必要がある、約めれば、褪せたる戀を復活させて、其上で今度は反對に、捨てられた自分が、捨るのだ、そして脅迫してまでも自分といふ者を、永劫に、對手の胸へ深刻に印象させねばならぬ、否、彼の靈魂が宇宙間に滅せ



繪日傘　近江　若井きくえ

ぬ限りは、川路柳子の四字を片時も忘れぬ樣に、彼の腦へ鋭く彫んで、そして棄てねばならぬ、でなければ破壞された女子の節操を囘復する事は出來ない、ふみにじられた女性の尊嚴を挽囘する事は望まれないのだで――棄てられたものを反對に捨てる爲の術策――と暗に良心へ謝罪して、

「私だつてもね、鬼ぢやなし蛇でもなし普通の女ですもの、強いて冷やかになりたかありません、弱い女ですもの、矢張昔が懐かしう御座い升わ、けれども其懐しい昔に復す事が到底不万能だと悟りましたからこそ、こんな没常識な事も行ろうつていふんですわ、」と蜿曲懐柔策をとつて、態とホロリとなる、

「ね？」意外の眸に凝と見返した靖樣は、つとよつていきなり柔に手をとつた、「柳樣、それは眞個？」「え？」と斗きゆつと握りかへしたもの丶、今私の胸には不快の血潮がむら／＼と湧いた――一面には勝ちお丶せた喜悦を包んで。藤井樣を抱いた腕、自己の罪惡を飽くまで隱さうが爲に、良心を僞つて、一度路傍に棄てた蜜なき花に再與へる冷やかな息、それはいふ斗なく嫌惡の情を刺戟した。また私にしてもさうだ、自己の自尊心の傷手を癒やす爲に、弱者に向つて侮蔑を加へる爲に心にもない笑を作つたのだもの、冷えきつた涙を働かせたのだもの、情の血が何の波立たう、熱の炎がなに燃ゑさからう、唯一方は儚い戀の勝利者たらんが爲に一方は自己の沈淪を免れたいが爲に、冷やかな、上面のみの握手を交換したのに過ぎない。

「で、藤井樣の方は奈何する積り？」強いて親しんだ調子で聞くと「親父にいつて破談にする、」といふ

「そう、なんといつて、」「ウム丶丶丶」靖樣は仔細らしく「ね、可いだらう、え丶？」耳へよせた口を離すと、目を見合つてにつこりした、

「それなら成功してよ、だけど屹度？」「勿論、」と大きくうなづく、

「うれしい!!!」力を籠めていふと、今度は私から手を出してすがる樣に握りしめた、そして媚るやうな笑を洩した、

お丶此笑！此笑!!此悲しい笑は、やがて靖樣を破滅の淵へ蹴落し、同級の、しかも睦まじかつた園樣の涙をみて、狂熱な女性の誇の前に、更に、大に繰り返へさる丶事であらう、涯知らぬヴアニチーの前に、更に、更に快心の笑をなす事であらう。

一直線な書き方ではあるが筆に力を入れて眞面目に行りおほせたのが此篇の取りどころである。(評)

此篇近代的の色彩を帶びて居るのは勿論だが猶ほ其閑葛藤あるを免れぬ樣に見えるのは其背景に直接生活が無いからであらう。今後作者の一考の爲め再言する

二等

町育ち

東京　しげ子

電車を下ると日はとつぷり暮れてゐた。ゴー〳〵いふ樣な風は落ちたが、此通りは町幅が廣いだけ、鋸の齒の樣な粗い空氣が鼻や手先を挽切つて行く樣。私は頭巾の上に襟巻をすつぽり巻つけ、肩を竦めて前屈みに歩いて行く。今夜は又咳で眠られない事だらう。今夜に限つた用でもなかつたにと後悔される、角の大野屋の前迄來た時私はふと妙な事を思ひ出した。それは此大野屋といふ呉服屋にお東さんといふ一人娘があつて、私とは小學校の友達だつた。色の白い、すらりとした、特色もないが僻もない顏で、極内氣な、それでゐて町育だけに何處か仇つぽい處があつて、私の母などは好い娘だ〳〵と始終ほめてゐた。さ程親しかつたのでもなし、卒業後私は山の手へ越して高等女學校へ入る樣になつたので、自然と音信不通になつて了つたが、昨夜だつたか一昨夜だつたか、ふと其娘の夢を見たのであつた。どんな夢だつたか目が醒ると直忘れて了つたが、今暖簾を見たので幽な記憶が再び浮上つた。

どうしてゐるだらう、もう十年も逢はない。一寸入つて見樣かと迄思つたが店員が大勢ゐるし私は平常着の儘で出て來たからと思つて、通り過ぎるどうもどうも氣になつてならない。

お父さん――大野屋の主人――の氣輕に引變てお母さんの佛頂面といふものは、容色も惡しお世辭もなし青脹れの嫌な女だつた。生れは高家の娘で一度軍人とかに嫁いたが、夫の死後どうとかした譯で大野屋と夫婦になつたのださうだ。お東さんは連子だといふから其軍人の胤なのだらう。長唄は幼い時から習つてゐて上手の評判があつたが學校は餘りよく能る方ではなかつた。時々先生の惡口など、顏に似合はない巧い事をい

ふのが、三度に一度は耳に入つて小言をいはれると、眞赤になつて涙ぐんで了ふので、先生も强い事はいはれなくなつて了ふ。

高等三年ぐらゐから大變芝居通になつて、よく音羽屋だの成田屋だのと、遊び時間には大勢集めて、低い落付た調子で、鹽原多助の話しなどには衆が泣いたのを今でも覺えてゐる。私などは羨しくて、

「いゝわねえ、お東さん家ちやちよい／＼芝居にいかれて」、といふと、

「よかないわ商家なんぞ――、お邸の方がいくら好いか知れないわ」、と心から嘆つ樣な顏をする。

其頃菊の助といふ役者がゐた頃で、其役者の寫眞を、素顏だの舞臺顏だの取かへ引かへ持つて來ちや見せるので、しまひには衆がからかつて、

「お東さん菊の助をお婿さんにするといゝわ」、などゝいふと、

「いやあよ―家ぢや商人だけれども官員さんでなけりや婿にとらないつて、お父さんが然いつてゐるわ」、と云つたので、それからは官員さんの奥樣／＼とからかつた。

卒業した――たしか翌年だつた、校友會か何かあつた

時、お時さんは上品な高島田に、緋鹿子と黒繻子と腹合の帶を締めて、めつきり娘ぶりも上り、まるで芝居のお染のやうな娘になつて來た。年長の口の惡い連中などは、

「あれぢや官員さんにや向かない、やつぱり菊の助の方だ」、などゝ云つてゐたが私はそれぎり逢はない。

こんな古い事を思ひながら私はいつか寂しい脱裏へ入つてゐた。こゝはしもたやばかりで一軒隔ぐらゐに軒燈が出てゐるが、道がでこぼこしてゐて足元が惡い。黒板塀の上に、雪釣をした松の出てゐる家では謠曲を謠つてゐる。私は又變な事を考へ出した。

「お東さんは死んだのぢやなかつたかしら――」、

然し是も夢かもしれない――、否々、夢ではない樣だ。

「大野屋の娘さん死去ましたよ、可哀想に餘り苦勢をしなすつたもんだから」、と髮結か誰かゞそんな事を云つた。

「お婿さんを取らないうちに子供衆が出來て――、お店の者だとも大野屋の旦那だとも云ひますが、まさかお父さんがねえ――、でも異つた仲にしては餘り可愛がんなさるもんですから、世間ぢやそんな事をねえあなた―、

あゝ夢ぢやない〳〵、あの髪結が鏡面を覗き込んで囁つた狀が歴々目に殘つてゐる。さうだ、お東さんは死んだのだつた。

私の小學校の友達はどういふものか皆早く死ぬ。今一人お淸さんといふのがあつた。裁判官の娘で矢張り溫良しい人だつたが、十六で海軍の軍人の處へ嫁つて十日程經つと、子宮何炎とかいふ病氣が出て死んで了つた。嘗て裁縫の先生の死去つた時一級から三人づゝ總代で悔みに行つた事があつた。私の級で指定されたのがお東さんにお淸さんに私。お東さんも死んだ、お淸さんも死んだ。今度は…………と迷信的の恐怖が暗い意識の中でぱつと光つた。



一休み　陸奥　井上よし子

「今度は私の番だ！」といふ觀念が漸々強くなつて、果は爭ふ可からざる事實の樣に思はれて來た。あゝこんな寒い晩に何しにこんな寂しい脫裏を通るのだらう、今夜は必然咳で苦しむ、其咳で苦しむ意味も解つた。

私はもう寒い事も感じない。義俠な人が握りつぶしてゐた自分の人相書を、不圖見つけた時の樣に顏が嚇となつて足がふら〳〵して來た。脫裏はもう半町程で盡るので、向ふの通りに郵便函の立姿がぼうと見える。

薄紙を剝ぐ樣に浮ぶ記憶のはかない辿り心地から儼として存する現實の壓迫を覺ゆるさ云ふので夢現錯綜の記性の出方も宜く又亡友の側面的描寫に暗影のほのめきを見せたる筆つきも鋭い、「咳で苦しむ意味」「今度は私の番」點には今一層暗示的に出て欲しかつた。

三等

連れ子

香川道子

軒の氷柱に朝日が映えて丁度短かい長い銀の瓔珞がぶら下つて居る樣、其細い先の先から白い雫がポツリー一定の間をおいて又ポツリー其雨垂の土は一露毎にほれていく、お瀧は首を縮めて其下を出たり、入たり、襷掛のこじんまりとした女房風、一寸見にはさ程でもないが、よく〳〵見れば何とはなしに見込のする、かう、女らしい一種の寂しみを眉の間にほの見せて、而もさえた顔付の女である、お瀧は勝手廻りの用事をすつかり濟ませて朝餉の膳を拭き清め、夫の箸を二本揃へて茶碗や小皿の置場にまで氣も配つてさて急須の茶糟を捨てにと立つた時、言ひ合はした樣に時計は七時を打た平生なら六時、遲くとも半には起きて來る夫が今朝は惡した事かと審かりつゝ沸き過ぎる土瓶の蓋を取つて少し水を挿した「郎君、もう七時ですよ、お起なつては……」、聞えん事もあるまいに夫は頭から布團を被いでまるまつたまゝ、うんともすんともの返事をしない、追ひ續けて又「貴方、何所かお惡るいのですか、何なら振り出しでも煎じて參りませうか」、「馬鹿いへ」、と噛み付けられてお瀧は胸がギクッとした、が強いて答ひ返しもせず靜と臺所の方へとかへした、見れば火鉢の傍に良夫が昨日散髮だばかしのお坊主頭を兩手で撫でながら寒相にお座はりして居る、お瀧は思出した樣に「おゝ良や、おちさんはまだだけど、お前先にご飯お上り」と言ひつゝ小さい茶碗に飯を盛つて香の物を付けかけた、すると「母さん、先食べてもかまはんの?」と良夫はにこ〳〵可愛らしい眼に母を見上る「おゝ可いのよ」とお瀧は輕く首付いて見せたが口でこそ何でもなげに言つたものゝ心は悶々するのであつた「ほんに可愛想に、二親揃つて育てゝいた子は幸福者だ、三度が三度のご飯さへ、兩手を支いて頭を下げて……小さいながらも遠慮をして、欲しい物でも其お呉れよとは稀に一口言つた事もないし夫の目の前だけではあるが―是でも私は親だといふ顔がたつものだらうか」、とお瀧はつく〳〵埓ない我身の境遇を哀に

思ひ首垂れて居た、突然奥の間から「お瀧、煙草の火を持つて來ないか、間ぬけ者」、と惡くたえいふ夫の聲「はい只今……これ良や座敷へいつて莨盆をとつて來てお呉れ、早う」、と自分は七輪から火をつまみ出した、すると又「おい何をぐづ／＼しとるのだえ、」と齒痒らしく舌打するのが甚く聞える良夫が、がた／＼兩手で持つて來るのを待ち兼て火を入れ「さあ之をおぢさんに持つていてね、お座りして上げるのよ、其からお炬燵もつて來ませうかつて聞いてお見」、といふのを心得顏に合點いて立去る我子の後を見送つてお瀧はホッと息づいた、「一體何が惑したといふのだらう、腹が立つなら、氣に入らぬ事があるなら、何でもかでも底打開けて、腹一杯の事をいふてくれゝば、何程か心が薩張するものを、其上でどれ程罵られやうが打たれやうが私や……其にしても前の失は優しい者だつた、長い月日を連れ添ふて只の一度の否顏も見せなかつた」、とお瀧はそゞろに若かりし、樂しかりし過去を追想して思はず微笑を禁じ得られないのである、けども其ほゝ笑みも只刹那、直ぐ元の不安に立ち戻つて「斯して考へれば考へる程私はよく／＼仕合が惡いのだ、母に死なれて片腕落したと思ふ翌年又夫に別れるとは—、おまけに三つになる子供抱へて兄の厄介、其が愁さに如何しても獨身でと堅く決めて居た心もつい折れて、勸められるまゝに何の深い考へも持たず只夢の樣に此處へ嫁いだ、でも彼時嫂があんなに言はなかつたら私も斯迄氣苦勞はせまいものを、」と今は却て嬉しいと聞いた人の言葉を怨めしく思ふのである、「頻と願つたり叶つたりの好い内だ、連子も承知といふのだし、其に先方はしつかりの年上者だから何とて可愛がつてくれる事は保險付だなんて、これから先も姉さんの言つた樣な處は一つもない、案外冷血者で我意の強い自分の言ひ出した事は是が非でもおし通すといふ、而も變屈と來て居るのだもの、堪らないこんな工合で長い幾末が圓まつて行く筈がないと思ふと全體私は如何すればいゝのだらう？」と、お瀧はしみ／＼暗い我身の行末を氣遣つて「離縁するなら今の内——子供の一人も出來たら其こそ私は一生泣き暮しだわ、一層のこと其も兄に相談して見やう、さうだ／＼」、と心は早實家に歸つて兄の膝元に泣崩れて居るかの樣な感じがする「でも話をしたら兄は何といふだらうか、まさかはねつけもしまいけど……あの嫂さんが——」と其から其へと思ひ亂れてお瀧は一つ大きな吐息を洩すのであつた、奥

では夫が自狂に吹管を叩き付ける音がする、途端に良夫が「母さん、おちさんがこれお呉れた」と二つ宛兩手に持つた密柑の赤いのを嬉し氣につき出して見せた「おゝお前が柔にして言ふ事をよくお聞きだつたかいつも其通りだよ」と半は訓す樣に言つて半は共に喜んだが親心の嬉しさは瞭然と頰に溢れた、加て夫が萬更機嫌の惡くない事を知つたからだ間もなく夫は起きて來た「お前まだだつたのかへ」と給仕かた〳〵箸を取る妻を顧て一人滿足らしう旨い不味いの小言もなく濟ませた、お瀧は後片附ながら夫は大きな變り者だと思ふてふと可笑しくもなつて來る同時に自分はあまりとりこし苦勞をし過ぎると感づいた、丁度大風が吹いて黑雲が吹き拂はれて後が凪ぎた樣、朝の苦思〳〵した考へも取り去られてお瀧は何の事もなく針箱を取り出した、そして「私はもう〳〵一生此家の人よ、兄だつて三人四人の子供の親、其苦勞を知つて居て良夫の世話を賴むといへた義理でもなし、かといふて彼を連れて居る間は一時として身に氣兼の離れた間とてはないのだけれど子供の世話を親が見ないで誰が見ようぞ」と一針毎に思ひ沈んだ。

連れ子して緣六つかしき亭主に於ける血色惡き古女房の樣子はまづよく描かれてあります、灰吹の叩き樣が少し荒らくても取越苦勞して直ぐ前の亭主の事から根本的に浮んで來る少し優しい顏を見るとそれを忘れる等わけて（評）

秀逸

末つ子

播磨 內藤松圃

お友達が誘ひに來て居るのに未だ寢て居る妹を甘き母が起さうともせぬのが、初野は氣に成つて堪らない、又しても部室へのぞきに行くが矢張寢て居る。

「お母樣、皆が誘ひに來て居るんぢや無いこと？」

「來てるんだけれどもねー、何に寒むいから最つと寢さして置かうと思つて」

「左う、だけど最う起さ無くちや遲れるでせう」

初野は其の儘部室へ這入つて妹を搖り起した、心は起きて居る癖に寢た風をして居る、其れも介意はず搖り起すと、初めて氣が付いた樣に「うむー」と云つて延び切つて細い眠む相な眼を開けた、

「季ちやん、好い加減にお起きよ、もう八時ぢや有りませんか、學校が遲れてもお前何とも思はないの？」

「うふー、寒ぶいわー」

「寒ぶいわーぢや有りません、さ、早くお起き、皆が

誘ひに來て居らつしやるぢや有りませんか」

「まあ、初様寝さしてお置きよ、一時間位遅れたつて……
……」と母の聲、初野は沈默つて臺所に來た、知らぬ顔をして御飯を喰べて居る、毎日もそうで有る、初野は母の顔を一寸見て玄關の方へ行つた、小さな子供が寒む相に塀にもたれて日當ぼつこをして居る、初野は先行つて呉れと言つた、子供はちよこ／＼と足を引きずつて寒む相に肩をすぼめて東の方へ行つた。

御飯が濟むで九時が鳴つたが未だ起きない初野は堪り兼ねた様に

「お母様も餘りな、幾等何だつて、もう九時ぢや有りませんか、學校は九時始りぢや有りませんか、私等の小さい時は、十一や二で小さい者が一里半も通つて行くのに、暗い内から引き起して、板塲をふかしたり庭を掃かしたりして置て……其の時の事お思ひなすつたら、唯た十五分間で行ける學校ぢやありませんか、せめて遅刻だけさせぬ様に……

と言ひかけると火鉢の傍に座つて居た母は皆迄言はせす、つと立つて、つか／＼と部室へ這入り乍ら

「ハイ／＼お母様が惡う御座いました、さあ季、季、早くお起き……」

と荒々しく蒲團をむくつて、妹の帯際を取つてぐいと引き起した、「まあ、お母様――」

「いゝえ、お母様が行き居か無いのでお前に迄御心配をかけます、お季、お前もな、性念が有るなら能う聞いてお出で、姉様はな、お前の年で暗い内から起きて拭き掃除からはき掃除からして一里半もある遠い學校へお通ひなすつた偉い方なんだよ。」と荒々しく帯を解きかける、母の血相の餘りに恐ろしいので、お季はしく／＼泣き出した、母は益々腹立し相に帯を持つた手でとんと脊中をついて

「今頃迄寝て居て泣く事がありますか」と、恐しい眼で凝つと睨んで居たが「未だ。未た……」と聲をつまらせて可愛い頬をぱつしりと打つた、初野はおろ／＼となつて「まあお母様そんな手荒な事……」

「いゝえ」と又たゝき付ける、お季は又一しきり泣き叫むで姉の後に身をかくした、

「さあお出で、小さい時には何んなに心配して育てたか知れないのに、今に成つたら自分獨で大きくなつた様に……と唇を嚙みしめて

「親に向つて禮をいふ事か、理屈がましい事許り、幾等お母様のやうな阿呆だつて、餘まり。餘り……」

すゝり上げて炬燵の上にうつぶして仕舞つた、
初野は一ぱいたまつて居た涙をはら／＼と落して
「何もそんな、そんな惡氣で言つたんぢや無いんですけれどお母様は、お母様は私の事と言つたら直ぐ……
と云つた儘、其處にも居たまらず、臺所の火鉢にもたれてすゝり上げた、
廣い世界に唯た一人の病身な母が可愛の妹に、何も好むでせり合い度くは無いが、其れも此れも皆妹が後の爲めを思へばこそ、他人の子なら何んな事をしやうと影で笑つても前では言はぬ物を、と思ふとつい母が恨めしくもなる、
何も言ふまい、何も言ふまいと思つて居ても見るに見兼ねてつい口が辷べる、辷ればいつも母も機嫌をそこなつてこうなる、妹に辛い物は私である、母に苦いものは私である、私は不孝者――、何もそんな氣ぢや無いけれど、何うしたつて皆さう成るのだ、と思ふと淋しい様な水くさい様な悲しさがひし／＼と胸にせまる
初野はもう何も思ふまいと思つた、これからは何んな事があつても、何も口出をすまい、母の意志に從つて行かう、妹が何うなつたつてそれは私の知つた事では無い、人は人、私は私、もう其れで好い、と心で定めてふら／＼と立つた、掃木に手をかけ乍ら又思ひ出した、病身な母、自分に敵意をはさむ妹、あゝもう最れからは妹にも餘りくど／＼言ふまい、父なき後に苦勞に苦勞を積むだ母が老ひてのせめてもの樂しみは……
…あゝ無理もない、末つ子だもの
奥では母が言ひ訳かす聲、妹のすゝり聲、初野は又一しきり思ひ出して泣いた、
「濟まぬ、濟まぬ、皆私が惡いのだ………」

夫に別れた病身な母さ、婚期近い總領娘とが甘やかさるゝ季の子の爲めに波瀾が生ずる筋無雑に寫されてある。（評）

昔の男

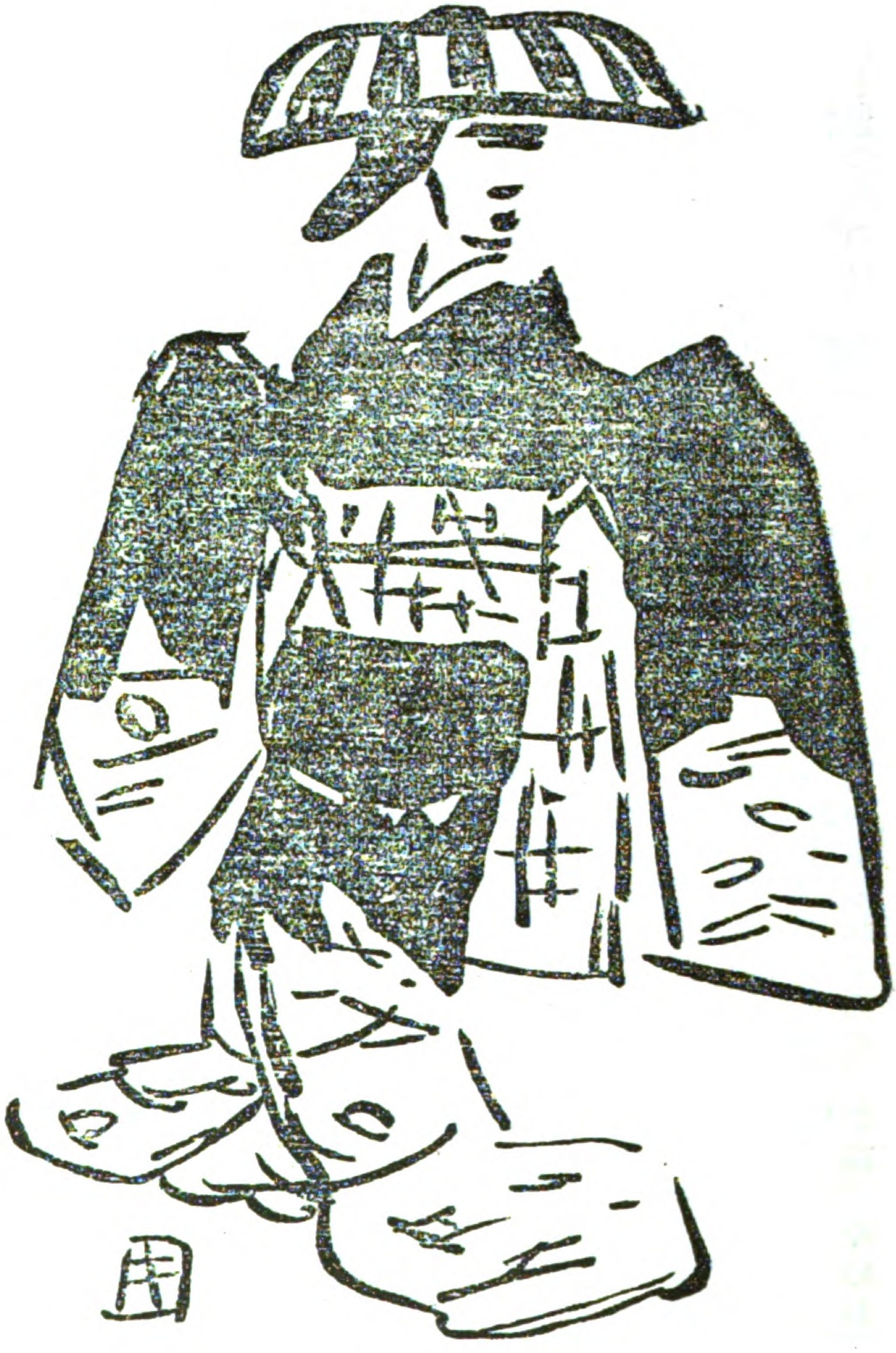
本所　江原田鶴子

北風が烈しく吹く晩だ。
お葉は銀座通りを、ショールの襟をひしと合せて、袖も前に組んで、急ぎ足に歩いて行つた。
夜店は一つも出てゐなかつた、たゞ街並の柳の木の陰に、『玉子入、いそ燒』と書いた、布で圍つた夜店のランプの陰に、お爺さんが一人で燒いてゐるのを見た許りだ。
電車もけたたましくベルを鳴らして走つて行く、通る人もみんな風に追はれて驅け出すやうに歩いてゐた、通りの店は硝子障子を閉めて、中は白熱ガスが明

ろく華やかについてゐるが、入つてゐる客は一人もなかつた、何處の店にも小僧や番頭が火鉢にあたつて、不蕩らなさうに風の烈しい往來を見てゐる。

京橋を渡つてからお葉は、もう二つ横町を越した、そして「救世軍本營」と書いた大看板を上げた暗い建物の前まで來ると、ふと擦違つた男があつた。

二三歩歩いて、その男の足音が止つたと思つた、お



スケツチ　近江若井きくゐ

葉は何といふこともなく、ハツト胸を躍した、そして歩かうとすると、

『お葉さんぢやないんですか……』と、何處か聞き覺えのあるやうな男の聲がした。

『え、』お葉は足を止めた。そして振り返つた。

『あ、さうですか？どうもさうだと思つた……』と男は近寄つた、それはインバネスを着て、中折を

被つた男だ。

お葉の胸は騒いた、何だか知らぬ人だ、

『誰方でしたか………?』

『や、しばらく……』

男は馴々しく帽子をとつた、その時、隣りの大黒お、こしの店から來る明るい瓦斯の光で、男の顔が分つた、男はほゝ笑んでゐた、お葉には解らなかつた、不思議な顔をしてゐたが、だん／＼記憶がついたやうで、それでも、

『しばらく……』

と云つて不思議さうに男の顔を見た。

『お忘れになりましたか……?』

男は笑ひ乍ら、

『ホラ、田中ですよ……』

と云つた、その瞬間、ある厭はしい感情が、ふつと閃めいて消えた、それと共に田中といふ男が思ひ出せた。

　お葉が厭はしいと思つたのは、昔からこの男が厭な男だと思つてゐたからである、だから、厭な……と思ふと同時に、その男が思ひ出せたのである。田中はお葉の近所に住んでお葉を戀ひ、嫁に呉れと申込んだ男であつた、けれども田中はその時、まだ瓦斯會社の機械の職工をしてゐて、自分の妹と家を持つてゐたゞけであるので、無論、そんなものは刎ねつけられて了つた。

　お葉も勿論望んでゐなかつた、將來は仲々月給がとれるのださうで、現にその時も、三十五圓ほどとつてゐたので、月給取りとしてはいゝ方であつた、けれども、家では堅氣な商人の方がいゝといふので、お葉にも一寸話したゞけで、一も二もなくはねつけて了つた兩親がさういふ處置をとると、お葉も頭から厭だと思ひ込んで了つた。けれども田中は執念深い男で、折あらばと覗ひ、お葉と道で逢つたりすると、厭らしい素振りをしたので、餘計嫌つて了つた、そして兩親はそんなことがあるので、早く嫁けて了ふ方が好いと云ふので、幸ひ呉服屋を始めた獨身者の男から緣談の申込みがあつたので、そつちへ嫁けて了つた、それつ限り、時々は思ひ出さぬではないが、此頃ではすつかり田中を忘れてゐた、勿論、今のお葉には、もう二人も子供があるのだ。

『アラ田中さんですか、どうもしばらく……』

お葉は強いて笑顔を作つて言つた。怖ろしいやうな

氣もしたが、今となつては、もう恨みも何も、すつかり忘れた時代であるので、强めて感情を柔らげて言つた、それと同時に、その男が憐れであるやうな氣もした。

男はぢろ〳〵お葉の顏を見て、恨むやうな、薄笑ひをする、お葉も變になつて、

「今は何んですか何處に……」怖えるやうに言つた。

「え」

と男はニや〳〵笑つて、

「イエこのぢき近所にゐます……」

とお葉の顏を見る。

「あゝさうですか……」

お葉が忙しく言ふと、

「もうすつかりいゝお神さんにおなりですな……」

「御戯談ばつかり……」

お葉は何だか怖ろしくなつた。

「あの妹さんは如何なさいました。」

「妹ですか、妹はもう嫁いてゐます、」

男は猶冷たい薄笑ひをする。

北風が颯と吹いて來た、お葉の裾がめくれた、二人は默つて了つた。

「や、私はまだ獨身でゐますよ、ハヽヽヽ、お宅は何方です……」

「芝です」

お葉は聞えぬ振をしたが、慄とした。

「や、お止め申して失禮……、左樣なら……」

「左樣なら……」

お葉も氣が拔けたやうに言つた。男はまた恨むやうな笑ひをして、帽子を破ッて向うへ行つた。

お葉も歩き出したが、少し行つて振り返つた、男の姿が横町の角で、パッと埃に隱れた。

寂しい〳〵氣がした、何か罪惡でもしたやうで苦しかつたけれども、それと同時に、家にゐる夫の顏や、小供の笑顏が思ひ出されて、亦急いで歩き出した。

例の如く巧みな細やかな筆、どうかもつと好いものを見付けて書いて貰ひたい。(評)

疲れた人

龜井戸　鵜澤貞子

妙な響に驚かされて、奈良威は、ふいと、夢からさめた彼は肺の初期で、五六ケ月前に此へ入院したのだが、どうも、はか〴〵しくゆかない、どちかと云ふと少し惡くなつたやうだ、彼はこんな病氣に襲はれない前ま

では、さる會社へ勤めてゐて、隨分と勤勉家であつたそして非常な節儉家で、否な寧ろ吝嗇家の方だつたかも知れない、その上彼は多少の財産を有してゐた、で會社の仲間の内でも余り良くは云はれなかつたが、羨まれる身分だつた、然し彼れには一つの不幸があつた、それは彼れには兄弟もない、姉妹と云ふものも知らない父母は早くに死んでしまつたし、漸く一本立の出來るやうにまでして呉れた、一人の泊母があつたが、それも彼れが恩を報ゆるに至らずして病歿したし、妻もまだ迎へない、彼れは全くの孤獨であつたけれども壯健の間は別に何とも思はなかつた、處でこの病院のベツトの上に起臥するやうになつてから、彼れは一種の淋しさを感づるやうになつた、その淋びしさが日を經るに從つて益々烈しくなつて、此頃では病氣より痛切にこれに苦しめられてゐる。

今日も彼れは夢からさめると、軀は何んだか重たくて冷たい汗をかいて心持が惡い、こうしてゐる内に肉體が滅びてしまふのではないか、眞黑の洞穴がもうそこに迫つて、ずん／＼自分の身を吸ひ込んで行くやうに思はれる、もう駄目だ、全てが絶望と云ふたやうな言葉が胸にくりかへされる、限りなき心細さに、熱い涙が彼の蒼白くなつた頰をつたふて流れた、寐覺の刹那は彼れにとつて最も苦痛の時なので、かゝる時は何つも附添の看護婦を呼んで僅かに寂寥を脱し得られる。

彼れは身を起した、……例の通り看護婦を呼ばうとしたので、然し何處へ行つたのか看護婦は病室にはゐない、不圖この時隣の病室が何んだかゴタ／＼してゐるのに氣がついた、聞くともなし、耳を寄せると、

『本當に飛んだ事になりましたねえ、こんなに早くお亡なりなさらうとは實際夢にも思ひませんでした、先刻電話でねえ驚きました』あわてたやうな男の聲だ。

『どうも致方がございません、これは壽命でございますから……』うるみ聲で女が答へる。

奈良は俄に一種云ふべからざる恐怖に壓されて、突然床に倒れると、頭からスッポリ白毛布をかぶつてしまつた、そうして體を固くして、ワナ／＼顫えてゐた。

その中、神經を余り過度に使ひすぎたせいか、彼れは再び苦しい夢に落ちた、やがて我れに返つた時はもう隣室は靜かであつた、

人間はつまらない者だ、玩弄品の人形だと云ふが實際さうだ、散々いぢくられて、苦しめられて、結果は、生存遂に破壞せられて惜氣もなく捨てられてしまう、

は無意味だ、
「けれども矢つ張り生きて居たい、どんな勞働でもいいそれもやる、元の壯健になりたい、病院は壞れかかた人形を投り込んで置く箱のやうなものだ、何つ出られるか判らない、駄目だ、自分なぞはかうしてどうなるのだらう、歸する所は隣室の人と仝じ運命、捨てられて滅びてしまうのだ、この寢床の上へ横になつて、再び起き上らなかつた多くの人と同樣に、冷めたくなつてしまうのか、嫌だ、……嫌だ」
何にか形のない物に驚かされたやうに彼れはむつくり飛び起きたが、この時彼れは自ら肉の衰へを泌々と感じた、そして果敢ない溜息をついた。
左手の閉ぢられた硝子窓から廣い庭をへだてて向うに矢張り病室の窓が見える、生氣のない五月雨は霧のやうに降りしきつて、夕暮の鉛のやうな霧はあたりを襲つてきた、さま〴〵な新樹も長の雨に叩かれてしほれたやうに葉をたれて居る、赤黒い水をただえた小さな瓢箪なりの池の岸につつじが二樹あつてしなびた色のあせた見る影もない花が僅かに二つ三つ餘生を保つて居る。
奈良の居る二等病室は、六疊敷の部屋で、壁に寄つて窓を上にして白い床が布れてある、枕元には、水藥の瓶やら、藥の染みでた、袋やコツプがのせてある黑塗の丸盆、火の消えた火鉢、その上に冷めたくなつた鐵瓶、牛乳を煮る土鍋、茶道具、なぞがゴタ〳〵置かれてある、片つ方には、雜誌が二三册積まれて、その上に先つき半分食べた夏蜜柑が細く甘い香りを放つて居る、秋の蠅のやうな弱さうな蠅が一疋、窓の蒼白い硝子の上をあつちこつちと迷つてゐる、眼にうつるすべての物象は重たく沈んでゐてこれが夏の初めかと思はしめる、奈良の胸はただ人戀しさに滿ちた、そして
「己れは不幸だ、不幸な孤獨だ」と悲しさうに呟いた
此の時、廊下に足音がして、ガチリとドーアが開くと奈良と同じ會社におつた倉並が例の通り疲れたと云つたやうな顔をして絹セルの古い洋服、台灣パナマの帽子と風呂敷つつみを兩手に持つて這入つてきた。
「やあ」と奈良は嬉しさうに聲をかけた、
「どうです、少しは良い方ですか」倉並は崩れるやうに枕元に座はる、
「有りがたう、どうもいけないので、僕はとても駄目ですよ」奈良は氣抜けたやうに云ふ、
「そんな君、弱い事は云つちやあいかんよ、ゆつくり

あせらずにやるです、僕等と違つて君は充分な、余裕があるのだから、僕なんぞが病氣になつたら、それこそ、大變です』、倉並は妻がある兒が二人ある、その上老母と片足不隨な弟を養つてゐる、僅かな月給で多くを養ふ生活難を彼れは常に訴へて嘆じてゐた。

『實際病氣なんぞにとりつかれて、こんな所へ休むやうになつてはいけない、どんな苦しい職業でも働いて居る内がいいですね之』、奈良は泌々と云つた。

『然し僕等のやうに、生活に追ひたほされて働いて居るのも苦しいですよ』、倉並は一寸眉をひそめたが、思出したやうに隱袋を探つて、見すぼらしい煙草入を出して、せわしさうにつめて、燐寸をすつて吸ひつける、二三服うまさうに煙りをあじはつたが、ふいと、

『實際、繫累の多い者は不幸ですねい、望を臨せられるのは獨身の中だね』、と倉並は淋しく吐息した。

奈良は妻子のある者が不幸で、獨身者が幸福であると云ふ事はどうしても信じられなかつた、そして彼れは心の中に頻りに過去の戀を探し求めた。

二人とも妙に默つてしまつた。

おはてたやうにドーアを開けて、そこへ付添の看護婦が赤い顔をして這入つて來た、今時に電燈が頭の上で花の開くやうにつくと陰氣な室がパツトあかるくなる

二人は思はず顔を見合せたが、互の胸には社會の戰爭に「疲れた人」であると云ふ事を感じた。

病を憊ける孤獨の哀しみと繫累を負へる生活難の嘆きと無理なく描かれてある、(評)

灯影

井上笹波女

「君等が新婚旅行のお伴して來たんだもの、歸京つたら大に奢つて貰はう」と云つたのは兄の聲だ、大分醉が廻つたと見へて、力のある聲が二間距つた臺所迄一層強く響く、それを聞た良枝は片手を爐縁について及腰になつて居たが、つと身を反らして心持顔を赤くした、煤で眞黑になつたつゝかぎにかけてある五升鍋の湯は音をたてゝたぎつて居る、それを頭の中で打消して奧の話に耳をすましたが、何とか答へた夫の聲は聞き取れなかつた、今日も滊車の中で、散々兄に揶揄れたものだ

「良枝、明朝は早く起きて新聞をご覧」「何故!」とつい云つて了ふと、「東京〇〇銀行頭取、杉山春一氏は新夫人同伴作日四番列車にて來縣、と載つて居るから……」とけろりとした顔をしてすまして居る

「また兄さんは、オホヽヽ」とそれでも女らしくつゝましやかに手巾で口元を抑ゑて夫の方を一寸見た、其風姿は全然東京化して了つた、「どうも君の口に合つちあかなはん」と短い髭をひねり乍らまだ元の友達交際のぬけぬ其口調が、良枝には何となく嬉しい、と停車場から我家迄の途すがらの有様が目の前に浮ぶ陸軍少尉の軍服姿いかめしい兄の車を眞先に、直ぐ前には雨催ひの寒い空氣をふせぐために、わざと張つた幌の中から、石に躓いて車がゆれる度に、夫の眞白なダブルカラーが見へる、それを見やうといく度か良枝は身を横にして、車夫に怪しまれた、



おもひで　本郷萩原採

丁度、秋の收穫の最中で道の兩側の田には、稲こく女や麥播く男が田舎に珍らしい三輛の車を見送り見迎へた、中には去年迄良枝が一しよに豆打ちしたお吉も混つて居たが、良枝は見て見ぬ振して過ぎた、「あッ新田の良枝さんがッ」と何處からともなく呼ばるゝ聲にも或種の矜りは限りなく煽り立てられて、羽ショールにうづまつた顔を上げて幾度も空の何物をか見やうとした

「姉や、お父ッちゃんがな、はいお燗がついつらつて」

土産のカステラを頬張つた弟の彦平が、詰つたやうな聲をしてによきりと前に立つて居る、はつと夢見るやうな想ひを破られて、「何ですまア、お行儀の惡い、東京の義男さんはもつと温順しいよ」たしなめられて、ぢつと姿を見つめられたので、彦平は姉の顔を竊見ながら、肱の抜けた筒袖で横なせして下をむいた。

良枝は今着變へた計りの華美な米琉の羽織の袂を口にくはへて、眞黒な鐵瓶の弦を氣にし乍ら、中から德利を引上げて加減を見た。

白足袋で裾をさばいて奥へ行つた時はもう裏の柿の木の下で彦平の聲がして居た。

「良枝、ビールは無いかなあ」と兄はもうとろんこな眼をして居る、呑けぬ口ではあるが、父は醉ひもせず片隅の、自然木の火鉢に体を半のせかけて、我子と婿との話に相好をくづして居た。

良枝は空いたのと持ち變へて、又爐傍に立つと、夕闇はもう家の隅々にせまつて居る、今迄納屋で母が調子をつけ乍ら延して居た蕎麥は、もう鍋の中で泡を立てて居る、其の白い泡がくつきりと眼についた。

「おつ母さんお蕎麥なの？」「あゝ田舎のご馳走でな、何もなくつて……」と土間の隅でランプに火をつけ乍ら母は答へた、「いゝわ、どうせおつ母さん」良枝は上り框でそれを受取つて、卷き心の良いのを奥へ、紙の笠の三分心を爐の傍へ吊した。

「どうして斯んなに暗いんだらう」やけに心をぐいとねじ上げたが、ジイ〳〵と音を立てる許りで矢張り暗い、「せうがないなあ」と投げるやうに云つて座つた爐の大きい根つこが、ぱつと燃へ上ると、納戸の入口に置てある茶簞笥へ炎が映つててら〳〵する。

母は蕎麥を冷して來た手を、前掛で拭き乍ら土間近い木尻へ座つた、足元にある口の損けた大きい白ちやうを見て、「あの何かえ……、ものは酒が呑けさうかえ、あの春一さ」「えゝ呑けるつて云ふ程でもないが少しは上るわ、」油氣のないそゝけた母の櫛卷きへ火埃の付いたを見て、格好の良い自分の髷の上をなでた。

「まあ何してもいゝ、堅いと云ふ話だから」

今夜は頭取の家へ招かれた、今夜は送別會だと、毎晩のやうに遲く歸宅る夫ではあるが、交際のためと聞けば左程不滿足な心持もしないので、良枝はそれを何とも云はなかつた。

裏口へ立てた二本の薄黑い障子が、家中の光を皆吸ひ込むやうで障子許りが赤い、ぼい〳〵と火屋の上迄燻

の上るランプを良枝は顏をしかめて見返つたが、
「お母さん、東京つて物事が華美で調法な處よ、此頃は日曜の度にねえ、同僚の奥さんたちが、菊見にとか何とか云つて誘ひに來るわ」「さうづらな、お前どうだえ、そんな人中へ行つて居て苦勞な事はないかえ？」と元祿式の前髮を見つめ居る。「大丈夫よお母さん、だけれどねえ、一寸〱出る時に着るものが無いのが一番困るわ」「あゝ俺もそれは心配しない事ぢやないが、繁が金を使ひ果した上にこの頃の不作でなあ、御覽滿足なら十五六俵も穫れる籾が今年はしいなが只あれだけさ」と台所に積んである萎び俵の三俵を指した「あれだけにするにも、お前、お父ちやんがどんなに苦勞したか」と一寸口を切つて、忠三さんもなあ、山下のおきみさんを嫁にしたあわ、夫婦がよく稼ぐから親達はこれから樂になれて仕合よ」と聲を曇らせてほろりとした。
良枝は「さう」と許り横を向いて苦い顏をした、「忠三に呉れたら…」と此頃切に思ふ心が今も胸をついて居るが死んでも厭だと云つた娘の前で、今更それ以上の愚痴もこぼせなかつた。
先刻來た下部の伯父が加つてから奥は大分賑かになつて、珍らしく父は聲を出して笑つて居る、良枝は急に思ひ出したやうに「お母さん、あのねえ兄さんは休暇を戴いて來たんだからいゝけれど、私達はどうしても明日歸京らなければならないんですよ、銀行の方が年末の決算や何かで忙しいから……」と口早に云つた、「え、明日？余り早いぢやないかえ」と母は眼を見張つた、「えゝ、年末だから銀行の方がねえ」良枝も流石に心弱さうに母が顏を見た。
母は燻る火壺を火箸で直して、しよぼ〱した眼を前掛で拭き乍ら、「せめてなあ、繁の歸隊る位迄居られるならいゝが……」
彦平は冷たさうに勝手の板の間へ堅く坐つて、茶碗の音をさせ乍ら茶づけ飯を食べて居る、それをぢろりと見た良枝の眼は光つて居た。

此作者は一作毎に上達する、これなぞも煤けた田舍へ華美に飾つて、新婚旅行をして暗いランプを氣にしたり爺の茶づけ飯を氣にしたり描寫も無理なく及んでゐる、たゞ今一息で光彩あるものになる、（評）

女

京都　風窓

某男教授が寄宿舍中の花で有ると謂つたとか、或一部の生徒間に評判されてゐる野村艶子は故有つて昨日西

洋畫科から日本畫科へ轉科した今日、席順の都合で掃除の當番を終へて今しも穢れた手を寄宿舍の洗面場で洗つてゐると造花を持つた舍生が三人後の廊下を通り過ぎた、間も無く亦足音がしたかと思ふと「姉さん今歸つて？」と可愛い聲がする、西洋畫科普通科一年の霜野光子で有る、艶子が振り向くと光子は嫣然と笑つてゐる、「エ、お初つから當番なのよ」光子は傍へ寄つて「姉さんがゐないから私、眞個に淋しいわ」と艶子の肩に手をかける、「光ちやん、私だつて何程淋しいか……でもね恁うしていつでも遇へるから、いゝ事ね」と艶子はなだめる樣に云ふと「だけど私、心細くて、それに岸野さんや高橋さんなどが野村さんは斯麼に出來るのに何麼して止したのでせうかつて謂つてるんですもの」甘える樣に艶子の肩をいぢつてゐる、「それで光ちやんは何ていつたの」

「私姉さんが云つた通り、イゝの？」と訊く、「ソー」と艶子は何か考へてゐたのか返事をして袂からハンカチを出して拭いてゐると光子が「姉さん後でいゝから手紙を書いて頂戴な」「エ、書いたげてよ」と謂つたが思ひ出した樣に「光ちやん貴女舍監の前なんかで姉さんつて云つちや不可ない事よ」「何故、不可ないの」と光子は涼しい眼をみはつて訊く、「あとでネー」と艶子は光子のお下髮のリボンを直し乍ら直ぐ被入しやいよ」「ぢや後でね」と光子は部屋へ歸つて行く、袴を取つてメリンスの赤地に白と黄との菊の模樣の帶を小ヂンマリと立矢に結んだ光子の姿は一層可愛ゆく見せた、艶子が廊下へ出るなり松阪といふ舍監兼西洋畫科助教授に出遇つた、艶子は什麼したものかハッとした樣な氣持で鳥渡會釋をしたが舍監は笑顏も見せず一寸眼をくれたきり過ぎて行く、色の馬鹿に黑い決して美人では無いが眼立つやうな醜婦でも無い癖の無い黑い毛で、齒が非常に揃つて白い、寄宿舍では餘り受けはよく無い、而してある處が不具だとかいふ評判が二三の人の口から出てゐる、本校を二年前卒業したので有つて見れば艶子とはさほど年齡は違はぬ艶子は俗に云ふ虫が不好ぬとでも謂ふのか入學した時專任教授から私の居ない時は此の人が見て與れるからと紹介された時艶子は何んだか不嫌な教師だと思つた、艶子自身乍らも何故か解らなかつた、日を經る毎に此の念は艶子に益々增して行く、一寸廊下で遇つても他の教師に對する樣な素振りは什麼しても出來なかつた、一つは艶子は立派な女學校をも卒業し國の洋畫家につい

て多少敬を受けてゐたので、髙が私立學校の卒業生位との心が或は自と出るのかも知れなかつた、松阪助敎授とても若い女だけにモー屈じてはゐたに違い無い、霜野光子が始めて石膏の人物寫生にかゝつた或ろ月曜で有つた、什麼しても輪廓が取れ無いので晝食後にソツと書いて呉れと艶子に頼んだ。

艶子がその晝、熱心に木炭を動かしてる傍には光子が嬉しそうな顔をして見てゐると折も折松阪助敎授が何か用事でも有つたのか這入つて來たが、其の樣を見るなりズカ〲と傍に來て「野村さん」と恐ろしい顔をして「貴女は生徒ですか或は敎師ですか、生徒で有り作ら他人の作をなほすなんか一體生意氣ではありませんか」如何にも嘲けつたやうな微笑を泛して「以後は決して恁麼事をしては免しませんから……」苦々しく云つて足音荒く鉛筆を持つて出て行つた、恐ろしい擧動に顔さへ得上げなかつた光子は艶子の肩に手をかけて覗く樣に「姉さん、御免なさいよ、御免なさいねえ」と子供だけにオロ〲としてゐる艶子は自分が決して善い行爲とは思はなかつたが言ひ樣も有らうに餘りの罵言に激せずには居られなかつた

「イヽ事よ、かまやし無い」投げるやうに謂つたが、流石、木炭は下に置いてゐた、光子は心配さうにまだ御免なさいネを續けてゐるので艶子はいぢらしく成つた、「ナーに光ちやん其麼に氣にする事はいらない事よ」優しく云つて「光ちやんと私とが餘り仲が良いものだから決然妬けるんだわホ……」と艶子が笑ふと

「爾なんでせうか」とまだ心配らしい顔をしてゐる、光子が餘り眞面目なので「ナーニ爾、思つてりやいゝじや有りませんかねえ光ちやん」と艶子は云つた、この事が有つてから松阪助敎授は他生徒に迄眼立つ程光子を愛し始めた、それから二度目の日曜で有つた艶子が外出簿を持つて舍監室へ行くと松阪舍監が當番で舍監臺(机)の前に座つてゐる、三人許外出生がつめかけたゐた、艶子が時間をかいて調印を濟して立かけた時舍監が艶子の顔をジロ〲見て「野村さん、顔が白過ぎますよ、丁度粉屋へ飛び込んだやうだ」と笑つた時白い綺麗な齒が見える、傍にゐた三人は流石艶子をよう見なかつた。

「只今」と艶子が部屋の障子を啓けて這入ると誰もゐない、隣で人の足音がしたかと思ふと障子の啓く音がして「野村さん、皆さんはお湯よ、貴女が遲かつたので私の方から一人行きました」と口早な室長の聲がす

る、「ア、爾ですかどうも有難う」と艶子は道具を机の上へ置いて座る、冬の午後三時の太陽がスリ硝子を透して斜に部屋を照してゐる、光線の通る道には細かい塵埃が靜に動いてゐる、二階では讃美歌を唱ひ出した、艶子は偶然、本箱の上の一輪挿の薔薇が俯向いてゐるのに氣が附いてなほしてゐると「姉さん」と聲がして障子が啓いたかと思ふと光子が眼をはらして行きなり艶子の膝の上へ顏を押しあてゝ泣くので有る。

「よう光ちやん什麽したのよ、えゝ云はなければ解らないぢや有りませんかえゝ」と肩をゆすり乍ら訊くと光子は鳥渡頭を上げて「エ、今云つてよ」と語るのを聞くと今、光子が紙を持つて出やうとすると室長が何處へ行くかと聞くので野村さんに手紙を書いて貰ひにと云ふと室長は野村といふ人は今寄宿で注意人物の一人で有る、常に男から澤山手紙が來て舍監室へ始終呼ばれてゐる、不好に濟してるとか、商船學校の從弟と云つてるのが怪しいの墮落女學生で有るから交際を止せのと云つたさうで有る、聞き終つた艶子は泣きたかつた否腹の中では泣いた、そして艶子は一日も早く神の子のやうな光子をして頭腦、品性の卑いそして殊に有り勝ちな專門學校の修養の少しも無い隨分年を老つたねぢけ者の多い危險な寄宿舍から遁さしたく沁々と感じた、艶子はシカと光子の手を取つて「光ちやん！貴女だけでも私を信じてゐて下さるはねえ」と堅く握つた手は流石に慄へてゐた、

「エ、姉さん……私モーくく……悔しくつて……」

「光ちやん、譬へ私と光ちやんとは離れても心はね、此の手のやうに一つよ」艶子は握りしめて淋しく笑つた。

學校生活は能くあらはれて居るが個人の性格の出方が今少し強くあつたならばと思はれる、わけて艶子に於いてその憾みがある　（評）

出戻り（上）

大阪　西戸政江子

妹の夫、音彌が今度京都へ轉任になつたので暫くは遇へないからと暇乞かた〲今日は夫婦そろつて來ると云ふので、お富はもう朝から忙しさうに轉々して居る、姉のお里は頭痛がすると云ふので母や下女が騷いで居るのも知らん顏で自分の居間の二階にとじ籠つたなり顏出し一つしない、お富が忙しさうに、

「竹やもう坐敷の火鉢には火が入れてあるだらうね、それから」と何かくど〲と命ひつけて居ると思ふと

もう臺所の茶箪笥もガタ〳〵音させて居る。

お里は「そんなに騒がなくたつて可いや、高が知れた妹じやないか」腹立しさに氣がむしやくしやする、頭はシン〳〵と余計に痛む、

「高が知れた敎員風情じやないか」フヽンと鼻の先で嘲笑ふた、どうせ妾や出戻りさ、氣儘者に違ひない、けれどもお阿母さんも餘りじやないか、妾の嫁くときは自分から進んで居たくせに…………」

二年前である、お里が嫁いだ先家は某銀行員であつた、勿論正式の結婚ではなかつた、多少新聞にも浮名を流した、頑固な父親はなか〳〵承知しなかつた、どうとも勝手にしろとまで云つた、けれども、母のお富が、先家の銀行員で今一ヶ財産家だと云ふのに惚れ込んで自分から頑固な父親を無理に説きふせて嫁入さしたのであつたが、お里は自分が結婚前に思ふて居つた事の總てが正反對なのに驚いた、舅は居る、小姑は二人まである、財産は意外に少かつた、好いた同志の交情でもいつまでも保つ譯けがない、母のお富が無理に引戻したとは表面だけ、お轉婆のお里が舅の氣に入る筈はない、氣儘者のお里にどうして六づかしい舅の機嫌がとれやう、今は離縁同樣實家に婦つて居るのである、

「夫と二人限りなら誰れでも辛棒する、誰れがあんな八釜し屋の舅や、五月蠅さい小姑の中で辛棒が出來る



長屋の人　名古屋　吉田とき子

ものか、妹は夫と二人限りじやないか辛棒するのは、當り前さ、自分だつて夫と二人限りだつたら、どんなに夫が茶屋遊びしやうが辛棒して見せる、お阿母さんだつてこんな辛い目に遇ないから知らないんだ。

「竹、庭先きはどうだえ」未だそこらをバタ〳〵掃除して居る、お里は聞くたんび胸は沸き返るやう氣が苛〳〵する、

「チヨッ何故あんなに騒ぐのだらう」妹の歸家るのが何んだらう自分の娘の夫――それは高が知れた學校の敎員じやないか、それに何故あんなに掃除なんかしてさはぐのだらう、

「自分の娘が歸へつて來るのじやないか」再、嘲笑ふたが、フト思ふた、「どんなにして歸家つて來るだらうと、此の前に寫眞を送つて來たが、あんなに生意氣な眼鏡なんか掛けてと思ふと二人が手をつないで睦じさうに笑い私話きながら家へ入つて來る姿がまざ〳〵と胸に浮ぶ、とお里は今更自分の寂寞孤獨の感が胸にヒシ〳〵と泌む、何だか恰度深い〳〵敵の重圍に陷つたやうな氣がする、落膽して、痛む頭を抱えて俯向した、

「竹やもう、くる時分だが何時だへ」ポンと煙管を叩く音、もう掃除は終つたらしい、たすきを外しつゝ二階へ登つて來て、

「お里」と呼んだがお里が頭を抱えて机に俯向して居るのを見て、「亦か？」と一寸嫌な顔して「まだ痛むのかい」と立つたまゝ「もうおつつけ音彌さんも見えるしお林も久し振り歸つて來るのだから少々位の頭痛は我慢してね」

「何時？」と答へたがやつぱり頭を抱へたなりである

（下）

音彌は散歩にと出て去つた、

「姉さん御機嫌よろしう」と妹のお林が――上等ではないけれど一寸した絹物を着たゾロリとした風姿を見るともうお里の胸は沸き返るやう頭は𤏋となる。

「まあよく歸つたわね」ツンとして横を向いて仕舞ふ

その綺麗な着物がなんだい、この姉に見せたいのか餘り馬鹿におしでないよ、妹じやないか、生意氣に眼鏡なんか掛けて餘り姉を馬鹿にしるじやないか、腹立しくて堪らず泣きたいやう、沸き立つ胸をジーッとおさへて

「お前は仕合せさ」當てつけに、突つけもないことを云ふ「林ちやんは音無しいから音彌さんが可愛がるだ

らう仕合者さ　冷笑し氣味に、
「まあいやな姊さんよ」人妻とは云ふもの、初い〳〵しい伉氣ない未だ十八である、
「あの姊さん、京都へも是非一度遊びに居らつしやいな」ねいと云ふやうに心持ち首を傾げてにつと笑ふ、キラりと金齒が光輝る、
「お里は唇をかんで半ば自暴氣味に「獨り行つても、つまらないや、林ちやんは音彌さんと二人で面白いか知らないけれどそんな内へ妾が行つたら、却て林ちやんも迷惑だらうし、妾だつて氣苦勞だからね」うるさそうに後れ毛をかき上げて「やつぱりね獨りこうやつて暮して居るのが氣樂だよ」又兩手で額をおさへて俯向した、
「林ちやん」と母が「荷物が着いたよ」「え丶」とお林は走つて行く、お里はホツと息をついた、何だか心細いやうな氣がする、
「お林ほんとにお前島田がよく似合ふよ」如何にも嬉さうな母の聲、臺所である、
「アラお阿母さんは……」と例のお林が疳高な聲で何だか面白さうに笑ひ狂じて居る、
「お前ほんとに仕合せ者だよ音彌さんは……」何か云ふて居るが聲が少さいので聞えなかつた、
お里は立つて障子を開けた、
寒い夕暮である、シユツ〳〵と寒い音を立て丶電車が走る、ガタ〳〵と車が通る、郵便夫が通る、忙しさうだ、お里は見るともなしに往來を見下した、
「貴方、貴方つてば一寸待つて頂戴な」年は十九か二十歳の廂に結つた若い女がつい一間程さきに行く男―金縁眼鏡にオバーコート着た――に縋りつく樣に追いついて「一寸待つて頂戴な」男は一寸振返つて、
「へ……美代さんは弱いね、貴方は學校に居るときテニスの撰手ぢやなかつたか知ら？」「でも……辛度いわ」と蓮葉に「オホ……」と未だ何か面白さうに笑ひながら行く若い夫婦の姿をお里は見ると、
「何と云ふざまだらう見面もない」嘲けるやうに口走つたが、又してもむら〳〵と淋しい何とも云へぬ嫌な思ひが湧く。

◦　◦　◦

「一寸〳〵お里まあ御覽よく似合ふこと」お富がじつと見送つて居る、何心なく見れば音彌とお林がそろうて湯屋へ行く姿、お里は一寸見た丶け嫌な顏して、亦頭を抱えて俯向した。

から始終駄々捏れて居るばかりぢやア出戻りの心持が見えない少くとも表面には厚意めたい矢位あるべきだらうと思はれる如何でせうもうフと假名遣に注意してもらひたい　（評）

蕎麥屋

信濃　市瀬いちゑ

妾しが錢湯へ行かふとすると、お母樣が、
『あの、湯へ這入る前にネ、みなと屋へ蕎麥を十五注文して來てお呉れ、今夜お客樣が有るから。』
と云つたので、妾しは始めて、みなと屋へ行つて見た。
『今晚は。』
『へー。』と子供の聲がする、淺黃の褪せた、濕々した、氣味の惡い暖簾を怖々排して家内へ這入る。
料理屋にも似合はず、五分心の暗い洋燈、滅多には登樓ぬと見えて、階子段も塵埃を大分冠つて居る、闇い、汚ない、陰氣な家だな、と思つて勝手を見る、十一二歲の男の子が二人炬燵に當つて、古新聞紙へ何か莫迦に大きな字を書いて居る。箪笥の前にあたつて居るのが家の子供だらふ？、
『何だい？。』とませた口調で聞く、鼻汁を些し出した愚鈍さふな、汚ならしい子だ。
『誰も居ないの？。』
『炬燵いはめる格子をなエ、大工さの所え貰え行つたあな。』
『何時頃？。』
『今些時前に……何だネ？。』
『お蕎麥を十五持つて行つて貰ひたいけどネ。』
『歸つて來たら爾ふ云はずい、何處だネ？。』
『古町の大河だけど……歸へつたら爾ふ云つて下さいな、妾しお錢湯の歸へりに又寄りますからネ？。』
と妾しは直ぐ傍の入舟温泉へ入浴つて、妾しは長湯が嫌いなので、三十分斗り雜と洗つて、戸外へ出る。舊曆の二十三四日だらふ、空はドンヨリと曇つて、星一つ見へぬ眞の闇、冷たい風が湯上りの微熱た双頰を颯と吹く、五尺幅ぐらいの狹い小路、薄暗く「按摩」と書いた障子を照して居る角を曲つて、西へ行くと、直ぐ其處がみなと屋だ。
戸口の一寸出張つた櫺子へ、「美那登屋」と不格好な字で書いた行燈が懸けて有る、誰か歸へつて來て點けたのだらふ、と思ひながら
『先程は。』
と、例の暖簾を潜ぐると、誰も返事をしない。ヒヨイ

と土間の隅を覦ると、炬燵の處の洋燈より猶暗い三分心の、煤けたやうな洋燈を釣るして、其下に四十五六の背の高い女が、せつせと蕎麥を、グッと底の上つた古い籠へ盛つて居る。

『先程は。』今度は些時大きな聲で云ふと、炬燵に當つて居た、薄汚ない子が、

『お母樣と!!。』と大きな聲で怒鳴る。

『何だ!!。』突劍呑に、五月蠅さゝうに云いながら、ふと妾しの立つて居るのに氣がついて、

『へー今晩は。』

『聾婆あ……。』

と、子供は少さな聲で云つて、字を描き始める。

『ヤレ、好ふお出でな!!。』と戸外から小柄な、五十一二の男が這入つて、ニヤ、ニヤと妾しの顏を見る、此家の亭主だらふ。

『何處をブラ〳〵遊んで歩いつて居るら。』

お內儀樣が苛苛したやうに云ふ。亭主はチユッと、舌打ちをして

『人の顏せえ見りやあ、直ぐ小言だ。』 少さな聲で言つて『叶屋へ行つて來たのよ!!。』

と大きな聲で云ふ。お內儀さんは、いま〳〵しさうに

『人が耳が遠いと思つて少さい聲で惡口を云やがる。馬鹿にしてけつから……そんな所に茫然と突つ立つて居ずに、お手傳えをしてお呉れやれ!!。』

ヂロッと鋭い眸で睨めながら云ふと、

『仕樣の無へ婆あだなア、エヘ、、、。』

厭な笑い方をしながら、お神さんの側へ、ノッ〳〵と行く。

平つたい釜の中で、グッ〳〵湯が沸つて居る、其中へ蕎麥を入れてはうでゝ居る。

『ぢや成るべく大至急で持つてきて下さい。』

と妾しが出ようとすると

『へい〳〵畏まりました……二十だネエ?。』

と內儀さんが、優しい聲で云ふ

『イ、エ十五ですよ!!。』

お內儀さんは無言つて、妾しの顏を凝乎と見て居る

『十五だとよ!!。』 直ぐ側に茫然立つて居た亭主が大聲で云ふと

『十五?……由公!!馬鹿ッ小僧奴!!二十ぢや無え十五だつちうぢや無えか。仕樣が無え野郎だ!!後で見やがれ!!ハ、、、そいぢやあ直ぐと持つて行くで……。』

妾しに云ふ時だけは妙に優しい。妾しが戸外へ出ると、家内では剛さんが響けるやうな聲で

『邪魔ッ糞の處に立つてるなあ、此亭主は……。』

と云つた、亭主が少さな聲で、何かブツ〳〵、言つたらしかつたが聞へなかつた。

妾しが家へ歸へつて十分斗り經つと、亭主が大きな岡持を提げて、蕎麥を持つて來た。莫迦に寒い夜である。

寫生文的だが筆はなか〳〵利く方である（評）

鬼の面

小森たけ子

『鈴さん貴女の理想は何なの、私はね私はホ、良妻賢母主義よ、笑つて頂だい』なんて話の種の盡きた頃に成ると、口癖の樣に云つて居た御磯さんが、那麼良緣を誰が何と云つても『唯嫌なのよ』の一天張りだから不思議でならない。

此間も自慢の白菊を五六本切つて、勝手の知つた栞戸から聲をかけると、『誰？　あら鈴さんぢやなくつて、御這入りなさいなね』と平日に無い曇つた御磯さんの聲だ、私は持つて來た白菊を渡すと、嬉相に眺めて居たが『まあ綺麗ね、辰や一寸！　此れね大切に手桶の中へさして置いてお呉れな、氣を注けてだよ、鈴さん其麼處に立つて居ずに御上んなさいな、さあー』黄八丈の座蒲團を手あぶりの前に敷いて呉れた。

髮つたら引詰めのぐる〳〵卷き、平常から色は黑い方だつたが、彼の日は特に眼立つて居た。私は座り乍ら、『貴女何處か惡くないの、大變窶れて居らつしやるわ』と尋ねたら『イヽエ別に何處も惡か有りませんが矢つ張ね、毎日煩悶が絕え無いからでせう』つて顏にも似合ぬ白い兩手で頰の邊りを撫でゝ居た、

私は其れを聞いた時益々不思議がらずに居られ無い何が不足で煩悶なんかするんだらう、財產は有るし、兩親も揃つて、今度の緣談だつて相手は銀行の頭取なんだもの、失禮だがお磯さんの御縹緻ぢやちと過ぎる位ぢや無いか、其れを何か不滿での煩悶かと思つたら御可笑くも有つた、御磯さんは絕えず物憂い樣な顏をして居た、而して氣に成る程溜息を吐く、平日なら話半分に笑半分と云われてる位、キャツ〳〵騷ぐのに什うしたのか知ら、其れとも私の知らない秘密が潜伏して居て、お磯さんを苦しめるのかも知れないと思と、好奇心に騷ぐつて見度い樣な氣もする。

無言で机をガタつかせて居たお磯さんは、幾枚とな重り合つて居る半紙の間から、古びた一枚の紙を引張り出して『鈴さん貴女是を知つて居らつしやる』投げ出す様に机の端へ置く、私は何かと思ひ乍ら覗くと筆太に天心と書いて有る、確に何處でか見覺えの有る字だ、が什うして是がお磯さんの手に渡つたのか不思議だ。凝乎と眼を閉つて思ひ出相とした、出相だが出ない、私は遂々『誰が御書きなすつたの』と降參して了ふと、ニヤリ〳〵薄氣味惡く笑つて居たが『分らないの、ホヽ、ちや此次の日曜に入らつしやい、乾度何もかも御話して上げますから……。』云つて又ニヤリ〳〵笑ふ、何だか狐にでも欺まれた樣な馬鹿々々しい氣がしてならない、で日曜には乾度來るからつて引き止められるのを無理に歸つて來た。

自分の書齋へ這入ると、一變したお磯さんの態度と會話中の出來事を思ひ合せて見た、什うしても不思議だ、此不思議を什うにか解決してしまはにや……と色々に苦んだが、不思議は矢つ張り不思議で、今日が御約束の日曜なんだもの、夕方例の處からお磯さんを呼ぶと、先刻から待ち疲れて居たとか、何とか、上手い事を云ひ乍ら『寒い時の御馳走は是位よ』と火鉢の火を掻き立てたり、熱いお茶を注いで呉れたりする、前よりもげつそり頬がこけて、少し大きく成つたなと思はれる眼は座つて凄味を含んで居る、私は何だか其顏を見るのが嫌で耐なかつた、お磯さんは苦し相に眉を寄せて、二三度身も掻きして居たかと思ふと出し抜けに『ホヽ、まあ何んて吾儘なんでせう、折角來て下すつたのに此れですものね』恰で人毎の樣に云つて莞爾したが苦痛の色は明白と讀まれた。私は何と慰めて好いか分らなかつた唯『氣をお靜に持つて居らつしやいよねお體にでも障るといけませんわ』と云ふと『有難う、そう云つて下さるのは貴女ばつかりよ、罪の種を撒いたのは自分だから、自分で苅るより外ないわ、でも親なんかつて勝手な者ね、此間の縁談だつて私が好いとも惡いとも云はない内に定めて了ふのですもの、そう〳〵今日貴女に何もかも御話する約束だつたのね、私斯うして居ても隨分苦しいのよ、最う私の口から何も云ひませんわ、イヽエ云へないのですの、ですけれどね貴女にお渡しするものが有つてよ、何卒誰にも見せ無いて頂だいね、而してお分りに成つたら、罪に悶えて居る私に一雫の涙を垂れて下すつたら最う〳〵其れで滿足なの』お磯さんは兩眼に一杯涙を浮べて、

机の下から取り出した物を私に渡した、其れが此桐の箱なんだ。私は家へ歸ると早速袂から箱を取り出して見た。

長さ四寸に、幅三寸五分位の小箱だ、蓋は嚴重に釘で打ちつけて有る、私は『誰にも見せないで頂だいね』と云つたお磯さんの言葉を堅く守つて、兄さんから釘拔を借りると、書齋の戸をピッシリ閉めて、三分心の洋燈を引寄せた、深い紙笠を被つて居るから邊り薄暗い、一本々々釘を拔いて居る自分の後で、あの蒼褪めた顏のお磯さんがニヤリと淒い顏して笑つてる樣な氣がして慄然とした。すると今度は薄暗い洋燈の向で苦し相にもがいてはほつと溜息を吐いて居るお磯さんがスーと疊から浮き上つて何處へとも無く消えて了ふ、光の屆かぬ天井が段々低く成つて來て、冷たい手の樣な物がソッと頰の邊を撫でやしまいかと、急に怯がして背中の方がポッと熱く成る、額の處を輕く指の先か何で押えられてる樣にくすぐつ度く成つて來て、顏を上げる事も出來なくなつて來た、其れでも釘を拔く手は休めない、殘つた一本を拔くと蓋はスルッと膝を辷つた、私は洋燈へ斜に向けた小箱を覗くと其儘、アッと机の上に打ち伏してしまつたのだ。體中が妙に痺

痺れて胸の動悸はトツトと涙を打つ。

白い齒を思ひ切つて喰ひ縛つた、顏は茶鐵色して、稍々飛びくれた眼の上方に黒々とした眼球が半分だけ見える、額の兩傍にはお定りの角が生えて、何處と無く息血の通つて居相な生々しい鬼の面なのだもの。

噫！私が久しく解決に苦んで居た不思議も此鬼の面一つで、遺憾無く了解した、此れは確に（今は免職されたが）英語科敎師澤田晃先生の秘藏物だつた、そら〳〵あの天心の二字も澤田先生が小學を出る時紀念に書いたと云ふ其れに違い無い、と心當りがつくとお磯さんが苦悶する理由も、其苦しい胸の内も察せられて、一生を誤つた哀な友の身が氣の毒で私は同情の涙を絞らすに居られなかつた。それから三日程すぎた、愈々お磯さんの婚禮が有ると云ふ晩だつた、仲働のお駒から『お孃樣、今日藤見樣に御婚禮が御座います相ですから失禮ですが柴戸の處から伺つて見ましたらお孃樣お磯樣が大變御立派な物を召してホい、御緣の處で泣いて居らつしやいますの』と云ふはしたない言葉を聞いた。

末路

伊藤ぎよう子

藤枝さんはまあとんでもない』遇ふ人も〳〵皆斯樣な事を云ひ合ふが、實際品行が良くて氣位の高い藤枝さんの事だもの、皆の驚くのも無理はない。『藤枝さんが不淨取と夜脫した』何だかうその樣だ。私でさへ聞いた時は『まあ！』とあとも出ない程であつたが、考へて見れば思ひ合される所がないでもない。

小山內藤枝さんと云へば、私よりも一年前の卒業生で、文學好きで品行がよくつて、其上容貌も見憎からず、何時も級中の首席をしめて居ると云ふので、先生にも信用せられ四百の學生には羨望の的となつて立つて居る。卒業式もさし迫つた頃氣早の連中は一人きめで『小山內さんは高等師範か女子大學の文科が望みだつてねえ』などゝ云ひふらしたものだが、四月もすぎて夏も去つて二年を經た此頃までも藤枝さんは何校へも行かなかつた。校長のガントレット先生から、校費で傳導學校へ入學してはとすゝめられた時も、何とか彼とか云つて遂に辭退して終つた。



秋　紀伊　神田みつ子

お宅がすぐ一軒隔てゝ隣りなので御互に心安く、私

と藤枝さんとは學校へも英語にも何時も一しよに行つたものだ。ある日學校から歸りに柳の青々と芽をふいた濠沿の道を歩き乍ら『藤枝さん何だつて傳導學校へ行かないの！』ときくと、例の癖で涼し相な眼を一寸見張つて『でも私にはとても駄目だわ、それに學資を受けると云ふのが何だかあれでねえ……』實際傳導學校では藤枝さんには不向だらう、優しくて人を反らさぬ所などは持つて來いだけれども、藤枝さんはどうしても文學的の方面に進まなくてはならぬ筈だ。

校庭を飾る海棠の花の眞盛り、人の心も浮きたつ頃を盛んなる卒業式は擧げられた。白衿紋付に紫紺の袴の穿き方も野暮ならず、すき透る樣な人をチャームする樣な流暢な聲でよみ上げた藤枝さんの生徒總代の答辭は五百の人の眼をあるかゝやきに滿たしめた程よく出來たものであつたが、其顔色が一向に冴へない。無上の月桂冠を得乍らも日一日とたれこめてゆく藤枝さんの胸には何を包んで居るのであらうか。それは間もなく分つて終つた。

お宅と私方とは表こそ戸棚屋を挾んで居るけれども裏は纔一重を隔てゝの庭續き、藤枝樣方の方は二坪程の花畑を殘してすぐお妹子と二人の書齋が建つて居て私方は庭は一面の干場になつて居る。ポカ〳〵と溫い日の晝下り、藤枝さんのお母さんは背の美つちやんをゆすぶり乍ら、數人の職人を指揮して張物を手傳つて居られる母樣は垣ごしにこんな事を話して居られた。

『ハイ、もう彼女にも困つて終ひます。官費の高等師範へならやつていゝ樣に宅は申しますのに、是非片瀬先生のお宅の門弟にやつて呉れなきや病氣になつて終ふなんて、まあこんな事を申して居ますんですよ、夜も泣いて計り居る樣ですし出來る事ならやつて見たいと思ひますけれど、何を云つてもお金が第一でしてねえ、ホ……』淋しい心苦しい笑ひ方である。

藤枝樣のお父樣は縣技師で、中流の生活はして居られるけれども、別に不動産と云つてはなし子供は澤山ある事だし、とても藤枝樣の希望を納れる程の餘裕はないのである。

がしかし藤枝さんの顔色は次第によくなつて元の冴々しさに歸り、はては粉黛をこらした艶なる姿を見せる事さへあつた。何でも上京の事は思ひ止まつて其更りに立派な所へお嫁に行ッて見る考へらしい、一體に自負心が强く名譽心が深くて人の背後につくのが嫌

ひと云ふ性分なので持ち上る縁談も〳〵一つも世間見ずの藤枝さんの心をみたしめるものがなかつた。かれこれして其年も暮れに迫つた時、私も姉の縁談が極まつたので、藤枝さんのお母さんも嬉言を言ひに來て下すつた。其序に『藤枝もまあ今度はやつと定りかけました樣な次第で』と仰ッしやるのを、すかさず母樣が『お先は何處ですか』『ハア淸國に居る人だ相ですよ』何でも法學士で領事館付きだとか、さては藤枝さんも望みかなつて未來の外交官の夫人かと思つて内々喜んで居たが年があけてはや夏近くなつても何處へも行かれる樣子がない。不思議に思つて聞いて見ると、隣りの戸棚屋の内儀さんがある事無い事しやべくり散らして到頭破談にして終つたのだそーだ。戸棚屋には今年二十四になる初美さんと云ふ娘がある。近頃藤枝さんの樣子が變になつて來た。望む上京も、願つてもない縁談も遂に思ふまゝにならなかつたので、大分失望して來たらしい。そして自信の强い丈けに級の秀才と云はれた其身をそのまゝ田舍に埋らす事を此上なく口惜しくも感じて來た。月のよい夜を書齋の柱に身をもたせて、悲痛な聲で藤村詩集の

　天つみそらを渡る日の、影傾ける如くにて

　名の夕暮に消えて行く、秀いでし人の果も見きの一節をくり返し〳〵淋しい目には露をさへ宿して口づさむのを見受けた事さへあつた。二年前の華かさも何處かへ失せて今はもう書齋にのみ籠つて讀書に耽ける身となつて終つた。

才あつて田舍に埋れて居る人の作などを、身方でも得たかの樣に喜んでよむのを知つて居るので、ある日垣の處まで行つて小聲に『藤枝さん！』と呼ぶと『ハーイ』と聲してメリンス被布をめされたハイカラな半身が障子の内から現はれた。『一寸これにねえ、草花と云ふ人の『暗愁』が出て居るのよ、よんで御覽なさいよきつとお氣に入るわ』つて云ふと、すぐに向ふから下りて籬際の菊の中まで歩んで來られる。パラ〳〵と頁をくつて見て『えありがたう、何時もねえ』言ひ作ら後ろの方を見返られたが、フと廁の方へ歩んでゆく頬かぶりの不淨取屋を見出して『あのう千代さんあの方ねえ、あゝ見えてあれで今年の中學の卒業生なの何でも二番とかで出られたのですつて』『まあ見かけにもよらない……』『ね、本當にお氣の毒なの、何でもお宅は相當の財産家だけれども、お母さんが大變な六つかしやでしてねえ、あの方が内證でうけて及第せられた

高等工業の試驗も、とう／＼願ひ下げか何かにして、無理に百姓になれと言はれる相なのよ」

それから垣根にたつたまゝ、冬近い日の光を受け乍ら三十分程も文學上の話をしたか其時藤枝さんは理想の戀愛は淸いけれども實現されるとなると汚いもだとくり返し／＼云つて居られた、まあ藤枝さんは何處まで詩的で空想的なのであらう。それに珍らしく品行の正しい方だと思ひ乍ら『左樣なら』と會釋して別れたのであつたが、今考へて見ると美しい夢からさまされた樣な氣がする。

不淨取屋とは一口も交へた事はなし、それにその身の上ばなしも、其男の親にきいたとの事、全く淸い間であつたにはちがいないが、不遇に泣く二人はつひに相互の美しい同情をとり交したのであらう。一昨日の雨ふりしきる夜藤枝さんの姿は其書齋に見えなくなつた。そして哀れなる遺書によつて不淨取屋が同伴である事を知つたのだ相な。

雨催ひ

尾張　成田いし子

最う小半町で村端れ松並木のある街道へ出る三崎といふ所に、間口こそ狹いが店一ぱい荒物を並べた家が

あつて、ちよこ／＼小走りに來たおみきの足並は、其處の門口でぱつたり止まつた。しやぐらい裡を見透しながら。

『姉さん……』と呼ぶと、暫らくして。

『みきさんなの？』仲の間で釜の下を焚き付けて居た姉さんが返じをしながら、衝と上げた顏が煌と滿面に焚火の光を浴びて、はつきりと見へた、其面持には不言不語の間に。

『今頃どうしてまあ――』といふ疑問で妹を迎へて居るといふ事が推察られる。

『姉さん……』浮ばぬ語氣で甘つたるい樣に斯ういつて近づいたおみきは最う泣いて居る。

『おや!!どうしたの？泣いてちやあ分りやしないぢやあないか、え、どうしたのさ。』姉のお錦は今更らしう不審かしそうに見成つて居たが……汚れた手を、急に前掛で拭いて、そうしておみきの解け懸つた前掛の紐を直してやりながら、更に。

『眞實にどうしたの？』と其顏を覗く。

『高木のお加代さんがね、お嫁に行くんだつて。』

『お加代さんがお嫁に？』

『えゝお嫁に行くこともいゝや、何處へなと勝手に行

くがいゝけれど、姉さん‼妾、口惜しいわ。』止度もなくはふり落つる涙をそつと抑へて。
「妾を、姉さん、妾をね、女中に連れて行きたいんだつて。』
『まあ……』とお錦は呆氣に取られたやう、またゝきもせで凝乎と妹の顏を見詰めて居たが。
『そ、それでどういつて遣つたの？』
『どうつて姉さん‼そんなこと誰れが、妾、全く口惜しいわ、姉さんだつて口惜しいでしよう、お母さんも泣いて怒つてるんだもの。』
『だからさ、どういつて遣つたのつてこと。』
『どうも、こうもないわ、お母さん怒つてはね付てやつたの。』
『そう、當然だわ。』お錦はあらぬ方を屹と見て、いかにも口惜しさう、身をふるはしたが。
『人を何だと思つてるんだらう、奉公人のくせに。』と心から呟やいた。姉の同情を得ていくらか心強うなつたのだらう、ぼんやり戸外へ目を遣つて居たおみきは、ふと、其手束の亂れた銀杏返の頭を下げた。大方義兄でも見付けたのだらう。



田舍にて　牛込　佐野貞子

『やあ、みきさんか。』と義兄の庄治は今商先からでも歸つたらしい、筒袖の厚に紺前掛といふいでたち、元氣よう姉妹の傍へ來て。
『なんだ、そんな處で姉妹がくすりぶり込んでさ。』と上り框へ腰掛けてわらじの紐を解きながら例の口輕う。
『みきさん、お母さんが探して居たぜ。』と大聲にいふ。店の柱に懸つたくすぶつた時計が暢氣に六時を打

つて、つい近い踏切を下り列車が勢なく通過た。おみきは思ひ出したやうに。『姉さん、亦來てよ。』言葉を殘して歸つた。足音の消えた頃、お錦はつと流元へ行つて、浸してあつた小松菜をごし／＼洗ひ始めたが、妹から聞いたその事は彼れには深い煩悶の種で、彼女の手は殆んど機械的に動いて居るのみで轉々たる想はしきりに胸を馳け回つてる。

彼れ!!高木藤助は自家の奉公人であつた事。父の存在中は忠勤者とて信用を博して居た事。父が亡後の翌年から巨萬の資産がばた／＼と傾きだした事。當時一番番頭であつた藤助は亡父を殘した秘密の借財の有つた爲であると云ひ振らした事。全く破産の悲境に陥つた時、藤助の暇を取つて何處へか姿を隠した事。爾來消息を聞かざること數年――瓢然歸國した時は莫大な資産を有して居た事。自身では投機で儲けたと言ひふらして今日の榮華を極むる事――、

つまりは飼犬に手をかまれたのだらう、當時五歳のお錦は其間の事狀を委しく知るには餘りに小さかつたのであるか、兎角人の成功をそねむ世間の人は、姉妹の耳へ始中終、彼男が昔を叫いて居たので。此事を思ふとお錦の心は裂ける樣である。

洗ひ了つた小松菜をざるに上げて、みすぼらしい盲目縞の袢纒に二布の前掛をかけた自分を顧みると、亦更に涙である。

『お母さんや妾がこんなに難義をするのも皆んな彼男の爲だよ。』と獨言ちたが。

『恩知らず奴、お加代にお孃さん呼ばはりさすのも聞いて呆れるわ。』忌々しそうに舌打して、悵然と空を見上げると今にも雨が降り出しそう、濃い灰色の雲が一面に廣がつて星影一つなく、只停車場の燈がぼんやりとちら付いて居る斗り。

『亦、雨か知らん。』呟やいて彼女はつと家へは入つた、家内にはもう灯がついて、夫の庄治は火鉢の向にあぐらを掻いて運ぶ夕餉を物待らしう烟草をふかして居る。



二等　新體詩

野にいねて

土佐　石川きよ子

氷雨する日も
みぞれする日も、遠うゆきて
つめたき影のきら／＼と……
霜のひらめき——遠うゆきて
脂肪ぎりたる肌の匂ひ
はゝゑみ來る温みに
なまめき心ふとよみがへる。
雨後の原なり、ほか／＼と
濕り地、にほふ野にいねぬ、

なまぬるき日のくさみ
追憶はむら／＼と胸に溢る、
あゝ悲しみの、うれしみの
追憶は今きほひきつ……
街の方より動物のうめきぞ空を走り
來ぬ。
追憶は今、あか／＼と燐に炎えて
灰となる淋しらよ
肌の香のかげとみるうす雲は

空にみちぬれ。けだるげの
日のあたゝかみにみもだえて
街の方なるどよみを聞けり。
なまめき心ひた／＼と胸に和めば
追憶の肉の痛の喰ひいりて
胸の奥がはまざ／＼と
かきむしらるゝくるほしさ
街のどよみの空ふるはして
なほもはげしく寄する哉

現代文藝の反映が最も能く映つた作だ、今の若い人に斯う云ふことを想ふなと言つても、時代の文藝が語つてゐるから仕方がない、自然主義の影響であらう、前半野にいれては理想めいて却つて感興を薄くする恐れもあるが、後半の追憶、憧憬、悶え、哀愁のさま〲を一々訴へたのは情迫つて好い、街のどよみがあつて、此詩なほ生色を添ふ(評)

三等

雛鳩

京都　松田まさ子

空の色やはらぎ見えて
潤へる春の朝の日
辷り入る大廣前に
光こそ活きて漂へ

朗らかの鈴の響に
胸の羽をさゝと揺るや
雛鳩は軒の巣ながら
和らかき眼をしばたゝく

地に下りぬ空に舞ひ出ぬ
影さすよ羽音よ聲よ
波揺る丶光に乗りて
はた〳〵と羽を延しぬ。

かすかにも生絹織るらし
吹き起る管の鳴る音
神の歌さえ〳〵として
梅の芽は青み初めなむ。

雛き鳩はた〳〵と飛ぶ
胸をどり羽うちのして
影と影見比べつゝも
やすらひの首をかしげぬ。

何となく心持の好い、感じの好い作、神の大前の雛鳩など別に新しい題材でもないが、感じが上手に表はしてあるので、如何にも神々しい、又わか〳〵しい情緒がよび起されるやうに思ふ(評)

秀逸

草の瞳

周防　空野花子

土よりいでゝ草の瞳は、まだ伏したれど
肌に置くやさしき光り誘いに
跼してのぞむ、うらゝ日の——
乳房をさぐる幼兒と。

窓には充つる暖かき風の香りの
又こゝろ安眠するらし鳥の歌
見よ目に近きものなべて
肌の色のよろこびを。

織へる腕に凭らしめて君をし見れば
壊ほれし心のいつもたまゆらに
遠きに馳せん、——徒らの
夢のあがなひ、哀しやな。

よろこびわれを繞れども、努力の寂れ
絶望は地の輝やけるものみなに——
光さしぐむ草の瞳、哀れはわれも

天仰ぐ頭もたゆし
草の瞳――只日に向ふ――。

第二節、日や土や鳥や暖かさを表はした調子と、第四節よろこび我を繞れども、哀みの去りやらぬを歌つた調子と、共に太だ佳、ムードの發はれた作、小さな疵は多いが今殊更に攻めず（評）

木の實

大阪　筒井花子

見榮誇る木の果たわゝに――
繁葉の中に
孤り夢みぬ。
そは何を夢む――木の果よ
裂の日か――あらず、かくなる
現在のぬるたま。――
得むとして若し手をのべば
おのづから。やすく落ちては
熟み裂けん。
紅うみし木の果よあはれ
夢をとけ早く、今の
夢を解け。

手短に歌つてあるが、餘韻もあり、姿もあつて、忘れがたい、棄てがたい（評）

春のおとなひ

土佐　川島朝野

大極の底ひも遠く、
いと長き孤寂の夢に
鎖されし天地のそゝろの吐息
無花果の絡める枝をそとくゝる。
細らかの「生」のほのめき
暑にきゆる薄雪に――青麥は
日の華の香に眼を開けぬ。
活動の鋭き匂ひ、
漂へる萬木に沁めば――梢の顫え
さゝ揺れて　戀にときめく春の色。
白銀の星のこぼれ穂、
丘の上、紋織る花に泣きぬれぬ
あゝ九輪の日のひかり。
軟風はそゝろかに
彩透く珠を葉に宿す千五百花
口吻けぬ――たゆげき喘ぎ。
天地は、薫香の流れ、
倦んじたる沈默をやぶり、
おもむろに
薄ら映えぬる春のおとなひ。

若し强く此作者の創意とすれば、恐ろしい奇才であるが、技巧も題材も七八分までは有明集中のもの、強ち驚くに足らず（評）

祈の榊

羽後　りう子

神無月。日はとざゝれて
影をもらさず、鈍色の雲
入り亂れ涙さそふ夕
神の御前、二本の榊。さはくと
風なきにゆれ、あやしの葉すれ
胸をつく。小女あり、そは美しき
貴き衣を身につけて、つゝましげに
も
純白き紙、つとさきて、しなやかに
左なる細指先きを動かし、御榊の

末葉に結びはて、『此願事叶はせ給へ』と
双手つき、神前に膝まづき、やゝ暫し
祈りて、何處にかたちされり。
若き者、ちらほら來り、さゝめき合ひて
賑ひぬ。今古き御祠。やがて又
三十路に近き盲目女。まろぶが如く
はせよりて手探りに、『若き榊よ』
『繁りの榊は』と老木の方の。枯枝握り
暗汚き細紙を、左指もて、結ぶとすれば
折からの夕風にさわ〳〵と
葉こそすれあへ、背きつゝ。盲目女
又あせり、結ぶとすれば、
朽ちし(?)紙ぶつときれぬ。若者は
嘲りの笑をうかべ、かや〳〵と歌ひつゝ
出でゆけり。盲目女は又切紙出し、
冷たく固き指先に、一念こめて、
結び出せば、さすが念力、此度は固く
結ばれて……。嬉しげに手をひく
せつな。
老ひし榊の枯枝はぽッきと計り。
凶の音たて――、
盲目女の其侘しげの面わには
むら〳〵と絶望と疑惑の影浮べ
『はや神も捨て給ひしか』と。
めしひの凄や、何處ともなう見入て
冷き笑居にのぼる
神の御榊風なきにさわ〳〵なりて
今ぞ夕暮、光なき日は今山に沈みはてぬ

事柄は變つてもゐるし、詩になりさうだが斯う云ふ風に敍事にして了つたから、餘りうたらしい韻に乏しい、惜いこと(評)

白き花　　河内　しま子

草葉がくれの白き花
ふたつ見出でぬ――
根をわけて植えても見しか
わが胸の奥庭に。

十四の春の少女氣に
たゞなつかしう嬉しうて。
さかしげに母に見すれば
『むゝ』と笑みたまふのみ。
培へば
花は匂ひぬ白色美しう。
雨もなく風もなく
永久にかくてあれと我は願へど

題は「異父兄君達に」とあつた、意味は深長らしい、併し詩としては、もう少し物足らぬ(評)

追想　　靜岡　富永朗子

白梅のこぼれこぼるれ如月の、
かゝる日なりき――奥まがき、
築山かげに俯居して
戀がたりする人も見き。
白梅のこぼれこぼるれ午さがり、
かゝる日なりき――奥まがき、
かたみに人は擁き合ひ、
接吻にこそ酔ひにしか。

白梅のこぼれこぼるれそのかみの
ふたりのひとり――追想の
若きにかへるまぼろしを
さても吹く風薫りぬる。

調子よく、段取りが好いので、面白くうたはれる(評)

老樹　　三河　玉の井

夕日影、強き努力はきざまれて、
絡みする葉や乾反葉や、聖き慈悲に
うなだれぬ、あなしめやかに。
『寂寥』に、若き血潮は追はれ去に
更け沈む夜に病人の『生』の燈火
ふと消えし刹那こゝち。
秋は逝く――(今し、臨終のうごめきや)
大日輪も老ひれて、殘るは老樹
さはれまだ力は盡きじ。
白き魂ゆらぐごとくに…身ぶるひぬ
眼の光に、涙目なるほけし樹の精
うらぶれの吐息かすかに。
森の雨、晴れたる空の新月は
野末のかなた、草の上に夜の寂光
夢に似し老樹の影や。

泣菫を追随する無名の詩人は天下に甚だ多し、此も其の一人、模倣期に在る人としても才氣が見える(評)

黒帆　　本郷　萩原　操

夏の日は今ひるさかり
眩暈めく如き海の面
風は死し雲は默して
潮の音のたゆげのうめき。
みよ沖に黒帆はうかぶ
敗滅と恐怖と悔の
いと暗き人の心に――
あゝ默し黒帆はうかぶ。

病葉

ふと餌をえたる鳥の如
梢を落つる病葉に
入日のかげはあか／＼と
秋の姿にうつるかな。
冷たくはらふ西風に
ちからなく舞ふ病葉の
地に秋寂びの渦輪かき
悲しきこゝろに世は黄昏るゝ

黒帆の象徴詩は思ひつき佳なれど、二聯の詩にしては冗語が多すぎて失敗、病葉は通例の作、二聯の詩としては此方が整つてゐるけれど、活氣がない(評)

暮るゝ秋　　井上笹波女

鈍色の雲行きて、あえかに出し新月は
まばらに立てる、木立に入りぬ、
光は根元を匍ふごとく。
いゝ、しひな燒く野の香――
白き烟は、微風に野を迷ふ、
さあれ、あの[illegible]ふ月と

接吻くる時もやあらん。
輕く蹈む、落葉の低語は
我を嘲むか――淚ぞ流る
嗚呼！凋落の暮るゝ秋
戀成らざりし悲しき身。

目路遠き水車小屋
終日めぐる饑えと疲れに
軸は凋れたる水を怨む
きしる響きぞ胸に迫る
滅亡の兆――あゝ終焉の――。

又ひとしきり、ぎい、ぎい、と
病ひ呻く苦しき音なり
ぽたり、ぽたり、ぽたり
水泡は凝ほりて、屋根裏つたひ
月の七彩のせて逝く
暗き深き、幽路の底へ。

君が文章に比べるとなほ未熟の點もあるが華藻溢ひありて、かけ出しの人とは自ら異る（評）

標本箱

芝 眞崎靜子

わが室の暗き方へに
高くつみたる木の箱の玻璃の破ひ蓋
蝕し行く日の光に
うす赤く映えて照り交ふ。

淋しさに其の蓋取りぬ。
樟腦の香はむせぶ如つと浮つきて、
去にし日の追憶は
綾の泡、浮きて匂へり
さまざまにピンに刺れし
花に舞ひより蜜を吸ふ胡蝶の骸や、
はた堅き甲蟲の
藏しある標本箱。

死の肉を好む小蟲は
標本箱のふちめぐり窺ふとして
藥の香に逃げ飛びぬ。
日の蝕は終りて明し。

奇に過ぎた（評）

黑き力

龜井戶 鵜澤波子

闇黑に奇力あり、
安らかに横へし身を
壓しつくると、
忽ち目さめ
胸は羽うちぬ、
靜かなる血汐のながれ、
堰かれては
逆鳴りすさまじう
をののくや面熱り、
耳には何ものか細音もひゞく
眼は空間にさま〴〵の
形象を書き
書きては、はた見失ふ、
そをとらへむと
いらだちつ、
堪えぬ渴きに喘ふく、
汗ばめる身をかきむしり、
唸めきもだえてのけぞりに。
力は去りぬ、
疲れ果てし身を長々と……
ああ冷寂に殘されて。

香爐

相模 粂田血涙

花いろ衣の艶びと、
吾ゆきずりのかいま見や
衣の華やぎ袂にひらく、
彩の諸々緋のもやう
忘れ果つる世心の
底冷えにたる灰暖み
溫りの香の「魂」乾ては、
吾から咽ぶむねの中
胸かいならず灰よせに
想亂れぬあこがれぬ
香の闇――これや吾魂の
彩か――もろ〳〵の緋の模樣
蹤かほる華ふみて
裸足淸らの拾足や
童女は捧ぐくゆりかに
「心」の香爐「魂」の香

まぼろし

麴町 横關 春子

町はづれ、古りし御寺の暮の鐘、
遠く細く。さびれて搖るゝ、
そが中に、悄然と我はたゆたふ。
嗚呼、果敢なくゆきし、
去にし日の、戀物語、館の灯、
秘めしおもひの蔭やぎに、
ほのかにほのかに、吐息ぞ顫ふ。
おゝ西の空、春血に染むの搖き、
爵として、惱みをまとふ。
にほひ秘む樹立の奥に、
常盤の咽びはあれど、
慰籍もなき、暗き――暗き祈禱よ。
華やげる館、媚の最中に、
ほのめく接吻、からむかひな、
おゝ君在しぬ、夢の如くにほのかに、
あなおどましと、縋り縋れば、
憐れ、憐れ、君はあらず、
まぼろしは闇にうつりぬ、

街の虹

鹿兒島 岡積 春子

八幡の銀杏のかなた、
仰ぎみる人さまざまや、
泥濘路を轅棒胸だかに、
車夫があらき物言ひ、
豆腐屋の臼の音やみ、
足袋うつ手やすめし主人、
矜り顏に兒等はさゞめく。
ふと見れば葉茶屋の前の、
美しき人――つと入りぬ、
彩虹は北より浣る。

我が旅

奈良 中富よしみ

我が旅や
行きつきて
我立てり
あるは又
少女の里を
里のはづれに
行く手氣づかひ
あとかへり見て

嘉はしの
名殘惜し
行くべしと
なつかしや
少女の里を
今別るゝに
せきたつるとも
あとかへり見て。

詩の色
花やけき
ふり捨てゝ
今はとて
青春の香に
少女の里を
行かざるを得ず
行く手のぞめば。

恐怖てふ
すかせども
涙して
うたてやな
さ霧の閉し
見えぬ彼方に
いでや入らなん
あゝ我が旅よ。

常春

山形 本間 哀子

常春の長閑けさに
憧憬れぬ――土の春
そが匂ゆかしくて
萬象が息吹する

たまゆらに生を聞く。
美のうたげはぐゝめる
常樂の、あての譜は
美鳥の羅物の
羽にぞそとゆらげ
生凪ける國の春。
現實の寂寞や——
若き血は囚獄ゆく
氣配する、深刻に
憂愁秘めてたゞ疲勞れ
喘喚へる弱き女子。
常春の國の相
みまくとて憧憬れぬ
萎えし魂は噓欷する
さやかなる春の風
現なに吹き行けば。

冷血

信濃　市瀬いちえ

あゝ吾が胸内——大洋の底ひも知れ
ず
夜なれば、浪黑くして
悲しくも、漂よへる
敗殘の——孤舟にしあれ
あゝ吾が胸内——華やぎし花むらの
冷やけき、情なの雨に
散りて、零れて、濁々と
裸——寂しきそれの如
あゝ吾が胸内——悶として闇を縫ひ
行く
寒流の、如も寂しき
經來し日の、いとも憂愁き
追懷に——冷へし血潮よ
あゝ吾が胸内——そぼち立つ枯林の
上
冬の月冷たく、光る
名も知らぬ、啼き行く怪鳥
それの如——なほも淋しき
あゝ吾が胸内——温かき戀の生命は
いつの日か、とく走り逝き
これはこれ、生命の形骸
凝りし如——冷えし血潮よ

うらみ

紀伊　福本蒼生枝

雲にうつろふ夕榮の
暫しかゞやくさまを見て
慕ふは戀か大空に
消えてはあともなからまし
我の戀ひわたる乙女子を
思へば夢のごとくにて
失せては何を誇るべき

名殘りのかげもなからまし
いづれ闇なる現世に
若き血汐は冷えはてゝ
思ひに惱みもだえつゝ
恨みぞいとゞまさる哉

流れのひゞき

岩代　木下春子

靜かに暮るゝ花の夕の、
消えもやせなん音遠く、
わだかまる大空の雲を寫して、
黃昏の得しらぬ恨永しへに、
薄闇の小流れの面や、
若き人のなやみの色——
狂ほしの戀の泉に、
憧憬に醉らし人が、
新らしき生の影おふて、
雨の手に掬びし水の玉、
亂れては、
小草のかげのさゆらぐに、
心のなやみ——
きずの痛手の深くして、
悔に泣く其聲のごと、
むせびつゝ流れのさゝやき、
ゆるく——長く——

吹く風にしばしをたえては、
又くりかへす淋しき調、
常闇の面や、
ちる花に音なく、
そよく我髮に、花の一ひら、
あこがれの思はいづこ、
暗は默して——
をのゝく胸の小琴のみぞ、
かすかにひゞく、

新潮

徳島　西澤小百合

潮湧きかへる曉の、
海なる岩に佇めば、
軸に湧くなる憍慢の、
想ひは高く漲るよ。
寄せては返す磯ぎはに、
貝を拾ひて歌書きて、
砂に埋めて妹と妄れ、
幸ある戀に醉ひし哉。
微妙の響き傳へては、
高く薫づる八重の潮、
若き想ひに喘ぐ妾の、
宛がら开れに似たらずや。

希望

新潟　旭彩子

「天使の啓示」賛して

凪ぎ済む胸の大洋
高潮ゆる潮の際ゆ、
彩帆して希望の小舟、
終日を駛り走らふ。
ひたぶるに理想の花の、
幻影趁ひつ、又はも奇しき、
甘蔗の香ぐを慕ひて。
然はあれいつの日に、
歡樂の彼岸に夢みむ、
只見るは不安の潮。
さはれ見よ小舟はなほも、
懈げなく駛り走れる。

春の光

紀伊　北村初枝

椿落ち散る飛石の
苔うるほひし雨あがり
老樹洩れくる弱き日に
夢より覺めぬ、庭の面。

露にかゞやく蜘蛛の巣の
古りし燈籠の下かげに
はにかむごとく水仙の
花のちさきが俯首れぬ。

下界に立つか白梅の
かほりは空にひろごりて
春の光はあふれたれ。

氣高き姿、神のごと
鋏ゆるさぬ花の美は
ものに恐れぬ若き子に
たゆたふことを敎へけり。

森に立ちて

下總　小澤まゆみ

いとほのに狹霧沈める森の奥
木叢の蔭のくすし香の、白頬の花は
しめやかにつゆに濡れたる天つ國
天使のそれとあくがれて、そと接吻
けし
たまゆらよ、心はおぼろ追想の影ぞ
あやなし。
夢の香の、あな渦輪して卒附に
葉づれの音のなつかしさ、少女なれ
ばや、
うつゝなの美しみ胸の愛の華
ほのかに白う燃ゆるらし、仰ぎてみ

よや美鳥は
羽うち輕らに、瑯玕の相ふるゝ如
樹より樹に枝より枝に囀き交す聲も
消しき森の奥。

しかはあれ、暮れて行く森の歎かひ
夕霧は冷たく迫り死の色に
絕え入るごとく、木の葉みな
沈む吐息に嘘嘶りつゝ忍び音に泣く
瞬間を、ふとしもきくは滿足の
極ての恐怖の管絃樂こは森の奥。

空想

信濃　原田鈴穗子

鐘の音にふと瞬間の
空想胸の岩扉に
消え失せて覺る瞳に
冷やけき露こそ宿れ。

かくてなほまたゆら／＼と
さすらうて行く末つ方
來し方の深き追想
笑もあれ涙もあらむ。

おなもろし笑は空の
花の夢——唯美くしと
見たまいそ蒼ざめ心地
かくて散る儚き影よ。

涙は深き悲愁の
絕望寂寥のあとのみ
瞬間を世のしいたげの
慰めとたゞ酔ひすさぶ。

草苺

北陸　通瀨川俊子

縁のまろきはがくれに、
草苺球を綴りて、
そよ／＼／＼と朝風の——
すそふきまいて緋のけだし——
はぢらひやすき、ひなの少女よ。
ふれなばとけむ、君がみ唇に、
冷く甘き味に、
口をすぼめて笑みませる、
みひとみ、浮べて、ほゝ笑みつ、
鋏ちよき／＼莖ごととれば、
夕の星の涙まで、
ほろ／＼／＼と、うつはに、こぼる。

野守

和歌山　谷田峰子

露めく宵は里の子の、
星降るよとはためくに、
薫香の窓を半ばして、
見成る——影や何處へと——
色づく秋は紅くして、
一つ一つに置く影の、
天てる星の靈凝の、
畑、そは玉の席の名?。
五畝そは餘り廣からぬ、
苺の畑に野守して、
自からなる美祿の、
香に酔ふ莚に幾月ゆ、
鋏せしあと果をしぼり、
甘泡——白き齒も染まむ、
羨め後寒宮の歡樂を、
下界に享けたる人一人。
さるを今宵よ如何なれば、
窓に倚訪ふ星あらず、
咽ぶか冷へし野の石の、
音に泣く影の訪ひよれる、
薄氷する溪水の、
解くるに細き音と聞きて、
また耳たつる時やまた、
破れ琴風にたつる音?と。

一等 濱より

牛込 よし子

今日中里の濱に鯨がよりました、房州からでも流れて來たんだつぺとの事、風が甚いのでまだ見には行きませんが、何でもやつと二間半の小鯨だ相で『一昨年のがに比べると、それは小ひ、と云つて何しろ大いには大いでげすが、一昨年のはお前樣十三間もありましたかんね』と宿の爺が話し出すと、お神さんはお神さんで又『本當に彼時や面白う御座えましたよ、誰がでも切取り勝手で以て、懇意な船方共から其方此方持込まれましてね、終にや最う嫌んなつちまつて、鯨なら最う御免だつて始末なんで、それにまあ如何でせう私共のがの、慾が深いじやありませんか、サア鯨がよつたと聞きますとね、彼樣なヒヨワな躰をして居て、それで一番に出刄あ持つて駈出すんですもの、呆れたもんじやありませんか。』『アニ俺だつて初めつから然うした考があつたで無え、隣りの婆樣がよ、お前濱さ行ぐなら何でも切物を持つて行つたが好いつて敎へるもんだで、それも然うかと持出した譯でしてな、處があせうにも大くてさ、俺あおつ魂消げ了つたでげす。』と云つて大笑ひ、何とか云ふ此處いらでの網引が船方共を指圖して刄物を入れた相ですが、十三間もある鯨でやつと二十兩しか上らなかつたとか、料理法も何もあつ

たもんじやありません、只鯨や鰯と同じに煮附けて、まづいので終には肥料にしたと云ふんです、身鯨を小松菜と一緒にへカ鍋で食べると甘しいと云つて聞かせますとね、驚ろいてましたつけ。貴君は白肉のぬたが大好き、明日にも切賣を初めたら眞先に馳着けて、好い處をどつさり取つて置きます、此頃は最う氣分も惡かありませんけれど、如何にも淋しくつて〳〵、此次ぎの土曜日から祭日を掛けて、一寸と見舞つては下さらなくて？　若し御差支なら鯨丈けお送りしませう。

達意、（評）

二等　奈良より

和歌山　伏見八千子

今朝七時なつかしい此の舊都につきました。停車場には叔母さんと福枝さんとが迎ひに來てゐて下さつて大層嬉しう御座いました。

車ですぐ宅へとの叔母さんの仰にそむいて『どうしても戀人に會はない内は』といひますと、『え、戀人？』つて叔母さんはけゞんなお顔をなさるのよ、鹿の事よ母さんと福枝さんの説明に三人は大笑ひいたしました。

奈良名物何々と澤山看板のかゝつた寂れた大通りを眞直に『わぎ妹子がねくたれ髮を猿澤の池の玉藻と見るぞうたてき』と國文で敎つた名高い池に行きました、鯉が澤山居て麩を投げると面白いのださうですがもう冷たいので一尾も見えないの、たゞ水に散つた柳の葉が淋しう漂つて居ました。

面白い叔母さんのお話に肝腎の戀人の事も忘れてつひうか〳〵と歩るいて居ますと不意に福枝さんが妾の袖を引いて居てよとおつしやるのでひよいと見ると角の寸に足らない可愛いのが一匹紅う枯れた千草をふんで蹄の音輕う近づいて來るのよまあ妾どんなに嬉しかつたでしよう、まだ〳〵澤山居ますから早う餌を買つておやりと叔母さんのお指圖に福枝さんと二人着ぶくれて寒むそうに坐つて居る婆さんの店で糠煎餅を買つて妾達を取りまいたのに一枚づゝやりました。それから春日神社に參りましたそれは琴子さん澤山の石燈籠があつてよどうしても數へきれなかつたわ、二月堂手向山などの名所を見て東大寺へ行きましたの、おん丈五丈三尺五寸の大佛さま聞いただけでは大層大きさうですが思つたよりも小さう御座いましたお鼻の穴に石川五右衛門が三年も住まつて居て雨傘をつぼめずに出入したのだつて叔母さんのお話しよ、まさかね、でも初めて見ると小さいがつぎ〳〵に大きく見へる樣になる

つて福枝さんがおつしやつてよ、あの名高い一件一鐘の大鐘をつきましてよ、南圓堂へもお參り致しましたの。

今ね妾福枝さんのお書齋で此のお手紙を書いて居ますの、障子を開けると興福寺の五重の塔も見えるの叔母さんも福枝さんも厨の方でお忙はしさう明日は斑鳩の塔へ登るつもりよ。さよなら。

奈良見物手紙は隨分澤山ありましたが是れが要領其宜しきを得又趣味あるのもでした（評）

三等

逝ける友が慕ひし君へ

大阪　木村花子

義人樣、私は今、御許にも私にも二なき親友君代樣が葬の野に立てるにて候、名殘り惜げに沈み行く夕日は、寂しく痛ましく白木の棺を照らし居候

弔鐘は今哀しく冬の空に響き初め候、御許の耳には聞えまさずや、あゝ、春尚長き君代樣は、十八年を一期とし て冷き形骸と化し、長く恨を飲んで、不覺の眠につかせられ候を、如何思ぼし候ぞ、燃ゆる戀、熔ける愛を、打消され斥けられて、如何なればこそ僞の高砂を謡ひ納められしや、よも御許とて木石に非ざるかぎりは、君代樣の心根を推し玉はらざりしにはあらざらまじに、殊に其かみ、御許には、朧はなる春の夕には、月の韻を踏んで、蘭燈の灯影に、濃やかなる秋の夕には、静かに睦まじく語らひけるもありしとか聞及び候を、あゝそを何故に／＼御許は……、逝ける君は、刻々死期の近づける迄も、一言半語の怨も洩らさざりしを聞し召せ、夢か幻か、鐘は今幽に將強く、土培ふ私が胸に響くにて候、悲しからずや鐘の音、哀れならずや逝ける君……。

女詩人（ポエテス）と呼はるに至りしも御許が爲と知りまさずや、今は千百の繰言を述んも、そは餘りに恐かしき事共に候へど、唯、薄幸なる女詩人とぞ思ひ給ひて、陰ながら一滴同情の涙と、一片燒香の手向とを惜しみたまはで、心からの御追葬こそ望ましく候、私共が千度の墓參りより、御許が一瞬の合掌こそ、逝ける君が身には嬉しかる可きを、返す／＼も忘れ給はざる樣、偏へに申進候、さらば／＼行末幸多くおはしませ、新らしき墓標は今佛生等の庫裏が南、垣に添ふたる小高き場所に東を向けて立てられ申候、拙き筆の跡は幾重にも御見逃し下され度候、先はあら／＼かしこ。

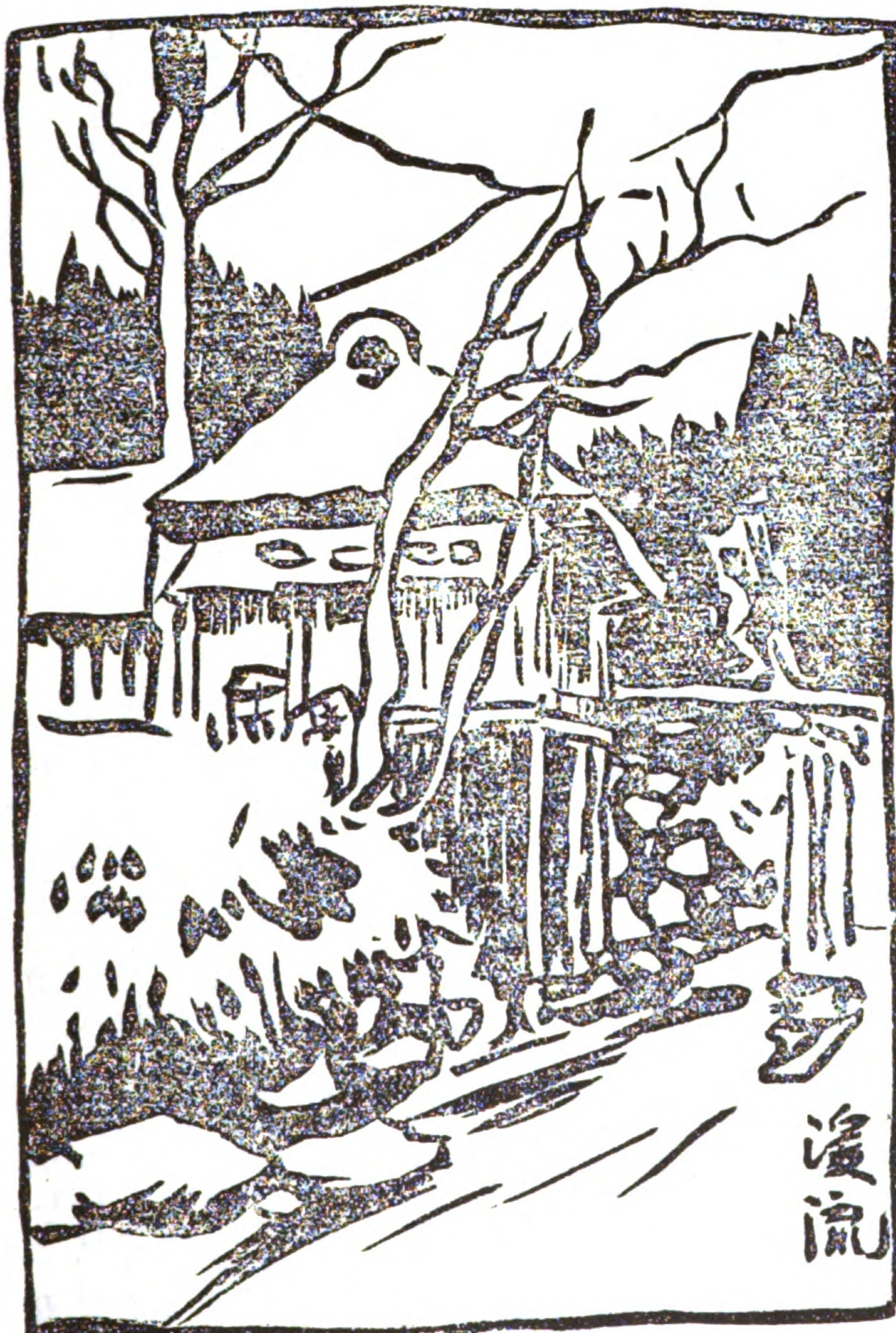
例の如く技巧を盡くしたるもの、それ丈け眞を缺ぐところあり。一讀哀しみを感ずるよりもむしろ美くしさを覺ゆる事是れたしかに一よいふうります、一つは書き型の文體にも依りませうけれど（評）

秀逸

はつ冬のたより

鹿兒島　内田ふみ子

霧島の煙がむく〱と上つて、今朝は寒い事でございます。少し氣分がすぐれましたので久しぶりに裏の畑に出て見ました。二三日前の大霜に甘藷の葉はすつかり眞黑に枯れました。大根は大方ひかれて了ひました。玉葱の畠が見事でございます。粟の刈られて跡の畑をバリバリ云はして歩みながらつい色々な事に思ひ耽りました。思ふまい〱と努めてゐるのですけれどすぐに斯うなんですよ、矢張り病氣の故でせう。あなたと手をとつて遊んだ畑中の道、温泉がよひの人も減りました。散歩の人も少なくなりました。多く通るのは野菜賣、野



溪流　靜田　白井津奈子

良男、正月の買物に出る田舎の爺さん、三三五五通る事は通るけれど、皆師走めいた寒い顔をしてゐます。寒いのは人の顔ばかりではございません。山の姿も水の色も、飛ぶ鳥の影もみな寒さうです。鳥といへばもう渡鳥が澤山來ましたよ。今朝も裏の椿に騒ぐ聲を寢床の中できゝました。渡鳥の聲が一番冬といふ感じを人の胸に與へますね。

武の丘も骨立ちました、村々の家が露になりました。十日ばかりふき殺いた野分の風に明神の森は見るかげもなくなりました。淋しい〳〵。何處を見ても冷たい冬の氣が充ちて居ます。しかし私にはその淋しい冷たい氣の中に何處にか「春は來る春は來る」といふやうな色が潜んで居るやうに思はれます。いや春は來るのでございます。期節の春は待たずとも必ず參ります、さて私共の境遇には何時春が來るでせう、分りません分りません、お互一生懸命に働かうではございませんか。おからだをお大事になさいませ、さよなら。

いさゝか作り過ぎた氣味も見えますが筆つきは實にたしかな巧みなものです（評）

近江より

滋賀　若井きくえ

若狹の國を出て近江に入る事になりました、今日で丁度三日他國の地を踏んでゐるのです、近江は何うしも近江だけあつて美くしい國です、それに日本一と云ふ琵琶湖があるのですもの、風景の佳い事は云ふまでもない事です、近江七十二峯はこと〳〵く圓くて靜かな形を表はしてゐます、一寸云はうなら、周圍が山で眞中が湖で、湖と山とのあはひに人が住んでゐるのです、それで山水の妙は近江に限ると云ふてもようございませう、第一湖が氣に入りました、世に名高き天下の八景も此の裡にありまして、竹生島などの風景は何うしても都人の夢にも見られない處と思ひました。小舟に乘つて湖心に浮びますと、周圍の岸は丁度、果しなき繪卷物を繰るかの樣で、實に別天地とでも云ひたい樣な心地がしました。ボーンと響いてくる三井の晩鐘を聞き乍ら大津へ着きますと、小さな町ではあるが、湖邊だけあつて何處となく濟々しい心持が致します、町の人も京都に近いだけあつて、皆優しく愛嬌よく美くしいお方々計りです。そうかうする裡に日が暮れかゝるので、私は湖面に對した殊に風景のよい三層樓に泊る事と致しました。欄に凭つて美くしい夕の景色にあこがれても見ましたが、今更、我れに詩なき羨ましさ

よと、しみ〲と悲しさが身に迫つて來るのを覺えました。

湖上を渡る風が冷たくさつと吹いて來るので見張らすと、まろらかなる山々は早や夕の色に包まれてゐます町は縱橫に明るい灯が照り映えて、俥が徒に往來してゐます。あゝ今宵は美くしい近江で什麽夢を辿るのでせう。

明日は最う一日近江の景色にあこがれて、次の日は山城の國へ入らうと豫め定めてゐるのです、いづれ又後からゆる〲とお話し致します。さようなら。（大津にて）

描寫は宜いが書簡の意味が少い（評）

障子張るとて

尾張　陽炎女

夕の雨靜かに收りて、今朝は浮き雲だに、とゞめぬうらゝ日和、例の新派和歌に小さき胸の紅焔(ほのほ)を、燃やしおられ候を、御前樣に折入つて願ふべき事の出來申候、何事の湧き申候といぶかり給ふも、道理には侍り候へど、いつに似合はぬお母樣には、隣りの人に誘はれての名古屋行、力と賴む妹もふいに友の家に遊び、お父樣よりの嚴命に障子張らんと、桟を拂ひ糊まで拵へ候に、何がさて季の弟が毎日の仕事の樣に、小さき指に唾して穴あけ、或はむしやぐり破りしその修繕(つくろひ)、昔松下禪尼となむいへる尼人が、吾子(あこ)時賴の心をつゞまやかにせしめばやと、見苦しきを强ひて忍び、障子の切り張りなし給ひし、そをまねびての障子張にても半日や一日はかゝり申すべく、まいてや拙き妾一人慣れぬ事とて、直ぐ飽き申し、お父樣より二度も三度も、お小言聞くはつらき事に侍り候まゝ、お前樣の優しき歌染め給ふ玉の手を、糊こは〲とつけ參らすは妾の胸の、堪へ難き處に候へども、手掛け障子と、上の障子に面白き趣向の、紅葉を押し給ふて、御兩親樣や妹、はては路通る人達の、褒め言葉を耳にし、憂愁の影に趁はれし妾の身を、樂ませたく、お友達多き中にも、御前樣ばかり懷しく、心易きに甘えて、お願せし事に侍れば、何卒妾の心をいとしと思し召され、歌染め參らすみ手を、せめて半日なりとも、御かし下さるべく、あら〲のみかしこ。

實に振つたものです、たまにはこんなのも面白いでせう（評）

都の友

松山　大本花子

喜美子樣、上京はとう〲夢になつて了ひました、餘り意志が弱いと、思し召しませうが、懷中には汽車賃をいれた財布を抱きながら、母の顏を見ると、氣も

何もめげて了つて、遂に上京の上の字も得云ひませんでした。母もめつきり衰えて、目も薄くなりましたし、髪を梳くと櫛にかゝるのが白髪ばかり、そして近頃は虫が知らせるとでも云ふもでせうか、妙に心細い事を云つて或る晩なぞは、私の傍を放れてお呉れでない、お前に行かれては私は死ぬなぞと泣きました、

あゝ、親一人、子一人、何物にも替えられぬ母に寂しい思ひをさせ度くはありません、天にも地にも私をのみ命とも頼む母は、希望にも榮達にも替えられません。幾晩か、脊戸の木戸にもたれて、停車場のアーク燈を見ながら懐中の財布を押えて、悶えに悶え、泣きに泣いた末、遂に、母に受けた身は母に捧げやうと、断然、決心いたしました。何も何も運命だと、あきらめれば其れ迄、今迄の事は只だ、夢の様でございます。



田畑とり　愛知　谷口しん子

けれども〳〵お察し下さい、青春十八、胸には若き血の高鳴つて、目は高き現想を見つゝ、殊に多少は人にも勝れた才を持つ身の、思ひ切るのは随分辛うございました。

嗚呼、喜美様、親に背いた、花の様な生涯よりは、よし野の名無し草であれ、道にはづれぬ一生が何ぼう聖くはありますまいか。

今日からは髪も桃われは赤い帯しめた私を見て、他愛もなく喜ぶ母の顔、私は其の顔で満足でございます。

これを讀まば喜美子さんならぬ人でも同情を表し得らるゝ程眞情が表はれて居ます（評）

寄宿舎の兄様に

牛込　平塚白百合

兄様あけましてお目出度、寄宿でもお餅召しあがつて、うちでは皆元氣で樂しいお正月を迎へましたのよ、ちゑさんは昨夜羽子板とねたので大わらひ、今朝から私はいそがしくつてお化粧も出來ないのですよ今一寸暇をぬすんで申上ます。くれて嫁かれた姉様が今日義兄様とおふたりで御年始にいらつしやいましたの姉様は黒の裙模様に白茶の帶、すこし上がけんな高島田で、おうちにゐらつしやつた時分はお白粉はきらいだとおつしやつたのに今日はきれいにつけてフロックの義兄様と座つてゐらつしやる處はまるで讃のやうですの、父様と母様は兩人をしげ〳〵と見入ながら、それは嬉しそうに何かいつてゐらつしやいますのよ。しますと姉様はおともで眞紅になつたお顔を伏目にしてハンケチを膝の上でまさぐつてゐらつしやいますのよ私ほんとに姉様はお變りになつたとおどろきますわ、もうテニスなんか遊ばさないのでございませうね。昨年のお正月は三人でテニスや追羽子で大さわぎしましたのにもう姉様は一寸もお動きにならないでちゑさんを傍に座らして何かいつてゐらつしやるのですよ、ほんとうにもう奥様ですわねえ、兄様私もう兄様より外にはたよれないのですわ姉様は嫁つてしまいましたし、けれども兄様も卒業なさればもう昔のやうにしたしくして下さらないのでしやうか義姉さまが入らつしやるから。お正月そう〳〵こんな事はおやめにいたしませうやさし父様や母様があるのに、ですけれど兄妹でなければ打あけたお話は出來ませんのね、ほらこれで筆を擱きませう母様がおよろこびのやうですから。さよなら

「何かくだらない事書いてらあ」と寄宿舍の兄さん一笑せらるゝや否、其處が此文の宜いところ（評）

初春だより

三重　川原みさを

昨日今日の東風に梅花一二輪ほゝゑみ候。未だいとけなき鶯の歌もいと興多く枝より枝に飛びうつり咲きかけの梅花けちらし向ふの密柑畑につと入り候。

靜かなる初春の櫛田川渡舟の夕日をうけて葦間を別けつゝ歸り來る舟子の磯節に驚かされてや葦の中より鴫二三羽飛立申候。

櫛田川の流は潺々として流るゝ水に青柳垂れていと清く名も知らぬ鳥一羽身をさかしまに水を飲む風情俳人ならぬ姿もいと興多く覺え候。

今日此の頃の日和にも似ず朝より何となく曇り勝なりし此日は晝頃より六花の霏々として降り出し候。只見る枯木の林時ならずして梢頭に白花綻び候小犬は喜び飛び廻りつかれしにや築山の竹の下にいこひぬを

りしも一陣の吹雪に竹ゆれて雪どさりと音して落ちぬ小犬は驚きて何處ともなく飛び去り申候。
今日は名殘なう晴れ渡りて候。
朝より新福寺に詣で候ひき寺内は只寂寞として葉もなき大銀杏そが下に小坊主一人竹箒もて昨日の雪のとけのこりをかき寄せ居り候。
そう此度には五六の戰死の新嘉碑有之候君が兄上樣の碑も右より二番目戰の常とは云へ花ならば春の身をと愁哀の情交々湧き來り思はず雨袂をしぼり申候。
時しも有心か果た無心か梅花一二片今くみ込みし清水に落ち漂ひて候。
今や夜は三更戀しき君に差出すべく手紙を書きつゝ居り候。
屋外は只風になぶらるゝ松聲犬の遠吠のみしきりに聞え候。

是れも巧みではありますが材料蒐集に過ぎたる氣味があります(評)

國許の伯母へ

岩代　永山みす子

伯母さんいつもお壯健で結構ですれ、妾しも無事でゐますから安んで下さい。おん地はもう梅が盛りでせうれ、あの一昨年でしたか、お伯父さんに無性に連れて行つて戴いた武田の梅林れ、今年も大層咲いたでせう行つて見たい哉。
會津は雪國つて聞いたが、本當は澤山降るのよ、そして町なんか兩側から屋根雪を下すもんですから、通う途が高くなつて四尺もあるのよ、妾し書いたわ、それがら地方の人は皆んな、あの藁で編んだ雪駄つてものを履くの、妾し眞似して一寸履いて見たわ、振りが可笑しくつて本……けれどお滑りが出來て面白いの、竹下駄を履いてれとても郷里では斯んな遊びは出來ないから、叔ちやんにも見せたいと思ふの。
良人は近頃酒飲みを覺えましてれ、昨晩などもお仲間の松田つて方と、好い氣嫌になつてお踊りになつたの、だが怒らないからまあ—宜いわ。
先月月給が五圓昇つてれ、賞與金も澤山戴いたからコートと指輪を買つて戴いたの、嬉しいこと、お伯母さんも喜んで下さい。
この夏には是非一寸歸りたいと思つてゐますから、お伯父さんにも宜しく云つて下さい、まだ書きたいんですけれど、もう遲くなりましたから……左樣なら。

修學旅行し得ざりし友へ

名古屋　吉田とき子

御機嫌は宜くつて?折角貴姉も行きたいと思つて居なさつても、御病氣で殘念でムいましたでしやう。夫故拙い筆をも耻ぢず紀行を御報知致します。妙にあの日は、眼が醒めました。淡い殘月が西の空に懸つて、冷い風が頬を撫でゝ道は霜で白うムいました。顫へる手操る胸の中、御飯も怱々にして停車場へ着いた頃は、新聞配達の息が白く見えて、市は未だ暖い夢の内に居ました。多分貴姉は夜の瞑想が多くつて夢の間を辿つて被在つたでしやう。私は汽車に乘つてからも、貴姉か見えぬので面白くありませんでした。華やかな旭樣の笑貌が田の面を渡つて、森の方で消えて仕舞ひます。東の空は艶な色彩に彩られて、紫の山の邊に輕い雲が立つて居ます。刻一刻と紅を添へ行く空に鳥が樂しげによろこびを唱へて居ます。猿投山の頂が燃ゆる樣になつたと思ふ瞬間に、太陽はヌーと出ました。吾知らずアーッといひました。『偉大なる朝暾』と、細川先生は髯をひねつて被在いました。高藏寺から十四の隧道をくゞつて多治見へ着きました、其間玉川の溪流に蔦紅葉、楓、椛が白い清い水に寫つて得も言はれませんでした。停車場へ綺麗に並んだ時、近くで遊んで居た小

兒等が物珍しげに見て居ました。一行は古い町——何處となく平靜な——を通つて、落葉の道を辿りました。ザク〳〵と草鞋に蹈む落葉、深い土の香が盛々と「秋」といふ感が致しました。觸れたら折れはせぬか、と思ふ許な桑林の間に澁柿が二つ三つ見えて、女兒が片言で唱歌をうたつて居ました。いつしか山坂に懸つて居ます。振り返ると多治見の町や山々の果、空の奥も眺められる程です。乍然この坂を昇るつらさ。虎溪に來た辛抱しろと、先生は勵して下さいますが、息は切れる足は疲れる苦みに苦しんで、岩の坂、九十九折の下坂を越すと、實に驚いたの。天津姬の織なした錦が、目の前に展開されたのです。『別れの暇に拙い作ら寫生しましたのが是です、前の白いのは玉川、岩に碎けて散る白泡は實に美しかつたのよ。それから色々古跡を探つて、名殘り惜しくも歸途に着きました。これは有名な多治見燒です、外によい土産も見付らなかつたから此品を買つたの。什麽が納めて下さい。何れ明朝は御宅へあがつて、詳しく御話します。御身體を大切にね。

動く光動かぬ燈

紀伊　櫻淵靜江

姉上樣、延引ながら新年の御慶おめでたく存じ候。姉樣が嫁かれて一年目に御歸り遊ばされ。武坊は初誕生、妾は女學校へと志し候お正月、愉快に過ごしたる新年も、はや四年の昔の夢と消えはて、父上樣武坊は共に亡き人の數に入り、母上樣と唯二人、新爺の世話にてどうか、かうか年を迎へ申し候

さはれひなびたる熊野の奥にも、さすが御代の光は、漏れなくさし給ひて昨日今日の有樣四年目の妾には珍らしく、昔なつかしく覺え候、尤も今に舊曆にて　村長樣よりは新曆による樣おふれこれあり候へども新爺は熱心なる保存主唱者にて且は隣との折り合もこれあり候へば　舊曆と相定め、七五三飾、餅搗其の他萬般の事は母上と新爺とにて準備とゝのひ。妾は近所より賴まれたる縫物に目を通すばかりに候ひき。

越えて　元旦となれば　若水を汲むは　主人の務なりと新爺が　頑張りとう〳〵　新爺の附添にて實の汲みそめをなし、それより宮參りを致し申し候、動く光、動かぬ燈、下駄の音にて京の大路とやうなれども言ひ罵るもの一人もなきに感心して、母樣に聞けば「物言へば授かれる福をば逃がすと昔よりの言傳」とやら、嬉しく覺え候村の若い連中は笛や大鼓に獅子舞して地下廻りを致し居り候　昔は姉樣に笑はれ候程の獅子舞狂も今は何となく馬鹿らしくて見る氣にならず候。

母樣と新爺とに勸め勸められて親戚二三軒を廻り今漸う歸り、來客もなくて少し閑暇を得候へば、御無沙汰勝の筆とりて御詫かた〴〵右あら〳〵。

尙相談すべき事もあれば　本月中に年禮旁遊びに是非御越しある樣と母樣の申し出、一さんもかずちやんも御連れなされて御越しの程そへて願上候。かしこ。

山里より

青森縣　溝口夢園女

俊子樣、その後は飛んだ御無沙汰いたしました。さぞ御變りもなく御勉強の事と存じます。此の頃の長き夜をお得意の歌でもお作りになつてお出でゝせう、何卒拜見さして頂戴な。それとも加留多とりでもして居らつしやいますか。加留多といへば去年が戀しう御座います。此の樣な山中に埋れて居ると。是れからの事には何も面白いことがないものですから、過ぎ去つた事は非常に戀しう御座います。このまゝ此處に一生を送らなければならぬかと思ふと、堪へがたい寂しさが湧いて來ますが、然し何にもかも年老いた母上の爲めと妾は諦めて居ます。妾の今の樂しみは、母上の笑顏を見るのと、それから先にもいつた今迄の樂しかつた事を、靜かに思ひ出の糸を手繰つて、いろ〳〵の詰らぬ思にふけるので御座います。いし子さんや、まさ子さんや、けい子さんにお逢ひになつた節は、山家に埋れて居る妾から、よろしくと御傳へ下さいませ。妾は貴地にはいろ〳〵の思ひ出が御座います。けれども今となつて其の

樣な事を申し上げたなら、あなた樣から未練がましいとの御笑ひを受けるばかりでせうから申上げません。何卒御察し下さい。ほんとうに妾はあきらめのない女で御座います。今でも思ひなやんで居るので御座います。あなた樣は未練だとお笑ひになるかとは思ひつゝも、何となく、妾の心中を御察し下されて、可哀想ただと思召して居らるゝようの氣が致して、つい此のようなつまらない繰言にお耳をけがしました。何卒御ゆるし下さい。

昔は新年だと申して、いろいろの樂しいこともあるようですが、雪ふかい此の山里は、毎夜狐の聲や風の音ばかりをきいて居ます。時に御便り下さるよう御待ち申します。

教へ子へ

尾州　牛田淸子

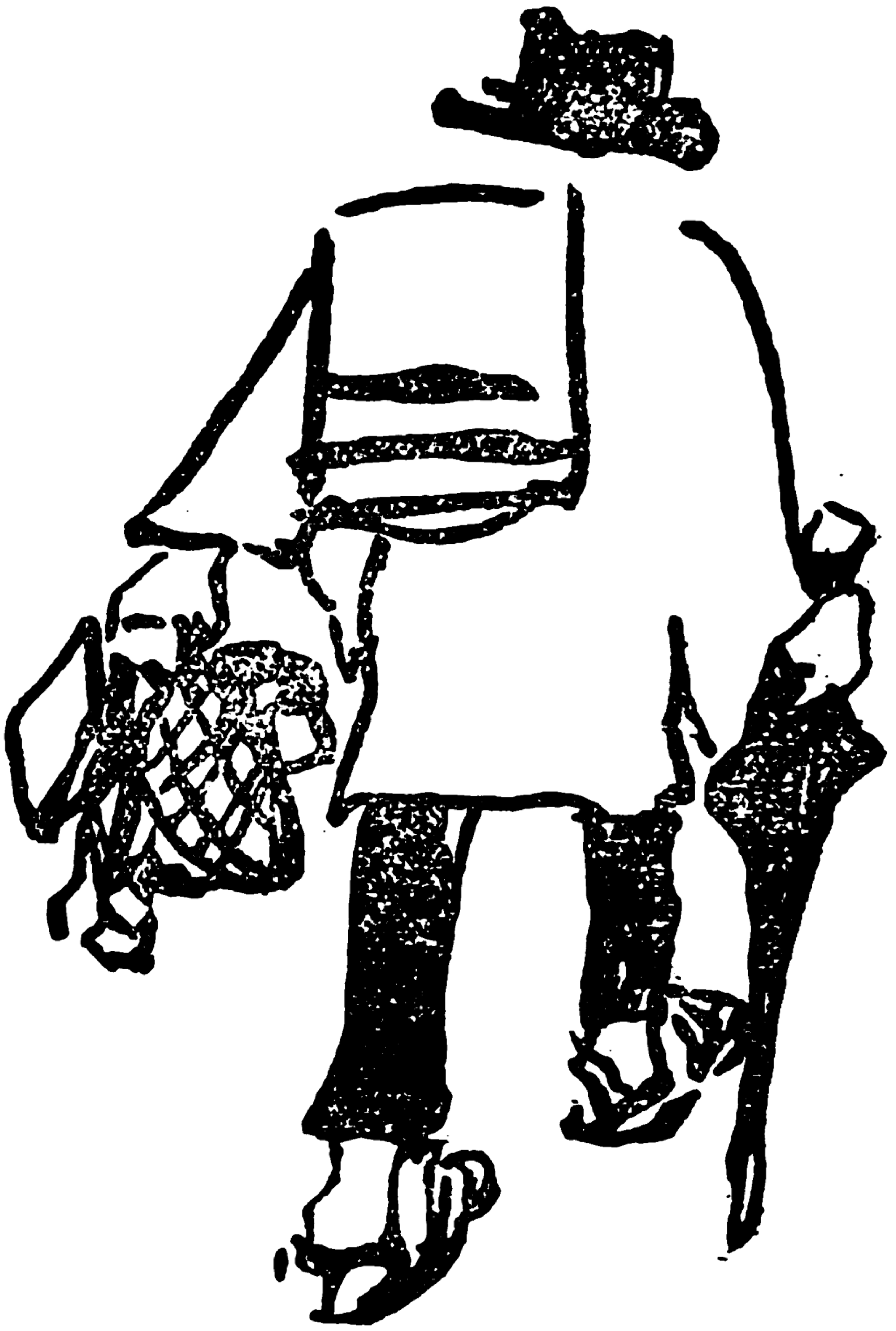
皆さん、妾の可愛いと思つてゐる皆さん！、聞いて下さいませ、

妾の家の庭に、今山茶花が綺麗に咲いてゐます、皆さんの學校の御庭にも咲いたでせうね、あの御池の緣の築山の腹に、コンモリと濃綠の山茶花の白い綺麗なね、するともう丁度一年になりますね、皆さん其後ばお健つしやなの、妾は健ッしやでゐますが、皆さんの事は片時も忘れたくはございませんよ、三年間も姉妹のように暮しく遊んだんだものね、殊に妾は、お庭へ出て、あの山茶花を見ると、キツト皆さんの事を思ひ出すの。

あの淸しい目元、吸ひ附いて上げたいような唇、林檎のような頰べた女眞リボンが風にヒラヒラと舞つて先生先生と、妾の袴に縋りなさるアノ可愛いい姿が、胸に、浮かんだり、消えたり、飛び出たり、目の邊りにチラツイたり、本當に幻ぢやないように見えて、妾の胸を妙に騷がさすのです、妾は其時サツトリ瞑目してしまつて、あゝ可愛いい皆さん！一度逢つて幷々抱きしめて見たい、と氣遠くなるのです。そして、主人に怪訝に思はれたり、下女に不思議がられる事が度々あるのですよ。……

只今妾は、庭の山茶花の側にたゝずんで、花の寒い寂しい音を嗅ぎながら矢張り皆さんの事を思つてゐます。

終ひに妾は潤んだ眼で輝いてゐる空の星を見つめました。キラキラと光る星、緩く光る星早く光る星屋ぢやないかと思はれる程淡い淡い星等、月の無い今夜氣のない今宵、あの子である星は、何んと思つて西へ歩むで行くでせうか？、是は皆さんにお尋ねしますから星の見える晩に考へて下さいませ、さよなら



畫　出京　名古屋　吉田ときこ

坊ちやまと交換して

山口　田村菊子

中村さん！先日は誠にお邪魔致しまして濟みませんでした。其上色々と御念入りの御饗應にまで預り何んともお禮の申樣もご座いません、餘りお話しの面白いのや、坊ちやまのお可愛いのに見惚れて歸るのが惜しい樣な氣が致しました、其の晩も一同夜食の席で綺麗な坊ちやまのお噂や、御安心の御樣子など打ち語らうては、ついお羨ましくつてなりませんでした。私も此節は殊更注意に注意して豈かの異常もなかれかしと朝夕念じて居ます、良人の言ひますには「若し男子なんだら大いに奢つてやるんだ、だから屹度男子だぞ」。とお腹の子が什うにでも好きな樣になるものだと思つてるんですもの、是れには一同吹き出しました、だけど妾、男より女の子の方が幾何可愛いか知れません、と向ふを張りますとお父さんも、お母さんも大不賛成で結局妾の味方は一人もない譯でした。

今恁うして手紙を書いてる内も始終お腹の中で動いてる樣に感ぜられます、貴姉も此んな事がご座いましたんでせうか？　まだ〳〵親しくお産の時のお話しが聞き度いんですが最早多分濟む迄は外出も出來ない事だらうと諦らめました、何れ産れましたなら直くお知らせ致します。そして体の工合も恢復し次第お訪ね致しまして坊ちやまと交換して抱いて見ませう。

平素日記を缺がしたことはないんですが、此節はそれも出來ず此のお手紙だけは、やつとの事で書いたのでご座います、失禮致しました。

奉公先より姉君へ

常陸　淺香くら子

薄暗き燈火の元に埋火かきおこしつゝ樂しき宿下りの一日を書き並べ候。

十四日の夜七人の女中くるまざになり籤引いたせしに、私と外三人の者は十五日に當りしか、曇天なので非常に心配しつゝ床に着き候宵より、氣がかりなりし空は晴れてうれしく、幾つかの停車場をへて水戸に着きぬ

先づ、銀杏坂を昇りて常盤公園へと足を向けぬ、光圀公のみたまやにまうで、それより梅園に入りぬ、春とは名のみにて雪を吹く風さへ渡りて軒端の梅も未だほゝ笑まぬ有樣なれば、恰も、そだ山を見し如き心地致候すぐ下に、滊笛の音きこゆれば、生垣に身をまかせ恐る〳〵のぞけば此ぞ、何ぞや米子樣に承はり候ひし水戸八景の一なる暮雪なりけり。こゝより好文亭にまで、噴水石に行かんと七曲り坂に至る時、四人の男學生思ひ〳〵に堤の中頃に陣を取り、今しも寫生始まらんと繪具を筆先にてとかし居り候き。噴水石の傍に小なる四阿屋あり、夏は隨分遊びに來る人も少なからねと、霜枯の頃には學生の散歩位に過ぎずと、側にありし翁は語れり、こゝにて二時間餘遊で、更に引返して高等女學校、女子師範西の丸なる男子師範等參觀して午後五時頃無事歸宅致し候。

眞實に、奉公の身に取りては宿下り程樂しみなる物は之なく、今より盆の宿下りには日光見物に行くなとゝ皆々明日にも參るさわぎして、樂しみ居り候。

尚、何となく書きたらぬ心地すれど、埋火はかへらす寒さは一際身に泌み渡り候へば、何れ次便にと書き殘し此れにて筆留めまゐらせ候かしこ

雪の鄙より

山形　本間哀子

雪の積むてふ出羽の鄙は、その和毛の樣な雪に葬られて居るのヨ、唸りながら荒む吹雪を恐れて、つくれんと冬籠する人間も、大きな神なんてふものから見たら、蜂や蛇等と變つたところが無いでしやうネ？。東の都は春風が立ち、池氷も解けて水蒸氣が面白くゆら〳〵と丁度そは

しくする人心のやうに、上つて遣ゆるともなく、それが雲に棚引いて、白い鳥の翼な姿してるてしやうネエ、春の水が響をつくると、木も草も幽かに戯つては揺りで揺れて、隅田川の邊や、燃え立つ様な人を乗せて待る電車、何んだか懲う見えるの。、想つては極れてるの。—。板谷峠だの何処の汽車が不通になるものだから、あたら都の春風も夾やしなかのね。

私しネ憧憬と云ふ事を考へたの、あの酒田に電気燈が美くしく出来たのね、して私は街燈を見ましてネ、天の星なんて美くしく瞬いてるけれども、近くしたら果して美麗なものかしら、街燈と同じ様に決して、華やかなものでないと思ふの。、只天なんてふ遠くにあるか奇麗に見えるんだと考へたの。、然しそれは一例に過ぎないの。、只無暗に物質に憧憬れて名誉心だの地位だのと騒ぐ人の、結婚だとかその外に就いても、誠に興致ないものと思ふの。「そして遂には得た名誉地位財産の始末に困ることがありはすまいかと案じられる。——悪意義の憧憬はですネ。私の憧憬は、温々した、大木の下に咲く小さい白い花ですの、然し今は自然の懸巡で、憧憬る人も憧憬れらるゝ物も、皆戦慄いてるのですから、ひたしく淋びしく感ぜられるの。。吹雪止んだ雪の都の寂寞は何となく荘厳なものですネ—。

奉公先の弟に

神奈川　須美子

随分寒さが厳しく成て来ましたが、別段變りは有りませんか家では皆が丈夫で暮して居りますから、安心して下さい、昨夜ね勇さんが友人と争ひをして御主人に怒られたつて逃げて来てね、父様に大變叱られてゐるを母様と私といくら詫びても、免して下さらないで、私も一所に泣いて居たの、そしたら伯様に起されて見ると、床の上に寝てゐましたの、ほんとで無くて何て嬉しかつたか、勇さんに限つてそんな事がある筈はありませんが、注意迄に書く事にしました、大勢の友人の中には随分人の悪いのも居るでせうね、私の學校にさへ曲つた人が居るのですもの、けれ共始の中は仕方が無いから、自分から下を経て行けば可いのです、それが随分辛い口惜い事でせうがね、永く雪を凌いで咲くから、初めて梅は賞めらるゝのですからね、父様からも聞いたし、二人でリンコルンの傳を読んでも悟つたわね、どうぞねあの時の言葉を二人で忘れない様にしませう、姉さんはね勇さんばかり外に出して、自分で學校へ行つてゐるのは、ほんとうに辛いの、幾度か學校を止めて手に叶つた事をとは思つたのよ　けれど切角父様があゝ仰言て下さるし勇さんもすゝめてくれるのでも三月の間だけの事故、其の心に成て一生懸命に、やつて早く卒業して、少しでも家の為に盡そうと、それ許り勇さん家を元のやうにするも、しないも貴君(あなた)の心一つなのですから、もう勇さんも明ければ、十六ですからね、能く考へて下さいよ、云ふ迄もありませんが、人間は弱い者で得て「喉もと過ぐれば暑さを忘れる」ですもの、姉さんも時々お父様に御説教ふ聞かされるので大變為に成りますから、之れは試験が終へて仕立た物、縮をたくさん入れて置きましたから、早速着て身體を大切に、よくお勤なさい、今日はこれで。

子は持つべきもの

済岡　中島ゆき

御寒いでせう、皆さまおさむうございますこと、それでも皆様お障りなくゐらつしやいませんか、お子様はさぞ御成人でございませう、私も去月中旬女児一人設けて母と呼ばるゝ身になりました、名は清子所詮は流涙に送るべき一生の済岡住居を思ひ出にせうとてゞございます、子は可愛いゝ者ね、いかな寝坊も夜中に二度三度はめがさめますの、まこと子はもつべきもの持つて親の恩を知り人の情をしるべきものだと思ひます、けれども又面倒は面倒ずゐぶんほねのをれるものですことね、それにしてもあなたは此むつかしい主婦の務のつとめの其上にまた教師としてのお勤めまで遊ばすこと今更つく〴〵感じました同級通信ふつと絶えて誰人の上も分かりませんが思ひ出しては學生の

昔なつかしくストーブかこんで話しあつたけふ此頃か思はれます、皆様御一處になめにかゝつてへだてない物語に一日樂しく送りたいと思ひますが又いつかさる折がありませうか覺束なうございます、在學の頃は相應に親しかつた誰かれもそれ〴〵御結婚の後は何の友も彼の朋もいらぬとや月に一度の御文は二月になり三月になりはては年賀暑中のお見舞もはがき一ひらのきまり文句、今では親しい御文通はあなたばかりを互ひに家持ち子もちになりましたが此さき孫もちの末までも御交際をつづけませうね 續けて頂戴 そして此未開の地に住みし世に後れ行く身を導いて頂戴

おからだ御大切にわけて お子様お風邪など召さぬ樣にといのつて筆を擱きます、末ながら御主人樣へもよろしう　かしこ

公園より

北米　るり花

とし子樣、秋はいま華の時をもつて居ますの。けさ東の白らみそむる頃、煤烟と塵埃に滿ちた街をはなれて、先日送りましたイストレーキ公園の繪はがきに、屋根にペンキを塗た建物があるでしよう、あの右の岸の椰の下のベンチに掛けて、靜な清い空氣にあてられつゝ、空の色が變るのを眺めて居ますの、青白い空の山端の淡黄なのが淡紅と變り、それがまた濃紅となつて、あざやかな一端をあらわします刹那に、池の水は大魚の鱗かなぞの樣に、葉末の露は玉のように輝て居ます、それが美くしい天使のうたの餘韻を留めてはら〳〵と散るのです、丁度一昨年あなたと共に嵐山へ松茸狩に行きました時の樣で、何んだか私一人で見て居るのが惜いの、それで失禮ではあるが鉛筆で走りがき致しました宥して下さいね。

ーー私は歸ります、三々五々夫婦互に肩を接し母子手を携へ、男女腕を組みて散歩する人々の聲や、馬車や自働車が轟として騒がしくなりました、前の仙境は沙漠と變りました。

女教員となりて

安藝　手島まさ子

垣根の雪はまだ古年のまゝなるに年新まりて新正を迎へました折ふし、昨子樣には其後お變りは御座いませんか、私はねー今日から村の小學校へ奉職する事となりました、平和な快樂なあびた御世幾千代の森を祝すると共にお祝ひ遊して頂戴、これから私も獨立闊歩の境に入つて自由の天地に活動するのです、さすがに都離れて見れば古郷とは云ひながら悲しうございますが朝な夕な、教訓の鞭取つて幾百の兒童を指揮致し遠くは國家安康の基、引いては良妻賢母、高潔なる理想も、遠大なる目的も此れより達成するのと思へば、破壞されし吾が前途の希望も必ずしも空しからず、此れが犠牲となりし効は認められて受けしみ國の厚恩も少しはとそゞろ微笑を禁じ得ません、されば今日は其の第一日ですから胸にも妙に鼓動が打つて校長の君にまみゆるもうら恥しく着席も躊躇はれましたが、早いもんじやおれが教へた子じやが、もう同じうなつたぞ、と微笑まれて、昔に變らぬ淡泊なる御言葉敬ひまつる身の如何ばかり幸かと喜びました、受持は尋常科三年です私等が母校を出た時の一年級です、顔は皆知合です、されば教室に入つて教壇に登りますと皆溫和しく開口を待つて居ますが、美しき都の生徒方見なれた目には汚い樣な氣も致しましたが教子ですものやがて可愛くなるでしやう、算術、讀書、體操、習字と順序に終つて漸く本日の勤はすませましたが、出席簿を讀むのと、同鄉人ですから上級の生徒が私を友人の樣に思ふのには閉口致しました。

押花にそへて

伊豆　木村綾野

木枯の音に冬は訪づれしかと思はるゝ此寒さ、兄上樣には御壯建の御樣子何より嬉しく存候、母樣も相變らずまめにて、只今嵐山の柿を竹やの御怪我でも遊ばしてはと、御止め申のも、いや、光雄に送るのだから私が善き處を取るとて、棒もてもぎ居られ候、何時も此木を眺むることに、光雄が産れた時父上が、紀念の爲、自ら植えられ朝夕樂しみをられし者なりと、そゞろ昔を、偲び居られ候、今年はいつもより實のなりもよく木も早書齋の窓をしのぎ居候、御成功の曉には此實より尚好ましきを話

び玉ひて一日も早く老先短き母君を、楽しませられん事願ひ上候、南の爺も中々元氣者にて、息子も評判の孝行者に候、今は爺も楽な身に候、二三日前、私が尋れ候處、爺やは、つれづれのなぐさみに、裏山へ草刈に行きし後にて、渋茶一碗に田舎餅頂き居候處、藁草履の音低く、爺よりし顏に、いつもの愛嬌たゝへて歸り候、耳の早き私、フト其中に、憐れなたえぐ\のこほろぎの啼く音致し候を、あれいとほしやとて、刈りし草の中をさがし申し候、其折、憐れや眼に入りしは此花、兄上様の御愛草に候はずや、忘れもせぬ、私、十二の秋、亡き祖父君の御墓の前に、一本咲きなりしを、よき花よと、もがんとする刹那、そは、吾が手向に植ゑし花、ゆめゆめもぎ取るなと、仰せられし其花に候はずや、私は唯、過去を追想して、いひ知らぬ感にうたれ申候、爺に昔を語りながら、持あひの物理書に、ソト、色香のいつまでもと呟いて、はさみやり候、今見れば色もまだ其儘に香も致し居候まゝ、この手紙の中に封じ込み置候て兄上様の御心に、うつたへ申候、此花のこと、よき香を身にあびて、御歸國の日一日も、早かれと祈上候。

都の兄上へ

近江 志賀小なみ

兄様其の後御變りはありませんか？私はこゝへ來ましてから、丁度昨日で滿一年になります。いつも十町あまりある草の茂つた田舍道を通ふのですが、一日に五人と人に出逢つた事は一日もありません。一人あへば一人、五人あへば五人、一人々々に其の心は違ふのです。通りかゝつた時教師とみては會釋する人もあれば、横を向いて通る人もあります。多くは通り越してから後ふり向いて眺めるのです。下宿の奥様はやはり親切な人で、昨日は幸ひ日曜で藤本様も役所から歸つて居られるので、私の一週年を祝れて、心ばかりの事をして呉れました。私はこの親切な家に下宿して、春はすみれたんぽゝの奇麗に咲いた野路を、夏は田畔の雜木の陰づたい、秋は美しく心よく實つて伏し稻や、四方につゝく錦の山々を眺めつゝ、冬は河原に風白う、目もまばゆき銀の世界に、ヒユーとばかり吹き來る嵐を身に受けて、田園の自然の美に微笑むのであります。背戸の三涼園とやらに熟した名物の、御宮柿、「あなたに」つて奥様から頂きました。小包で御送りいたします。着きましたら下宿の方迄一寸……。上に白い筋のついたのは、取わけておいしいように思ひます。この柿の名にも由緒があると聞きましたが、其は後より詳しく。（柿の國にて）

丁稚先なる弟へ

安房 高梨知世子

此の三月餘りは音信がありませんがやはり達者で主人の爲めに働いて御出でせうね、私も鬼々しい伯母様の元に相變らず働いて居りますから安心して頂戴。

私等二人何うしてこんなに果敢ない身の上でせう、私は此の間泣きました。伯母様かれ御自分で、大切な梅の鉢を南の椽に移さうと持て行く途中、お庭の敷石の上に落したのです、すると鉢は滅茶々々になりました、そして臺所に居た私を呼んで「なぜ私を驚がしたそれだものだから見よ、鉢を落して破つてしまつた」と私に罪を着せて私を追ひ出さうとしましたのです。あゝ何うして泣かずに居られませう、何うしてこんな悲しい運命でせう。伯母様が最少し善人ならお前もそう辛い目にもあはないですまうのにれ伯母様の事を佐久間鬼と言ひて誰れ知らぬ者はありません、實に村一番の鬼ださうです。あゝ何たる不幸な身の上でせう鬼の元に働くとは、お前も鬼の爲めに丁稚奉公に出たのですれ。あゝ言ひますまい書きますまい言ひたい事は澤山ありますけれど。

私はれ善い所があるなら東京へ奉公しやうと言ひます如何でせう、お前何所か好い所を知りませんか。

武坊よお前立派な人になつておくれれ、鬼などを恐しまずにれ今のセメント王と言はれる淺野總一郎氏もお前の様な小僧から成功したのです、其他今偉い實業家は多く丁稚小僧から成功したのですからお前も立派な實業家になつておくれ頼みます。正直に辛抱して働いてておくれ、今に二人揃ふて今の身の上を笑ひ乍ら昔話する時が來ますから。

先づは辛抱して頂戴よ。

韓國平壤にある姉の許に

岡山 長盛とき子

あたゝかき春のめぐみに、花よ鳥よと世の人は狂ひ出しましたが、御地の空ばいがゝで御座います、大したお變りはありませんか。此方は御兩親を初め皆々無事に暮して居ますから、御安心下さい。たゝ季の弟がこの冬少しわづらひましたが、程なく全快致しまして、今では以前より元氣がよい位です。それに去年迄姉様の無二のお友達であつた鉢植の紅梅が、今年はたくさん花が開いて、ぬし待ち顔にほこつております。姉上こひしう、朝夕慕ひおりますは、たゞ花のみで御座居ましようか。ふと筆をおきますとどこからともなくゆかしいかほりが致しますので、窓を開いてあたりを見れば、朧の月の光をあびつゝ、物いひたげに紅梅が軒下に佇んでゐるので御座います。夜中の雨をおそれて母上がなされた事と思ひ乍らも、折柄の配合面白く、そと花をもきとりて、花香をそのまゝ書中に封じいれました。その清く美くしさは申す迄もありません。私も紅梅を見る度毎に、その美くしさに劣るまじと、一意専心心の花を養つて居ります。末筆ですが兄上様へよろしく、尚お身體御大切に、一日も早く御任務お果しなされてお歸りのほど鶴首してまつてなります
左様なら。

師範入學につき答ふる文

相州　青柳　翠

追々第二學期の試驗もはじまり學生の身にとりては中中に忙はしき時節と相成り候折柄御許様には御機嫌よく日々御通學の由嬉しく存じ候私も御蔭様にて日々學びやに通ひ居り候間他事ながら御心易う思召下され度候扨御許様には明年三月には高等小學御卒業の由にて御卒業後の方針かつは今より其準備にとて數ならぬ私に此度の御尋ねのおもむき恐れ入り申候御存じの如く世の經驗も淺く斯道には一度もたづさはらず學問智識とても至てうすき私なれば御尋ねに對し十分なる御答へは、とても申上げかね候へ共折角の御思召に對し拙き考へを申上ぐべく候第一に女子は同情愛情の心に富み物事親切に注意緻密なれは小學校生徒の如き幼少なる者を敎育致すには注意よく行屆き又愛情を以て敎育致すならば此点に於て最も適するやう存じ候先づ私は女子の特性幼童の敎育に適當と存じ候勿論未だ一度も敎鞭を取りし身に候はねば實際に當りては如何に候や、はかり難く候へ共私は堅く信じ居り候生意氣のやうなれど小學校は無邪氣なる兒童を敎へ第二の國民となる人を敎育するに候へば其責任の重大なると職業の高尚なるとは私等の最も樂しむ所に候尤も明年此學びやを卒へ候へばやせうでながらも人の師と仰がるゝ身樂みにもあり責任の大なるよく私の如き者の出來得るやと今より心配に御座候殊に御許様の御性として萬事柔しく懇ろに且つ注意深く入らせらるゝ御身にて斯道を修め給ひなば如何なる良き師となり給ふらんと存じ上げ候、されば御志願の師範入學至極結構かと存上候右は私の意見をおくせず申上し迄に候間我田引水の所も多々有之候はむ尚とくと御勘考の上御定めの程願はしう存じ候此文生意氣のふし失禮の所もいと多かれどそは親しき御許様とてよろしく御ゆるしの程
なかしこ

新兵となりて姫路にある弟へ

大阪　はるえ女

三度缺けしも冬にて候、春はいざ今宵よりと、十六夜は月の哀も一しほにて候哉。埋火の下四人居し昨日は霜夜に荒ぶ枯も猶外にきゝなして候ひしか行きなされ候てより時雨の音は心弱き母様の夢を驚かし申候。軍隊の模様などは夢にだに知ろしめされば明暮れ御身の上のみ御案じ遊ばされ候事も理に候かし。昨日の御文の様委敷きこえあげ候程に今は御心安き様拜し上候へば、猶折々の御便りまち上候。
扨別封の金額は少なりとも母様が慈愛の露と幼き弟が身を節しての贈物に御座候
先輩の指揮に服從すべきはいはずもがな長官の寵を頼みて同輩を蔑視し給ふ如きことはあるべからず、なつかしき父母に別れてなれぬ生活に相集まり候もの、血氣の人々といへども心細き事も候ふべし、只々まごころもて親切に御交りなされ候はんには百金をなげうちて歡心を買ふよりもはるかに勝りて樂しかるべしと存じ候、祭日休日などには酒店に出入の餘儀なき交際もある事と存じ候へども興に乘じて過剰の罰を蒙るものもありとか。さればかゝる時には相當の入費のみ支拂ひて可成同座し玉はぬ樣心がけ給ふべし

勝餘暇には日記など記し玉ひては如何後年に至れば隨分追懐の種となるものに御座候

二年といへばまつ身には隨分長きものにて候よ

國の爲家之爲わけては母様のため御自愛之程偏に祈り上候

今十一時定めて御安眠なされ居候事と存じ候夢あらば何？かしこ

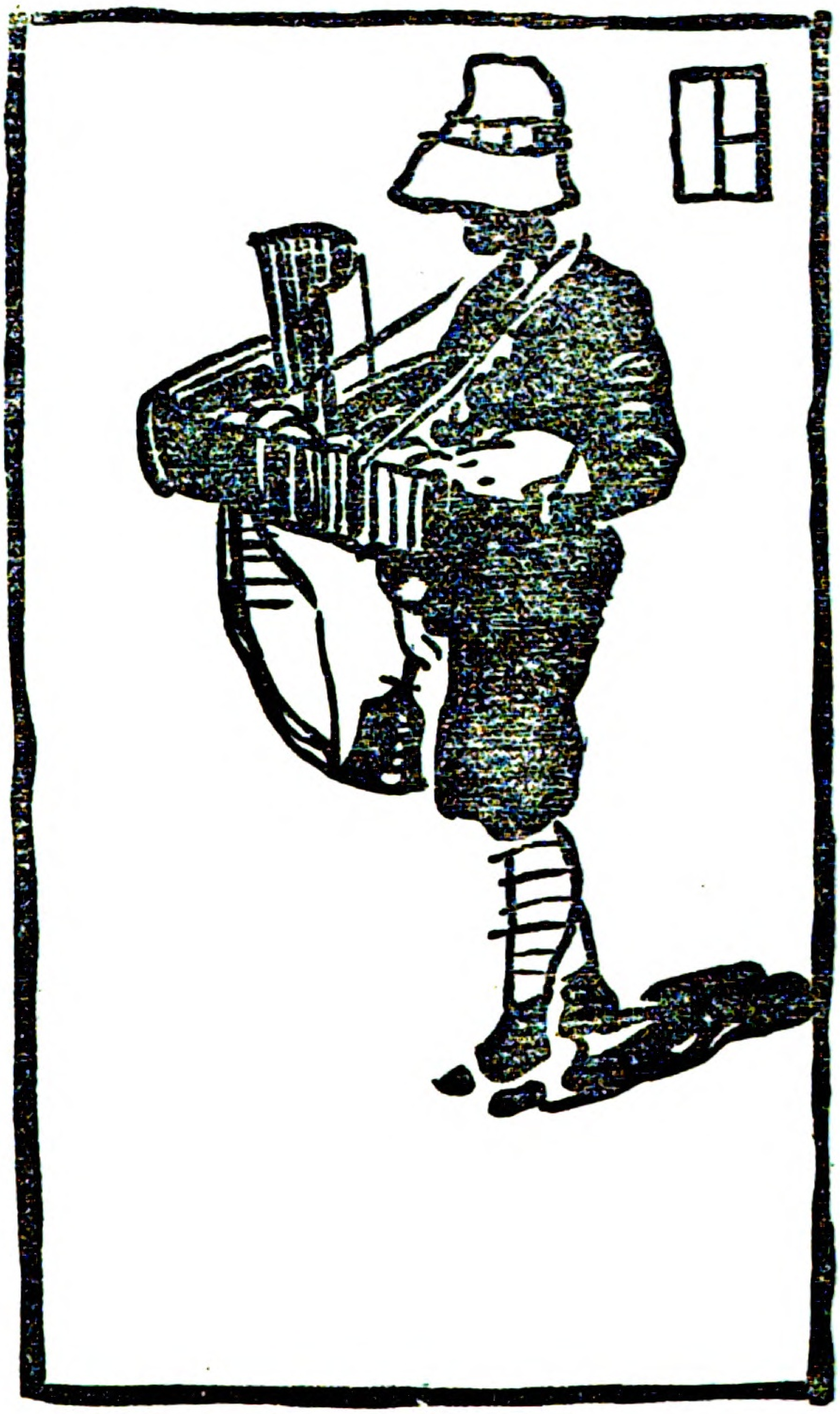
同勤せし友の許に近況を知らす

ゆかり子

秋も余程深う成りししろしにや朝毎におく霜も次第に加はり申候今日此頃あなた様には如何御過し遊ばされ候や私事も變り無く敎へ子共に御噂さに日を暮し居候まゝはゞかり様ながら御安心下され度候去月下旬御送り給はりし御文くり返し繰り返し拜見致候敎へ子にも早速讀み聞かせ候處皆々み情あふるゝ御言葉一言も洩らさじと或るはほゝ笑みつ或時は涙流しつ聞き入り申候讀み行く私しの心も仲々苦しく耳かたむくるたれ彼れのいぢらしさ且は御許様のおなつかしさに思はず涙あふれ申候御許様の御後任は安田と申す男子の方にて　お年もまだ余程初々しき様見受けられ申候

昨日も昨日とて校長の君及び谷田先生には校務のため御出張遊ばされ只此おなじみも無きお方と二人四學級引き受けてのお留守居には隨分閉口致候されどおかげなものにて御承知の如く平素はまことに手に合はすの大將。五年生の山本迄が神妙に私しの敎へ能く守り候ておとなしく致し居り候ひし殊に先生方お留守と思へば皆が私しを力と致す様子の見え候て實にいぢらしくあゝ此敎へ子とどうして別れる事が……と存じ候あなた様にはいよ〳〵家庭の人と成り給ふの日も迫り候に就ては何かと御心忙しく入らせ給ふ御事と御察し申上候おひまもおはし候へば御様子御もらし下され度く御待ち申上候時分柄御身御大切になさるべく祈り〳〵まいらせ候

御許様に差し上ぐべき文今日綴らせ候まゝ明日は清書いたさせ候上まとめて近日中には御送附申上ぐべく如何に美しき情やひそみ候はん御まち下さるべく候



實子

青森　立花とも子

都の兄へ

豐後　木枯子

吹き荒ぶ北山下し、最と堪へ難き此頃、一人淋しく都の空にて御苦學遊はさるゝ御身、いろ〳〵御艱難の御事とはるかに察しまつり候。今宵は幸ひ縫ひさしの衣もすみ候まゝ、御分袂後の模樣御知らせ申上ぐ可く候、分けて淋しき片山里の、訪ひ來る人もなき侘住に、徒四郎のみは書を忘れず、町便の折ふし立ちよりくれ、作圃の世話など何くれとなく致しくれ、父上生前の事共語り出ては老の目に涙もろく、母上共々涙にかき暮れ候事も幾度にて候ひけんされど、此の落ぶれし柴田家の再興にのみ御心をゆだれ、只管御苦學遊ばさるゝ兄上を偲び候ては、十時間勤務の工場も物の數にも之れなく、暖き夢路に入るも勿體なく、せめては十二時迄なりと母上に御加勢まつらんと、少し斗りの針を運ばすれば「お前は朝早ければお先へお休み」と早や御床迄御敷き下さる有難さ、いつも乍ら母上の一方ならぬ御慈しみの萬分の一にても報ひ奉らんと思へど、足はぬ妾の却つて母上に慰らるゝ有樣、今宵も色々と侘しきつれ〳〵をお慰言申上しに、二「世の中に落ふれたれど山つばき心丈夫に月日おくれよ」と口ずさみ給ひて心弱き妾をはげまされ候母上も先月より村の娘達に縫物の教授を遊はされ居候いづれ花咲く春にもならば生花をもならひたしなと申し出でゝ、聞くが如き野卑なる行は少しも見えず、皆親切に母子を慰めくれ、親達迄も先生〳〵と慕ひくれ候、今日は何が出來しなど云ひては、種々なる物を持ち來り候ため味噌などは買ひ物の大豆にてつき申候斯かる次第にて、村人の親切により今は全く安かに暮し居候まゝ家の事は決して御心配下さるまじく候。別に小包郵便にて長着と羽織御送り申上候間早うより召し給ひて風など召し給はぬやう呉々も念じ上げ候、

良人か失敗せし妹の許へ

伊豫　禰井白百合

此度の良人の失敗御文の模樣にて委しく知り侍り候世間の噂も取り〳〵に候へば嘸かし御心痛の事と察し上候、げに不定なる人間の世は榮しかりし春去りて秋の紅葉とうつろひ行きいつしか淋しき冬枯の野となりても時を待ちなば再び美花に鳥謡ふ春に逢ふ事を得べく候、されば此度の事とても左のみ憂ふるには足らず當然の仕樣にて失敗を取り返すは容易の事と存候 連れ添ふ御身が良人の失敗を共に憂ふるは當然の事に候へども只憂一方に心を勞して今後の善策を思ざればいたづら事に候、人は失望の極に達する時は往々自暴自棄となるものなれば御身の良人も今日の場合萬一にも意志の健全を欠く等の事なき共保し難く、妻は斯かる場合良人の心を慰めて家政を整理する重任の位置に立つ可き義務有之ものに候、家の興亡は妻の良否にあり昔より良人を資けて家名を揚げし賢婦の例も尠なからず候へばよろしく良人を励まし善後の方針を定むる事返す返すも望ましく候、斯かる事は既に心得ある筈の御身なれ共人は境遇に依て常識を脱する事まゝ有之候ゆへ老婆心を筆に任せて申上候かしこ

田舍たより

秋田　沖口みき子

春子さん、大分寒くなりました事れ、都は如何で御座いますか、私の方なんか朝夕の寒い事、まるで冬で御座いますよ、毎日水仕の業許りなして、筆持つことも極く稀れな、私の手の小指の先きには、眞赤なひゞが口をあき始めましたは、田舍少女の無骨な手をお察し下さいまし、私も此所に來た當時は、唯々、あなた樣等の美くしい、お姿ばかり思ひ出して、どうでも淋しくて、堪りませんでしたが、今はもう、田園生活の趣味を、覺へてしまつて、却つて、昔都に在りし時の、華かな空想なんて、馬鹿らしく思はれますの、風流ぶつてと、お笑ひ下さいましな、今は毎晩あの高潔な、淸い〳〵月を見て、人影の少ない村の、靜かな前の土橋に佇んで、細い何處からともなく、もれて來る哀れ深い、笛の音を聞いて、うつとりとするのが何よりの、樂しみで御座いますよ、春子さん私れ、毎朝殘んの月の中空に、淡く光つて居て、有るか無きかの星影の、頻りに、瞬くのを見つゝ、丸々と肥えた、勇みたつ馬をひいて、一里にあまる山奥へ、柴をかりに行きますの、赤々とした、秋の夕日を身にあびて、背一つぱいに、柴を積んだ馬をひき〳〵、端歌などを口にして、眞白な、手拭を、頬かむりにして、淸いいさゝ川のほとりを、家路へと、急ぐ樣も亦、一つの風情とやら、申すんで御座いませうれ、都に馴れた、あなた樣等が御覽なした

ら、さぞ可笑しくお思ひなさる事でせう、黒づんだ、小さな縞の手縫の着物を着て 帯と髪飾りばかり、いやに赤いのは、でも質朴なのは、田舎一般の美風で御坐いますからね、私のお財布もお袴も、皆かびが生ひて居るでせうよ、出す事がありませんもの、春子さん、此の紅葉れ、今お手紙を認めて居ると、お書齋の破れ窓から、飛んで來たのです、一時間ばかり前の俄か雨にびつしより濡れて居りますが、何んだか、拭くのが惜しい樣に思はれますから、此の儘そつと、入れて上げませう、お手紙が汚れたら、御免遊ばせ、さよふなら(十一月五日)

温泉の宿より

[illegible] 野部よし子

私は何も病氣があるでもなし、始終達者ですのに今度、母上の思召で六十になるおばあさんと、此所の温泉に專ら保養生として五日前参りました。

敏ちやんにも相も變らず御達者で、此寒ひのにもおかまいなく、毎日〳〵せつせと學の道にいそしみ給ふ事と、陰ながら嬉しく存じましてよ。

宿はれ大宮殿で申しまして、只今五十計りのおばつさんに、十二三の坊ちやんが一人御出るばかり、極靜かな家庭で御座います、殊に屋敷の結構な所で、朝七時から太陽が齊々と照り込むし、因みて四方の景色の展ひ事と云ひましては、ほんとに書き盡されんのです、實に病める方の保養地に相違ありません、左の方は何一つ遮るものもない田圃で、右の方は枝振のよい岡が、少し間を置いて、朝は御早ふと云はんばかりに、顯はれて居るのです、其岡に今小さい松が行儀よく列んで居る所は、迚も都會では想像も及ばない絶景で、一寸の不快は茲に來さいすれば、すぐ癒ゆると云ふ位です。

内のおばつさんと、宿のおばつさんは、二遍ばつかしお湯に這入られますと、火鉢のそばで煙草など吸ひなされますが、いつも古臭ひ話を永たらしい口調で、話して居られます、年も恰度同じ位ですから、話も能く打ち合つて、一向盡きる事はない樣です、私は他に知人の來合せもなく、只一人で女子文壇など見て湯に這入つて居ります、若し自由に行くものなら、敏ちやんと一所にとのみ始終案じ居りますのよ……。時には桑の葉に、母が送つて呉れましたお正月の餅を投げ込んで、火鉢で香しい匂ひを嗅ぎつゝ、本を讀むのも都に得難ひ一興で御座います。

都の友に

露の玉

かの停車場に惜しきお別れプラツトホームにたゝづませ給へるみ姿をあかず〳〵拜しまゐらせて、はてはみ情のふかきに、別れまつりてのちは誰を友に語り合はんと、樂しかるべき鎌倉の旅に怪しふもおつる涙を覺え候ひしが、親はらからに迎へられて、一日二日と過すうちに、住めば都とや、はやくも田舍の風にそまり申候、扨て此頃の冬景色に、絶えまなく降りつむ六つの花、都はこゝかしこに雪見の宴も開かれ候はむ、田舍にはさる雅なる事はなくて、あくまでも靜かに、おごそかなるものとぞ眺め居り申候、例まだき鷄の聲に夢破られて、暖かきふしど出で立ち、水道の水盥持ちし手にはれ釣瓶とりて、うがひの水吸む頃、初めは思ふやうに行かず、獨りほゝゑまれ候ひしが、此頃はいたくもなれて、水仕の業もやす〳〵と出來得る程になり申候、廣くもあらぬ庭らせには常盤木の緑に雪をいたゞくうるはしさ、又妾上京のせつ手植し寒紅梅のいともふとりて、この寒さにもめげず、咲き出で申候、こゝにまき込めしは其一ひらにて、ふるき思ひでのなつかしふ、朝な夕なに眺め居り候、芝の破れ戸おしあけて外面に出づれば小川に大根洗ふ少女が突寒げに、野も山も宵より降りし雪におほはれて、不淨のものは目にもとまらず、身も心も靜りて話に聞く仙人とやらんになりたる心地いたし候、筆はまわらぬながら取りつくろはぬ田舍の冬景色なかくなんかしこ

兄さんへ

岐阜 高木やう子

寒さいや増す今日此頃は、隙漏る風も身に沁む程になりました、妾事過にし秋の半頃参りし折は、[illegible]に色ずきし葉の未だ殘つて居た前の桑畑も、一葉残らず落ちつくして只痛々しげの小枝のみ、空を仰いで吹き荒む風に、太息して居るでしやう、又隣りの家の彼の、大きなこんもりとした、柚子の木には、小さき村雀の多く集つて、やましき迄に囀つて居

るのでしやう、それにつけても思ひ出すは亡き母上のこと、丁度今月の三十日で今日の樣に烈しい吹雪のする日でした、野山は何れも白布を裝うて、共に我母を送るかの樣の眞白なる、雪中を彼の山邊に添ふて兄さんは位牌を持ち、妾亦は白無垢に被衣を被り、多くの村人に送られていと靜やかに野邊の送りをすましたのでした、そして棺に火をつける時には、思はず聲をあげて泣きましたのれ、今當時の思ひを如何に繰り返さうとしても、只悲しい思ひの一つより、他に思ひは浮ばぬのです、憑慾ことを思ふと後に殘られた一人の、お父さんがいとゞ戀しくなりますの、殊に妾亦はお母さんの看護も、充分にしなかつたのですから猶のこと、そしてお父さんは相も變らぬ、愚痴つぽくて居らつしやるでしやう、これもお母さんの亡くなられてからは、一層強い樣に思はれますの、妾事が偶々參りましても、娘さんの惡口や隣りの誰彼が何うのと、何時も下らんこと計りおつしやつて居らつしやるから、ほんとにさうと思ひますすの、それにつれて娘さんにも、嘸お辛いことのおありなさるでしやう、けれども兄さん其の時には、あなたから娘さんにお慰めして下さい、憑慾ことを云ふと、何だかお父さんの死を待つ樣で不幸の樣に思はれますが、何分にもお父さんはもう、七十の坂を越へられた御老齢のこと故、後長くはないでしやう、だから何卒御面倒見て上げて下さいまし、又嫂さんにも宜しく、元よりお體は御大切にして下さいまし、

招かれし友への返し

攝津　寺部君子

御玉章嬉く拜見致し候、夏の嵐山冬の舞子は好一對との仰、誠におかしき事に存じ候、併し如何程閑なる春なればとて、心に樂き事のお在されば何とて花見る心にも成れ申べき。花は無くとも綠滴る山の姿、水清き桂川の其れの如き君の厚き御もてなしに預り候あの時の事、忘れ兼れて未だに思ひ續け居り候。舟にて上る道すがら、みどりの中に可愛らしき姫百合のなよ〳〵と露したゝらん斗りの樣仕て咲けるなど、春はものかはと存じ候ひし。

舞子の冬は未だ存じ申さず候まゝ、御言葉にあまへ早速御邪魔致す可く候、御許樣の溫き御情に何とて寒き事のお在し候はん、お炬燵などの御用意は御無用に遊ばされ度候。短き冬の日も今日のみはいと長く覺え申候。今宵の夢やいかに御察し被下度候かしこ

小學教師より

靜岡　佐知子

六日附けのお手紙遙かに拜見致し候、一週間許り前より火鉢の番人と相成候——とのみ言葉にたう〳〵ご病氣？といたく驚かされ申候、二枚目の罫紙に相成候ふて、良人への面當、兩親への意地——とは、あまりお情けの無さ過ぎたるみ言葉には候はずや。拜し行くに從ひ御兩親樣の御み心の程を推し、延いては妾の不幸の爲め、冬の日の四時中にもなりつゝる頃職務を了へ、寒風を冒して樂園とも申すべき我が部屋へ歸り見れば寘れ一錢程の火だにこれ無き有樣、此の小學教師？を羨み給ふ御許樣の御淺孝……。折しも添削せむと拔げあり候ひし小供等の爭ふて草せし親の恩てふ作文はからずも——親の恩の海よりも深く、山よりも高し——の文字に目移り申し、十とせ昔の御許樣、無論妾も此の如き文字を讀みもし書きもし將た思ひも致し候ならんに、今は我れ一人にて成長致せしもの〻如く思ひ候て親の我が意を通さゞるを恨み申して——と遂に涙にくれ申候。幼な兒の笑みたるを見れば忽ち抱かむとし、泣きたるを見れば必ず見て見ぬ姿をなすが如く御座候やう、御許樣も小學校敎師の內事に入り給はゞ、必ずしも只今のお家庭を悔望遊はさる事、此の不幸なる妾が誓つて御引受け申候、されば郡子樣よ、願はくば滿足の二字を以つて、御兩親樣は申迄も無之親ご樣の御撰み下されし御良人樣なれば、幾久しく御仲らひの溫きを失せ給はざらむ樣呉れ〴〵も御頼み申上候。餘は後便にて。あなかしこ

和歌

一等　福井　やまざと

ふと吾にかへりて見れば春の日は吾をも
ぬくう照して居たり

慰藉と云ふことを此れほど能く言ひ表はしたものは少い（評）

二等　麹町　はぎ

おん文箱開きてみればいまはまで送りし
文を納めし君よ

戀歌の一生面（評）

三等　樺太　眞田のぶ子

父いませど母はいませど何となく淋しき
思ひ胸閉づる日よ

誰にも來る寂寥（評）

秀逸

○　伊賀　山村龍子

道を行く一人一人にさま〴〵のさびしみなけて日は山に入る

○　府下　うざわはるみ子

人ひとり拾しばかりに寂しさは昨日と今日と天を隔てぬ

○　若狹　片岡はる

新潮は日のひねもすを白き貝紅貝拾ふ手にうちよせぬ

○　府下　定子

きさらぎや地は大天のしづくして遠野の末に梅の香す

○　鹿兒島　橋口友

かなりやはやさしき眼してその籠の隅にる倚つ病われを見る

○　大久保　水野ゆみ子

心たゞ上の空にて琴はしる玉のおん手の白きをぞみる

○　本所　大森房枝

しろき浪そのいとまなきおきふしに綾なく人の思はれしかな

○玉の緒が思ひのまゝに從へば切よと告ぐは望み絶し日　攝津 八代美代子

○天地に一人居殘る思ひして冷たき君のおん手握りぬ　近江 若井きくえ

○月見草月の國なる同胞を戀ふとしひらく一瞬を見る　芝 大嶋ふゆ

○へだてゝはみづから深きとがめ得て御名呼ぶにもはゞかられぬる　土佐 宮内ゆき子

○我がむねの小さき泉に大いなる波紋たゝせぬ石投し君　東京 多美子

○こと／＼く心の花の散り失て淋しき子なり君戀ふな夢　丹後 久壽多桃代

○もろ共に破れし胸を抱きつゝうなだれ步はてしなき道　下太 細谷鏡子

○辛ふじて七筋ばかり引けばとて束の黑髮引かるゝものか　高松 香川育江

○猫の背にそと乘せて見てほゝゑみぬ七色糸に美し手鞠　尾張 成田石子

○夏痩といひのがれたる背の前に打あけまどふ初みごもりよ　牛込 平塚白百合

○我が戀の面影の君銘眼して我れに淋しみ海の雲見る　後志 橋本千代子

○森の朝夢のこゝちに霧ふりぬほのかに呼ばゞ君か來まさん　安房 高栗ちせ子

○そが中のいとふさはしき一花をかざし得し如君とある日は　筑後 梧桐知登子

○大風や砂ほこりなる街中に連れたる君を見失ひけり　靜岡 齋藤みれ子

○おん君を初めて戀ふと思ひしは若狹の境日の入りし時　若狹 山田小濱

○岡の家はともし小暗し冬の風きれ／＼吹きぬ機織唄に　大阪 紅女

○たび衣母が香やすと嗅きて見つ故郷おもふ寂しらの夜や　埼玉 花子

○蜜柑實に實れる山を馬の上海鳴る聞きつ越えし日思ふ　芝 眞崎靜子

○われはなど枯野ゆくらん火たなます母上のこして妹殘して　府下 鈴木春子

○かくなしつかくなしつゝもあたひなき命ひとつを明日より明日へ　大阪 井上靜

○山陰の凍りし路をうき人はいくかへりしつ今日も暮れけり　土佐 石川きよ子

○往にし日も有る日も闇に生くる身になど見ゆるらむ君一人のみ　陸前 浮草子

○力ある低き叫びにわが胸の亂るゝ思ひ汝も知れりや　京都 松田あや子

○荒潮の大潮いよゝ高まりぬあはれわがせこ如何にかなりけん　島根縣 藏倉よしを

○しら姬のみつかひ馬のくひちらす玉のくだけの霰ぞ降る　長野縣 川上嘉子

○　のぎく

山嶋に一とむら雲のかゝりぬとみるまにそゝぐ夕立の雨
○　備中　雪下すみ子
われ女强さ見せむと一たびは君を拒みぬ心にもあらず
○　廣島　賀川みづ繪
われはゆく光と闇のさかひゆく拭ひもえせぬ淚の眼して
○　石狩　信子
幸あれと旅なるわれに送り來しはゝのみふみを病床によむ
○　常陸　秋山欣子
白々と月波根みえて芒咲く常陸國原露そゝろなり
○　遠江　岸とみ子
落日をわれにたとえて敗殘の運命を泣きぬ零落の子は
○　靑森　馬場ちよ子
桃近く櫻も近き我が家にまらうどもなく黃昏にけり
○　大阪　木村春江
我が戀ふる君はいつこの誰ならむ影たにとめぬ胸のくるしき
○　淡路　加藤菊子
我袖の二尺にあまる長やけきたけも斷ちけり春過ぎしいま
○　羽後　大友しん子
なに故の淚と知らず霧るゝ日に遠空見ればさしくまれつゝ
○　若狹　瀧本なみ
走り行く日のうす照りの朝霧を靑き風吸ふ大海の果
○　鹿兒島　內田ふみ子
いとかろく君がそびらに手をやりて嘆ききぬ恋梅の窓
○　上毛　岩田せき子
霧ぐもりはれゆく山の日のかげのうすあかるさや啼く鳥の聲
○　靑森　西村みや女
我をすら我を疑ふわが世にて人の言葉を何賴むべき
○　下總　向後準根子
われかつて君を戀ふるに淚なく嘆だになき日も有りし哉
○　遠江　小林とし子
しめやかに春の雨降る窓にして花の散る空ながめて居りぬ
○　木村志滿子
人去りぬ遠くわら打つつちの音君を戀ふに嬉しき夜なり
○　水戸　重子
悲しけに子をよぶ牛の聲すなり病める我身をひき入るゝ如と
○　伊豆　三國菊の枝
聖堂に冬の氣すみて庭もせの水仙かほる朝月夜かな
○　長岡　野口美壽子
いたつきにやつれし母の御顏を照して淋し冬の夜の月
○　播磨　內藤松園
日うら〳〵若き女の菜を洗ふ池の面に桃の花散る
○　石狩　綱貝藤花子
澄む月に我れは向へどあゝされど胸の悶ひはなほまさり行く
○　野菊女
凜々しうもいひもて放ちのけました御言のうらのその御淚よ
○　福岡　木船江美子
只一たび京にのぼりし物語り今もかたるよ沖のしまより
○　京都　吉田しづ枝
天地にわれてふ奇しき謎を得し其かなしさに淚流るゝ
○　長門　田中華子
ふと思ふ悲哀こそは美しき追憶の花今日も探づれん
○　マニラ　西村ふみ子
水牛の群のすぎゆく夕野路や土人が唄をかなしげに聞く
○　靜岡　土屋紫運
雲かざす傘に御顏のわかれどもうしろ姿の君に似たるよ
○　本所　松本晴
あたゝかき君が腕に抱かれて御空翔けゆく夢を見し哉
○　新潟　村山ぎん子
億劫にわかると泣きて野に立てる人あるごとし春の譜なる
○　相模　鈑田政錦
夕謠は天地の春に糸ひきてまつはる程の人愁しむ
○　信濃　久保田田鶴子

新美文

○寂しく汽笛ならして町はずれ夕汽車つきぬ霧のふかきに　大阪　四戸政江子

○淋しさの黄昏に君が御名も呼ばせ慰むわれをあはれとおぼせ　丹波　伊東菊枝

○織姫のもすそもかくやと偲ばるゝ七色美はし西山の空　新潟　柏　彩子

○悲しさを裏に泣きつゝ表に笑む寂しき子とは知ろさずや母　小　草子

○ものみなの枯れて淋しき冬ながら君得しわれはたのしさに居ぬ　下總　小澤まゆみ子

○胸の琴弾けばことなる音のたびにことなる人のおもかげぞ浮く　岡山　霞子

○美しき露見てありしわが心土塊よりひくきふちに沈みぬ　北米　るり花

○温かき涙の友を一人得て世をうらふれのわが願ひ足る　紀伊　田中文子

○命を受けて月の花野を只一人東する夜や春寒の風　岡山　汀子

○おん君がみ胸の琴の歌の中にわが名ありやとたゞに思ひぬ　牛込　塚原けん子

○涙する毎にうすらぐわが胸のかなしみに散る緋牡丹の花　北區　俊子

○一掬の水をと君はのたまへどさゝげまつらん泉も枯れぬ　高松　山口げん子

○唇をかみたまへどもなほもるゝ嬉しき笑の君を見るかな　伊豫　曉子

○美しはなあまた咲く野を行きつゝもなほ思はるゝ寂しらの日よ　山口　河村靜子

○うちかすむ野末のつはなぬく子らになれてや空に雲雀なくなり　熊本　眞崎幸子

○おぼろ夜や庭石つたひしのびよる君が姿に胸さわぐかな　羽後　蕭塊まき子

○胡蝶とぶ菫たんぽゝげんげ草少女は土手を素足して來ぬ　熊本　藤村たくゑ

○愛の甕にふたもと花はさしたれどなげきの部屋の暗きに萎む　京都　高田眞子

○青空の彼方に浮ぶ白雲の靜けきさまに似たる日もなき　芝　長谷川靜枝

○このごろはうつゝともなく大船のゆたのたゆたにものをしぞおもふ　攝津　寺部君子

○花よりも匂ふ黒髮背にたれてはるの宵ゆく美し少女子　大分　さゝなみの子

○なでしこや波に太鼓の音などのまじりて吹きぬ初夏の風　相模　飯田美代子

○白鳥の百羽群るゝと海中に船は浮びぬうす霞して　山口　深山　霞

○大島はやさしき島を捕らんとすわが身は君に捕られんとす　和泉　金田香雲子

○目閉づれば君の姿の浮びいで戀しさ迫る春の夜かな　兵庫　楢　きみ子

○埋火を中にへたてゝへたてなく君と語ふ夜半の樂しさ　麻布　千葉まつ子

○なく妻のもつれし髮の黑き香にわが胸もやす力のこもる　牛込　黑田久花子

○われ歌君の生血をすひながら唯生きてありその日その日を　兵庫　杉山春翠

○夕ぐれを窓にしよれば心なく君と別れし日の浮び來ぬ　北見　今村りせ子

○暮るますみ空の方にとぶ雁の亂るゝを見て物思ふかな　石川　岡谷久枝

○傘さして畦道辿る黄昏に戀しき君の姿みいでぬ　茨城　立花こう子

君笑みて語りてあれど胸の扉に涙霧くらんけはひおぼえぬ
○　徳島　西野花薫

若かりし其日思へばわけもなう短き袖に涙こぼるゝ
○　山城　入田文子

一切の願ひに身をばつゝみ入れて全く知らぬ吾身のありか
○　三重　川原みさな

君思ふ一瞬にしてくろ髪のかほり流れぬうつゝなの夢
○　高知　坂本頂女

雪の街聲はりあげて鮮肉を賣り行く子等に冬日うするゝ
○　青森　天内みのる子

れころべるその君が頬の紅を見よ若草の風やはら吹く
○　高崎　貞子

浮びきぬ去日の思ひ出白き[illegible]この雨の日にはたへがたきかな
○　青森　竹野秋子

戀ふる想戀の姿に色あらば黄か紫かはた何色か
○　鳥取　桑本奇沙子

高粱を疑ひ又はなづかしみ淋しと[illegible]みる戀得し少女
○　青森　夢野園子

あはれ我が心の鏡君が身の悪よろこび皆うつしぬる
○　麻布　林かれ子

[illegible]賀風琴ひきてとほりける慕忙かしき大年の町
○　越後　矢部みさ子

しも柱ふみしだきつつ初冬の野路行く我に月白う照る
○　麹町　やよひ子

もたえの糸三筋によりてさむき夜のこほれる道をかきならしゆく
○　福岡　山本芳

あゝ白き大なる閏水晶の玉垣結ひぬ信濃とぞ呼ぶ
○　四谷　露子

しかすがに絶えず泪に濡れにたれ十五の秋を頬は紅かりき
○　備中　三宅こつる

はたはたとやぶれ障子に音立てゝ朝風さむく通ひ来るなり
○　静岡　根岸鐘子

秩父路は遠くかすみて白樺の垣に馬寄す若き馬子かな
○　大和　小橋きく子

佐保姫の御手澱栞の御甕こほれけるかと少さき川見ぬ
○　京橋　小林喜代

紫の霧おぼろなる都大路花賣行きぬ十月の朝
○　甲斐　やす子

春の野のつぼ菫より糸引くはさゝがに姫の手業なりけり
○　名古屋　吉田とき

日光に消え行く雪を惜しとこそ見る君などて愚なる哉
○　近江　竹村みつえ

にじられぬ踏まれぬ野邊の名なし草あゝわが心砕けはてたり
○　品川　[illegible]

川上の山は夕日にかゝやきて二子の渡し時雨ふるなり
○　信濃　駒澤ひろえ

都なる歌よむ君の黒髪とわが黒髪をつながんと思ふ
○　長野　直枝

馬曳て雪降る夕べ少女子は堤戻りぬ男のやうに
○　塞北　峡貞子

夕のかねさびしく野邊にひゞき行き道行く人もしづみゆくなり
○　若狭　遠水里風

人は知られ花の名きゝし其の日より香のするごとに戀ひしその人
○　伊豆　伊賀かれ子

つよき人吾を拉してはてしなき寂野ゆくらむ悲しきおもい
○　播磨　嘉代子

母と泣き姉と泣きて郷を出づ我れ燃えし胸をかき抱きつゝ
○　明石　おちば子

相戀ふる遠き岬と岬との淡きあかりかあゝ君とわれ
○　中津　やま川

いたずらに落葉は三度重ぬれど出し子歸らず故郷秋逝く

新論文

信用について

二等

東京　鶴見美那子

人に貴賤貧富の、差別は御座いますが、私は、信用ある人程幸福はない。ばかりでなく人には、信用が無ければななぬと存じます。扨この信用ある人と成りますには、種々な必要も御座いませうが、私の考では、第一が、几帳面で御座います。あの帝國大學優等卒業生について、小使の談話だと、いふのを、聞きましたが『彼の方々は私共から、一寸雨傘等を御借りになつても、時を違へずちやんとお返しなさる。必ず成功なさいます。』と、いつたと申す事で、私の經驗では斯う云ふ几帳面の方は、御座います。

是等は、誠に些細な事のやうですが、平生几帳面な爲確かに成功すると信用されたので、御座います。

第二には、私共が、何事を致します時にも『仕事に對する報酬以上に働く。』と云ふ心掛が、欲しいので、外に出て業務を執る者は、もとより家庭に在る者でも、此の御心持を以て萬事に當るならば必ず深厚なる信用を、得られる事で御座いませう、

次に、忘れてなりませんのは、誠實で、あります。隨分世間には表面ばかり親切らしく忠實らしくして居ながら信用を得て居る人が有る樣にも思はれますが、それは眞の一時で到底永く續くものでは御座いません。處で、最後に申し度いのは、俗に云ふ偏屈人となつてはならぬ。といふことであります。是は私ども、婦人には分けて大切な事で『淸濁併せ呑む』と云ふ心持で、何誰に交際をしなる可く人の感情を損はぬ事が肝要と

存じます、是れ等が程よく、調和して行はれましたならば、確かに信用ある人となる事が出來ると信じ升。

議論は名流の軼話を聽く樣に平凡の裡に教訓を藏して居ますが若き人の筆としては今少し溫るみが欲しく思はれます(評)

三等

詩のある處

愛知　山内梅枝

詩は何處にありますかと問ひますと、先生が、都會でも田舍でも海も山も世界の萬物萬事は盡く皆詩です、と云はれました、それで私は一日詩を求める爲に都會に遊びましたけれども、是と云ふ詩趣に出會ひませんから、足を轉じて田舍へ出ましたが、田舍は田舍だけで何も新らしい趣向はありません、海には水山には岩や木があるばかりで、得る處なく空しく家に歸りまして、此事を先生に話しますと、先生は大に笑はれて、それは恰も字引を繙いて文章を求める樣なもので、百日探しても得る事は出來ません、字と字と程よく組合して文章をなすと同じく、世界の物事を程よく組合して初めて詩をなすのですと、云れました。

私は之を聞いて、つく〲考へました、世界の萬物萬事は萬物萬事に止まつて、詩と云ふものは、此物事を程よく組合する其人の頭の中にあるのだと、悟りました。

其眞面目なる理氣を取る(評)

秀逸

挨拶振に就て

しづゑ

私は西洋の交際上の事なぞ少しも承知して居りませず又日本式の禮の事も詳しくは存じて居りません、たゞ私が住んで居る所と住んで居た事のある國での人々の挨拶振に就て多少の考へをのべて見たいと思ひます、現今の男子の挨拶の單純なのは、まだしもの事と致しまして女子と女子が途中で出會した時の話しぶりを聞いて見ますと極簡單なもので、若い方にしますと「あらどちら」「ちよつと」「そこまで」と莞爾位で別れる、又年長けた人々は形式の樣に僅かに默禮し又は「お寒むうで」と摺れ違ふ位なもので少しも心からの挨拶には見えません、

私考へますには他家に行ての前挨拶は大切では有りますが、それよりも途上で出會つた時の挨拶の方が猶大切の事と思はれます、

何故かと申しますと假に自分が至極と迄は行かなくとも常に親しくしてゐる人々に道で會て一寸首を下げたのか上げたのかわからない樣に「今日は」と云はれたならば、どうで御座いましやう乾度あの方は何か自分に

對して惡感情を抱いてゐるのではなからうか等と色々な事を考へて氣の揉るものです。文明の女子たるものはこの邊の消息を考へ友誼交際と云ふ事に重きを置いたならば、敢えて御世辭を云はなくとも自然と、態度に溢れ又自然と言葉にも溢れて來る事と思ひます。

どうもまだ說き足らない所がある樣です折角の好題を促へながら惜しい事です（評）



寒き夜　紀伊　稗田かず子

方言につきて

はつね

時々刻々世の文明に遲れつゝある絕海の孤島だからかも知れませんが、苟も普通語を解し得る者は何人を問はず決して琉球語を使用してはならぬ、通用せぬ言語ではいつ迄も進歩しない、野蠻視されるとの事で絕對に後を絕たうと嚴しく云ふ人がありますが、

畢竟これは程度問題だらうと思ひます、方言でなければ一言も發し得ない人なら上達する迄束縛する必要もありますが、さうでない者に絶對にと强ゆるのは、好ましくありません。すべて世の進歩と云ふものは、只暗の夜を後も見ず驅け込む樣な物ではありますまい、寂い樣な懷しい樣な囘想の情に樂んで居ればこそ世の苦さも忘れはて一層力もつき成功もするのでありまして、己が幼な時や方言はこれ大なる慰安であります、慰安なく進めとは働く事を知つて遊ぶ事を知らぬ人です、實なき花を咲かせるのは永遠の力ではありません庭前の美を見るはかりです。

又琉球語を以て蠻的視するならこれ眞の沖縄を知らぬ皮相の觀察です。或言語學者の説に、琉球語は記紀萬葉等にある七世紀以前の、大和言葉が遺て居て猶東鑑にある樣な鎌倉時代のが多いとの事です。私共がこれ迄讀んだ本の古語や鎌倉時代のそれが今現に使用されつゝあります……長い間内地との交通もなく爲に餘程の差異が出來て外國語の樣に聞えるでせうが――一例を上げて見ますと商人が物を商ふに御買ヒ召シ侍レ（ウケー ミセー ドレー）と云ひ車屋が客を呼ぶに御乘り召シ候へ（ウヌイ ミ ソーレー）といふ。これが聞き苦い野蠻の言でせうか、餘りに祖先を侮辱し過ぎては居ますまいか。さうだわ、さうよ等の耻づべき物は耻ぢず耻づべからざるものを耻づとは何たる矛盾でありませう。私はいつまでも、囘想の心持に生き現實の淋さを忘れて行かうと務めて居るのであります。

南海の絶島の爲めに萬丈の氣焔を吐く、其氣當るべからざるものであるが其議論の消極的なのは遺憾であります（評）

日誌

但馬　西垣琴枝

私は文章を練習するには日誌を記載するのが一番良法であらうと存じます。皆さんはあながち然うで無いかは存じませぬが、妾共には常に、文を作らうと思うて筆紙墨は直ぐ用意を致しまするが、サア書かうと云ふに至りましては特別の場合でなければ其の題材に少なからぬ苦悶を覺ゆるのでムいます。けれども私共は命がある間は何か身體上にか精神上にか爲ない日は一日も無いのであります。其れを在りの儘に記載するのが此の日誌なのでムいますから、之れについては前に述べた題に苦むやうな事は少しも無いのであります。其の上日記は作文の根本たる事實の描寫でムいまするから、少し氣をつけて記載して行くなら、一年も經つたら恐ろしい程進歩するであらうと信じます。今一段其の進歩を速からしめやうと思ふたならば、毎日日誌をつける前十分なり、二十分なり、自分が一番崇拜して居る名文を通讀して其の文の口調や趣味の面白い處がまた頭の中に彷徨ふて居る處へ、自分で筆を執ると、

多少其の文にかぶれたものが出來るのでムい升。そうすると確かに二三倍は違ふものでムいます。

また此の日誌と云ふものは文章體の凡てを具備して居るものでムいます。卽ち其の日の出來事または觀察の仕方によつて美文にもなれば寫生文にもなる論文にも小說にもなります。其の他新體詩賓用文和歌俳句等を入れて置くのも一層妙であります。それから又、日記を記載して行きますると日誌其の物の効力は勿論其の副産物として右に申しました文學的方面の外、習字や觀察力や忍耐力は知らぬ間に發達するものでムいます けれども此處に注意せなければ成らぬのは、嫌々々々日誌をつけると云ふ事でムいます。之れは何の効も無いばかりで無く却つて有害であります。で要するに此の日誌を十分活用さして行くならば、確かに一個の人格を作り得るまでの効力があると私は信じます。

新らしき提案では無いが遺憾なく書けてある老練な筆（評）

自然主義に就て

本所　江原田鶴子

私、自然主義とは如何いふものか、といつて論ずるなら、自然主義といふものは如何いふものかと云ふことは知らないのです。お友達なぞが、『あなた小說お書きなさるんですつてね、自然主義つて如何いふんですの？』なぞと、少し侮蔑をまぜた問を聞く時に、私は口惜しくもあり、亦、私が何か道ならぬことでもしてゐるやうに想ふのです。

けれども自然主義の運動は、且亦、自然派の作品は、みんなしつくりと、私等の胸に觸れるのです、さうして、昔の小說を讀むやうな輕跳な所は少しもなく、みんなしみ／＼と人生を思ひ浮べさせられる。だから、僞りでない、眞であるのか、ナチユラリズムだと思ひました、卽ち自然をまつに、世相人生、ありのまゝであるのが自然主義であり、それを書くのが自然派の作品であると思ひました。

私は決して私の智識の淺いのを悔みません、今はみんなが、世の一切が、あらゆる拒措を離れて、囚れから放れて、さうして傳習にもこだはらず、人間の眞、卽ち自然に還るべきだと思ひました。

それを唱導し、その眞を描くのが、自然主義であると思ひました。

だから作を書くにしても、文章を文章として、あらゆるごた／＼したお飾り（卽ち技巧）を施して、そして一種の骨董品みたいに、文章、ひいては作品を、見扱ひ、觀賞するのぢやないと思ひました。

だから私が昔、紅葉の『金色夜叉』を、非常な大藝術だと思つたのを考えて、愧しさに堪へぬのです。

あゝ時代は推移せり、つく／＼私はこの言葉を思はざるを得ないのです。

私達も、まじめにやりたいと思ふ。だから私の自然主義の解釋は以上の通りなのです。むづかしくも何ともないと思ふ。

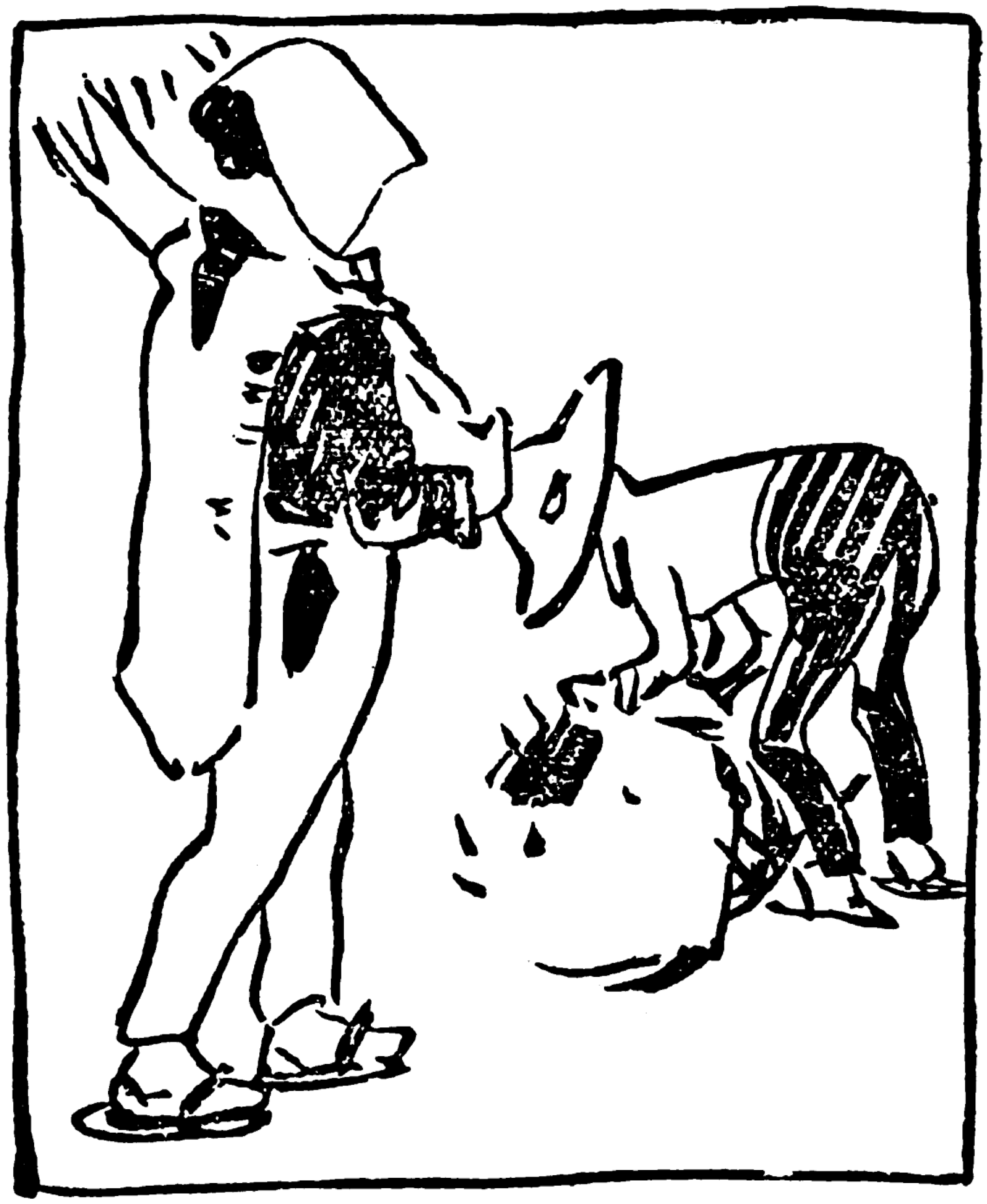
自然主義の縮圖とも云ふべきもの、此の作者ならば格別の苦も無く出來ましたらう、又自然派以前の小説を假偶と呼ぶは稍か苦しい（評）

田舍生活

土佐　宮内ゆき子

田園とかう申しますと、詩的にも聞えますけれども、田舍と云へば、頭から平凡な思ひが致します。全く、田舍の生活程つまらないものは、ありませんでせう。それは、新らしい空氣も吸へませう。靜でもありませう。又偉大なる自然の美にもあくがれる事もできませう。詩にもなれば、文章にもなりませう。けれども、其は皆、餘裕ある人の事、其日暮らしのまづしい者の、思ひ及ぶ事ではありません。ただ生の爲に、日夜あくせくと、稼いで居るばかりです。殊に、私共の堪へがたきは、向上心のなくなる事と、風習のよくない事と、人の目と口とです。土地が狹ければ狹いだけ、其れが甚しいのです。一寸、他出すれば眼を袋めて、衣服の批評、髮から、姿から、言葉迄、何所へは、狀が來るとか、來なひとか、本を讀むとか、生意氣なとか、いつも、批難の焼點となる事です、田舍人は實直なとか質朴なとか、いふのは、內情をしらない皮相の觀で、實際は都人士より、却つて。劣つて居る位です。田園、田舍、言葉に雅俗のある如く、風俗、生活も見樣によつて、美しくもあれば、みにくくもあります。

定めし左樣で御座いませうとキビキビとした書き振り心地よく讀みました（評）



勞働　牛込　佐野貞子

菜食主義

鹿兒島　内田ふみ

「肉食は道德と並立せず」と言つたトルストイ翁は肉食をやめて三十年、日本のトルストイ德富芦花さんは止めてもう三年になられます。芦花さんは訪問の或る記者に向つて「肉食はきたないでせう」と言はれたさうです。よく／＼思つて見ますと實にきたないではありませんか、生物を殺して煮て食ふのですもの、平氣で居れば何の事もないけれど、これは動物だ生物だ是を人間が食ふのか、とさういふ風に考へて見ますと實に淺間しくてきたなくて何だか自然の道に叶つてゐないやうな氣がするではありませんか。

私は或る新聞で「二十八年間肉食を斷てる男」と題して次のやうな事の書いてあつたのを記憶します。

身體はさまで肥えてはゐないが、すらりと高く、眼は瑩然と澄んで一種嘲るやうな色を湛へてゐる、鼻は刻んだやうに形がよく、頭髮は緣色にちぢれてゐる、年は四十七だが三十位にしか見えない云々

私は其時思ひました「これが眞の人間らしい人間で、人間は皆かうならねばならぬのだ」と。

又或る日の新聞にこんな事が載つてゐました。

肉を食ふべき動物はちやんと牙を備えて居る。犬猫虎、猴、狐などが此の類。穀菜を食ふべき動物はちやんと臼齒を備へて居る、馬、牛、羊、猿、駱駝などが此の類だ、これから見て吾々人類は徹頭徹尾穀菜を食ふべき約束の下に生れ來つたのは明白な理で、肉食をやるのは自然の道に反してゐる、しか／＼

又或る雜誌でこんな事を見ました

肉を食ふと眼が濁つて來る、耳や鼻の形が惡くなる盛に肉食をやる人の耳は妙な形にくねつて所謂動物的になつてゐる、鼻も獸的になつて、あの上向いた獅子つ鼻、胡坐をかいたのや寢ころんだのや赤いのは大抵その爲だ云々

菜食をやれば容貌が整つて美しくなる、といふのはチト極端かも知れませんが私の持論でございます。元來野菜は何に限らず多少の美顏素を含んでゐるといふ事です。野菜を小キザミにして絹の布に包んで顏を磨ると艶が出て色が白くなるさうです。これから見ても野菜が人の身體に適してゐる事が分ります。

吾國上古の人は大抵體格が大きくて容貌が正しくて、そして百何歲といふ長命を保つた人が珍しくはありません。それは外にも色々理由のある事でせうけれど一つは肉食といふものを全くやらず菜食穀食ばかりした爲ではあるまいかと思ひます。お寺の坊さんなど長生する人が多いやうですが、矢張りその爲かも知れません。

材料蒐集なぞの用意深きを取る（評）

無題錄

備中　原　こみね

人の禽獸でない事を知らぬ人はないが、人の禽獸と異

る所以を知らぬ人は少なくない、金銀を鏤めた殿堂の樣な家に住んで居ても、光彩目を奪ふ樣な美衣に纏はれてをつても其行ふ所が禽獸と相擇ぶなき者は卽ち夫である然らば人間と禽獸との相違は孰れの點に存する乎、是れは素より一にして足らぬが其最も著しき者は禮節の有ると無きとの相違である、禽獸は只本能の發動する所を滿足せしむるの外一物もない、況んや禮節をやである、彼等は如何に嬉々として相たはむれて居つても其一群に一片の肉を投ずと親子でも兄弟でも互ひに其本能を滿足せしめようとして相かむに至るが人間相互の間には禮節と云ふことがある、而かして人格の高き人ほど禮節の觀念に富んでゐる、文明の進んだ社會ほど禮節の規約が整ふて居る、日本は東洋唯一の君子國である文明國であるから禮節にも富んで居る、又かの武士道の奥意も禮節である、昔者蘇格の一勇將トクラスは其競敵ヲンドルフの戰を援助せんがために戰場に赴き其已でに敵兵を擊退したりと聞くや止まれ彼れ既に勝てり若し進んで止まらざれば彼れの功績を損傷せんと大呼して兵を制したりと之れ皆禮節である、斯く禮節は貴き事を一日たりとも忘るべからざるものである。

一體に粗雜な書きぶりです「殊にまだあるが行數があるからやめておかう」と終に書いてありましたがあんな物は禮節を說く人の言とも覺えないことです（評）

電車についての雜感

南品川　岩田せい子

私はいつも七時半に出て八ッ山より東京電車へのりますの、それは勿論「學生勞働わりびき」で御座います、この車は會社が特に勞働者の勞れを補ひ一厘の收入もないが將來希望ある學生に對して、同情のあまり發車するものだと思ひます、少し私の考は皮肉かも知れませんが、立派な有髭の紳士が「我こそは世に尊はるゝ所の紳士であるぞ」と云はんばかりに、大きな顏をして大きく足をひろげて、腰をかけ新聞等鼻目鏡の下から見てゐるのを見ると、實に何んともいはれませんの、私いつも思ひますのよ、幾ら紳士だつて特に私共の爲めに發車されるものに乘つて指さゝれてゐる、學生を皮にぶら下げてよくも心がとがめないだらうと、それは誰しも人情ゆゑ安い物に乘りたいのは、山々故、乘るな、とは夢々思ひまん、が可憐の女子が立つてどよめく度に困る時には三度に一度は、席をゆづるに惜しむ事のない樣にしたいと思ひます、何も決して私はどいてもらひたくはありませんけれど。

それから或る華美な女學校の生徒は、現在目の前に割引車がありますのに、わざと次のへ乘りますの、本當にね誰もほめは致しませんの、私は其虛榮心が憎らし

いやうに感じます、そうして其の人の父母が氣の毒だと存じます、先づは思ひのまゝを。

このお嬢さんえらい事を仰しやる、しかし論文と爲さず單に寫生した方がよかつたでせう(評)

遠き慮り

名古屋　吉田とき子

宵越の錢は持たぬとか江戸兒は言ふとかですが或はそれを意氣だとか誇張したとかいひますが、妾は間違つた考だと思ひます、今若し此の人達から職業を奪つたら什麽でしやう。食はずに居る許りと、痩我慢を申されるかも存じませんが、とても一日も空腹を抱へて居れますまい。これは遠い所まで考へが及ばぬからだと思ひます。諸事百端。行きなりバツタリでは、眞面目な良結果を得る事は出來ません。人が永久に生を保つて行く限りは必ず、持續的に仕事を遣つて行くものです、そうしたならば、その日暮し其場に臨みあはてゝ初むる樣では到底及びません。前々から腹案を立て、秩序に從ひ其事を爲すに當つて、僅かに遣つて行けるのです。縱になり、横になつて考へても、矢張遠き慮りといふ事は、是非必要であります。それ故に彼の東洋の大聖人孔夫子も、申されましたではありませんか。「遠き慮なければ近き憂あり」と。

男女の性格

菊岡靜子

男子の裏面は女子にして女子の表面は男子也、表裏相俟つて初めて完全なる「人」となる、蓋し男子は意志に生く、從て靜寂考覈、是非を辨別し、利害を打算して進む、反之、女子は愛に活く、從て情の上に執着ありと雖ども智の上に輕進す、故に其の觀察や、皮相也、判斷的にあらず、直觀的也、批評的にあらず、世の女子が流行を趁ふて華美に流れ、奢侈に走るもの之れ豈に其證左にあらずや。

近時文運の進歩は男女七歳不同席てう嚴酷なる東洋的道德の檢束を打破して愛情は自由を尚ぶ西洋倫理の輸入されし以來、男女學生の品行問題、囂々として世論を誘起す、之れ蓋し兩性の差異と、道德思想の變轉とは、驅りて男女學生を墮落の深淵に導けるもの也、何となれば心理上より見て、感情に強く、智的判斷と意的操守に弱き女子の性格は、卽ち誘惑され易く、煽動され易く、惑溺し易き性格なれば也、而して之に乘ずるに惡青年の辨佞巧辭を以てす、墮落せざらんと欲するも得んや、リヒテル嘗て曰く、女子は門口多く窓牖少き家の如し、窺き難けれども入り易しと、至言と云つべし。

此弊を矯求せんとす、如何なる方法がある、思ふに男子は松の如し、暴風却て其枝振りを作る、之を敎育する須らく自然に放任すべし、感情に脆き女子は花也、散るを護らざれば可惜、泥土に餘香を留めん、之を敎育する須らく嚴重なるを要す。

研究心

野の花

我國の人は一體に研究心に乏しいじやないでせうか、殊に婦人は殆ど此心がないといつてもよい位でせう、と云つては語弊があるかもしれませんが、一體から見れば眞實なのですから致し方がありません。まあ考へてごらんなさい、あの蒸氣仕掛の交通機關、其他重寶がられてる機械等の大抵は、惜しいことには外人の手によつてなつたものです、日本人が發明したのは交通機關として、僅に人力車位、それでは村田銃はつて仰有る方もあるでせうが、名こそ村田でも其拵へたのは外人ですそれを村田さんが改良したのみです。

それから又機械等ばかりでなく、學術のことでも外人は自分の命にかけても、研究して人の爲社會の爲に盡すさうです。だから誰はどういふことを研究したと云つて、世界の人の賞讃の的になるのは、いつでも外人であるのは當然のことだらうと思ひます、又名高い人ばかりでなく、一般に外國人は男女をとはず常に何事をも研究を怠らないさうです。日本人は如何でせう殊に婦人は眠つてでも居るのでせうか、例へば新聞で見たのですが、日比谷の圖書館ができて一般の縱覽をゆるした初の日に、婦人室は特別に拵へてあるにもかゝはらず、何百人といふ入場者中わづかに婦人は二十人たらずとか、其二十人未滿の中にも婦人のなかで

最も研究心のあるべき筈の女學生は一人も見當らなかつたとか、其記事を御讀みになつた方もあつたでせうが、皆樣は何と思召して？私は實に恐しく口惜しく思ひました。なぜこう研究心がないのでせう？此心のあるなしは國の文明にもよほど影響するだらうと思ひます、どうぞ皆樣よ、是れからは學術は勿論のこと、すべてのことに疑惑をおこしてどこまでも深く御研究せられんことを御願ひいたします。

髮

大阪 木村花子

女が容色を飾るに就ては髮の結い方が非常に關係します、毎朝美くしく結づつた髮は、眞に見よいものですが、其内にも前から見て美くしいのと後恰好の綺麗な方とがあります、然し天性ではありません、結び方と手入れに依て異なるものではありますが、亦境遇とか職業とかに依て違つてくるものです、（どちらでも語弊はありますが）私共若き者は大方束髮です、學校生活をして居る間は髷に結んだ髮は御座いますまい、此髮に結んだ者は背後恰好が見惡いものです、先生の講義の筆記に追はれて髮の手入も出來ずに登校する事は目づらしくありません、それですから始終休み時間に水鏡や硝子鏡で撫きますが、それが習慣で家でも合せ鏡をする事は恐らくありません、從つて後見が大そふ惡くなります、丁度態度の外觀を飾つて心を磨かないとも申しましようか、兎に角出過ぎた御話してですが、髮は前よりも後を美くしくした方が什麽も引立ちはしないかと思はれます、女と化粧は先天的に結び付けられたものですから、容色を作る事は、華美に流れない限りは當然の事と思ひますにつけても、髮の結び方には、最も念を入れると共に、後恰好に注意したいものです。

本誌の發展に就て

東京 たけ子

月日の經つのは早いもので、妾が僅か十四歲の頃、丁度、今から五年前、初めて女子文壇が發行されました、本誌が此の五年間に、どう云ふ變化をしましたか、又どんな發展を致しましたかと云ふ事は、今更妾が申上げるまでも御座いませんけれども、本誌が女子文學の中心となりまして、文學界に貢献した事は、諸孃も普く御承知の事と存じます、女子教育奬勵の聲が盛になりまするにつれて、種々な雜誌も續々發行されて、日に月に其の發達は眼に映ずるのであります、今其の二三を擧げますれば、婦人世界、ムラサキ、女學世界などありまして、今一々述べる事はできませんが、御互に競ひ合ひ、我田引水と云ふ風で、表裝を飾り、或は其の販路を廣めまして、只管、收入の增加を計らうとするものもあります、こういう風に、まるで樣實の身長くらべをして居る、其の内に只女子文學に群を拔き內容の確實な雜誌は何でしよう、之れは諸孃の愛讀せらるゝ本誌です、私は深くこう信じるのです、

世が進むに隨つて、なにかも進歩して、歐米諸國にまアひけを取らないやうになりましたが、只一つ世が進むにつれて段々と進歩して、行くものは、女子の作文の力であります、諸孃の方々もいざ一つ御作りになるときに、机の傍に參考書を山のように積み累ねて、彼處から引きづり出し、此處からぬき書きして、やつと仕上げると云ふような始末でしよう、これは私の想像に過ぎないのです、こういう事は皆作文力の足りないと云ふ事から起つて來ることで、文を作るに達者になるは、是非現在の善良と思はれる、他人の作を善く吞みこんで、之れを應用させるより外はないのです、けれども近頃妾共が他人の作を讀んで、參考にしようと思ひますものは、少數ですから、隨て作文の力が退歩して行くのですこういう時に、本誌は退歩して行く此の女子の作文力を、養ひ益々女子文學の發達を目的として、發行なされてから諸孃に與へられた效力は、實に非常なもので御座います、處が今又體裁と內容とに非常な改良が加へられまして、投稿も記事も、皆範圍を擴張なされまするのは、實に妾共に取りまして、喜ばしい事であります、妾は記者樣がどんなに其の發展について、多くの艱難辛苦をなされたかを深く感謝致しますと同時に、妾は今後ともに、記者の御盡力と諸孃の方々の御熱心とによりまして、益々發展擴張する事を諸姉と共に祈つてやまないのです。

理想について

福岡　天野糸子

今日女子一般の弊として一の缺點は理想と云ふ事にあると思ひます、理想と云ふ事は決して惡い事ではない、男子でも女子でも人は必ず理想がなくてはなりませぬが世には理想と空想と混同する人が多いやうで御座います。隨て其弊害も是から起ること、思ひます。

例へば未婚の女子が自分の學識才能も顧みず、高位高官の貴人と富貴榮華の家庭を作らうと夢み、又は結婚後美的生活を試みて人生の快樂を盡したいといふのは、理想で御座いません、理想と云ふ事は一口に云へば實際成し遂げ得らるゝ目的に外ならぬので御座います。

誰しも意中の人と結婚し富貴榮華の夢を貪り終生愉快に暮したいと云ふ事は、人情として無理もないこと、併し世の中は決して思ふ通りにならぬもので、よし又萬に一つ思ふ通りに行つたとしても、年が年中愉快ばかり續いては決して愉快を感ずるものではありません、春の花や秋の月も四季の變換によりて時々來るから、其眺も佳いので、此物見遊山も毎日毎晩仕事のやうに眺めては、決して樂しいものではありますまい。

ソコで私は今日一般の婦人方が、理想の家庭を夢み、理想の家庭の實現を企てらるゝには、此處に大に注意をせねばならぬこと、思ひます。私の近隣にて實現しました所によれば、殺風景の家庭は多く、一般の女子が理想の良人を得ずして不快の感を起し、或は美的生活を試みることの出來ないために起つた、惡い結果であらうと思ひます。

だから家庭は根本的に、秩序的、經濟的、共同的、愛情的でなければなりませぬ、決して美的生活と愉快とを理想としてはなりませぬ。併し美的生活と家庭の和樂は必要である事を忘れてはならぬと思ひます。

美文と新體詩

近江　竹村みつえ

美文は美文です、新體詩は新體詩です、寫生文は寫生文、日記文は日記文、實用文は實用文です、それに近頃此の區別が無茶苦茶になつたやうです、私は此の區別のある限りは何處までも此の區別をはつきりと區別して置きたい考へです。ある雜誌で寫生文とあつて、寫生文やら美文やら殆んど判斷に苦しむ樣な文章を往々見受けます、そうして又、日記文でも實用文でもそうです、美文に傾向いたものが多い樣ですが、今後何うか此の區別のある限りは何處までも此の區別をキチンと行つて行かればならぬと考へます。譬へて見ようなら豆は豆、米は米、麥は麥、と區別されてあるではありませんか、その區別がしてある米に豆が交つたり、麥が有たりしては面白くありますまい、豆は豆、米は米、麥は麥と怒う區別がしてあるから、豆を蒔いたら豆許り、米を蒔いたら米許り生へるでせう。

近頃に至つて又、美文と新體詩と判斷のつかないのが間々あります、言はゞ縦に書いたら美文、横に書いたら新體詩と云ふ樣なもので美文が新體詩か新體詩が美文か解らない樣なものでは面白くないと妾は思ひます。麥を蒔いたら麥、米を蒔いたら米が生へる如く、美文てふ米を蒔きさへすれば美文てふ交りものゝない米が生へ、新體詩てふ麥を蒔きさへすれば新體詩てふ交りものゝない麥が生へるだらうと思ひます。で、美文は美文、新體詩は新體詩と何處までも區別があつて欲しいと、いつも心から神に祈つてゐるのであります以上、妾の感じたまゝを拙い筆で書いたのだから氣に入らない處があつたら何うか許して下さい。

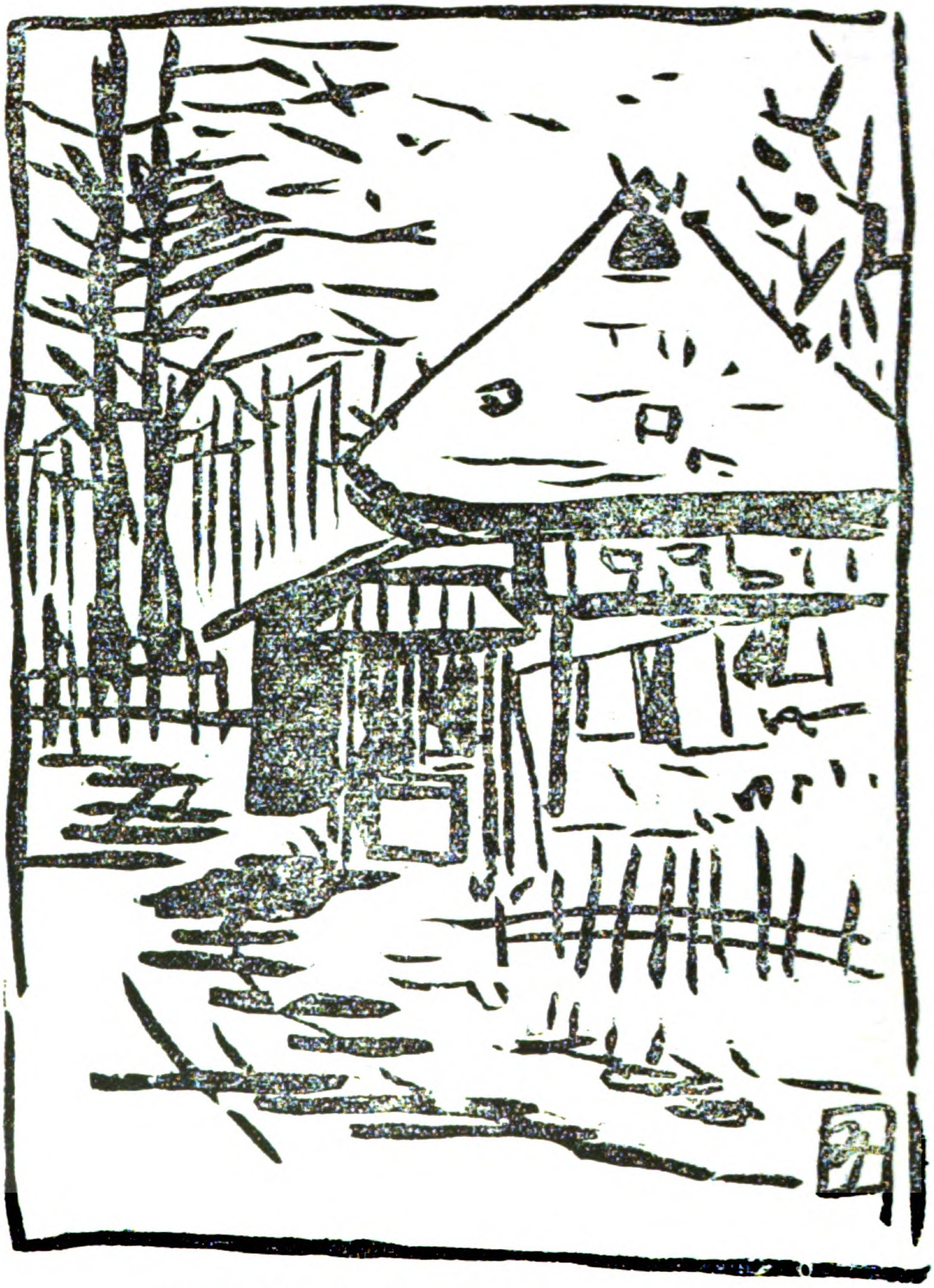
婦人の覺醒を促す

椿　窓

戰勝の榮譽に陶醉して、兜緒を引締むる事を爲ざりし我國民は、國步多難なるも知らず顔に、滔々として虚榮に憧がれ、奢侈放逸、流連荒亡して歸る事を知らざりし醉夢は、彼の畏き御詔勅によりて、霹靂一聲の下に覺醒せられたり。嗚呼我國國債實に三十億圓、五口を一戸として之を分割すれば、今日一日糊口にすら苦しめる裏店生活の一貧家、尚三百圓づゝの大負債を擔ふ。然れ共是れ元より國家經濟の大問題。區々たる婦人

の得て與かり知る所に非ずと思惟する者なきに非ず。奚ぞ知らん。其起因し其歸着する所、堂々たる男子よりも、寧ろ隱れたる婦人の勢力の更に大なるを。

試に我國年來の輸出入に徵せよ、年々輸入超過又超過、而も其大部分は、裝飾品贅澤品に位すといふに於て、豈驚嘆せざるを得んや。而して其裝飾品等の多くは、婦人が虛榮の夢を飽かし、虛美の誇を衒ふ價値なき道具たりしは言を俟たずして明なり。吾所持の財を以て之を購ふ何の累か他にあらんと言ふは、大勢を知らざる者の囈言なり。吾手を拔け去りし金貨は、一度我國人の手を經て、やがて海外に飛散するを知らずや。此故に一家の富は一國の富なり。苟も愛國を以て自ら任ずる日本婦人、國難を憂ふるに於て、豈に憂國の士に讓る可けんや。宜しく我國の現狀に鑑みて、奮つて茲に感起し、皆同心一致して、假初にも贅澤品裝飾品と名づくべき物には、誓て一金をも拂はざるの覺悟を定め之を一家に勸むるは即ち一國に對するの責務なるを自覺し、各自實踐躬行するあらば、庶くは勤儉の美風成て國力充實し、誠に一等國たるの實質を以て、世界の舞臺に雄飛すべき事期して待つべきなり。



のどか　　近江　竹村光枝

＊　＊　＊　＊

歯を染める事について

信濃　小林美喜代

妾が漸く人間社會へ顔を出して此頃感じた事ですが第一習慣となつた原因此んな事がどうして習慣となつたと申しますとまづ或る小さな島に始まつたのだそうです其の島には婦人が食へば歯が染まる木の實が有つて其の實を島の婦人は食ふて歯を染めて居たさうでした所が其の實が非常に少なかつたので日本にも傳はつて來たけれども日本中の婦人が染める事が出來なかつた爲あんなオハグロブシ等と言ふものを製造してつい歯を染める事が日本の習慣となつたのださうです。善い事でしようか惡い事でしようか勿論妾は非常に惡い習慣と思ひます、なぜ惡いかと申しますと歯は御覧の通り眞白く非常によい光澤を放つて居ます又堅い事は水晶等より堅くいかに人間が百年生きようが二百年生て使ふが小さくならずかけず人間にして一生欠くべからざる一つの器ですそれを嫁になつたとてわざ〳〵眞つ黒々と染めて何の光も無い木でゝも造つた樣な歯にして了ふ、見苦るしい計りならよいですが男子の歯に比して女子の歯は早く痛むように思はれます、男子の歯とて女子の歯より弱いのもいくらもありますがそれ等は常によく磨かなかつたからです私しは何歳で嫁したつて歯は染めぬと暮れ〳〵父母や親類の人や友だちに言ふて居るのです。

聞きますに西洋では此んな歯を染めるなんて野蠻的な事はやらんそうですが女子文壇愛讀諸姉様方は歯を染める方がよいと思はれますか私しは前申した通りな次第ですから西洋風が大さんせいです。

記者様はどちらが御さんせいですか。不束ながら常々思つて居た事ですから書きならべて見ました。

遠慮

海棠女

遠慮?……遠きを慮ると云ふ事は大變大切な事で御座ゐます。近い例を取りますと學校では時間表と云ふ物を出して生徒に復習豫習の出來る餘地を與へて居ます、其場になつて驚く事のなきやう前日に復習豫習をなすべく時間を與へられて居ます、即ち明日の事を下調し考て置と云ふのは遠慮の一で御座ゐます、遠慮と云ふことに心を用ひないで、むつくり起ると今日は何をしやうまあ裁縫でもと針を取り升が、何やら物忘れたやうな氣が致し升、宜考へて居ますと、そう〳〵お友達に御返事を出さなきあ成らんのをすつかり忘れて居たと、云ふやうな事が宜あり升之等は全く遠慮と云ふことがない故です、明日の事を明日考へると云ふやうな事では到底成功する事は有ません、時間を空費し又不規律な爲間違を生ずるとも御座ゐます、まあ私達は裁縫が讀書に成ても聊の事で御座ゐ升けれど、一家をなし社會の荒波と戰て居らつしやる御婦人方では到底圓滿な家庭を作る事は出來ません、明日のとは今日臥床に入りてよく考へ明日は何をしよう、何處に行うと、明日の仕事を宜考へて置て、何も忘れて居たと云ふ事のなきやう、兒に家政に交際にと百事に心をくだくべきで御座ゐます、明日よりは進んで、一週間進んでは一ヶ月のさきをも遠く慮ると云ふとが大切で有升、私達も長じては必要な事です、故に今より心得て置べきで御座ゐます。

古言に「一年の計は元旦にあり」と有升、誠に善い句です、けれども長い一ヶ年の計を短い元旦において計ると云ふことは到底むつかしい事で、又完全に考ることは出來まいと思ひます、どうしても前年末より考へ置れば成ません、年末と申せば學生では二學期の終です、故に今迄の事をよく考へ顧て、二學期間には不勉强ではなかつたか、不品行ではなかつたか、眞實であたらうか否か、など顧みて善良の行はます〳〵進め、惡しき行は捨て長所をとり短所を捨て來年度の手本とすべく、又來年暑中休暇には何をしようか、裁縫と家政とを熱心に勤めやうなどと長く遠き來年を慮り、計を立てゝ、めでたい元旦において、十分に志をかためどうしてもうごかぬと云ふ、堅固な精神に基くべきで御座ゐます、遠慮と云ふことは何のわけもないやうで又出來にくい事で御座ゐます、故皆様もよく辨へておいてほしいことでごさいます。

交際につきて

ひで

交際と申してもなか〳〵廣い言葉では御座いますが、私は娘時代の交際に付いて申のべて見たいので御座ゐます。今は昔しと異つてなか〳〵家の奥に許り引込んで居る譯に參りませぬ、娘は娘相當に交際せればなり

きせぬでせう、然し交際が必要だからとて無闇に出しやばつて騒ぎ廻るにも及びますまい、先親類間に友達間の交際、それから家に出入の商人などにもそれ相當の愛想もなくてはなりませぬ、これらの事がうまく出來たなら他日社會に立つて澤山の人達と交際してもさほど手落はなからうと信じます。それから今世間の問題となりて居る、青年男女の交際はどういふものでせうか、絶對に交際しては惡いとは思ひませぬ、無論必要とは認めますが、何も強いて未知の男子に交際を求める必要はあるまいと思ひます。誰れしも兄弟が有りませう、もし無いとした處が親類間に一人や二人の青年がない方は御座いますまい、又その友達の家にとも自然に知り合ひになります、それだけの男子で男子と云ふもの一部はたしかに研究が出來ますそれだけで澤山です、なにしろ男子に口もきけぬやうでは今の世の中は渡つて行かれませぬ、然し男子の前ですん／＼饒舌るやうになれば、お轉婆と云はれ、ろくに口もきけぬやうに温順しければ因循だと云はれます本當に世の中はむづかしいものですね。

裁縫について

細谷鏡子

どなたでも、大抵裁縫と申ますと一口に一年か二年もすれば出來上る樣に、御思召すで御座いませう、從つて一年卒業とか、二年卒業とかの學校へはいり、卒業さへすれば、それでもう自分は一廉仕上げたつもりでゐらつしやる、さう云ふ私も初めは左樣思つて居りました、けれども、裁縫は決して、そんな生やさしい物ではなからうと思ひます、成程卒業すれば出來ないのでは有りません、出來るにはちがいありませんが、これでもう充分だと思つて、安心しては居られません、學校の裁縫と申ますのは、ほんの手ほどきで、何もかも規則ぜめですから、思ふ物もやつと、一通り位しか致されません、其の上皆樣にまけまいと縫ふため、なるべくすつぺりした縫ひ宜さそうな物をゑらんで、仕立ますから、其時は一寸宜い樣ですが。さて、卒業後先生の手を離れてから、少し、はいたり、ついたり、した物にあたると、何だか、くしや、くしや、して、それをまとめるのは一通りの骨折りでは有ません、其上終にはめんどくさくなつて、とう／＼人の手を借る樣な事になります、又裁方とて黒板へ圖をひいたのを帳面へ寫して、有るのですから、實物にあたりますと、一寸まごづいて何して宜のかわけがわからなくなります、是はほんの一例ですが近所の方等が、少し込入た縫物などお持ちになつて、「貴女此所は、何うしたら宜でせう」なんて御尋になる、其時私はほんとに御恥かしい次第ですが、一寸お答にまごづくのです、無論學校では縫たのですが、わづか一枚ですから、忘れてしまつたのです、けれども、免状をにぎつてると云ふ口の下から、存じませんとは申されず、仕方なしに、一寸帳面を見ますからと、部屋にかけ込まなければ成ないのです、此時私はつく／＼、修練がかんじんだと思ひました、全く裁縫は學問でなく技術ですから、一通法を習ひましたら後はよく／＼、修業を積なければならぬ物だと思ひます。

小説を讀む利害

近江　志賀小なみ

論文なんて生意氣の樣でありますが、たゞ妾の思ふだけを、みなさんに聞いていたゞきたいのであります。總ての事物が、利あれば害あり、得る所あれば失する所あるは、社會自然の道則であります。有とあらゆる事物のうち、利あつて害のないものは稀であります。方今文明の餘波は其の影響を小説界に迄及ぼして、自然主義なる語は、主に小説によつて勃起せられつつあるものと思ひます。

一体小説とは何をいふのでありませう？

小説とは、一種無形的の美術であつて、文學の粹——新思潮であらうと思ひます。多くの人が小説を讀むに就て、利害得失を論じ、或は讀むべく或は讀むべからざるものとして、互に喋々と紙上に口舌に辯論して、止むといふ事はないのであります。小説を讀むの利害は、大にしては輿論の代表者となり、或は國家の風俗を亂し、小にしては善をすゝめ惡を懲らし、又一身の立志を誤る基となるのであります。

依て小說を讀む利害得失は、只讀者其の人の取捨如何にあらうと思ひます。たとへ同じ小說を讀むにしても、讀者其の人の理解の、仕樣に依つて、又利害得失を、異にするのであります。吾々靑春の女子は、人生の春でありますから。妾等の申す迄もなく、自身の立志、女子たる本分を誤らぬ樣、今のうちに充分識んで頂きたいのであります。

「何故」てふ觀念

茨城　大高はな子

世の中の總ての事を爲すに最も必要なるものは、業務に對して何故と云ふ事だらうと思ふ、みなさんが日々學校に於て硏究なさるも要するに何故と云ふ事を明にする爲でありませう、彼のニユトンは林檎が樹から落つるを見て地球の引力なるものを發見されたのであるが之も多くの人は皆木の實の木から落つる事は知つて居る其れに右の大發見もニユトンは何故と云ふ事を深く考へた結果でゝらう此の外にも例は澤山あると思ふ、自分を進步せしめ社會の進步を計るには何故と云ふ事が必要なり、それも今學校にあつて硏究しつゝある間は何故にと云ふ事を知るゝも一旦家事に從つて居る時それを疎んずる傾きがある、今日諸事業家は非常に多い、是等は幾多の人が幾多の方面から硏究し經驗するにも拘らず現今有益なる發明なされた事などの少ないのはつまり「何故」なる考への足らざる結果と思ふ、今後近き將來に於て社會に出で一家の主婦となり家事に從いそれが指導に當らるゝみなさんは宜しく此の「何故」と云ふ思想を十分に起して戴きたいと思ひます?

物と事の善し惡しに就て

德島　福本千代

善しと云ふも惡しと云ふも仔細に其原因を考ふれば、そが隔りのさして別なきのみならず、其境界までが甚だ淡然たるを氣付くものなり、例ば多辨の人は多辨の人たるを見て氣易き善き人と云にんも、寡言の人は之の人をもて輕浮なる惡しき人と評するが如き、必竟多くの場合人々は自己の身心と類似せる身心の人を善しと定め然らざれば眞に善きもの迄ら善からずとなし終るを例とす、菓子を好む人と酒を好く人とは互に己が嗜むものに善き理由を附して他を排すべけれど、酒も菓子も共に其身が病的たるより激好するものなりと判明せば兩者の論旨の取るに足らざる如く、少なくも正しき善し惡しを定めんには身心の片寄せ無き多方面の物と事とに通じたる人以外、誰人なりが輕々しく決し得べきにあらず、殊に惡しきもの故意に其位置に在るにあらず誠は實にそれだけより成し能はざるがためにして其間に存する邪因を遏止せば、惡しきは其束縛よりぬけて善きに近づくべく、善きものは幸にして邪因なきため今の間は善きとしての体面を保てるも、一度び邪因に襲はれなば忽ち惡しきと變ぶ所なきに至らん　されど今の世の人々は未だ之れ等を氣付かず、單に表面に現はれつゝある形のみを見て善し惡しを批評し去り、善きをもて普通以上に卓越せるもの惡しきは　それ以下のものたる如く記憶するは誤なり、天地のあらゆる事と物とは善きにあらざれば惡しき筈にて其他に介在する樣のもの有べからず、善は卽ち然あるべき當然のものにして惡しきはそれに及ばざるの位置に在るものゝ謂れたるなり、例は血色のよき人必ずしも普通以上なるに非ず運動營養適度にして然るのみ寧ろ人として當然なり、斯く細密に考ひ來れば善しとて無上に好み惡しとて一途に嫌ふとの、甚だ淺はかなるを思出づべし。

日記

橫濱　島柏葉

私は今日から日記を書いて見ようと思ひます。日毎の私の感想を、廻らぬながらこの筆端にのせて、書き寫して置かうと思ひます。たとへ日記のその各の頁に、萬人をして驚はしめ、敬まはしむるやうな、精華はないにしても、少女時代のいつはらぬ、美しい心の告白を、書き得たならば、それで滿足なのです。

日記をつけると云ふ事は、今までは一體に、等閑にせられてゐたやうです。若し又つけるにしても、それは、たゞ過去を知ると云ふ、ことだけであつたやうですが、私は決してその位な、小さなこと許りではないと思ふのです。

欺かぬ日記の内には、煩悶もあり、喜悅もあり、歡樂もあるでせう。そしてその煩悶喜悅の内に、その人の人格をうかゞひ、知る事を得るのは、最も日記が適當なるものでせうと思ひます●

私は僞らぬ日記こそ萬人の敬ふべきものでせうと、思ひます。少女の淸い美しい心！それは日記によつて、少しも僞らずに書き顯はし得るのでせう。



二等

級友

河内　木村しま子

學校の友に春子さんといふのがあつた、雨天等は近い私の家から二本傘を持つて來て貸して上げても有難うとばかりで如何してもおさしなさらないで濡れてお歸りなさる何といふお心か。柔順しい人の好い方だつたが級では誰も親友になつて上げる人がなかつた。

かうした運命の人

三等

春が來た

靜岡　さち子

春が來た、春が來た、何處に來た、山に來た、野に來た!! 里に來た。ふと小供の唄ふ唱歌が胸に響いた。私のとこへも春が來た！人生の春が……。此の緋縮緬も然うだ、長く簞笥の底に藏つたのたが―矢つ張り春が來たのだ。

緋縮緬は歡迎委員の一人

秀逸

散歩

府下　萬千田野里

夢心地で紅葉のトンネルを出るとそこに製糸場がある。日當のよい廣場で女が六七人糸を引きながら私を見る。糸車を廻して居る三十女の一人が世は樣々だねと呟く。私は見てゐるのが氣の毒さうになつて引き返そうとすると、他の一人があんな人あ歩き付きからちがつてらあ。

脫け去つてホッと一息

らんぷ

香川　百惠

今朝から大掃除を致しまして、床下

のランプ箱から少さい澄らんぷの、壺が圓形で眞紅な、それは可愛らしいのを見出しましたので、綺麗にお掃除して石油をついで、今晩からは妾のお机へ、今迄の無骨なのにおひまをやつて、もう思ひ出しては嬉しくてならない。

若き喜びを照らし出せ

夕日　　福岡　山本芳

花園でがさ〳〵音がする私は讀みさしの雑誌を伏せて椽に出ると裾を端折つたお母様が腰を伸して此方に向かれた「まあお母様は何も彼も抽いて了つて―「あつても淺い計りだから」「だつて」空虚となつた花園と積上げられたコスモスや朝鮮菊の殘骸に黄色い夕日がさして居る。

すべて是れ夢幻

冬の夜　　茨城　福田喜久子

「今誰か來たやうでしたね」「さうね、だけれどお隣家へも行つた様子はないし向合うて縫物をして居た姉妹は同じ様に針を止めて引耳立てゝ「氣の所為だつたかしら」「淋しい晩だね」、シポヨ〳〵と外は絶えず雨が降て居る。

襖の向うではお父さんの鼾聲

おちば　　ゆかり子

四五日續いた秋日和に落葉は皆カサコソと音立てる程に成つた。今日のお晝運動四年生連れて裏の山に落葉掻きに行つた。女生は集める男生は束ねるかくして瞬たく間に大束が十二把これで冬春は焚付けとも思はずに皆が暖まる事が出來ると思ふと云ひ知らすうれしい。教へ子の顔も輝いて居る。

夕陽林樹に白づく

弟　　和歌山　大橋信子

今しも團欒の裡に新年を迎へ様としてゐる。祝盃の廻ると共に思ひ出したのは弟である。去年の御正月には此弟の為に家内一同が腹を抱へて賑かに年を迎へた。噫其の弟は今日の團欒中にはゐないのである。今頃は何をしてゐるだらう冥府にもお正月があるのだらうか

沈痛

泣いてゐる　　土佐　きよ子

今夜も、水車の軋る音が聞えてくる……雨が降つても、風が吹いても何時も〳〵聞えぬ晩はない。そして悲しそうに、鳴つてゐる。あれは、鳴るのではない、必つと、泣いて居るのだらう。

近代的の見つけどころ

夜半　　山口　空野花子

硯の水が竭きて、胸の思ひがすつかり出たとおもつた時、悲しい手紙が

皆書き終りました。月が枯木の形を變へて窓に映つてゐる。………斯うして此の便り姉さんの許へ訪れた時私は既に此の家を去つて何處かへ迷ひ行つてゐるでせう。風が幽かに歔り泣いて過ぎた。

あゝ家を出て迷ひが去るものならば……

黄昏

丹後　山添たみ

寒むさうな黄昏の雲に包まれてゆく東の山々に薄墨でボカス、大野田圃は岱赭に薄墨、うねうね縫ふてゐる竹野川に仄白く、「籾塚」の松を眞中に描く。これで配合はどうであらう？。こんな事を考へてゐる間に給のやうな山も川も人も牛も向側からだんだん消えて了ふ。

「又明日れ……」と獨り笑むで

兄様の日記

京都　吉田しづ枝

書齋を掃除する時不圖發見た兄様の日記、早速讀んで見ると頻に戀だとか愛だとかある俳句や和歌も二三首描いてある。兄様にも此麼時代があつたのかと思つて、不思ず微笑むと傍に赤兒を抱いて厳めしく立つてゐた兄様が、『何を笑つてるんだ？』



畫く人　下谷　水野稻子

人毎に月毎に

石屋

大阪　木村はな子

石屋の爺さんは今日もこつこつとやつて居る、見て居ると大槌と鑿を投げ出して、角の石塔を斜に倒し、朱墨を彫に流しながら、歯のない厚い唇で、陽氣な唄を唸り出した、先の短い運命を、毎日毎日石に刻み込んで、自分の死と云ふ事は思はないだらうか。

そこが人生

てふのおはか

山鹿　宗部枝

妹等が騒いで居たのはこれだなと近よつて見ると黒い庭土でこしらへた小山、そのまわりには叮嚀に柳の垣が出來て居て正面の門の處には菫の

花が植えてある萎れた海棠の一枝は丘の頂きに立られてそれには何か書いた紙きれ、何氣なくひろげて見れば「てふのをはか」

「お墓」が好かつた

雲の一日

樺太 眞田のぶ子

名に負ふ樺太の酷寒、海は堅く〱凍りて、市街は雪風吹き、電信柱の唸る音はげしく、往來は人絶えて稀に馬橇の行通ふのみ、お祖母様はストーブにあたりながら、長生きはせぬもの南無阿彌陀佛〱

生きて居るのが臆劫

トキちやんの手紙

下野 錦 子

私が入院してから丁度十日目姉の子の今年十才になるトキちやんから手紙が來ました見ると「オバチヤンアノチ、トナリノオヂオヤンシンデヨメフップフチ、オバチヤンハオーキクメヲアイチイラフシヤイ」と私は手紙を抱いて泣きました。

今夜は眠れませんよ

手がとゞかぬ

神戸 山田よね女

なんだか物が倒れた樣な音がしたので、細目に開いた障子の隙から覗いて見ると、何時の間にか机を箪笥の前に引張り出して、まだそれでもピスケットの罐に手が屆かないので、可愛い丶眼をパチつかせ乍ら、どうしたらよからうてな顏をして、頻に忠雄が思案中。

第二の作戰計畫

少 女

茨城 木村ふさ子

日頃ほしいと思ふて居るは、白の手拭、赤の襷、紅白粉です、鏡は水でも澤山なのよ。豆は不作て、納豆屋も出來ません。母樣病んで買つてお呉れも言ひ惡いので、庭の福壽草一かゝえ程、父さんに貰つて市へと出掛け。花召しませと呼ばる事でも稽古して、母樣に藥を買て上げようか

春近し

叔母の家

後志 鈴木 梅子

大きな潛門を這入るとスツと急に衿元が何とも云はれない宜い氣持がします兩側の高い落葉松はそよ〱と搖れて汗の肌に通ふので此處へ來るとどんな暑さでも打忘れます、眞中に敷石をカラコロと「叔母樣」と呼ぶまでの樂しい心地と云つたら。

蟬聲靜か也

笛の音

熊本 眞崎 幸子

月は寒そうに照つて居る、冷たい風がをり〱吹く。四邊はホーツとして、まるで墨繪のやうだ。

折から、笛の音が静かにひゞく、妾はあまりのなつかしさに、音のする方に歩をすゝめた、梅の花がチラ／＼と散る。

若きあこがれ

試驗　　高知　姫野々荻

紙をのべて名を記し終り問題如何にと、片唾をのんで、一字一句も見逃すまいと、先生の御手許のみを見てゐる實に、此間ほど一點の邪念もなく、愉快で希望に充ちた時は無い

若きおごり

蝶の新婚旅行　　石川　岡谷久枝

讀書に倦んで書齋の窓を開けた時、庭の梅の木に蝶が二つ下りて來た、暫時すると、二羽が悠々と空に舞ひ上つた

所謂此れが新婚旅行

と私は思つた、

若き憧憬

焚火　　信濃　小林みきよ子

秋の日の夕方山に上つて見ますと焚火か澤山見えますが燃え始めて半時間ともえて居るのは有りません皆火が見えて來ると消えて了ひます何と焚火の運命は……

羅馬の繁榮も一焚火

厭世　　新潟　川上照子

厭世と云ひ樂天と云ふ皆其境遇より生ず我世を厭へりと云ふも世は少しも困る色なく我天を樂むと云ふも天の之を喜びし沙汰を聞かず何すれぞ貴嬢等動もすれば高慢顏して厭世と呼びはた樂天とは稱へ給ふぞ

眞の厭世眞の樂天にはあらじ

何故　　英子

妹さんは大きく成つても兄樣に甘えるし弟さんは妙に姉樣に遠慮するし女の姉妹に中の惡いのが多くつて割に男の兄弟に情の厚いのを見る、何故だらう

野僧の疑問

森の姉妹　　信濃　長瀨かなゑ

姉は「家庭」を求むるとて、妹は「美服」を探すとて末の妹は「パン」を得んとて、うち伴れて森を出て行つた。三年の後、姉妹は疲れた妹を引いて再び森に歸つて來たが、前に温い光を姉妹に送つた日の皇子は隱れ去つて、暗い天上には星が冷たい笑ひを浴せてゐた

嫁ぐ道　　土佐　宮内ゆき子

重い袂を膝にたたんで、そつと見返つたわが家門火の煙が白くかすかに御空へ。再び歸るな、との母上の御心で有らうと、昨夜守護刀を下さつた、無言の御姿を思ひ出て涙がホロリと。

妾の村　　靜岡　土屋勢運

東海道五十三次の一つで「箱根八里は馬でも越すが……シャン／＼」と馬追ふた吉原驛は昔の名、今は元吉原と言つて山邊赤人が見惚れた田子浦は昔しの儘、これが妾の村で、網引の中に跳れる魚貢ふては、朝日の富士を眺めつゝ朝風に頰吹かせて歸る。こんな嬉しい所がありませうか。

冬の朝　　長野　山越悦子

信州は誠に寒むい、殊に寒むい朝でした、妾は

盥を持つて居りますと、鏡にかゝつた吐氣が凍つて落つて仕舞ひます、窓の外の竹籔で雀がちよ〳〵寒むさうに囀つて居る、時々街を掛け聲で野菜を引ひて通りました。

春を送る

上野　木内きくえ

纏綿な愛讀されたあなたは春の粗描に描かれるでしやう、けれど私は丈好いと思ひますの。まあ讀で御覧胸に手を當てゝ靜かに眠つた青木の生涯と夢の時代から醒めて現實と顔を合せた岸本の懺悔とはながく「春」の讀者の心を捕へるでしやうよ、

胸なる鍵

筑後　梧桐知登子

處女の私に秘められた美しい思ひ。私は此思ひを何時までも何時までも秘めて置きたい。そして誰がどうしたつて決して開けてやりたくない。しかし何時か此鍵をあけなくちやならない時が來はすまいか。……斯う思うと急に淋しさが胸一ぱいになりました。

おさかなの番

京都　藤村たくゑ

執念深く猫が おさかなを覗らつて居ましたので、お母樣は私にそれの番をして居れと申されました、私はそれが煩さゝに、猫に大きな籠を蓋ぶせて出る事の出來ない樣にしてもう安心と書齋を片付て來た、間に何時か他の猫が來て取つてしまつた。

足音

福岡　石川浦子

芳枝さんに導かれて書齋に入る。床の間がある、勅題の雪中松の掛物が掛かつて居る。机の上の梅の一枝、早咲きの二輪三輪咲きこぼれて氣高い薫が室に充ちて居る。芳枝さんが蒲團をすゝめて火鉢の火を掻きまぜて居る。次の間でそつと誰かの足音がして室を出た。

門の方に駒下駄の音がしました。姉と民子樣に逢ひなひと玄關へ出ますると、まあ。雪はベツより歇んで、寒月が照つて美しい事つたら。民子樣は雪の陷つた、下駄で危に彼在る。私を見て嫣然「まあ遲くなつて……」雪を欺く芳容が一しほ麗しい。室の方では歡聲が手に取る樣。

…………

夜寒

山口　田村菊子

寒いけれど月夜は月夜だ、其の光りの凄いこと！それに西の方から走る樣な雲が月を呑んでは吐き。呑んでは出す。裏山に夜もすがら木枯の聲止ます、川瀬の音のみ冴えてゐる、あーどうしても冬の夜だ。

お祖父樣と時計

備後　井上幸子

私の内のお祖父樣は大の時計嫌です。或時お父樣が目さまし時計を買うと仰言つたら、ヤレ〳〵買ふて吳れな私はあの音を聞くと生命が縮むのが目に見へる樣な氣がすると仰言るのです。

渡し場

大阪　筒井花子

五里の白い砂ほこりの街道を歩んで來た足は眞白、川の中へサブ〳〵走り込む足の半迄の深み心地が好い底は砂地で流れが清い人の足跡が數へられて馬蹄も所々に美くしう晒されて沈んで居る足先を鮎が西東に逃げる三人の旅人が來たが未だ舟が向岸をはなれぬ。

寒夜

伊豫　白ばら

今夜は妙に眠れないので古い手紙を讀でみた。外は殆ど人通が少なくなつた。時々乾いた往還を足駄で通る按摩ばかり何處からか籾摺りの音が聞える。隣の石屋には豆ランプが赤う、爺さんは毛の首卷をしてコチ〳〵やつて居る。石碑だ。誰のだらう。

屏風岩

攝津　寺部君子

四五間の高さに直立仕た岩が、人工を入れたかと思ふ迄正く六枚折に成て、二枚目の處の細い溝の處々に緑の小松赤きつゝじの咲たる樣は繪の樣です、前に清き流れを扣へて向は段々の山田で麥生に菜の花が入り交て咲て升。何地の人か寫眞を撮て居りました、大方私も寫つて居るでせう。

歳暮の朝

播磨　木村まさの

眞白に置いた、朝霜の小路を、學校へと急ぐ。「先生お早う」愛らしい、子供が、路傍で、挨拶をして、後から跟いて來る。二人、三人、だんだん人數が増してくる。打ち撒いた、晴天に、下駄の音が、カンカンする。他は靜だ。と一人が、「私、もう、直、十に、なるのよ」と連れの子に言つた。

加留多の夜

名古屋　吉田とき子

春待つ間は、人も亦花。

小鳥

長門　田中　華子

晩秋の鈍び雲が空一面を掩うて、日光も見えない。重い物を脊負つて、長い路を行く思ひがする。高いたかい空を小鳥が一羽とんで行く。空路の限りには友鳥の影も見えない、寂の境といふものがあるとしたらそれはあの飛んで行く小鳥であらう。

弱い決心

尾道　安保　京子

十三圓や十四圓の月俸を貰はんでも暮されぬ妾の家ではないから、父様と相談して是非出勤ぬ様にしましようと決心しまして、翌日の朝、常の様に校門まで行きますと、受持の兒童が鬼事の最中でしたが妾を見ると顔に笑をたゝへて恭々しく頭をたれて「先生、お早う」といふのです、其時折角の決心も壊れて了ひました。

誌友倶樂部

京都　くちなし

私は本紙を見る毎にお終の細かい字の所へ來ると急にいやになります。皆様何故だと思召す。あの「お情深き姉様よ」だとか「お懐しい皆様よ」。これが私、失敬ですけれど、あのお友達なんぞと語り歩く盗で「右や左の旦那様や奥様や」と言ふ聲をきいた様な氣がしますもの。

受信

丹後　木村　花水

ふと目が醒めた電鈴はけたゝましう自分の肩を呼んで居る驚いて機械に掛つて應答した「誰」と問ふ「木村」と答へると「木村の孫女」とどなる。受信して見ると「ムシ」應答遅延の事、然も三時間中「失敗」と思わず叫んだ。追つかない又罰責か。嗚呼。



失題　下谷　木野綱子

少女の乞食

鹿兒島　橋口　友

垣の内に赤う實れる、蜜柑は、あはれなる少女乞食の飢ゐの犠牲となりました、この寒いのにたつた單衣一枚で、よろよろと顫へながら盗んだ蜜柑を喰ひながら行く、あさましきすがたに妾は止め度なく冷たい冷たい涙が……。

雨あがり

常陸　秋山　欣子

うなされてふつと目を開くと、おゝ眩しい、蒼とした白い光線が雨のやうに木立を透ける、空は一帯に滴く翠の笠を冠つてるので、わが裳の袖も濡れない。春雨晴れて此朝、裏近い庭には梅の匂が映畫の如に漂ふて、病後の身も爽々となつた。

晩秋

梅花

北風がヒユウ／＼と吹き荒れて園を離るゝさへむつかしき朝でも、街道にはほの暗き頃より荷車が間断なくガラ／＼と聞えます、そして晩方までには流石に廣き市場もまたゝく間に眞黄な蜜柑の山を造ります、あゝ秋も深く成りました

雀塚

濱田　小松原德子

ミヨちやんの大切な、裏の御庭の芭蕉の根の雀塚へ何時の間にやら、始終此御庭を住居として居た可愛い、赤蜻蛉が碑の上に、生ける如く彼の世の虫と成つて居た。

花環

千葉　四之宮綾子

昨夕の雨で、庭の椿が大分落ちた、その落ちた椿を琴子さんと金子さんが一心に絲へ通して居る、なりなり二人が顔を見合せて、微笑んでは丈をくらべる、やがて大きな花環を頸にかけて「花咲く春の蝶に…」と唄ひながら下りて來る。

櫻がまた一つ落ちた、

笑ひ初め　　相模　渡邊八重子

何日も朝寐の弟が今朝ばかりは御正月だつて、一番早く起きて裏の垣根からヌツと出た梅の木の下で、若水を使つて裏の山から上る初日の出を拜みました、そして私に「姉樣今日の太陽は御正月だから大變に大きいや」と家中の者が今年の福笑ひの開業をしました。

蝶のひつぎ　　根室　幸　子

今にも白いものが落ちて來そうな朝ふと見たら書齋の窓に錦を着た樣な同じ羽色の蝶が雌雄…身動きしない急に云ひ知れぬ心地になつて其儘桐の小箱へ綿を敷いて納めて置きました…此柩には何と法名を記したらいゝでせう。

ルネタ公園　　マニラ　西村ふみ子

瑠璃の容には、鳥の胸毛に似たる白雲が疎に流れて、海原のやうな、廣い廣いルネタ公園の碧草の上には、今、馬車をドりた白衣の西洋婦人が二人、半身を蝙蝠傘にかくして、徐に歩を移して居る、と、獅子の吼らむ如き聲を立てゝ、その中を電車が…。

舊友　　は　ぎ

「久濶でございましてね」姿こそ御變りなすつたがたしかに石本さんたと思つて聲をかけたのは博品館の階上

「おやまあ」と態とらしい挨拶なすつてそれから切口上の四方山話、「やはり何か御稽古でも？」とはいかにもみくびつた樣な口吻、「幾度塗りましても取落しましてね」とこれがあの氣輕な石本さんのいまの奥樣振なのか、まあ、

蛙　　佐渡　田村　貞子

青葉が茂りあつてる、間をさゝやく樣に、流る谷川の清水を、兩手に、むすばんとすれば、何處より流れて來か、桐の一葉は、可愛ゆい蛙二つをのせて、浮いてゐる、そつと葉と共に、取らうとすると蛙二つ共に、ちやぽんと、水へと び込むだ、あゝこの、二疋はどこ迄も、はなれぬと見える。

庭　　牛込　塚原けん子

庭の梅の花は今を盛りと咲いて、美しい鶯の聲が長閑なる日和を遮つて、ゆるやかに聞える。おさげにリボン、お隣の美ちやんは誇つた顔で庭に毬をつきつゝ遊んでゐる。折からさつと吹く風に梅の花がはら〳〵と美ちやんの小袖をかすめて散つた。

春　　熊本　佐々木秋江

野も山も、大分青くなつて來た。鶯が鳴くから春が來たのか、春が來たから鶯が鳴くのか知らないが。暖かい南の椽では、猫がゴロ〳〵言つて寢そべつて居る。見るさえ寒い霧岳の雪はもう、大半溶けた。噫最う世は春である。

冬の黄昏　　松本　大口　巨樹

寒い風がひゆーひゆーとふいてきた、乗鞍岳あ

たりへは雪が降つてゐるのであらう、折から前の小徑を鼻唄で通る、四十恰好の男、「よせばよいのに舌切雀、ちよいとなめたが身のつまり、」足音は遠く、南の方に消えてしまつた。

年始狀　　信濃　駒澤比呂子

私は、炬燵に靠れて雜誌を讀んで居りました。すると郵便と、一枚の葉書を投げ込んで行きました。私は直ぐ雜誌を投げて、葉書を手にしました。京なる雪子さんからの年始狀……私は昨日迄つて置いた。定めし今頃雪子さんも手にして居られやう……と思ふと懷かしさが胸に溢ちた。

短日　　信濃　小林美喜代子

太陽は山を近くまわるので出たかと思ふと直ぐに沒して了ふ何をしたともなしに昨日も又今日も暮れて了ふのだそれも其の筈だ朝は寒いつて十時時分迄炬燵に這込んで居ろし夕方は又寒つて早くしまつて了ふ、でも御飯だけは三度食ふのです。あゝ又日長になつたらいやになるかしら??

病室より　　和歌山　松嶋　雪子

今夜は何だか淋しいのよ。もう一體何時だか知ら？阿母さんか傍で寢んで下さるけれど、今時分眼を覺ますと、もう淋しくて仕樣がないよ。それに今夜は頻に五位鷺が啼くの。あの聲可厭れ。ギアーギーつて。――あら又啼くわ。姉樣病氣はもう眞個に厭だわ、私。

武藏野の夜　　府下　定　子

悲しさに堪へかねてこの寂寞の裡に佇む。星もなく、山も森も丘も唯しつとりと息を凝して、日暮里や三河島の家は墳墓のやうに見える化見寺の鐘が陰に微かに響いてくると、我知らず末遠く野に消えて行く後を吸込れる樣に耳をすました。

孤獨　信濃　市瀬いちえ

澄んだ！、麗人が銀の櫛を投げつけた樣な冬の月。底知れぬ大海の樣に、凄い程碧ずんだ空には、一片の雲が浮んで居るだけ。フハ〳〵と月の後を追ふ雲が莫迦に寂しい、廣大無邊の宇宙に漂ふ一片の浮雲。噫、妾しは孤獨の女です！。

小春日和　しみづ

上氣する樣な好天氣、秋には遲いが冬には早い。田舎は麥蒔で忙がしい。若い者は皆田圃に出て家には留守居の老婆が獨、日當の好縁端で丸くかゞんだ背を暖めてゐる。邊りは靜かて、時々風もないのに紅葉した櫨の葉がほろり〳〵と土に返る音が聞えて居る。

藪入　紀伊　谷田峰子

清ちやんは今日藪入りで歸へる、妾は知つて居るが清ちやんの家は湯川と云ふ山の奥で雪は積つて淋しい所。それに朝早くから起きて、歸らうと悅こんで居る、やつぱり生れた所はよいと見える。

理想　松山　曉子

草花や果樹でとりまかれた廣庭の中の小さい家に住んで、お琴を彈いてお裁縫をして、文を作つて詩集をよんで、そして派手におつくりをして銘仙位の着物をきて、人の惡評を知らずに、一生母上と二人でくらしたいものです。

造るもの　阿波　西澤小百合

田吾作は年貢米を造るものであつて、官吏は月給を造るものゝ稱、高利貸は負債者を作るもの、裁判官は罪人を造るものであつて、辯護士は訴訟事件を造るものゝ稱、華族は馬鹿を作るもの、藝娼妓は放蕩息子を作るもの、而して凡ての人間は皆墓を造るもの。

兄の運動振り　臺灣　栗本とし子

親友の俊樣と兄樣の器械體操を見に行く。何がさて、男子の運動目にも止まらず。丁度、御猿のぶらんこに髣髴。兄樣は一ち二つと懸聲勇ましく身を躍らす。と見る、危險々々！。體は宙にもんどり打て！、あつと叫ぶ間もなく、ぴよいと地盤に下り立つ兄の平氣さ！。操さんの御顏は土の樣。

母の墓前　樺太　諸石敏

厭かな線香の香をのせて、秋の風はしめやかに、我頰を傳ふ。ふと顏を上ると、あはれにも悲しく響く經の主は慥かに花枝さんだ。奥津樹の前片敷く袖の露しげく、はら〳〵と零れ零るゝ哀みの涙、頰を傳ふて、一零！二零！花枝さんは今年十八の未亡人だ　そして、私は今おん母の墓前に——

夕暮の海　紀伊　榎本しなゑ

夕飯を喰つて、まー、そこらへと、足のたどるに委した、寒いながらも、濱に出た、砂は下駄を沒して足袋の間になじり込んで、心持が惡い、波なくて海は油を流したよーな、面である、夕日は水鏡を照して錦絡を廣げたよーな、魚船は聲をそろへて錨揚破る、身に寒氣おぼへて、明き燈火の下に、歸つた。

落葉　和歌山　伏見八千子

夕日に聳ゆる古塔の扉を背に、幻心にザッと佇んで居ると、木枯に拂れて冷たう舞ひ落ちる胡蝶の屍の樣な數々の木の葉、あゝこの一葉ひとはを燃る少女の息吹に溫めて、せめて晦の國になりとも母木の梢にかへしてやりたい。

旋風　坂出　鉢山雪溪

ぶうと、躍ふて來る。——あなやと、思ふ間に、あたりにある、すべてのものは、直ぐに、消えて仕舞ふ。後には、白煙が濛々と立つのみ。間もなく白煙はなくなる。と同時に、一旦消えた、以前のものは、再び此世へ、生れ出て來る。

皆樣の眼　牛込　平塚白百合

皆樣がよくリンケのダイナの話しをしてはうらやましそうな眼をするので私はいつも朝はやく窓をあけてはそう思ふ。あの明星のやうなのをはめてゐたらまあ皆樣のヴニチーにもえてゐる眼はどんなに光るだらうと。

夜氣　東京　小草

井戸ばたの草かげにはこほろぎの聲がだん〳〵

とほたつてゆく、すみきつた空にはとがまなといだ樣な二十日の月が青白い光をはなつて自分のおとしたつるべの音が井戸の底からしーんとひゞいて來る、とわけもなく身内がおのゝく、

鐘

京橋　小林　喜代

鐘がなる、築地の寺の五時の鐘だ。二階の窓から首を出すと夕暮の風がヒイヤリ、顔にあたる。灰色な空に低い。また鐘がなる。いかにも淋しい音色だ
きつと、あの片眼のお婆さんが、シナビメ手で、手さぐりに、ついて居るのだらう

初春

滋賀　若井きくえ

日當の宜い室で裁縫をしてゐると、先刻から椽側に遊んでゐた君ちやんが障子の破れ穴からそッと覗いて『あら姉さんか、バーア』とニッコり、君ちやんは四歳である。椿も二三輪咲いて靜かな暖かい日だ。

つばめ

近江　竹村みつえ

あゝ慈愿日、鶯は谷から出てくるのでせうか。
私の家は林の中にある小さな一軒家である。海山越えて早や今年も燕は遠い國から渡つて來た、彼處の森へ、此處の林へと低い軒から通ふてゐる、頓て樂しい團欒を作るだらう『あゝ燕は神が放ち給ひし天使ではあるまいか』と私はいつも天を仰いて燕の通路を眺めてゐる。

春

岩代　永山みす子

前の小川に最う囀きが聞えるやうになると、背戸の日當りの枯芝も、少し青みがゝつて、所の

鶯が美しく出た。今日はお天氣が宜いから、椿も大分當を持つた、この安排ちや二三日過つと咲くかしら?。

鸚鵡

愛媛　松村さみだれ

ちやんと支度の出來た美佐子が祖父の前へ暇乞ひに出た、が思あまつて言が出ぬ唯さしうつむいて居た其目は涙んで居た、佐多子が。祖父さん美佐が嫁て來ます云つて居ります。ふうん、いよ〳〵か、又來いよ。ホロリ。祖父さん。美佐。美佐子はがばと泣き伏した。

針

青森　夢野　園子

夫が役所を出るのに氣替をまして、其れを衣桁へかけて一寸かゞまつた時、疊の間から針を一本見付けました。取らうとしても中々出て來ませんでしたが、よう〳〵塵と一緒に上げますと、もう錆が付いて用ゐられないようになつて居ました。妾はちよつとそれを髮へさして、人氣ない室をみまわした時、時計はポン〳〵と八時を打ちました。

十三年忌

山形　齋藤　榮子

本堂の靜寂を破つて、鐘がゴーンと響く、續いて琮瑽の音さやかに四邊を拂へば、線香の烟にも似たる御經が徐ろに起る。そと母上を窺ふと。依然。やせた頸を傾けて讀入る。妾は更に頭を垂れた。而して。夢の樣に父有し幼時を偲んだ。やがて。チラと眸が合つた時。母上の御眼には涙が一杯。

尋常一年生

井上　俊波

右左の區別さへつかなかつた兒童が此頃はもう手を上げるにも間違はなくなつた、クアプと書ひた洗粉の廣告が讀めたと誇る父兄は喜んだが私は其上に尙一つの矜を感ずる。人の子とは思はれない、白雲頭の毛ものびた、時にはそれを結つてもやれば接吻もする。

初夢

大阪　西戸政江子

まあどこかわかりませんけれど華族樣の姫樣よ、顏の寫る紫檀の机に絹のひじつき、坐蒲團は羽二重ですわ、見れば自分は長い振袖姿、樣は勅題新年の松！二人の小間使が襖越しに行儀たゞしく頭を下げて……………とこれが新年の初夢でした。

秋代子

磐城　武者　昼子

春ちやんては何するのと妾は黄菊の瓣をちぎつてゐる妹を叱しました。すると小さい聲が物言ふ樣に秋代子にやるのと口籠る。妾の目白を云ふのです。秋代子が食べるの。かう言ッたが庭石に淋しくなッて春日の照す景色を眺めると風が一陣。妹の菊を散し初めました。

牧場の夕

靜岡　岡村　博子

流るゝ川は細う、牧はるゝ羊は白く、牧場の草は綠。柵口に立つて一笛すれば、おゝ神の子は群れて來るよ。其の眞白き頰毛に赤き夕日を受けて、房はしき髮をふりたてゝ、我を追ふて愛しくも。





俳句

一等

淡路　加藤きく子
妹の麥蒔なれぬ勞れかな
勞れの字活く（評）

二等

羽後　三浦とみ子
わが戀の十年に古りしかるたかな
古りの字適切（評）

三等

佐渡　田村貞子
大雪やたつたひとりの針仕事
ひとりの字が生命（評）

秀逸

落葉掻天狗の沓を拾ひける　羽後　藤原竹子
したゝかにしもやけ踏みし妹かな　伊賀　山村龍子
蝶とぶや油の乾く小傘　秋田　三浦しゑ子

のぞきこむ火桶つめたし古女　土佐　宮内ゆき子
百雀廂の雪をあびにけり　福井　北利子
湖の氷わたりて御慶かな　芝　山下宮子
寢卷着て寢やの姿見寒げなり　長野　川上恵子
菜の花や女芝居の鏡たて　秋田　國松操子
日永さや數へて上る女坂　秋田　泉田秀子
關守の關を鎖すやほとゝぎす　豐後　伏見ゑみ子
冬川や鶺鴒やせて草に入る　本所　大森房枝
花の上胡蝶の夢のしばらくを　岡山　桐本悦子
新世帶大根刻む手の白さ　水戸　重子
白酒と侮り醉ひし男哉　京都　千代子
飛ぶ鳥の羽暖かき小春かな　近江　貞水女
なつかしきおもひ薄の穗に出でぬ　神奈川　柚木とよ子

寒月の山見れば皆尖りけり　陸中　染田とき子
鶯の初音に花の夢醒めぬ　相模　矢島たき子
春の雪地上五寸で消えにけり　陸奥　南部賀智子
萬巻の書をふところに冬籠　芝　長谷川靜枝
船引や居はり直せば手くらがり　神戸　足立あさ子
陽炎や豆の芽萠ゆる生灰より　大連　眞佐子
四塔の日の影淡し百合根掘る　山口　空野花子
銀響の落ちて音あり小夜時雨　品川　落穗
朝ばえや水仙かこむ霜ばしら　府下　鈴木春子
君去りし夜具の温みや春寒し　信濃　長瀬鼎
行く春を土筆の多き牧場かな　信濃　竹花桂子
鶯啼く野寺の道や冬の月　札幌　翔花
裏木戸に竹破る音や冬日和　鹿児島　内田ふみ子
夜の明ける度に新らし春の山　上毛　岩田せき子
せきれいの二つおりたつ冬田かな　京都　松江かめの
虻一つ障子に狂ふ春日和　信濃　岩波むら子
馬遠く野は黄昏れて春の風　青森　馬場ちよ子
朝顔のつるうら枯れて花小さし　相模　靜枝子
裏店で大きな聲や福は内　下總　秋山たい子
青めく蕪菁や加茂の家　羽後　大友しん子
二組になりて針子のかるたかな　羽後　萩村かの子
月の夜は花も踊らふ奥の庭　岩代　水下はる子
殘菊に洗濯の水流しけり　鹿児島　岡積春子
十勝野を吹雪するらし雲の脚　山城　松田鳳子
煤掃の閑に入るや額かむり　彦根　辻芳子
カラ傘を傾て見る雲雀かな　豐後　後藤つう子
鳥の餌となりぬのこりし霜の柿　越後　枯尾花
梅園の既に春まつ手入れ哉　岡山　三船菊野
白梅や采女の部屋の私言　岩代　金子きよ子
梅白し暮れゆく丘の一つ家　新潟　旭彩子
しのぶ程足音のする落葉哉　駿河　天野しらふじ

淋しさは掃いても退かぬ木の葉哉　若狹　橋本うき子
小さなる堂に氣高き銀杏かな　秋田　小原あき子
春の雨小問物賣りの來りけり　丹後　桃代女
雲裂けて月の丸さや塔遙か　千葉　椎名入重子
白梅の二月は去りて櫻かな　鳥取　安木春子
霰に紙鐵砲は隣の子　石川　岡谷久枝
雪とけや白きは猫の毛なりけり　和歌山　松島ゆき子
枯柳百舌にさゝれし蟲は何　常陸　木村ふさ子
水仙の小鉢持出す小僧かな　常陸　立花こう子
木蘭の葉はわがものと蝸牛　熊本　佐々木秋江
梅が香や誦きこゆる父の部屋　德島　西野花びし
北風に昼あれし梅見かな　福井　黒川好久
梅三株こち吹く家の詩人哉　山城　入田文子
鶯や友禪を干す裏の町　三重　川原みさを
深林の伐木白き吹雪哉　廣島　安藤文子
淡雪や京に育ちて若菜賣　岩代　永山みす子
午後二時の日影冷れき枯野哉　麻布　林かれ子
嫁が君今朝初産もありけらし　但馬　石原勝子
初冬や日向に出でて針仕事　福島　山崎よれ子
玉あられまたなき夢をやぶりけり　越後　矢部みさ子
寒の月はると云ふ氣のゆるみかな　上毛　多都子
木枯や暮れて明るき水の上　常州　山下百合子
雪晴の天水桶やあつ氷　茨城　喜久子
老人の椽に爪とる小春哉　吉本君子
襖板の更紗模様や雁來紅　福岡　山本芳子
虹見つつ畑を打つや京近し　芝　眞崎靜子
思ふ人思はぬ人や春の風　靜岡　根岸綠子
夕陽や鳥飛ぶ方の山しろし　沼津　入代美代子
綿を打つ翁健なり今朝の冬　岐阜　田口鳳子
化粧する妹が嚔や春寒し　大和　小橋きく子
春寒く巣籠る鳩や朝の雨　神戸　すみ子

俳句

麥二寸渺々として富士白し　滋賀　若井きくえ
公逢の裝置く軒や梅薫る　大阪　木村波奈女
雪深う棺を埋む野墓かな　青森　しらぎく
小春日やたが捨行し菊の花　横須賀　峠とく子
楽々と故郷に寢る蒲團哉　青森　島村花代
春を待つ瓢は壁にささやけり　大阪　中野喜代子
春の雨軒端けぶりて麥淺き　和歌山　岡村幸枝
暁の燈臺近くなく千鳥　靜岡　岡村博子
海峡の晴れて鯨を見る日哉　陸中　黒澤よし子
丸窓や紅水流す雪の上　明石　おちば子
主病んで垣の白菊亂れけり　長岡　野口美壽子
花咲いて乙女歌よき桃の村　石狩　細貝藤花子
滿天の雪に楚江を渡る哉　神戸　東川艶妻
小春日や雛に餌をやる姉妹　熊本　武田萩子
堂の椽に夕日うすれて春寒し　大阪　石野繁枝
猫の戀胡蝶の戀や春の風　京都　吉田しづ子
雪となる庭木の雨を雀鳴く　岩代　川名直子
朝寒や顔かくし行く女學生　札幌　德光竹子
とざゝずに宵の時雨や梶が宿　和歌山　伏見入千子
京に賣られ春日を舞の稽古哉　大阪　今西はろゑ
背むけて物よむ人や冬の梅　相模　乗田血涙
疲れたる程の嵩なき摘菜かな　福岡　天野糸子
新葉の屋根に群る雀かな　丹後　木村花水
石段の下や主なき乳母車　新潟　村山銀子
張板のさらさの菊に秋の蝶　伊豫　白ばら
輪飾りや江戸に生れて小さき家　長崎　天ケ瀬貞子
洛陽の秋やゝ老いし小雨かな　羽前　うばら女史
水汲んで石壇上る紅葉哉　島根　長崎春子
新しき蛇籠や利根の春の雨　麻布　吉田俊子
春さむき玄海灘や驅逐艦　紀伊　田中文子
沓の雪片足上げじ雛かな　大阪　西戸政江子
夕日さす窓に胡蝶のかげもさす　臺北　峡さだ子
初がらす豐明殿の甍かな　下總　小澤まゆみ子
燕や大佛殿の軒の雨　秋田　すみれ
丘の上花つむ子あり春の風　熊本　眞崎幸子
行く人の皆肩すくむ寒さかな　備中　篠原しげ子
春寒の後園に病む孔雀かな　羽後　三浦まみえ
若き畫家寫生してけり春の町　信濃　市瀬いちゑ
蛇の衣旱の麻にかゝりけり　京都　高田良子
朝寒や實子のころも氷りけり　岩代　武藤たみよ

春雨や鼓しらべる京女　兵庫　杉山春翠
兎の毛むしりし籔や水仙花　尾道　安保强子
行く年や積る詩の屑歌の屑　伊豫　福井白百合
海越に霞初めたりまつの林　千葉　金井ぎん子
下駄の音は月にひゞきぬ夜寒かな　香川　百惠子
初日の出尊き雲の絶間かな　丹後　山添たみ
舞衣を批評しあふや宵の春　下總　荒登代子
うとき友の賀状まひ込む大みそか　松山　きよう子
新しき障子に飛ふや冬の蠅　紀伊　谷田峰子
木枯しに追はるゝ街の女かな　丹波　玉島孝子
君が春出仕の臣の若きかな　鹿兒島　橋口友
星まばら木立まばらや冬の月　京都　くちなし
驚いて雨を免れし蛙かな　千葉　岩田よし子
寒月や天台山の杉黒し　信濃　駒澤ひろ江
十人の子賢にして屠蘇をくむ　信濃　小林いち子
心あてに摘ばや雪の初若菜　香川　藤村菅江子
猿曳に犬吠へかゝる町家かな　攝津　金振清子
みどり葉の春いき〳〵と神の庭　紀伊　蒼生枝
夜毎夜毎天女舞ふらん梅の枝　名古屋　松村萩子
衣すゝぐ前を白帆の見ゆるかな　マニラ　西村ふみ子
田舎から袂に入れて土筆かな　愛媛　大谷菊枝
厄拂ふ女恥らう月夜哉　名古屋　吉田とき子
慈の葉に置く霜白き朝かな　岡山　長鹽とき子
縫物の手を止めてきく虫の聲　備中　三宅こつろ
白梅や繪草紙かきの暮らす家　鳥取　五百重子
北の方に面向けられぬ吹雪哉　兵庫　柳田政子
大寺や鐘樓見えて冬木立　廣島　山本秀子
雪洞の淡き光や夜の雪　靜岡　かよ子
つれ〴〵に生花なほす春日哉　麻布　千葉まつ子
春の野や草を褥の夢静か　岩手　松田愁花
星飛んで稲こく家の夜寒かな　長岡　岸初子
梅散るや階下に浮む舟の上　丹波　横山若代
わが姿影長う曳く枯野哉　尾張　陽炎女
仰き見る松の高さや今朝の雪　近江　山本たけ子



附録

小寒日記

薄田泣菫

一月五日

午後、一條通を逍遙いてゐると久し振でK君に出會つた。近頃一向に顏を見せないが、如何してゐると訊いてみると、困り切つたといふ顏附をして、例の女の事が今に何方とも極りが着かず、此方が貰ひ受けやうといへば家附の娘だから嫁には遣りかねる、何卒養子に來ては吳れまいかと、出來ぬ相談を持つて來る。然うはなりかねるといふと、夫なら渠が身の仕末を着けるまで月々幾らか宛の仕送がして欲しいと、此方の足元を見て恁うした口を切り出して來るといふ仕末、そんなこんなで仕事の方にもつい手が附きかねるし、何方へも御無沙汰の仕通しになつてゐると辨解らしく零してゐる。で、當人の心も既う其麽になつてゐるのかと駄目を推すと、何やら急に腹の嬉しさが込み揚げてくるのを、押へきれぬといつた風に妙にそはそはして、

『渠かね、渠の腹なら夫はもう僕もちやんと知りぬいてゐるんだから……唯阿母がね……』と極り惡さうにもぢもぢしてゐる。

私は何だか擽られるやうな氣持がして來たので、

『這麼所では談し難い。近に遣つて來給へ、ぢや今日は是で失敬する』

といつて別れた。別れてものの十歩ばかりも歩いて來ると、K君はせかせかと後を追掛けて來て、馴々しさうに肩に手を掛けて、

『君若しか途中で渠に會つても、何卒何も知らん顏でゐて呉れ給へ……でないと……』

私は氣難しい顏をして、默つて首肯いてみせた。K君は安心したやうにまた後へ引回して往つた。

ニイチエのツアラトウストラに恁ういふ一節がある――、

『ある日の事ツアラトウストラが途を歩いてると出會頭に呼び止めた人がある。

「先生、貴方はまた後生大事に何を然う抱へ込むでゐらつしやいます、外套の下なぞへ。何かそのお家の重寶とでもいつたやうな代物なんで？」

「然やう、此かの、此はその矢張寶物ぢや、少し許りの眞理といふ奴での」といつて、ツアラトウストラはその性來について、恁ういつて說き明かして聞かせた。

私が今日日の暮合に外を逍遙いてゐると、途中で不圖出會したのは、背の侏儒な腰の屈まつた老婆であつた老婆はいきなり、

「先生、お前樣は此間中何とか彼とかそりや隨分と婦女の私達に御談話も下さいましたが、ねつから未だ肝腎の婦女てものに就いては御談話が御座いませんのね、あれは一体……」といつたやうな調子で馴々しく物を訊きにかゝる。私が取りあへず、

「婦女か、婦女の事なら男子にさへ談したら十分さ」

と答へると、老婆は執厚く、

「ま、然うばかり仰有らずに、何卒私達にも……」

と推し返へして來る。そこで私は恁ういつて敎へてやつた。

「婦女についての種々な事柄は、皆謎で、その謎には唯一つの答がある。それは出産だ。婦女に對しては男子は方便で、目的は小供なのさ。

「それなら男子に對しては婦女は如何かといふのに、一体眞の男子の欲しがるものといつたら、危險と遊戯の二つで、男子は一番危つかしい玩具として婦女を求めるのだ。

「男子は戰ふやうに、婦女はまた戰ふ人を再造するやうに敎育てられなければならぬ。その他は皆無益事ばかりさ。

「婦女は男子に較べたら小供心を了解む事は巧いが、然し男子には婦人よりか小供らしい箇所がずつと多い。本當の男子には小供心が隱れてゐる。畢竟婦女は男子の中に小供を見付けるのだ。婦女は次に來るべき世界の價値功德に輝いて、寶石のやうな美しい玩具でありたい。婦女は什麼にかして超人を產むやうにせなければならぬ。

「婦女に可愛がられた時には男子は唯怖れることさ、すると婦女は一切の物を犧牲として仕へて來る。婦女に憎まれた時にも男子は唯怖れることさ、何故かといふに男子には唯惡があるのみだが、婦女には又卑劣があるから。

「婦女の嫌いのを何かといふのに、恁うした譚がある。ある時鐵が磁石に對つて言ふのに——汝は始終私を引張寄せなさるが、うむと私を抱着ける程強みの無い時が私は一番憎らしい——と

「男子の幸福は——吾は欲す——といふ事で、婦女のは——渠は欲す——といふ事だ。婦女は自分が可愛がられる瞬間に世界は圓滿になつたものゝやうに考へる。

「婦女の心持は表面だけのもので、淺い水の上には何時も泡が立つ習慣さ。男子のは深い、その流は地の深底に沸つてゐる。恁うした男子の力は婦人には如何しても了解みかねる。」

私が恁ういつて敎へると、老婆は甚く感心して、これは大層面白く御座いますこと、特別若い人達にお利益になるやうに御聽申しました。で、私も御禮心に一寸眞理を御耳に入れると致しませう、何卒これを巧く物に包み込むで、滅多に口を開けさせないやう

にして下さいまし、然も無いと無闇と大聲で喚き散らすかも知れませんからといつて、老婆は耳打をして聞かせた。

「若しか婦女の所へ往つしたなら、鞭を、それ、御忘れにならないやうにね……」

ツアラトウストラは恁う言つた。」

K君が近に訪ねて來たなら、私はそれとなく此の一節を讀むで聞かせる事にせう。

同 七日



朝湯に往くと、七草の束ねたのが湯槽に浮いてゐる。濛々と湯氣の籠つたなかにすつぽりと漬つて、夫をじつと鼻先に持つて來ると、ほんのりと上氣したやうな輕い香がする。春といつても未だ皮一重被つて、地面の下に芽ぐむでゐるのを嗅ぐ氣持だ。

去年の夏であつた、この湯槽で菖蒲湯の香氣を嗅いだ事があつた。その折の日紀に恁うした文字が殘つてゐる。

「六月三日、朝湯に往くと、湯槽に菖蒲の束ねたの

が一つ漬つてゐるので、陰暦では今日が五月の節句だなと氣がついた。手に掬ひ上げてみると、菖蒲の强い匂が刺すやうに鼻に沁む。

香氣ほど追懷に饒かなものは無い。朝湯の透き徹るやうな湯槽に漬つて、菖蒲の匂を嗅いでゐると、ずつと幼い頃明日は既う菖蒲の節句といふ日になつて、よく小河の岸に蹲踞むで此草を拔いた事が想ひ出される。柳の落葉とも見違へるやうな鯇の子が足音に吃驚して、ちらちらと逃げ散ばる透影の銀のやうに白いのに見惚れながら、水際の手頃なのを見計つて、柔と根こぎに引こ拔く心地よさといつたら、掌面まで初夏の香が染みとほるやうに思はれる。

三月を夢想の世界とすれば、五月は現實の國で、桃節句の生命を美だとすれば、菖蒲節句の意義はつまり力で無くてはならぬ。蕩らすやうな桃日和に雛祭をする女子の夢も夢だが、野も山も新綠の色に滿ち溢れた今日此頃には、私は產れ落ちて男子となつた身の幸福を熟々と思はぬ譯にゆかぬ。

這麼事を考へながら、胸の附邊から二の腕へかけて、力一杯にごしごしと磨つてゐると、何だか恁う急に身内に絶大な威力を覺えてニイチエの言つた「自我といふ心靈の傲慢を笑ふ自己」の偉さといつたやうなものを沁々と感じる。

朝湯の暢氣さは、誰ひとり入つて來るものも無いので、私は心ゆくばかり菖蒲の匂を嗅いで、そして章魚のやうに茹つてゐた。」

夏初めの日影も徐々じわついて來樣といふ頃、そこらの湯屋で菖蒲湯を浴びると、怪しなもので時は明治の、所といつても都の場末でありながら、それで何といふ事なしに希臘の太古、ユリセスが所々方々を流れ歩いた末旅疲でフエアチアの森蔭にぐつすり寢込むでゐると、土地の姫君が侍女達と一緒に鞠投をして輕躁ぎ廻る騷ぎに、つい眼が覺めて、のそのそ森を這ひ出して來て附近の河で水浴をする、其の往事が想ひ出されて、那の健やかな生々した力が私の脈管を走るやうにも思はれる。で、また恁うした年始めに、唯ひと

り靜と七草湯に漬つてる氣持といつたら、さやうさ何に譬へたらよからう——あのベツレヘムの天に奇異な星が見え初めたといふ頃、ヨルダンの河に漬つて髪の毛の長い預言者にバプテスマを受ける、まあ然ういつた風な、新しく産れ更つて來る、すがすがしい氣持が胸一杯になる。

同十日

午後から御苑を逍遙いた。樹蔭の隅には忘られたやうに雪が消え殘つてゐる。今歳の冬は如何した事か、まだ雪といふ程の雪にも出會さぬ。底冷の甚く嚴しいのにも拘はらず、京都に雪の少いのは如何やら些と慊らぬ氣持がする。鞍馬貴船の附邊を振りかへつてみると、流石に眞白に降り積つてゐる。

家に歸ると、つい今し方大町氏が訪ねて來られたといふ。

家内は大町氏の容貌が、何處やら幼い頃別れた父親にそつくりだと言つて、甚く懷しがつて、門口に立つた儘いつまでも其の後姿を見送つてゐると、大町氏は下長者町を御苑へ衝當つて、その曲り角でじつと地圖を擴げて、方角を見定めてゐたらしかつたが、やつと了解めたやうに右へ折れて南へ急いで消えたさうだ。

「乾度御苑を御通りぬけでしたらうに、どうして御會にならなかつたでせう」と何うやら殘り惜しさうに「あ、然う然う、今晩は宿に居ますからつて、所書を御置きでございました」と帶の間から名刺を取り出した。見ると古門前の××といふ家だ。

夕餉を終つて大町氏の宿を訪ねた。初めて會つた感じは、冬初めの晴れた暖い日に、椽端か何處かで背を温めながら、唐詩にでも讀み耽つてゐるやうな如何にも暖い氣持だ。氏はよく吃る、その吃るのがまた氏の文章の暢びりとした取繕はぬ調子と同じ樣に、對手に打解けしめるだけの懷かしさと餘裕とを有つてゐる。

主人の○○氏といふのは、大町氏の舊友ださうで、これはまた驚いた大酒家で、今歳の元日には獨酌で三

升ばかりも傾けて、それで平氣でゐたといふ程の優者、それでまた聞えた將棋の名人とかで、碁好きの大町氏と向ひ合つて、酒の零れかゝるのにも氣がつかず、一人が面白いのは將棋だといへば、一人はいや碁の方がずつと趣味が高いと、互に負けず劣らず言ひ爭つてゐる。私は然う言いた、碁將棋とも何方も熟くは知らぬが、將棋は王を中心に勝敗を爭ふ、つまり英雄崇拜の味ひで、棋子が各自に名目を有つてゐるのは、個性の相違といふよりも寧ろ位置材能の差異で、互ひに相犯さぬところに封建制度の極意がある。碁は土地本位で優劣を定める、つまり平民政治の極致で、孰も是も一つの單位であるところに個人の權利を認める近代制度の深い意味が含まつてゐる。――恁ういふと、大町氏は『さあ、其も一つの觀方だね』と濟ました顏をしてゐる。

同　十　一　日

びしよびしよと冷い雨の降るなかを、例の加茂の女が來た。

『芹や番茶は要りまへんかあ』

と尻上りのすつきりとした調子だ。芹は寸のよく伸びた、根の思ひ切つて白い上物らしい。婢が調弄ひ半分に蛭の卵子でもこびり着いては居ないかしらと言ふと、女は仰山さうに手を振つて、

『嘘お言ひやすな、皆私ひとりで拵へましたんやもの……』

といつて、窘めるやうに上眼を使ふ調子が甚く旣う世馴れてゐる。

四月に入つて徐々花の咲きかかる頃になると、女はいつも酸莖賣に出て來る。一昨年の頃までは、まだほんの小娘で物越も何處やら含羞むだやうに生な調子があつたに、確か去年の春であつた、その頃には旣う見違へるやうに大人びてゐた、その時分の日記に恁ういつて書きつけてある――

『春雨のしとしとと降るなかを酸莖賣が來た。花の咲きかかる頃になると、兩加茂の附邊から毎日のや

うに町に出て来る漬物賣の女だ。

『すぐ――き――は要りまへんかあ』

と透き徹つた聲で、丕で歌でも唱ふやうに呼んで歩く調子は、去年の春よく買馴染むで居た那の御菩薩池の酸莖賣らしい。呼びとめてみると、駄つて門口を入つて、ごとりと漬物桶を下した顔は、忘れもせぬ矢張その女であつた。

『よう降らはりまつせなあ』

惩ういつて、女は掌面で肩のあたりの頻吹を拂つた。



見ると鐵漿をつけてゐる。また十七とはいふまいに、はや既う隣合の夫とでも接合きあつたものらしい。さう思つてみると、去年の春頃見馴れたやうな含羞むだ生な調子は無くなつて了つて、何處かに世馴れた、何うかして通りすがりの男に調弄はれでもせうものなら、口答への一つも返さうといふ性惡な所が見える。

どうやら裏切られたやうな心持で、一言でもいいから甚い皮肉を浴せてやりたいやうにもあるが、まさか然うもなるまい。――で、酸莖は買つた、然し私は

到頭食べずに濟ました。』

裏の家

孤雁生

其頃私が町へ出て中學に居る間厄介になつてゐた親戚の家の裏に、小高い丘が一帶に連らなつてゐた。此丘といふのは、舊時藩主が此處へ城を築く爲めに外郭を廣くとつて、遠く外濠をめぐらし、其濠を掘つた土を盛つて築いたので、其後築城の計畫は狹められて、濠はそのまゝ細い溝となり、蘆や太藺などが生えて水が赤く銹び、きらゝが浮いてゐる、二枚渡してある泥板を渡ると、荒壁の土藏が一棟あつて、其背後が雜草の茂つた例の丘になつてゐるのだ。

丘の上には柿の樹があつて、其傍に二三本の小松と、それに小さな稻荷の社が据えてある、土藏の裏から細徑がつけてあつて、それを登ると社の前へ出られるやうになつてゐる。

私は伯母さんが久振で家から町へ出て來たので、珍らしく後をつけて家の裏へ出て見た、伯母さんは舊時、此丘の裏の家を借りて、伯父さんと住んでゐた事があつた。伯父さんは其頃、町の師範校の漢文の敎師をしてゐたので、親戚である所から、其裏の家を借りてゐたのだ。

伯母さんは昔時自分達が住んでゐた家が、今どんな風になつてゐるか見たいのであらう、先きに立つて、土藏の裏の小徑をずん〳〵登つて行く、伯母さんは一體瘦ぎすな方で、すらりとした後姿、御召縮緬の單衣がしなやかなうねりを裾に見せて、白い足袋の踵にまつわる、頭髮は小さな銀杏返しに結つて、細い頸筋が長く背後からはいかにも弱々しそうに見えてゐる。七八年前伯父に死なれて、子の無いまゝに私の家へ戻つて家の世話をしてゐた。顏色はいつも勝れないが。目鼻立ちの好い、鼻筋の通つた細面で、聲の美しい人だつた。

八月下旬の日の正午頃で、丘の上の柿の樹では蟬の

聲が邊りに喧しい、青い空から日がぎら〱照りつけるが、丘の上まで來ると、涼しい風が吹いて來る、丘の外側は一面桑畑になつてゐて、桑の葉が日に輝いて、蒸されるやうな暑い吐息が其なかに籠つてゐるやうだ。

伯母さんは日を避けて柿の樹の下へ一寸と寄つて、右手で柿の葉先きを摘りながら、

『それでも、以前とそんなに變つて居ないね』

と言ひながら、凝乎と桑畑の向ふの方を見てゐる。桑畑の間の小徑を通つて向ふに丸い井戸側が見えて、其さきに黒い板壁を圍らした板葺屋根の家がある。伯母さんはまた先きへ立つて桑畑の中をおりて行く、私は後から跟いて行つた。井戸端の處から壁に沿つて折れ曲つて庭へは入ると、日照り草の赤いの黄色の白いのが、小さな花をつけて一面に爬ひまわつてゐる、朝顏の蔓がのびて、板壁を手にからみついてゐる。雨戸が閉つてゐて、狹い椽側には、夕立の時に飛び上つた泥が一ぱい點をなしてくつついてゐる、椽の下に何か草がひろ〱青白く伸び、竹の芽が椽まで屆いて、曲つて外へ出てゐる。

伯母さんは凝然と雨戸の方を見ながら、兩手を前に、指先きを握つて、立つて居たが、

『開かるか知ら、』と獨言のやうにいつて、傍へ寄つて行つた。

『開かりますとも』と私は言つて、端の一枚へ手を掛けると、がたぴしいひながらやうやく開いた。ぷうんとかび嗅ひやうな、長く暗い中に囚はれてゐた空氣が急に顏に當つて來る。障子が破れてゐるので、覗いて見ると、向ふの方の雨戸の隙から日が射し込んで、暗い中に所々斑點が見えてゐる、室の中の襖や床の間の壁などが、ぼんやり浮んでゐる。不圖、私は少さい自分伯母さんに連れられて來た時の事が思ひ出された。たしか此室の次ぎの右手に四疊半の伯母さんの書齋があつて、書物が一ぱい散らかつてゐた。向ふの室は茶の間で、長火鉢が据えてあつて、伯母が其前に座つてゐた。………と思つてゐると、

『どれ、私に……』と、伯母さんが私の肩へ手を掛けた、私は身をすぼめて、傍へよると、伯母さんは、つと、椽側へ上つて、障子へ手をかけて、音を立てるのを憚るやうに身を屈めてそつと開ける、そして何か目當でもあるやうに、そのまゝ中へは入つて行く。暗い中へ吸ひ込まれるやうに消えてしまつた。

私も上つて見やうかと思つて中を覗くと、伯母さんの姿が見えない、襖の開く音がする、左の書齋の方だ、幾度も開け馴れた其襖だ、開けると中に伯父さんが丸い大きなテーブルに向つて、書籍だらけの中に埋つて、朱筆を持つて、細かい書き入れをしてゐた其室だ、襖の開く音がすると、一寸と眼を上げて、口端に懐しい何とも言はれない微笑を見せてゐた其室だ……私は今其處へ行くのが、何だか惡いやうな氣がして、雨戸の端へ手を掛けたが、そのまゝ振り廻つて庭の方を見て立つてゐた。

森然としてゐる眞夏の晝だ、板壁を越えて向ふの丘の上の柿の樹が日光を浴びて一葉一葉にギラ〳〵光つてゐるのが見える、蟬の聲がぢい〳〵聞こえるばかり。其他には他の物音もない。

暫く立つてゐたが伯母さんはさつぱり出て來ない、私はまた家の中をのぞいて見た。

いつの間にか八疊の間へ出て來て、伯母さんは其眞中に、此處へ背を向けて、顔を手巾で埋めて座つてゐるではないか、聲を掛けやうかと思つて見ると、ぶる〳〵頭髮がふるへてゐる、細い蒼白い手の指先がふるえてゐる、伯母さんの身體の周圍を何か黑いものか、ぐる〳〵取りまいて、頭の上を行つたり來たりしておるやうな氣がする、今にも伯母さんの身體は消えてなくなつてしまうのではあるまいか。と思つてゐると伯母さんは、そうつと立ち上つた。

手巾を取つて、戸口の方へ出て來た其顔、唇を結んで、色も蒼い、そして默つて、障子をしめて庭へおりる。

「あゝ、此處にはね、私の小見がゐるの」といふ。

「えゝ？」、

「私の小兒が……」と、一寸と寂しい笑ひをする。

「あゝ、そう」、私は不圖氣がついた、伯母が一生に一度生んだ、それも半産をした男の兒があつた、一聲か二聲、初聲を上げたが、其まゝ呼吸がたえてしまつた。それでも伯母さんは、其聲を聞くと、はつと思つて「私でも母親になれたかと」悅しくて耐らなかつた。が、呼吸が絕えたと聞いた時は、伯母さんも一時氣が遠くなつてしまつた。其時の袍衣が何處か此家の床下に埋めてある筈だ、伯母さんは其時を思ひ出して泣いてゐたのだ。



伯母さんは先きへ庭を出て行つた。私が雨戶をしめて出て來ると、伯母さんは井戶端へ來て凝乎と立つてゐた。

憧憬

小川未明

須田町から電車に乘つた。

この邊は縱横に電車が往來してゐる。いつも此處へ來ると賑かだ。よくもかう澤山の人々が立派の身形をやつてゐるもんだと思ふ。また彼方に工事をしてゐる赤い煉瓦造の建物を見ると、今自分が此の都に住んでゐて、文明の有樣を見ることが出來るのを喜んだ。田舍に住んでゐる母親や、父親のことに比較して自分が餘程贅澤をしてゐるやうな、濟まない氣持がした。若し自分が田舍に歸つて、無學の村人と共に暮らして、此の文明といふものを知らなかつたら、生きてゐる張合がないやうに思ふかも知らぬ。

私は電車に搖られながら、窓の硝子を透して、種々な看板を眺めた。一つ一つの看板に異つた趣味がある。——其の商人の頭の程度が分る。——憎らしい程商賣根性を露骨に出したのもある。——美術的なのもある。——實利と美術とを兼ねんとしたものもある。中には薄べらに西洋の模倣をやつたものもあるが、また一種重くるしい底光のする古風なものもある。

いつしか神田小川町の通りを過ぎて九段の下に差しかゝつた。はや冬の日は西に傾いた。電車は一直線に南から北へと進んだ。風が出たやうだ。片側に洋傘店があつた。目標となつてゐる赤い傘が三つも四つも竿の尖に續かつてゐるのがひら〳〵と舞つてゐた。青い空に、赤い洋傘——　私は、それを見たゞけでも憧がれの感が起る。

青い海、赤い町——兼て憧がれてゐる伊太利などへ旅することが出來るなら、其時は此の都を捨てゝもいゝと思つた。

其夜私は散歩に出た。空には星がきら〳〵と瞬いてゐる。其の星の光りを仰ぐと遠い〳〵といふ感がする。足の向くまゝ私は神樂坂に出た。ちやうど縁日であつた。雜沓の中を人に押され、人を押して歩いてゐたのである。道を挾んで兩側には、露店が張られ、赤い物

を賣る店や、色の褪めたものを賣る店や、黑い物を賣る店や、光る刄物を賣つてゐる店などがあつた。

　私は此時から感じた。いつまで此の賑かな都がつゞくものだらう。五十年の後、百年の後、尚ほ此の都はこのまゝの繁盛を極めてゐるか知らん――此先、外國と戰ふやうなことがなからうか。或は吾人の空想が及ばぬ程此のあたりが繁華となるかも知れない。此後幾たび市區改正がせられることか、其たびに舊時の有様は破壞されて行くであらう。

　あの星の光りは、太古まだ此のあたりが茫々とした草原であつて、虫の聲が淋しく風に亂れてゐた時も輝いてゐたのである。……然り、又再び未來に於てあの星の光りは此のあたりの廢頽した古屋――白壁や、瓦屋根を――青白く照す時が來るに相違ない。――私は、雜沓の中を拔け出て、毘沙門堂の境内に擧行してゐる昔風の繰人形の前に出た。

　暗い、低い假小屋の周圍には、色の褪めた汚れた幕を廻してある。兎に角見やうと幕をくゞつて入つた。裡は茫としてゐて薄暗い、五ツ六ツのカンテラが、濃い烟を上げて朧ろに舞臺を照らしてゐた。外の賑かな割合に中は客が少なくて、何となく外の賑かさに蹴落されて、寂涼の感がする。――私はまだ見ないうちに、外の方が戀しくなつた。ひた〳〵と夜風が周圍の幕を拂つて、舞臺に垂れた黑つぽい布に當ると、哀れな樂の音がつゞいて起つた。何ともいはれぬ悲しさが心の裡に湧く。――もし此の劇を何處か外國の淋しい町にゐて見たのであつたら、どんな氣持がしやう。而して此の哀れなロマンチックの劇は、現代の産物でないといふことが分つた。最初見たのは髑髏の手踊であつた。丈が一尺八寸位の目もない鼻もない肉のない白骨が手を上げ足を上げて黑い幕を背景に舞臺の上で躍つてゐる。――いづれ何等かのシムボルだ。

　其の次にも、其の次にも出るもの、品は代つたが何れも凄い淋しいものばかりであつた。

　私は此の滔々として肉聲と、雜沓の風をなしてゐる都の中心にゐて、しかも斯様寂しい、太古の劇を見た

のを不思議に思つた。——出る時私は今一度幕を揚げて舞臺の裡を振向いた。——こんな淋しい光景は恐らく、再び私の一生に於て見られないかも知れないと思つた。

何となく、此の粗末な小屋を出るのが名殘惜しかつた。外へ出ると依然として賑かだ。淋しい處へ來ると、頭の上には燦々として星が閃めいてゐる。尚ほも無極の大空を見上ると忽然として名利も、戀も念頭を去つてしまつた。

あゝやはり自分は孤獨だ——、親もなければ、故郷もなければ、友人もない。たゞ目に見る世の中は假であつて、總べて一瞬の現象に過ぎないのだ——。

私は今の今迄此の都會を去りたくなかつた。が此の一瞬間に於て私の頭には都會生活もない。田園生活もない。何もかもつまらなくなつてしまつた。寧ろ嚴肅な禁欲主義をとつて僧侶となつてしまふかと考へた。

此の考へは、ほんの一時の氣まぐれに起つた考へばかりでなかつた。——今迄にも時々斯樣考へも起つたのだ。——

私は、明る日淋しい孤獨の旅を企てた——

——何物かに憧れて——　（完）

一轉機

高須梅溪

『女もない、戀もない、淋しい人生だ。』

と、ツク〲果敢ない氣がする。私は、其の折、鎌倉に來て居た。時は一月、誰も芽出度いと言ふ三ケ日も、扇ケ谷の客舍で迎へた。別に淋しいと思ふ原因がないのに、矢張り物足らん。

鎌倉は、東京よりも暖かで、最早、梅もチラホラ咲き相である。毎日天氣續きで、吹く風が暖かい、梅の色が青い、東京に居るよりは、ズンと、快活になる筈の私が、次第に陰鬱になつて、此樣な沒交渉の人生に生息する丈か馬鹿々々しいと思ふ。然し其の理由は、何だらうと押しつめて見ると、戀の甘味を知らぬからで

あらうとも解釋れる。實際、女を捉えて戯言、一つ言つたことのない私は、女の方から烟むがつて私に近寄らないのである。如何に燃え易い材料でも、火がないと燃えない。戀をしたいと思つても、相手になる女がないと、物にならん。私には、其の相手がない。何故、私に限つて、相手が出來ぬのか、眞面目なのが左樣なに惡いのかと思つても、俄かに改めることは出來ん。相不變ゴツ〳〵して居る。

此樣な時は、會心友と話すに限る。幸ひ私には、此の方の相手か乏しくない。而して相當に特色あるのが多い。私は、Y生を拉して、八幡宮前の牛肉屋に上る。最早、七日の夜である。宵闇の中に、松の影か灰かに見えて、折々通る汽車の音か耳に入るばかりだ。牛肉屋と言つても、二階は六疊一間で、荒壁に某々から送つた未だ新しいビラが下つて居る。天井の中央に釣ラムプがあつて中心の切り方が惡いのか妙に暗い。Y生と、私は、其の下で牛肉を煮て居る。中々急に煮えない。先づ一杯と、アルコール分子の強い酒をY生の酒盃に注ぐ、Y生又



た私のに注いで呉れる。
空腹に甘い筈の酒か妙に苦い、而して胸がムカ〳〵する。Y生は、一向私の樣子には頓着せずに、咽喉を鳴らすやうにしてグビリと飲む、如何にも快よさ相だ。
『君と飲むのも久振だね。矢張り會心の友と酒を飲むに限るよ。』
『左樣だ。僕も同感だ。然し此の頃は妙に淋しいやうな氣がする。何故だらう。』
『イヤ、それは傲骨の君にも似合はん。大に飲むさ。』
と又た一杯注いで呉れて、自分のにも又一杯。
少し酒か廻ると、私も稍元氣附いて春を迎へたやうな心持ちになる。Y生は、幼時、藝人にする積りで仕込まれたので、多少、俗謠や、端唄の素養あはる。私が一向冴えない調子で、『壺坂』を唸ると、Y生は、『紀伊の國』を歌ふ、流石に私とは違つて、聲もよい、節廻はしも巧い。一體に黒人染みた處がある。室内は俄かに春を生じて、牛肉の煮える湯氣が一段の生氣を添へる。

Y生は、漸々酔うて、折々戯言を云ふ。而して不圖した事から、半生の哀史を物語つた。其の中に、Y生の戀、而かも切なる戀の話を聞かされた。其の東京留學時代或素人屋に下宿して居ると、其處に温和しい怜悧な娘が居た。容貌も十人並優れて居る。此の少女がY生に惚れたのだ。實際、Y生は美男子ではないが、其涼しい眼元や、優れて格好のよい鼻が多少女を魅する力を持つて居るかも知れん。否、それよりも男らしい性格が更らに多感の女性をして熱烈な戀を捧げしむる動機を作つたらしい。Y生も亦件の娘を惡からず思つたか、此に一個の障碍が起つた。それは娘の方に早くより許嫁の夫があるからで、今、一年も經てば、結婚する事になつて居る。殊に其の聟と言ふのが母親の氣に入りでY生との間柄が如何に密接にもせよ、兩人の戀を協へて呉れ相にもない。而してそれが案の定、失戀に終つて、Y生も、其の娘も、全く心にない方向に別れ〳〵となつた。
私は、最初此の話を聞いて同情したか、漸々兩人の甘

い情緒を物語る一節になつて、俄かに嫉ましい氣がムラ／＼と起つた。Y生は、艶のある一歷史を有つて居るが、私は、全くそれがない。何時も異性の愛情を得ずに、淋しく暮らして居る。何故此の點を察して呉れぬのか、少しは、私の心持ちになつて見てもよからうと思ふて、又た酒か苦くなつて、心は冬のやうに冷たくなる。

然しY生は、私が此樣なに嫉妬心を起したとは、一向に知らない。私は、何も不平を言はん。嫉妬し乍らも、矢張り眞面目に其の戀物語を聞いて、或點迄同情を表したY生は、其哀史を語り終つて、ホッと一呼吸する。私は、最早、これ以上の話を聞く餘裕がない。何となく自分一人、斯の人生の除けものにされたように思はれて、Y生に別れた。野道を辿ると、空には星が疎らに見えて、松の影が黑い。

『女もない、戀もない、淋しい人生だ。』

と又た心中で繰返へした。而して私は此の一刹那、思ひ切つて不眞面目な生活に入らうと決心した。（完）

女床屋

兒玉花外

處は覺えぬが、何でも坂のダラ／＼した通りだつた。私は、一軒の『美髮』と看板に書いた理髮店の前に立停ッた。

銀杏返し斗りの女が五人、屋内に剃刀を手ん手に、立働いてゐた。……磨澄した三面の大鏡に春の正午の光線が射込み、剃刀が偶々青海の中の白魚のやうにキラと晃る。

椅子に黑い背中を見せて、職人らしいのと、萬筋縞が、刈ッてもらつて居た。

白い仕事服を被て、白い女の片頰が、時々に戶外からみえる。

理髮賃、八錢で以つて、椅子の男は如何を考へて居るであらう？

私は、善く理髮床で、剃刀を當てられる時に、……今ま此の理髮師が發狂はすまいか、すると、生命が瞬

間に危險い！……抔感じた事を胸に浮べた。

女の美しい一人が、不圖、此方を向いた。佛蘭西革命の時代には、街燈を斷頭機の替りに爲たといふ話がある。

私は、這う考へた。

彼の女理髮師の持つ剃刀で、剎那、勁動脈を切られたら？……温い女の息と、黑い濃い雲のやうな鬢の髮を、此の蒼白い額に十分に浴びながら……。

二階のマドンナ

向方の敎會堂には、今ま讃美歌の聲が起つてゐる。窓を漏れる淨聖燈の火に、日光は接吻して朦朧とふるへる。

こゝ新開地の小料理屋の軒端、二階と摺れ〳〵に、赤い球燈が幾個も懸聯ねられて、今宵は開店の祝ひ日であるさうな。

だが、客は一向に有る容子もない。男と銀杏返しの影が二箇、二階の横窓の障子に映ッてゐる、今其の一影が座を立つたらしい、多分、手に空銚子を持てゐるだらう？

ホンの夢を見てゐる間、昨日工事を興して今日は建築うといふ―細い新らしい骨のやうな材木――新開地の小料理屋、未だ下地はじめ〳〵した泥濘の跡、雨でも二三日續かうなら、蛙が何處からか飛出して、蚯蚓が晝間にも泣かうといふ。

女は孰れ、流れ〳〵て賣られて來た軀であらう！濕つた汚い壁、目の荒い疊、綿の薄い座布團、二階四疊半の一間に終日擒捕の身だ。ガタピシする危い梯子段は此れから、酌婦の足と裾に馴れて、材木は女の香ひに沁入るであらう。

現刻、敎會堂に男女の讃美歌の聲は止むだ。牧師が簡短な祈禱を始めたらしい。

此處では、今ま客が兩人料理屋の紺暖簾を潜ッた。

飮めよ、唄へよ！　漂泊の女の身には、特に青春の時は短かい。夜每々々の影薄い洋燈は君達の若い生命を吸ふのだ。

教會堂は闇中地獄のやうに立つ。
頰酒に紅の美しい、活きたる人間の女よ！女よ!!

矜誇れ、自覺せよ。卿等は、世の中の勞働者、小商人の爲めに、眞正に貴むべき靈肉の犧牲だ、救世の崇むべきマドンナである。

大きな光を帶つ星が一つ、小料理店の家根の上高く懸ッてゐる。

窓の内の顔



何時も兵隊さんが、銃を肩にして門前に立番してゐる所、其の側に大きな高い銀杏の樹が枝葉を擴げてゐる。

うねくと紆つた、其處路の曲り角に、一軒の小さな機屋が建つてゐる。

私が何時も、此前を通掛る毎に、カツタン、コトン……と、機織る女の細い音が聞える。

右左に忙しく動く小さな手！矢の樣に走る杼子

私は、學校に通つた十年間、現今でも此家の前を過

ぎるが、昔と變らんカッタン、コトン！と機を織る音がする。――無論、機手は幾度か更つてゐやう。

私は北國越前の福井の街で、大勢の女工が廣い工場で歌を唄ひ乍ら、此地の名物の雪よりも白い羽二重を織るのを見た。

山城西京の西陣で、織子（俗名オヘコ）が蒼白い陰氣臭い顏をして、だゞ濶い工場に瓜のやうに居並んで、土地特産の明光綸珍の帶を織るのも觀た。

併し、私には、此の東京の山の手の路傍に在る、小さな機屋の杼音ほど、此類の物で心を惹いたものは曾てない。

今夕も、少し曇ッた硝子窓の内部から、哀しい、細い、機の聲が漏れる。……豆の如うに小さらしい洋燈の光がボーッと、玻璃の底で明う燃えてゐる。

既う十年にも經るが、未だ一度も、此家の機手の女の顏を見、唄ふ聲さへ聴たことはない。

一週間に一度位、此附近を通行る自分には此の後とても決して女の顏を視る事はなからう……。

捨犬

岡田八千代

今朝は珍らしく早く目が覺めた。窓を開いて鎧戸を向ふへ押すと、朝の息が寢息ひ室に冷々と心持好く這入つて來て顏に當る、總身に染み渡ると震へるやうな寒氣だ、目の先のタラヨーの葉にも、目の下のケシの芽生への上にも、キラ〳〵と霜が光つて居る。向ふに見える小高い丘の薄青く塗つた西洋館の裏手には最早何か白い切がヒラ〳〵と干してある。其後の森の陰から、森の端れの空へかけて、朝日は今眞赤な色を流して居る。青い家の丘の裾から古川の水音が幽かに聞えて、すつと川下‼、今この窓から斜めに見える新建築の水車小屋の向ふで、水は漲つてぐわう〳〵と言ふ

今、川瀬の音を遮つて異様な響きが聞えた、耳を聳てるとばつたり止んで終つた、何だらう？、

まだ四邊には水を汲む音もせず、風も吹かない、あ又聞える。

繰糸車の輾るやうな、新らしひ齒の下駄で板の間を歩くやうな、何とも言へず頭に響く音である。何だらう？

分つた！　乳離れの小犬が親を慕ふ泣聲に違ひない。

庭下駄を突掛けて外へ出て見た。オー寒い、足がぶる〳〵と震へて、顏も手も千切つて取られさうに痛く冷たい、其處此處の木立の裾には薄く仄かに靄を引いて居る。もう東の眞紅は失せて淡く薔薇色の雲が浮んでる。

何事も忘れて呆然とした耳を貫いて又異樣な音―さうぢやない―哀れ小犬の聲が鋭く聞えた。

右も左も枯草の野である。所々に殘る草の根に蹲踞る可愛いもの丶姿も見えぬ、あ丶、又泣く！

ふと、見廻す目に這入つた水車小屋の戸がそつと人目を忍ぶやうに開いた、長方形に眞暗な中から、黒い綿入を丸く着た主人が、淺黄の手拭で頬冠りしい〳〵出て來た、吐く息が白々と立つ、暫く何か見廻して居たがやがて足許から白い丸いものを抱き上げた、彼だ！

可愛いものだ、其名を假に白と言はうか。

白は抱かれると共にクン〳〵と言つたやうに聞えた、初子を抱るやうな形をして主人は直ぐ家に這入つた、長方形の中は間もなく明るくなつた。引窓から朝の煙も立つ。

何か我子の先途でも見屆けたやうな氣がして、引返さうとする時、再び新らしく異樣な聲が響いた。振り返れば同じ水車小屋の中から白？、たしかに白を摘むやうにして出て來たのは其處の女房であつた。彼はバサ〳〵の頭を振り立つて四邊を見たが、二三度手のものを振ると、塵でも捨てるやうにポンと向ふへ投げて終つた、可愛いものは又一しきり哀れに泣いた。

森にも家にも早や暖かに日が差して來た。



火蘂

外壹篇

澤村胡夷

火葉まふ。輾轉、風の
吹たつるたびに火葉は
圓筒と機關の底に……

狹蒼なる目路もはるけく
海ばらの極もしらに
火船は走りてゆきぬ。

柔かに眠する芽は
禍ひのあかき焔の
葉の翼たたみてくろし。

火葉まふ。機關の音と
また響く輪鐵のきしり
船はいま潮瀬にかかる。

風

聴く、いつも横ぶす城の
石壁に、小暗き響……
また獨そびゆる樅の
高幹に輕快き調を。

潤む眼の曇れるうらに
刻みつつ一日は暗く、
燃る眼の輝やく波に
浮びつつ一日は明し。

柔かに觸れば石に
指冷えてしびるる思…
唯ひとり凭れる幹の
夢のなみ寢びてしるし。

雜報

○東京だより

▲近來の女子時事問題は田中宮相對小林夢子の結婚問題でした、輿論の火の手が盛んになつたので遂に結婚は中止されました、事の眞相は餘り報導したいことでもありませんが、只此んな事件もあつたと云ふことは記臆して置いても可いでせう ▲神代史劇と云ふものや、女義太夫の芝居や、兎角毛色の變つたものが流行します ▲島崎藤村氏と正宗白鳥氏は早稻田文學から推讃の辭を受けました ▲安成貞雄氏は萬朝報に、高須梅溪氏及び服部嘉香氏は東京毎日に、孰れも入社しました ▲横瀨夜雨氏は近々一家を擧げて水戸に移る筈で雨夜氏も勿論大貧を去るでせう ▲與謝野氏は神田區東紅梅町二番地に轉居しました ▲岡田美知代女史は田山美知代となつて愈よ永代靜雄氏と結婚することになりました ▲雜誌スバルは三月に短歌號を出して同人の百首選を載せるさうです ▲新年以來文界の調子は餘り浮き立たないやうですけれど、本年は新しい運動が起りさうだと期待して居る人があります

○記者より

▲此の「新美文」を編輯するに就いて記者は美文の數が八九百篇あつた爲め實に選擇に骨を折りました、六號活字を多く使つて出來得る丈け多く採錄したのも此の爲でした、遂に載せることの出來なかつた多數の諸君の爲めには深く其罪を謝します ▲入選作家の寫眞は例の通り口繪にいたしましたが、猶ほ持合せがなかつたり、遼隔の地で間に合はなかつた分は遺憾ながら本號には載せ得ませんでした ▲次の增刊は編輯の方法に一新を企て、「新作家」と題し、個人を本位として作物を選拔します、編輯の方法こそ違へ投稿は一層自由な方法にしてありますから特に多數に、且傑出した作品を寄せられたいと思ひます、〆切は三月末日ですけれど、今からお急ぎになつて、早く御寄稿をねがひます、なほ詳しいことは別項の廣告欄を御らんの上承知して下さい。

明治四十二年二月十二日印刷
明治四十二年二月十五日發行

本號限り 定價 金貳拾錢

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市本所區番場町四番地 多川惣一
印刷所 東京市本所區番場町四番地 [illegible] 本所分工場

發行所 東京市京橋區大鋸町十一番地 電話（本局六〇七番） 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

(東京凸版會社印刷)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添ねがふ